

茨城県石岡市

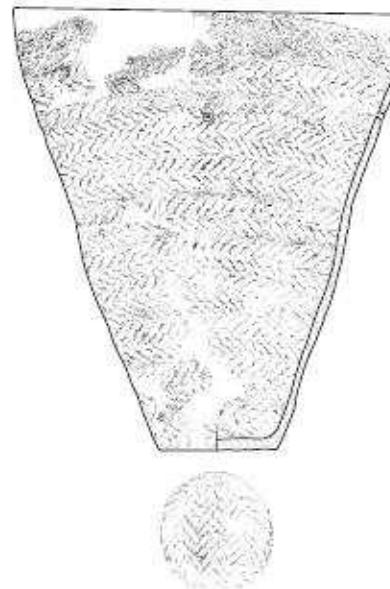
下ノ宮遺跡

茨城県石岡市

下ノ宮遺跡

- 県営畠地帯総合整備事業（三村地区）に伴う発掘調査 2 -

2012



茨城県・石岡市教育委員会・株式会社東京航業研究所

2012

茨 城 県
石 岡 市 教 育 委 員 会
株 式 会 社 東 京 航 業 研 究 所

茨城県石岡市

下ノ宮遺跡

－県営畠地帯総合整備事業（三村地区）に伴う発掘調査2－

2012

茨 城 県
石 岡 市 教 育 委 員 会
株 式 会 社 東 京 航 業 研 究 所

序

石岡市は、都心から北東へ約70km、茨城県のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市です。その約215平方キロメートルの市域には、392箇所もの「遺跡（埋蔵文化財包蔵地）」が存在しています。

さて、本書で報告されます「下ノ宮遺跡」は、三村地区に存在する遺跡です。1万年以上前の旧石器時代から近世に至るまで幅広い時代の資料が出土している、市内でも有数の遺跡です。昨年度は市役所のロビーで出土品の展示を行い、市民の皆様にその調査成果の一端をご紹介したところです。

今回は県営畠地帯総合整備事業に伴い発掘調査が行われましたが、調査の結果、縄文時代や古墳時代、奈良・平安時代の竪穴住居跡が多数発見されました。

このような成果をあげることができましたのも、調査にあたりご理解とご協力をいただいた皆様方や、ご指導・ご助言をいただきました皆様方のおかげであり、心から感謝申し上げます。

石岡市としても、今回の成果をもとに、より一層の文化財の保護・保存・活用に取り組んでいく所存でありますので、引き続いてのご指導・ご協力をお願い申し上げます。

本書が学術的な研究資料としてはもとより、石岡市の歴史に関する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として、広くご活用いただければ幸いです。

平成24年3月

石岡市教育委員会

教育長 石橋 凱

例　　言

1. 本報告書は石岡市三村地区に所在する下ノ宮遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は県営畠地帯総合整備事業（三村地区）に伴い、石岡市の委託を受けて、株式会社東京航業研究所が実施した。
3. 調査については、石岡市教育委員会の指導を受けて実施した。
4. 本調査地点における試掘調査は平成19年6月7日～21日まで70ヶ所にトレーニングを設定し、住居跡11軒、土坑4基、ピット52口を確認している。
5. 本書の編集は渡邊が担当し、執筆は曾根・渡邊・小林克也（パレオーラボ）が分担した。各項の文責は各文末に記載している。
6. 調査内容および調査組織は下記のとおりである。

所在地 石岡市三村 5089番地ほか

調査面積 約2,600m²

調査期間 発掘調査 平成23年7月1日～平成23年10月7日

整理作業 平成23年10月11日～平成24年3月25日

事務局・調査指導

石岡市教育委員会教育長	石 橋 凱
教育部長	高 野 喜市郎
次 長	上 曾 宗 則
生涯学習課長	真 家 忠
生涯学習課長補佐	吉 川 隆
生涯学習課係長	安 藤 敏 孝
生涯学習課係長	箕 輪 健 一
生涯学習課主任	小 杉 山 大 輔
生涯学習課主幹	曾 根 俊 雄

調査担当 渡邊久生（株東京航業研究所）

調査および整理作業参加者 細田二美夫 柿崎 昇 表 豊 田村 正則

城戸かなこ 沼田 久男 森永 典昭 小島 廣史 丸山麻由美 市村 浩男

中山 良洋 岡田 春 鈴木 勝利 露久保三郎 滝田 一徳 本田 仁子

中島 かつ 七谷エキエ 小池 一司 鈴木 敏信 桂木 郁夫 豊崎 理司

榎原 健二 永田 琴子 大河原 黙 三森 好子

7. 発掘調査から報告書の刊行まで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く感謝の意を表する次第である（敬称略・順不同）。

斎藤 弘道 宇田川肇

凡 例

1. 本遺跡において使用した略号は次の通りである。

下ノ宮遺跡・SM-2011 住居跡・SI 円形周溝状遺構・SM 土坑・SK 溝・SD
ピット・P 性格不明遺構・SX

2. 遺構の規模は壁の上端を、深度は遺構確認面を基準とする。遺構の長軸方位は座標北からの角度を計測値を示す。

3. 本書に記している座標値は世界測地系を用い、標高値はT・P点（東京湾平均海水面）を基準とする。
全体図・遺構図の北は座標北を示す。

4. 本文中の色調は『新版標準土色帖』（農林水産庁農林水産技術会議監修 財團法人日本色彩研究所色票監修）を用いた。

5. 本文中に掲載した図面は原則として以下の縮尺である。

全体図 1：600 壱穴住居跡・溝 1：60 土坑 1：40 カマド 1：30

出土遺物 繩文・弥生土器 1：3 古墳時代以降の土器 1：4 土製品 1：2

原則として図面末尾にスケールを表示した。

6. 本書に掲載した遺物番号及び縮尺は本文、実測図、写真図版と一致する。

7. 遺物観察表における法量の（ ）内数値は推定値、<>内数値は残存値を示す。

8. 遺構内遺物の出土状態は、下記の記号を用いた。

●土器 △石製品 □その他

9. 掲載図中のスクリーントーン及び記号は以下に示す通りである。

遺構図 ……焼土

遺物図 ……繊維土器断面 ……須恵器断面

……黒色

目 次

序	(2) 石器	38
例言 凡例	第4章 弥生時代	49
目次	4-1 遺物	49
第1章 調査に至る経緯と調査経過	第5章 古墳時代	50
1-1 調査に至る経緯	5-1 住居跡	50
1-2 調査の経過	5-2 円形周溝状遺構	66
1-3 調査の方法	5-3 遺物	67
1-4 基本土層	第6章 奈良・平安時代	68
1-5 検出された遺構の概要	6-1 住居跡	68
第2章 遺跡の位置と環境	6-2 遺物	92
2-1 地理的環境	第7章 中・近世	93
2-2 歴史的環境	7-1 溝	93
2-3 下ノ宮遺跡の調査履歴	7-2 遺物	93
第3章 縄文時代	第8章 出土炭化材の樹種同定	95
3-1 住居跡	第9章 総括	99
3-2 土坑	写真図版	
3-3 遺物	抄録	
(1) 土器		

挿図目次

第1図 下ノ宮遺跡の位置	1	第17図 13号住居跡	20
第2図 下ノ宮遺跡試掘	2	第18図 13号住居跡出土遺物	20
第3図 基本土層断面図	4	第19図 16号住居跡	22
第4図 遺跡の位置	5	第20図 16号住居跡炉	22
第5図 遺跡全体図	7~8	第21図 16号住居跡出土遺物(1)	23
第6図 8号住居跡	10	第22図 16号住居跡出土遺物(2)	24
第7図 8号住居跡炉	10	第23図 18号住居跡	25
第8図 8号住居跡出土遺物(1)	11	第24図 18号住居跡出土遺物	26
第9図 8号住居跡出土遺物(2)	12	第25図 19号住居跡	27
第10図 10号住居跡	14	第26図 19号住居跡出土遺物	28
第11図 10号住居跡炉	14	第27図 22号住居跡	28
第12図 10号住居跡出土遺物(1)	15	第28図 22号住居跡出土遺物	29
第13図 10号住居跡出土遺物(2)	16	第29図 25号住居跡	29
第14図 11号住居跡	17	第30図 25号住居跡出土遺物	30
第15図 11号住居跡炉	17	第31図 29号住居跡	30
第16図 11号住居跡出土遺物	18	第32図 29号住居跡炉	30

第33図 土坑（1）	31	第71図 2号円形周溝状遺構	67
第34図 土坑（2）	32	第72図 1号住居跡カマド	68
第35図 土坑（3）	33	第73図 1号住居跡	69
第36図 土坑（4）	34	第74図 1号住居跡出土遺物	69
第37図 11号土坑出土遺物	36	第75図 6号住居跡	70
第38図 25号土坑出土遺物	36	第76図 6号住居跡カマド	71
第39図 27号土坑出土遺物	36	第77図 6号住居跡出土遺物	71
第40図 36号土坑出土遺物	37	第78図 9号住居跡カマド	73
第41図 47号土坑出土遺物	37	第79図 9号住居跡	74
第42図 55号土坑出土遺物	37	第80図 9号住居跡出土遺物	75
第43図 73号土坑出土遺物	37	第81図 12号住居跡	76
第44図 91号土坑出土遺物	38	第82図 12号住居跡カマド	76
第45図 縄文時代遺構外出土遺物（1）	39	第83図 12号住居跡出土遺物	77
第46図 縄文時代遺構外出土遺物（2）	40	第84図 14号住居跡	79
第47図 縄文時代遺構外出土遺物（3）	41	第85図 14号住居跡カマド	79
第48図 縄文時代遺構外出土遺物（4）	42	第86図 14号住居跡出土遺物	80
第49図 縄文時代遺構外出土遺物（5）	43	第87図 15号住居跡カマド	80
第50図 弥生時代遺構外出土遺物	49	第88図 15号住居跡	81
第51図 2A号住居跡カマド	50	第89図 15号住居跡出土遺物	81
第52図 2A号住居跡	51	第90図 17号住居跡	82
第53図 2A号住居跡出土遺物	51	第91図 23号住居跡	83
第54図 2B号住居跡	52	第92図 23号住居跡カマド	83
第55図 2B号住居跡出土遺物	53	第93図 23号住居跡出土遺物	84
第56図 3号住居跡	54	第94図 24号住居跡	85
第57図 3号住居跡カマド	55	第95図 24号住居跡出土遺物	86
第58図 3号住居跡出土遺物	56	第96図 26号住居跡	87
第59図 4号住居跡	57	第97図 26号住居跡出土遺物	87
第60図 4号住居跡カマド	57	第98図 27号住居跡	88
第61図 4号住居跡出土遺物	58	第99図 27号住居跡カマド	89
第62図 5号住居跡	59	第100図 27号住居跡出土遺物	89
第63図 5号住居跡カマド	60	第101図 28号住居跡	91
第64図 5号住居跡出土遺物	60	第102図 30号住居跡	91
第65図 7号住居跡	61	第103図 30号住居跡出土遺物	91
第66図 7号住居跡カマド	62	第104図 奈良・平安時代遺構外出土遺物	92
第67図 7号住居跡出土遺物	62	第105図 1号溝	93
第68図 20・21号住居跡	64	第106図 中・近世遺構外出土遺物	94
第69図 20号住居跡出土遺物	65	第107図 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	98
第70図 1号円形周溝状遺構	66		

表 目 次

第1表 下ノ宮遺跡調査一覧	6	第23表 2B号住居跡出土遺物観察表	53
第2表 8号住居跡出土遺物観察表	12	第24表 3号住居跡出土遺物観察表	56
第3表 10号住居跡出土遺物観察表	16	第25表 4号住居跡出土遺物観察表	58
第4表 11号住居跡出土遺物観察表	19	第26表 5号住居跡出土遺物観察表	60
第5表 13号住居跡出土遺物観察表	21	第27表 7号住居跡出土遺物観察表	63
第6表 16号住居跡出土遺物観察表	24	第28表 20号住居跡出土遺物観察表	65
第7表 18号住居跡出土遺物観察表	26	第29表 1号住居跡出土遺物観察表	70
第8表 19号住居跡出土遺物観察表	28	第30表 6号住居跡出土遺物観察表	72
第9表 22号住居跡出土遺物観察表	29	第31表 9号住居跡出土遺物観察表	75
第10表 25号住居跡出土遺物観察表	30	第32表 12号住居跡出土遺物観察表	78
第11表 縄文時代土坑一覧	35	第33表 14号住居跡出土遺物観察表	80
第12表 11号土坑出土遺物観察表	36	第34表 15号住居跡出土遺物観察表	82
第13表 25号土坑出土遺物観察表	36	第35表 23号住居跡出土遺物観察表	84
第14表 27号土坑出土遺物観察表	36	第36表 24号住居跡出土遺物観察表	86
第15表 36号土坑出土遺物観察表	37	第37表 26号住居跡出土遺物観察表	87
第16表 47号土坑出土遺物観察表	37	第38表 27号住居跡出土遺物観察表	90
第17表 55号土坑出土遺物観察表	37	第39表 30号住居跡出土遺物観察表	91
第18表 73号土坑出土遺物観察表	37	第40表 奈良・平安時代 遺構外出土遺物観察表	92
第19表 91号土坑出土遺物観察表	38	第41表 中・近世遺構外出土遺物観察表	94
第20表 縄文時代遺構外出土遺物観察表	43	第42表 出土炭化材の樹種同定結果	95
第21表 弥生時代遺構外出土遺物観察表	49	第43表 出土炭化材の樹種同定結果一覧	97
第22表 2A号住居跡出土遺物観察表	52		

図版目次

図版 1	調査区全景(南から) 調査区 A 区
図版 2	調査区 B 区 調査区 C 区
図版 3	8号住居遺物出土状況(南から) 8号住居遺物出土状況(東から) 8号住居遺物出土状況 8号住居炉(南から) 8号住居(南から) 10号住居遺物出土状況(南から) 10号住居炉(南から) 10号住居(南から)
図版 4	10号住居遺物出土状況 11号住居(南から) 11号住居遺物出土状況(西から) 11号住居遺物出土状況1(東から) 11号住居遺物出土状況2(東から) 11号住居炉(南から) 13号住居炉(南から) 13号住居(南から)
図版 5	16号住居炉(南から) 16号住居(東から) 16号住居遺物出土状況(南から) 18号住居炉(南から) 18号住居(南から) 19号住居(西から) 22号住居(東から) 25号住居、1号溝(東から)
図版 6	29号住居炉(東から) 29号住居(東から) 3号土坑(西から) 11号土坑(南から) 13号土坑(西から) 26号土坑(南から) 27号土坑(南から) 38号土坑(南から)

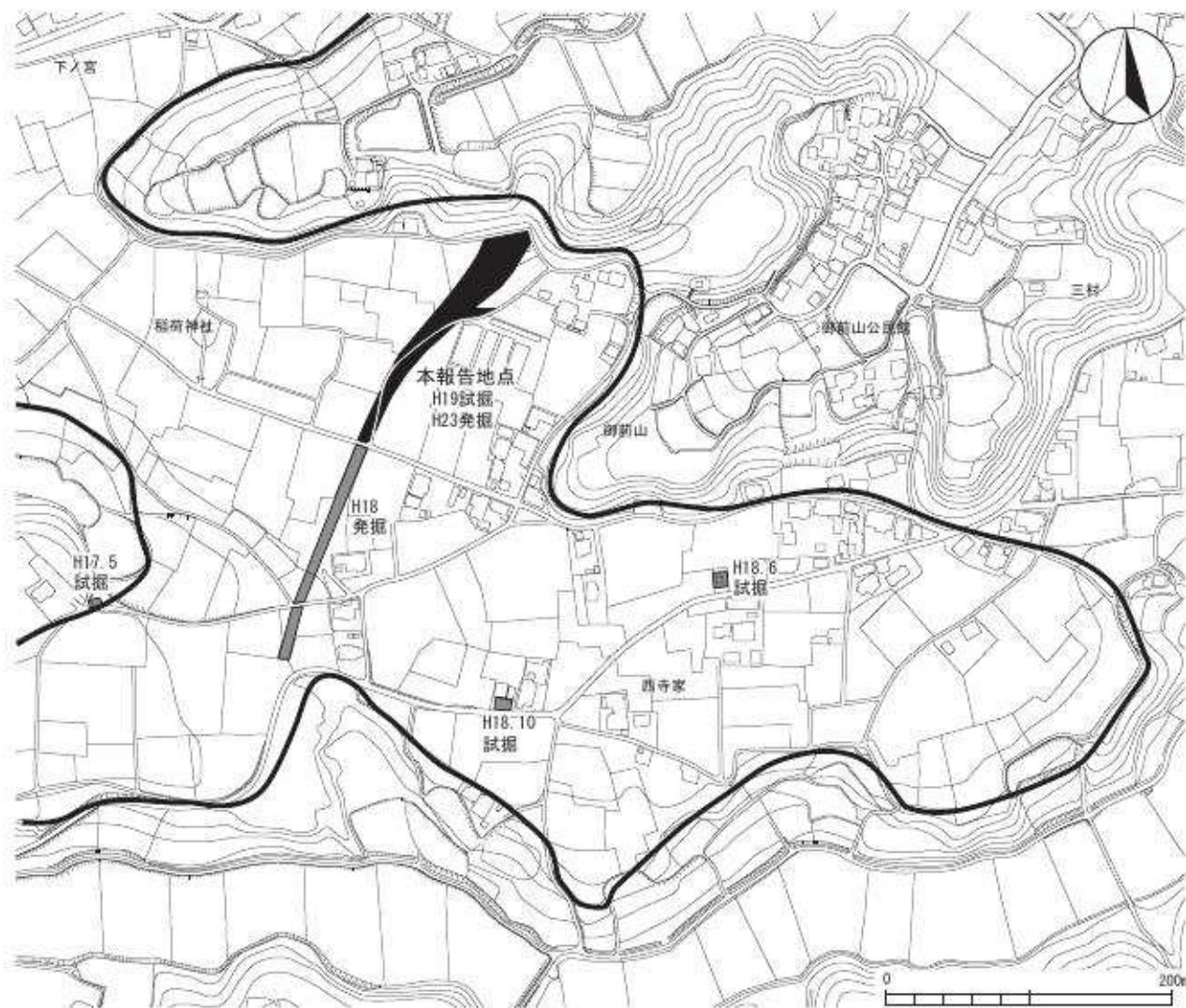
- 図版 7 46号土坑(南から) 65号土坑(南から) 72号土坑(南から) 86号土坑(南から) 88号土坑(南から) 89号土坑(南から) 94号土坑(南から) 2A号住居カマド(南から)
- 図版 8 2A号住居(南から) 2B号住居(南から) 3号住居遺物出土状況1 3号住居遺物出土状況2 3号住居遺物出土状況3 3号住居カマド(南から) 3号住居(南から) 4号住居カマド(東から)
- 図版 9 4号住居(南から) 5号住居遺物出土状況 5号住居カマド 5号住居(南から) 7号住居カマド(南から) 7号住居(南から) 20号住居遺物出土状況(南から) 20号住居(東から)
- 図版 10 21号住居(西から) 1号円形周溝状遺構(南から) 2号円形周溝状遺構(西から) 1号住居カマド(南から) 1号住居(南から) 6号住居遺物出土状況 6号住居カマド(南から) 6号住居(南から)
- 図版 11 9号住居遺物出土状況 9号住居カマド(南から) 9号住居(南から) 12号住居カマド(南から) 12号住居(南から) 12号住居遺物出土状況 14号住居カマド内遺物出土状況(南から) 14号住居(西から)
- 図版 12 15号住居カマド(南から) 15号住居(南から) 17号住居SPA～A'(西から) 17号住居(西から) 23号住居カマド(南から) 23号住居(南から) 24号住居(東から) 26号住居遺物出土状況1
- 図版 13 26号住居遺物出土状況2 26号住居遺物出土状況3 26号住居(東から) 27号住居遺物出土状況(南から) 27号住居カマド(南から) 27号住居(南から) 28号住居(東から) 30号住居(南から)
- 図版 14 縄文時代8号住居出土遺物 縄文時代10号住居出土遺物(1)
- 図版 15 縄文時代10号住居出土遺物(2) 縄文時代11号住居出土遺物(1)
- 図版 16 縄文時代11号住居出土遺物(2) 縄文時代13号住居出土遺物 縄文時代16号住居出土遺物(1)
- 図版 17 縄文時代16号住居出土遺物(2) 縄文時代18号住居出土遺物 縄文時代19号住居出土遺物 縄文時代22号住居出土遺物
- 図版 18 縄文時代25号住居出土遺物 縄文時代11号土坑出土遺物 縄文時代25号土坑出土遺物 縄文時代27号土坑出土遺物 縄文時代36号土坑出土遺物 縄文時代47号土坑出土遺物 縄文時代55号土坑出土遺物 縄文時代73号土坑出土遺物
- 図版 19 縄文時代91号土坑出土遺物 縄文時代遺構外出土遺物(1)
- 図版 20 縄文時代遺構外出土遺物(2)
- 図版 21 縄文時代遺構外出土遺物(3) 弥生時代遺構外出土遺物
- 図版 22 古墳時代2A号住居出土遺物 古墳時代2B号住居出土遺物 古墳時代3号住居出土遺物 古墳時代4号住居出土遺物
- 図版 23 古墳時代5号住居出土遺物 古墳時代7号住居出土遺物 古墳時代20号住居出土遺物 奈良・平安時代1号住居出土遺物 奈良・平安時代6号住居出土遺物(1)
- 図版 24 奈良・平安時代6号住居出土遺物(2) 奈良・平安時代9号住居出土遺物 奈良・平安時代12号住居出土遺物(1)
- 図版 25 奈良・平安時代12号住居出土遺物(2) 奈良・平安時代14号住居出土遺物 奈良・平安時代15号住居出土遺物 奈良・平安時代23号住居出土遺物(1)
- 図版 26 奈良・平安時代23号住居出土遺物(2) 奈良・平安時代24号住居出土遺物 奈良・平安時代26号住居出土遺物 奈良・平安時代27号住居出土遺物(1)
- 図版 27 奈良・平安時代27号住居出土遺物(2) 奈良・平安時代30号住居出土遺物 奈良・平安時代遺構外出土遺物 中・近世遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査経過

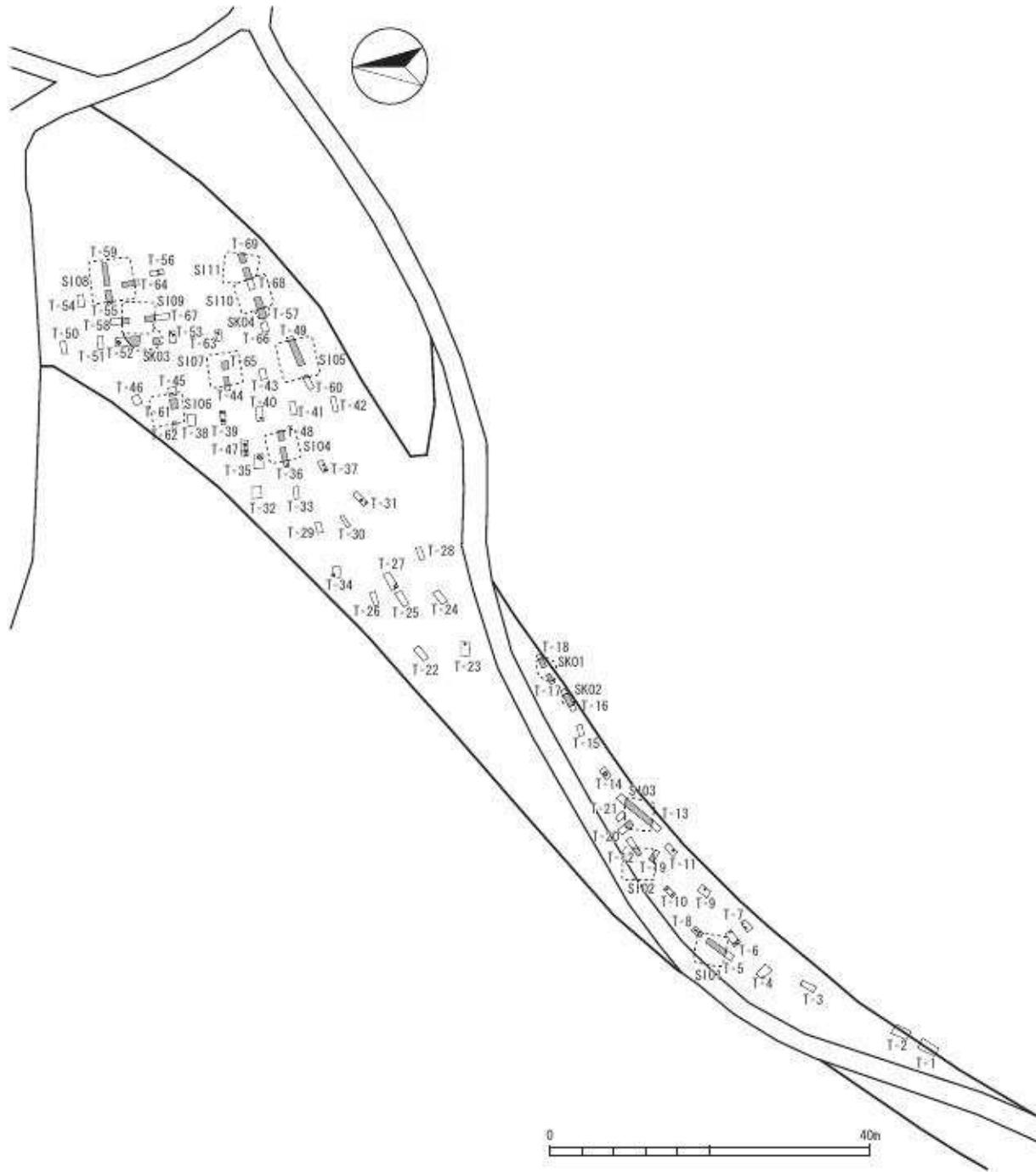
1-1 調査に至る経緯

平成15年6月23日、石岡市経済部長より県営畠地帯総合整備事業に伴い「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書が石岡市教育委員会に提出された。市教育委員会は、照会地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「下ノ宮遺跡」および「越場遺跡」に該当することから、試掘調査が必要である旨を回答した。

その後、市教育委員会は市経済部および事業主体である茨城県土浦土地改良事務所（現 茨城県県南農林事務所）と協議を行い、その協力を得て、平成16年度に試掘調査を実施した。ただし、開発区域の北側約2,600mについては、事業スケジュールの都合上、次年度以降に試掘調査を行うこととなった。調査の結果、下ノ宮遺跡の範囲からは古墳時代後期の竪穴住居跡1軒やピットが確認された。一方、越場遺跡の範囲からは溝1条が確認されたが、遺物は出土しなかった。



第1図 下ノ宮遺跡の位置 (1:5,000)



第2図 下ノ宮遺跡試掘 (1:800)

平成18年8月11日付で茨城県土浦土地改良事務所が茨城県教育委員会に「埋蔵文化財発掘の通知」を提出した。平成18年11月10日付で茨城県教育委員会から、下ノ宮遺跡の遺構の確認された範囲については工事着手前に発掘調査を実施するよう、試掘調査の未実施部分については、工事着手前に試掘調査を実施し遺構等が確認された場合は発掘調査を実施するように通知があった。

そこで、下ノ宮遺跡の試掘調査実施部分（約1,300 m²）については平成18年度に発掘調査を実施し、平成21年度に報告書を刊行している（『下ノ宮遺跡一県営畠地帯総合整備事業（三村地区）に伴う調査一』2009）。また、試掘調査未実施部分については、平成19年度に試掘調査を実施した。その結果、竪穴住居跡

11軒や土坑4基などが確認されたことから、県土浦土地改良事務所と協議し、平成23年度に発掘調査を実施することで合意した。なお、この試掘調査の結果については、『市内遺跡調査報告書 第4集』(2009)にて報告している。

これらを受け平成23年度は、下ノ宮遺跡の約2,600m²について株式会社東京航業研究所に委託し、発掘調査を実施することになった。
(曾根)

1-2 調査の経過

発掘調査は平成23年7月4日から同年10月14日まで約3ヶ月にわたって実施した。

7月4日から7月8日まで、調査地点の北東側に位置するA区の表土掘削および搬出作業を行った。表土は約50cmの深さで、遺構確認面に達した。遺構確認作業は7月5日から着手したが、遺構確認面は何らかの事由により、非常に硬く締り、また農作業のトレンチャーによる掘削がされていたために遺構確認作業は困難であった。8月1日から3日間をかけて再度表土の硬化部分の掘削を実施した。A区の調査は9月22日で完了した。A区から検出された遺構の内訳は、住居跡23軒、円形周構状遺構2基、土坑15基である。

9月7日から調査地点中央部のB区と同南西側のC区の表土掘削・搬出と遺構確認作業を実施し、B区において住居跡7軒、溝1条、土坑9基、C区において住居跡1軒、土坑4基を検出した。

10月4日に完了写真を撮影して遺構の調査は終了する。完了写真撮影後に、住居跡の掘り方の調査を10月14日まで行い、本遺跡の発掘調査は完了した。

整理作業は平成23年9月下旬から遺物の洗浄に着手し、同年10月下旬から注記に入り、同年11月下旬から接合作業を行った。

12月からは遺物の実測、トレース、掲載用の写真撮影、遺構図の修正と編集、図版の作成、原稿執筆に入った。

平成24年2月から報告書編集作業を行った。
(渡邊)

1-3 調査の方法

発掘調査は、道路建設に伴い試掘調査の成果を受けて実施した。調査区は道路用地分であり、幅が東西に狭く、長さは南北に長く設定された。調査は表土掘削から表土置き場が確保できなかったことから、表土掘削はバックフォウ2台、搬出用ダンプトラック(2t・4t・10t)を使用して、場外に搬出した。

調査区には5m方眼のグリッドを設定したが、遺構の密度が高いために10m間隔で杭を打ち実測や遺物取上げの基準とした。光波測距儀による測量には2箇所に基準杭を設置し、また標高値を設定した基本杭(BM)も2箇所設置して行った。

遺構調査では、住居跡は4分割し、土坑は2分割し、溝状遺構は適宜分割して土層の観察を行った。遺構内出土遺物は必要に応じて光波測距儀による3次元のデータを記録した。カマドや遺構内の出土遺物も微細図は、写真実測を用いて行った。写真撮影は、調査の進行状況に合わせて、デジタルカメラ、モノクロ、カラーリバーサルで行った。

整理作業は、遺物水洗・注記・接合を行い、接合終了後に遺構毎の出土遺物分類を実施した。図面整理は

遺構図面の修正、写真整理、遺物実測へと作業を進行した。報告書に使用する遺物写真撮影を実施した。

(渡邊)

1-4 基本土層(第3図)

基本土層については、調査区A区の中央部と北部の2箇所に $2 \times 2m$ のテストピットを設定し、土層の観察を行った。基本土層の概要は下記のとおりである。本テストピットは約2mの深さまで掘り下げたが鹿沼軽石層は検出されなかった。

I・II層は耕作等の影響を受けた層である。III層はソフトロームであり、IV層以下のハードロームへの漸移層であろう。

I層 10YR2/3 黒褐色土 耕作による搅乱 しまりなし 粘性なし

II層 10YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性なし

III層 10YR5/6 黄褐色土 白色スコリア中量・黒色粒微量 しまりあり 粘性あり

IV層 10YR5/6 黄褐色土 白色スコリア微量 しまりあり 粘性あり

V層 10YR5/6 黄褐色土 黒色粒微量 しまりあり 粘性あり

VI層 10YR5/6 黄褐色土 小石(1~2cm) 中量・ガラス質粒中量 しまりあり 粘性あり

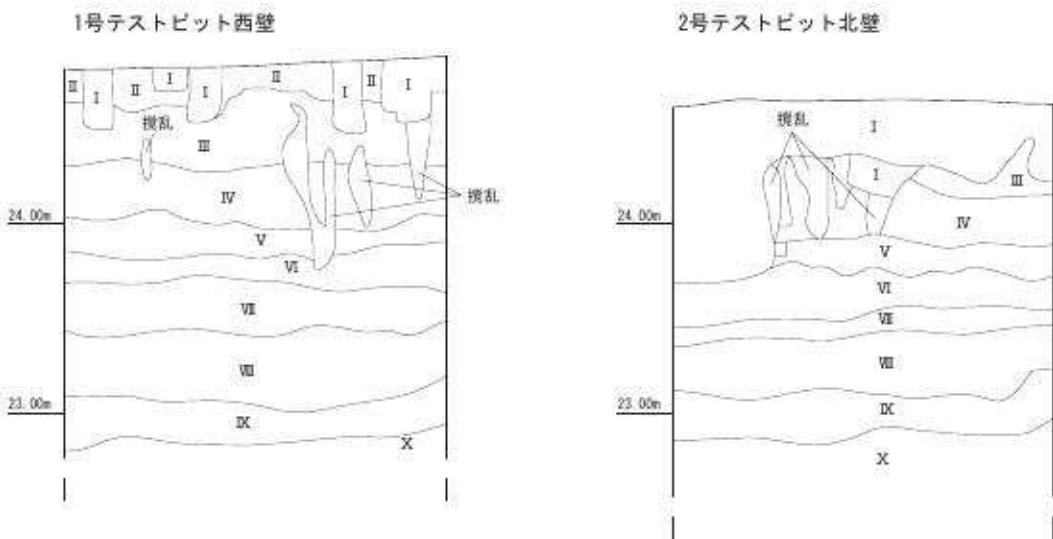
VII層 10YR5/6 黄褐色土 小石(1~2cm) 少量・ガラス質粒少量 しまりあり 粘性あり

VIII層 10YR4/6 褐色土 VII層よりやや暗い・小石・白色粒少量 しまりあり 粘性あり

IX層 10YR5/8 黄褐色土 しまりあり 粘性あり

X層 10YR6/4 鈍い黄橙褐色土 灰褐色の粘土層 しまりあり 粘性あり

(渡邊)



第3図 基本土層断面図(1:40)

1-5 検出された遺構の概要

今回の調査で検出された遺構は、住居跡31軒、円形周溝状遺構2基、溝1条、土坑28基を数える。このうち、縄文時代に属るのは住居跡10軒、土坑28基であり、残る住居跡8軒、円形周溝状遺構2基は古墳時代、住居跡13軒は奈良・平安時代、溝1条は中・近世に属する。いずれも耕作などによる搅乱や削平が

著しく、遺存状態は良好とはいえない。この他、調査区の広い範囲から小ピットが検出されているが、縄文時代に伴うものが大部分であったと考えられる。

(渡邊)

第2章 遺跡の位置と環境

2-1 地理的環境

茨城県石岡市は県のほぼ中央部に位置し、市域は西の筑波山麓から東は霞ヶ浦の低地帯までの広い範囲に及ぶ。市域の中央部を恋瀬川が南東に流れ、霞ヶ浦に達している。

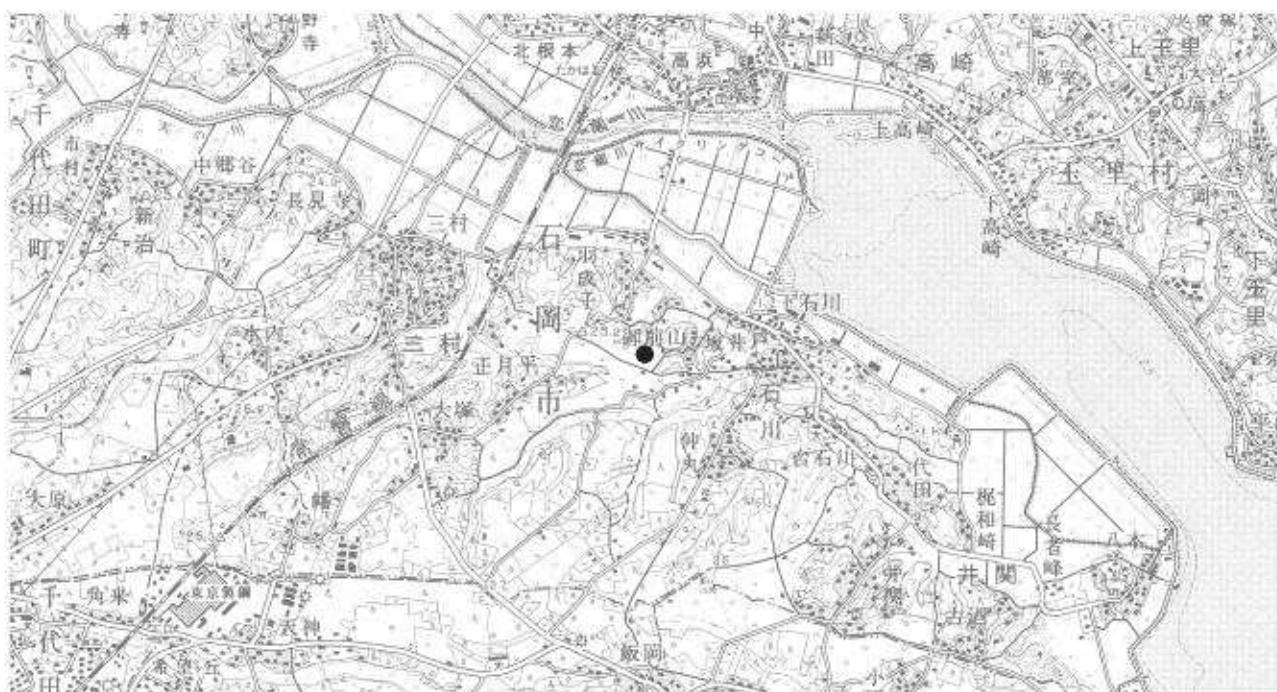
本遺跡は市域の南端部、JR常磐線石岡駅から南に約5km、高浜駅から約2km、恋瀬川の右岸で、南東方に霞ヶ浦へ半島状に迫り出している台地の基部に広がる。台地の標高は25～26mを計る。今回の調査範囲は、広大な面積を有する遺跡の東部に位置し、台地の括れ部に近い場所である。調査区の北部は東方に開く谷に面し、比高差は約15mである。

本遺跡の規模は大きく、東西1.5km、南北1kmの広範囲に広がり台地上を占有する。

(渡邊)

2-2 歴史的環境

恋瀬川をはじめとする中小の河川や霞ヶ浦に囲まれた本遺跡周辺の台地上には多数の遺跡が所在している。旧石器時代では、西方の正月平からナイフ形石器が出土している。縄文時代にはいると遺跡数が急速に増加する。縄文時代早期には西方に斜面貝塚の地蔵窪貝塚、前期には下ノ宮遺跡、中期には有段式住居跡や袋状土坑が検出された大作台遺跡が所在する。弥生時代では出島半島と併行して東流する、菱木川や一ノ瀬



第4図 遺跡の位置（国土地理院作成 1:50,000「玉造」）

川を眼下に見る台地上に遺跡が確認されている。弥生時代の発掘例は少ないが、弥生時代中期から後期の遺物が採取されている。この地域では、有角石器が集中している。古墳時代には、下ノ宮遺跡に隣接して諸士久保古墳が位置し、恋瀬川の対岸には舟塚山古墳や府中愛宕山古墳等の大型前方後円墳が点在している。これらの前方後円墳を中心とした古墳群が、恋瀬川の両岸に展開している。これらの古墳群を造営した集落等の調査例は少ない。奈良・平安時代には常陸国の国府が設置され、国衙機構を担った遺跡が点在する。国府の外縁にあたる本遺跡周辺でも、上ノ宮遺跡等の該当する時期の遺跡が多く確認されている。中世になると、三村地区には石岡を拠点とする大掾氏の支城である三村城が構えられており、戦国時代には小田氏との抗争の中で攻防戦が繰り返されている。

(渡邊)

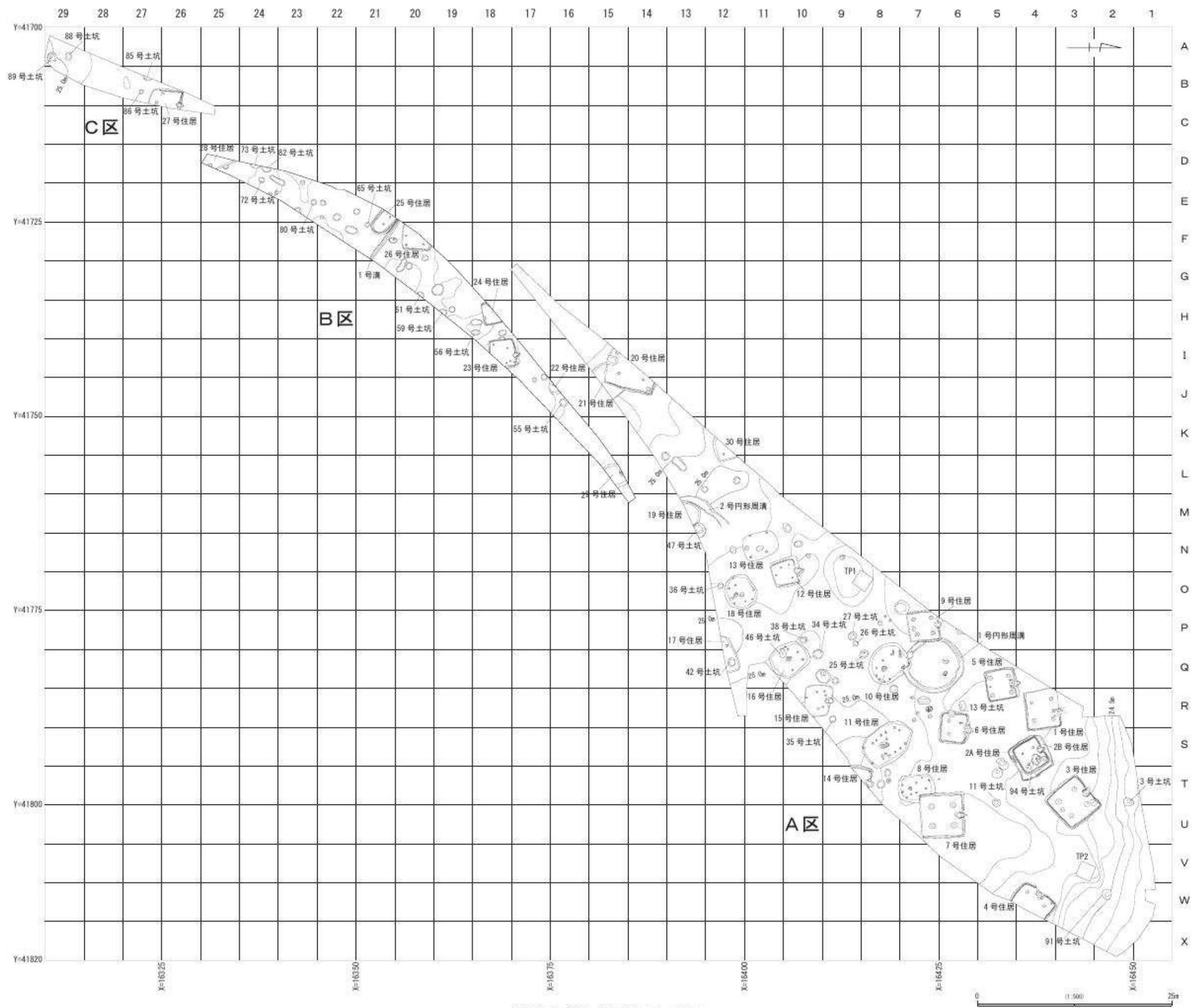
2-3 下ノ宮遺跡の調査履歴

下ノ宮遺跡は、東西1.5km、南北1kmの広範囲にわたる遺跡である。平成3年の試掘調査以来、5回の試掘調査、3回の発掘調査が行われており、今回の調査は4回目の発掘調査にあたる（第1図・第1表）。これまで確認されている遺構は古墳時代の竪穴住居跡中心だが、旧石器時代～縄文時代草創期の石核や、縄文時代早期から晩期の土器、弥生時代の有角石器、奈良・平安時代の竪穴住居跡、そして中世・近世の溝と、各時代の遺構・遺物が確認されている。

(曾根)

第1表 下ノ宮遺跡調査一覧

調査期間	調査地	調査原因	調査面積 ／対象面積	主な遺構	主な遺物	文献・備考
平成3年 2月	三村字下宮 5254ほか	老人ホーム建設 (試掘)	／20,000 m ²	住居跡53以上、方形周溝 状遺構1、土坑49以上、 焼土跡2、溝12	縄文土器(早・前期)、土師器、 須恵器	—
平成15年 7月	三村字十八山 5276-1	防火水槽設置 (発掘)	62 m ²	住居跡2(古墳)、溝1、ビット	縄文土器(早・前・中・後・ 晩期)・石器・土製品、土師器、 須恵器、土師質土器、陶器	市内遺跡調査報告書第3集 (2008)
平成15年 11月	三村4555	電波塔建設 (発掘)	200 m ²	住居跡1(古墳)、土坑1、 溝1	石核(旧石器～縄文草創期)、 縄文土器(早・前期)、弥生 土器(後期)、土師器、須恵器、 近世陶器、土鍤、鉄製品	下ノ宮遺跡—KDDI電波 塔建設に伴う埋蔵文化財 発掘調査報告書—(2004) 市内遺跡調査報告書第3集 (2008)
平成17年 5月	三村字上官 5168	防火水槽設置 (試掘)	／35 m ²	なし	縄文土器、土師器	石岡市内遺跡調査報告書 (2006)
平成18年 6月	石川字角田 2532	移動通信基地局建設 (試掘)	／110 m ²	なし	縄文土器(前期)、土師器	市内遺跡調査報告書第2集 (2007)
平成18年 10月	石川2509-2	防火水槽設置 (試掘)	／35 m ²	小ビット1	縄文土器	市内遺跡調査報告書第2集 (2007)
平成18年 12月～ 平成19年 1月	三村5161 ほか	県営畠地帯総合整備 事業 (発掘)	1,300 m ²	住居跡7(縄文1・古墳5・ 平安1)、性格不明遺構1(縄 文)、土坑39、溝3、ビット35	縄文土器(前・中・後期)・ 石器、弥生土器(中期)・有 角石器、土師器、須恵器、 舶載陶磁器、国産陶磁器	下ノ宮遺跡—県営畠地帯総合 整備事業(三村地区)に伴 う発掘調査—(2009)
平成19年 6月	三村5089 ほか	県営畠地帯総合整備 事業(試掘)	／2,609 m ²	住居跡11、土坑4、ビット 52	縄文土器(前・中・後)・石器、 土師器、須恵器	市内遺跡調査報告書第4集 (2009)
平成23年 7月～10月	三村5089 ほか	県営畠地帯総合整備 事業(発掘)	2,600 m ²			本報告



第5図 遺跡全体図 (1:500)

第3章 繩文時代

繩文時代の住居跡は、A区において7軒、B区において3軒の分布が確認されるなど、調査地点の北東側に集中する傾向がみられるが、調査範囲が限定的であることから、全体の状況は不明である。楕円形プランを中心としており、主軸方向や柱穴の配列などでも共通する傾向が認められる。28基の土坑は円形および楕円形プランを基本としており、調査地点の広い範囲に散在する。

3-1 住居跡

8号住居跡（第6～9図、第2表、図版3・14）

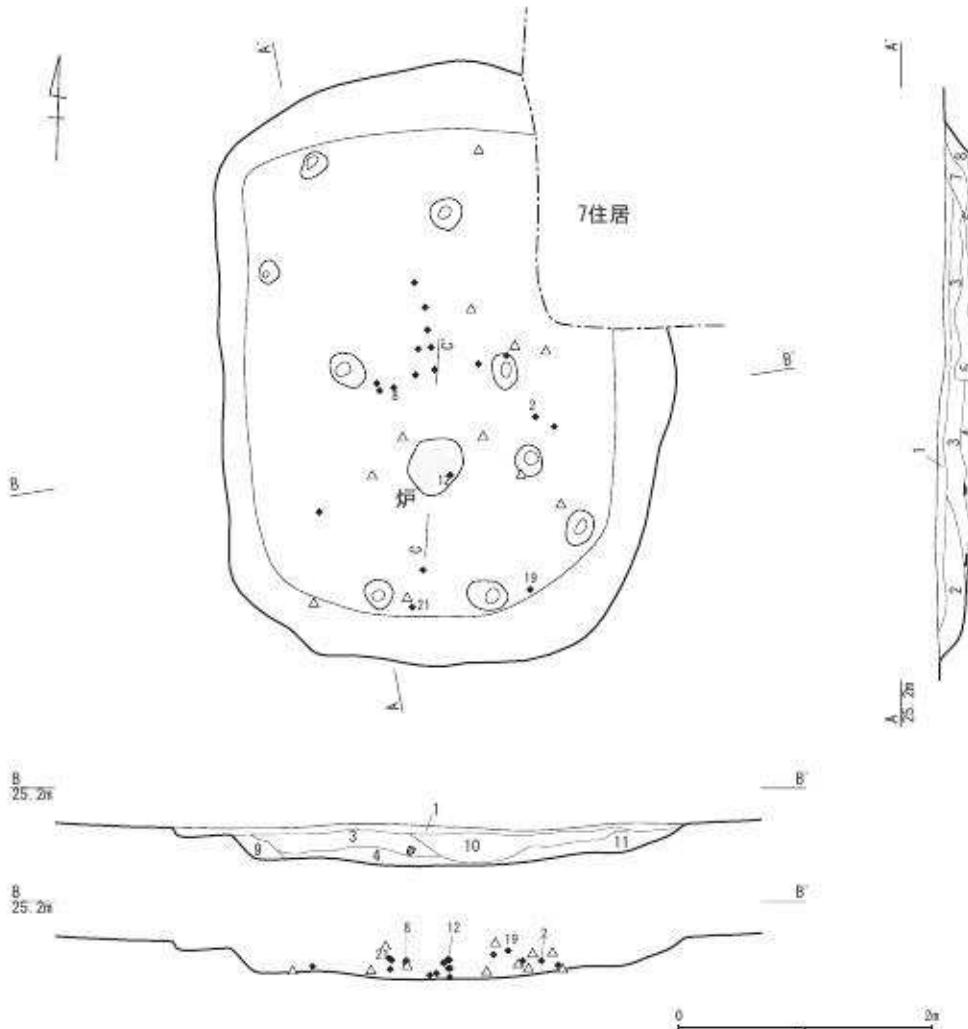
A区の北東側に位置する。西側に近接して11号住居跡が分布する。北東側を古墳時代の7号住居跡に切られる。各所に耕作による攪乱を受けているが、平面形は東西方向356cm、南北方向475cmの不整長楕円形ないし隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-3°-Wを示す。壁は緩傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は33cmを測る。床面はIV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝や炉跡は認められなかった。住居内から9個のピットが検出された。全体に長軸線に沿って対応するような配列をみせており、本住居跡に伴う柱穴であった可能性が高い。平均口径26cm、深さ21cmを測る。炉跡は長軸線に沿った床面中央南寄りに位置する。長軸45cmの楕円形を呈する地床炉である。皿状に浅く窪み、底面は被熱している。覆土中から床面にかけて縄文土器355片、須恵器1片、土師器2片、石器22点が出土した。伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代前期初頭、花積下層式土器の時期の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると7号住居跡に先行する。

10号住居跡（第10～13図、第3表、図版3・4・14・15）

A区の中央部に位置する。東側に近接して11号住居跡が分布する。北東側の一部を1号円形周溝状遺構に切られる。各所に耕作による攪乱を受けているが、平面形は東西方向397cm、南北方向538cmの不整な長楕円形を呈する。主軸方向はN-42°-Wを示す。壁は緩傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は45cmを測る。床面はIV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝は認められなかった。住居内から11個のピットが検出された。全体に長軸線に沿って対応するような配列をみせており、本住居跡に伴う柱穴であった可能性が高い。平均口径29cm、深さ12cmを測る。炉跡は長軸線に沿った床面中央南東寄りに位置する。長軸82cmの楕円形を呈する地床炉である。遺存状態は不良であるが、皿状に浅く窪み、底面は被熱している。覆土中から床面にかけて縄文土器184片、須恵器33片、土師器48片、石器6点が出土した。伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代前期初頭、花積下層式土器の時期の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると1号円形周溝状遺構に先行する。

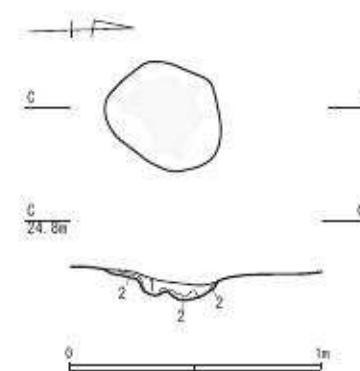
11号住居跡（第14～16図、第4表、図版4・15・16）

A区の北東側に位置する。東側に8号住居跡、西側に10号住居跡がそれぞれ近接して分布する。各所に耕作による攪乱を受けているが、平面形は東西方向458cm、南北方向680cmの不整な長楕円形を呈する。主軸方向はN-38°-Wを示す。壁は緩傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は44cmを測る。床面はIV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝は認められなかった。住居内から15個のピットが検



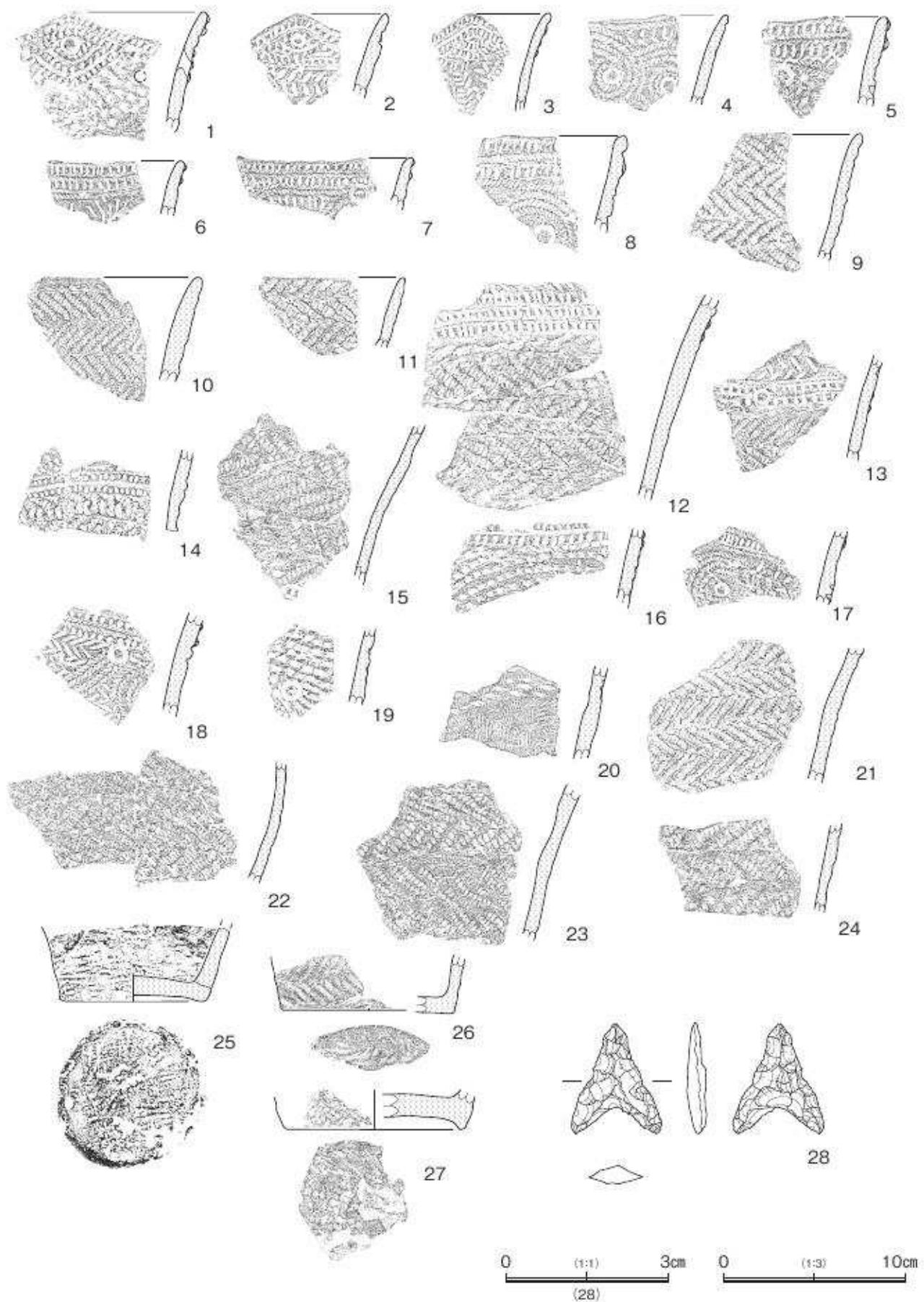
- 8号住居跡**
- 1 T.SYR3/3 蒼褐色土 粘性なし。しまり普通。
 - 2 T.SYR3/4 蒼褐色土 細いロームを中量、粘性普通、しまり普通。
 - 3 T.SYR3/4 蒼褐色土 ロームブロック(3~5cm)やや多く含む、粘性普通、しまり普通。
 - 4 T.SYR3/2 黒褐色土 ローム小ブロック(1cm前後)中量、燒土少量、粘性なし、しまり普通。
 - 5 T.SYR3/4 蒼褐色土 ロームブロック(5cm前後)を多量、粘性普通、しまり普通。
 - 6 T.SYR4/3 白色土 細いローム・ロームブロック(1~3cm)多量、粘性普通、しまり普通。
 - 7 10YR3/2 黑褐色土 ローム粒を少量、粘性普通、しまり普通。
 - 8 10YR3/4 蒼褐色土 ローム小ブロック(1cm前後)少量、粘性普通、しまり普通。
 - 9 10YR4/4 白色土 細いローム・ローム粒を多量、粘性普通、しまり普通。
 - 10 10YR2/3 黑褐色土 細いロームを少量、粘性なし、しまりなし。
 - 11 10YR3/4 蒼褐色土 細いロームを多量、粘性なし、しまりなし。

第6図 8号住居跡 (1:60)

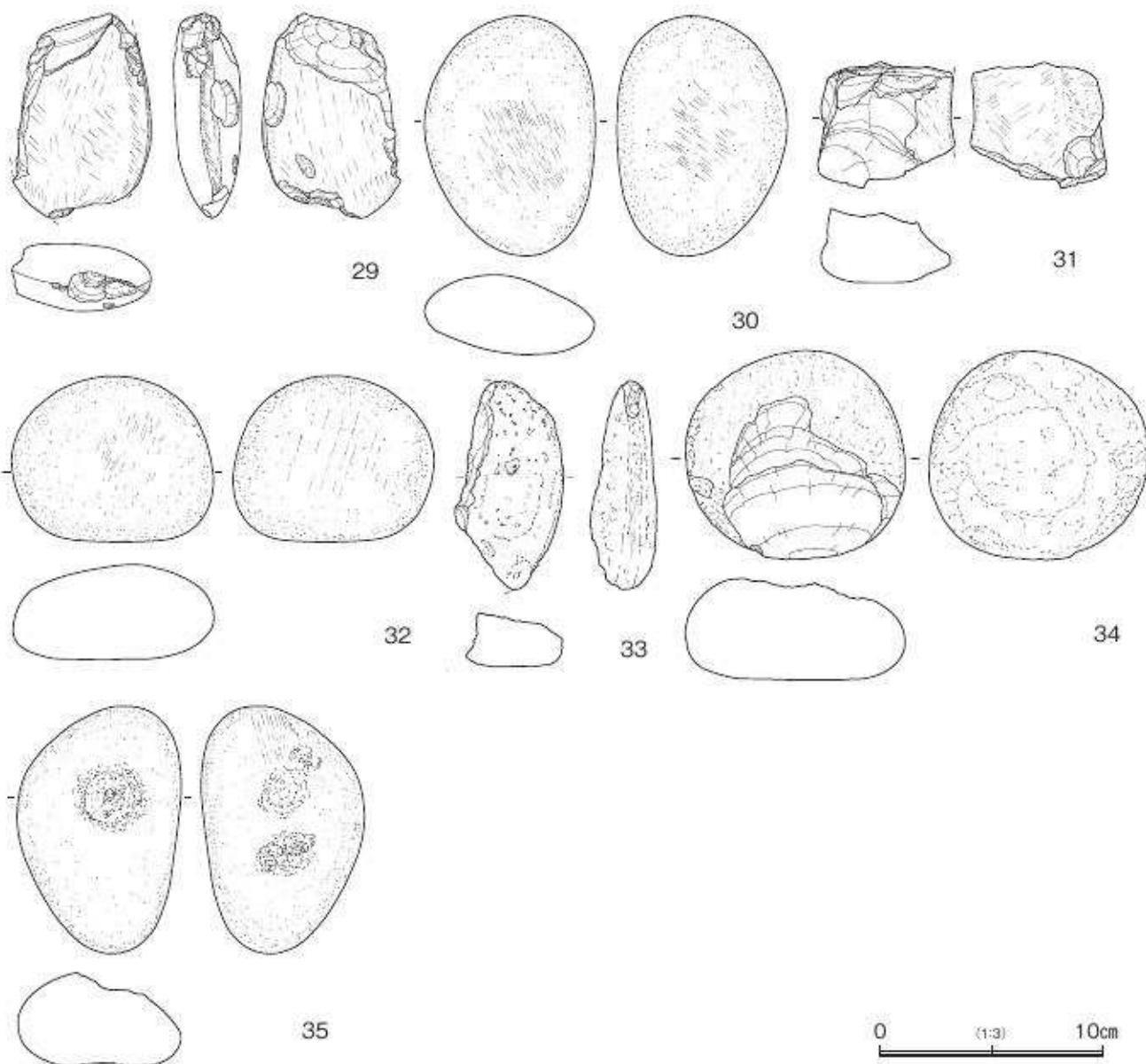


- 8号住居跡 炉**
- 1 10YR3/2 黑褐色土 燃土粒を少量、粘性なし、しまりなし。
 - 2 5YR3/6 蒼褐色土 燃土層、粘性なし、しまりなし。

第7図 8号住居跡炉 (1:30)



第8図 8号住居跡出土遺物（1）



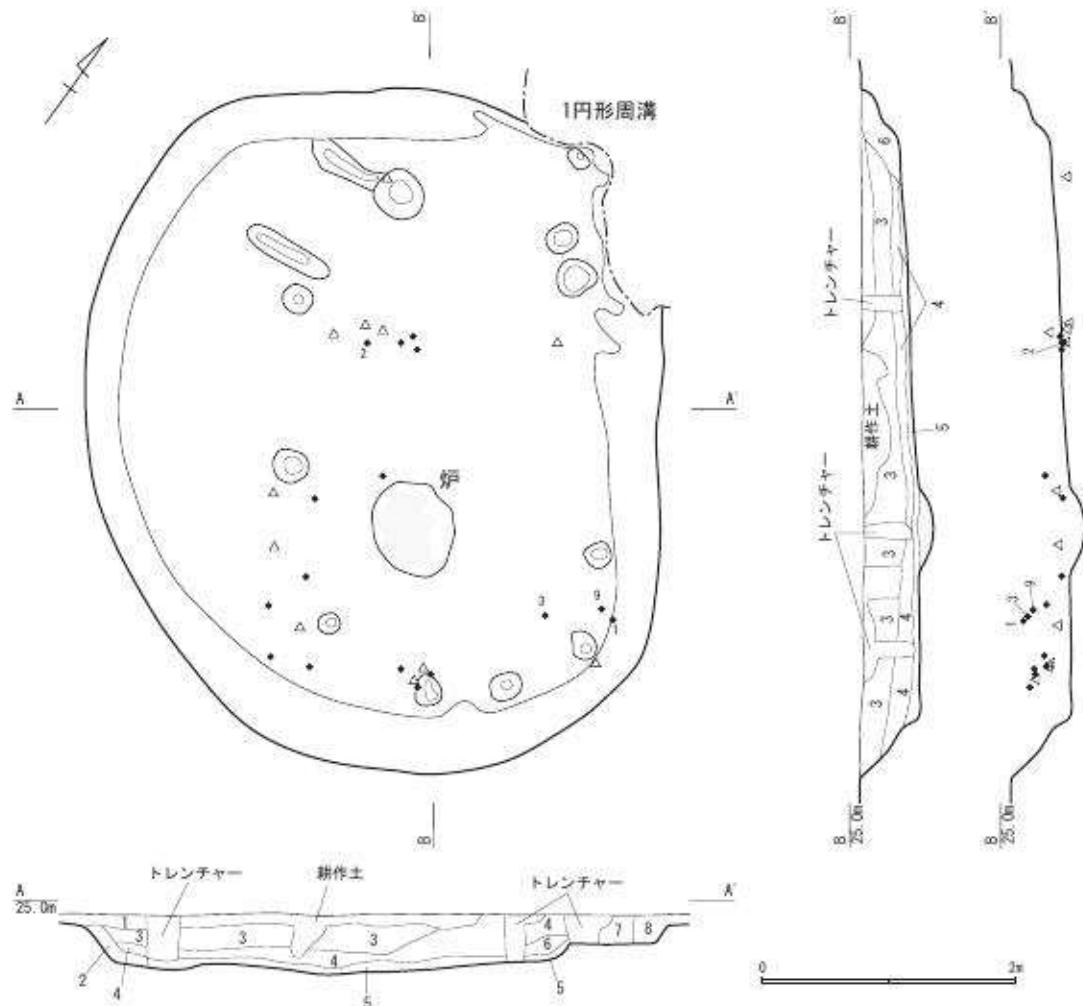
第9図 8号住居跡出土遺物（2）

第2表 8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	—	—	—	波状口縁部片。波状縁に沿って2条の刻みを有する隆帯が施され、波頂下に円形竹管文を付し、それを3条の上向き弧状隆帯文が施される。以下に刺突文、横位L R 縄文を施す。	纖維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式
2	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。波頂部に刻みを付した隆帯を沿わせ、以下に弧状の隆帯を施し、縄文原体側面圧痕文横位を弧状に施す。円形竹管文、波状沈線文を加える。	纖維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
3	深鉢	—	—	—	波状口縁部片。波状縁に沿って刻みを付した隆帯2条をめぐらし、波頂下には上向き弧状の刻み付き隆帯を3条施す。以下に縄文原体圧痕文と刺突文を施す。	纖維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
4	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。口縁部に沿って縄文原体側面圧痕文を施し、以下にワラビ手状モチーフを同手法で表現し、円形竹管文を施す。空白部に短沈線を施す。	纖維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
5	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。波状縁に沿って2条の刻みを付した隆帯と縄文原体側面圧痕文を施し、波頂下から弧状の隆帯を施す。以下に側面圧痕文を加え円形竹管文、刺突文を施す。	纖維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
6	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。波状縁に沿って刻みを付した2条の隆帯を縄文原体側面圧痕文を付し、継位、斜位の沈線文を施す。	纖維 石英 白色粒	黄褐色	普通	花積下層式

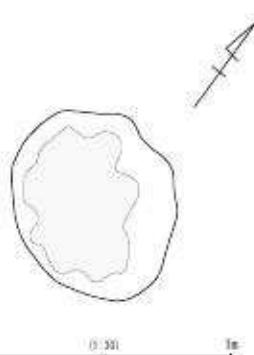
番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
7	深鉢	—	—	—	口縁部に沿って刻みを付した2条の隆帯と縄文原体側面圧痕文を施し、以下に側面圧痕文によるワラビ手状のモチーフを描き、円形竹管文、短沈線文を加える。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
8	深鉢	—	—	—	口縁部に沿って刻みを付した2条の隆帯と縄文原体側面圧痕文を施し、以下に側面圧痕文によるワラビ手状モチーフを描き、円形竹管文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
9	深鉢	—	—	—	全面に横位RL縄文と横位LR縄文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	良好	花積下層式
10	深鉢	—	—	—	横位RL縄文と横位LR縄文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
11	深鉢	—	—	—	平縁深鉢。全面に横位LR縄文と横位RL縄文を羽状に施す。	織維 白色粒	黒褐色	良好	花積下層式
12	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を刻みを付した隆帯を3条施し、文様帶内に斜位沈線文を施す。以下に横位RL縄文と横位LR縄文を施す。	織維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式
13	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を刻みを付した横走隆帯と縄文原体側面圧痕文で区画し、区画間に円形竹管文を施す。区画内に羽状沈線文を施す。以下に横位LR縄文と横位RL縄文を施す。	織維 白色粒	褐色	普通	花積下層式
14	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を刻みを付した2条の隆帯で区画し、区画内に刺突文を加える。以下に横位RL縄文、横位LR縄文を施す。	織維 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
15	深鉢	—	—	—	全面に横位RL縄文と横位LR縄文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
16	深鉢	—	—	—	刻みを付した横位2条の隆帯をめぐらし、以下に刺突による重弧状のモチーフを描く。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
17	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を刻みを付した隆帯と縄文原体圧痕文で区画し、区画内にワラビ手状の圧痕文、円形竹管文、刺突文（短沈線）を施す。	織維 白色粒	褐色	普通	花積下層式
18	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を刻みを有する2条の隆帯と縄文原体圧痕文で区画し、区画内に斜位、満巻状の圧痕文を施し、円形竹管文、縦位羽状沈線文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
19	深鉢	—	—	—	斜位の刺突文、円形竹管文を施す。	織維 角閃石 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
20	深鉢	—	—	—	縦位の貝殻の背面圧痕文と横位の刺突文を施す。	織維 白色粒	黒褐色	普通	花積下層式
21	深鉢	—	—	—	全面に横位LR縄文と横位RL縄文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
22	深鉢	—	—	—	横位LR縄文と横位RL縄文を羽状に施す。	織維 石英 中粒砂	暗褐色	普通	花積下層式
23	深鉢	—	—	—	横位RL縄文と横位LR縄文を羽状に施す。	織維 角閃石 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
24	深鉢	—	—	—	全面に横位LR縄文と横位RL縄文を羽状に施す。	織維 角閃石 白色粒	黒褐色	普通	花積下層式
25	深鉢	—	8.1	—	やや上底を呈し、体部は外傾して開く。体部外面および底部の外面に貝殻圧痕文を施す。(肋条を押圧する)	織維 石英 白色粒	赤褐色 黒褐色	普通	花積下層式
26	深鉢	—	9.3	—	体部は平底から直立して立ちあがる。外面は無筋横位RL縄文と無筋縦位LR縄文を羽状に施す。底部外面にも縄文を施す。	織維 石英 白色粒	黃褐色	普通	花積下層式
27	深鉢	—	10.0	—	上げ底から体部は直立して立ちあがる。外面は横位RL縄文を施し、底部外面にも縄文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	不良	花積下層式

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
28	石織	チャート	2.1	1.7	0.3	0.7	四基無茎織。
29	磨製石斧	流紋岩	(9.2)	6.2	3.1	226.3	基部や刃部を欠損。敲石として転用した可能性有。
30	磨石	砂岩	10.8	7.7	3.6	373.2	表裏の一部に小さな磨面形成。
31	磨石	安山岩	(5.7)	(6.2)	3.3	154.2	残存する部位に磨跡。
32	磨石	砂岩	7.4	9.1	4.4	410.3	表裏に小さな磨面。
33	磨石	多孔質安山岩	(9.4)	(4.9)	3.1	709	縦縁辺に小さな磨面。
34	敲石	砂岩	9.4	9.9	4.5	513.2	一部に強い敲打痕。全体的に微細な敲打痕。
35	凹石	砂岩	11.1	7.4	4.3	424	器体上部には、表裏に一对の凹み。

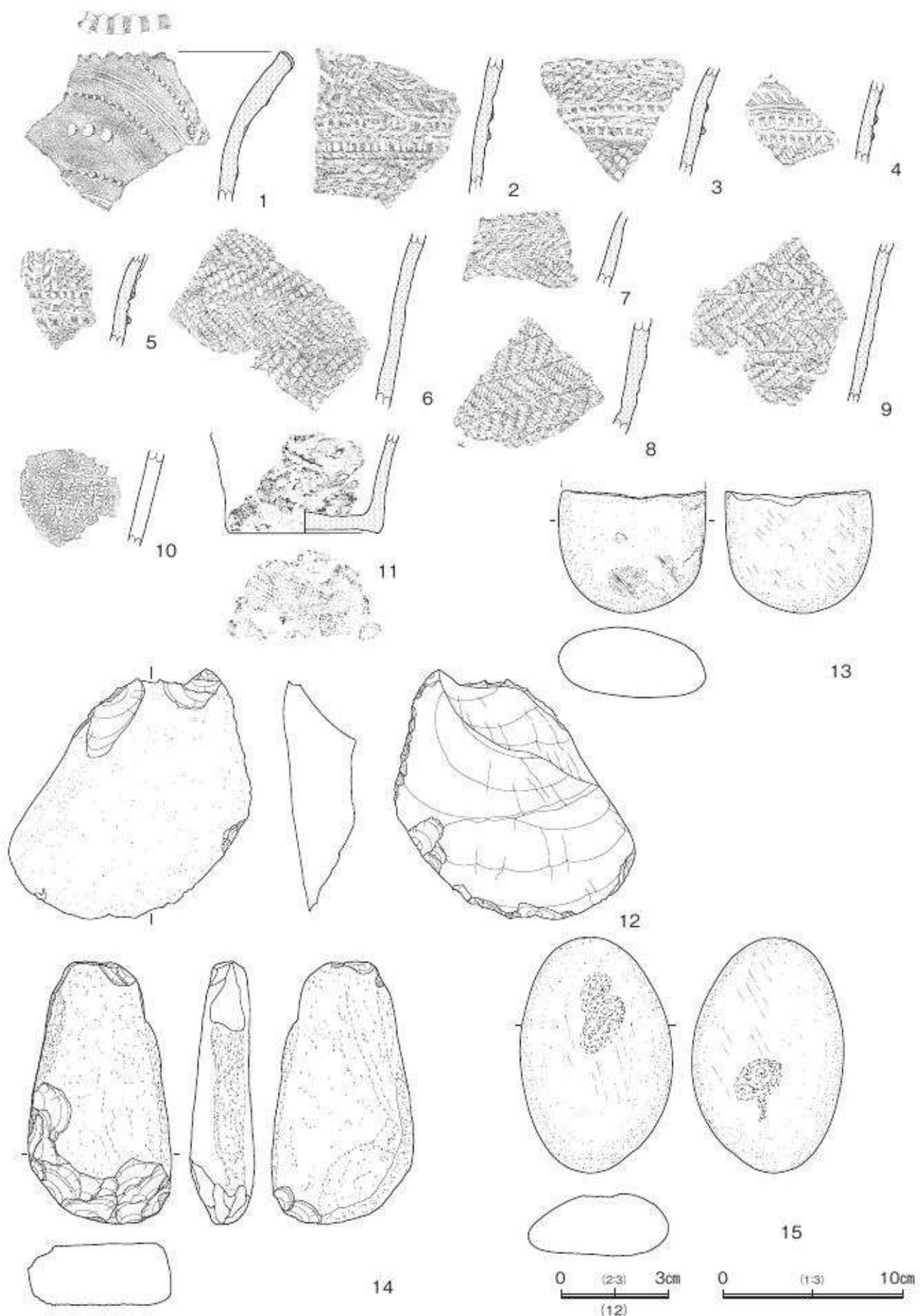


- 10号住居跡
- 1 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒少量(耕作土の一端?)、粘性普通、しまり普通。
 - 2 10YR1/4 棕色土 細いローム多量・ロームブロック(5cm前後)少量、粘性普通、しまり普通。
 - 3 10YR3/4 暗褐色土 細いローム・ローム小ブロック(1~2cm前後)少量、粘性普通、しまり普通。
 - 4 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒を少量、粘性普通、しまり普通。
 - 5 10YR3/4 暗褐色土 ローム小ブロック(1~3cm前後)少量、粘性あり、しまりあり。
 - 6 10YR1/3 薄い黄褐色土 細いロームを多量、粘性普通、しまり普通。
 - 7 10YR1/4 棕色土 細いローム・ローム粒多量、粘性普通、しまり普通。
 - 8 10YR1/6 棕色土 細いローム主体、粘性普通、しまり普通。

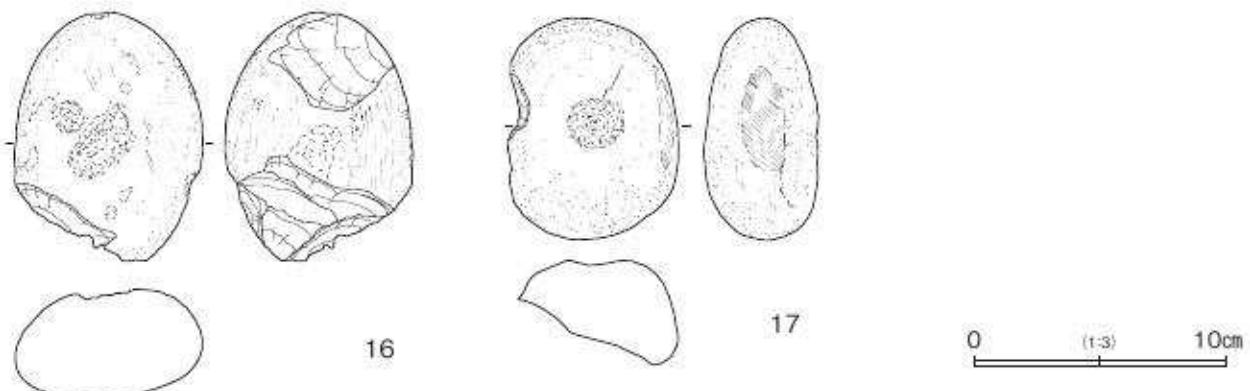
第10図 10号住居跡 (1:60)



第11図 10号住居跡炉 (1:30)



第12図 10号住居跡出土遺物(1)

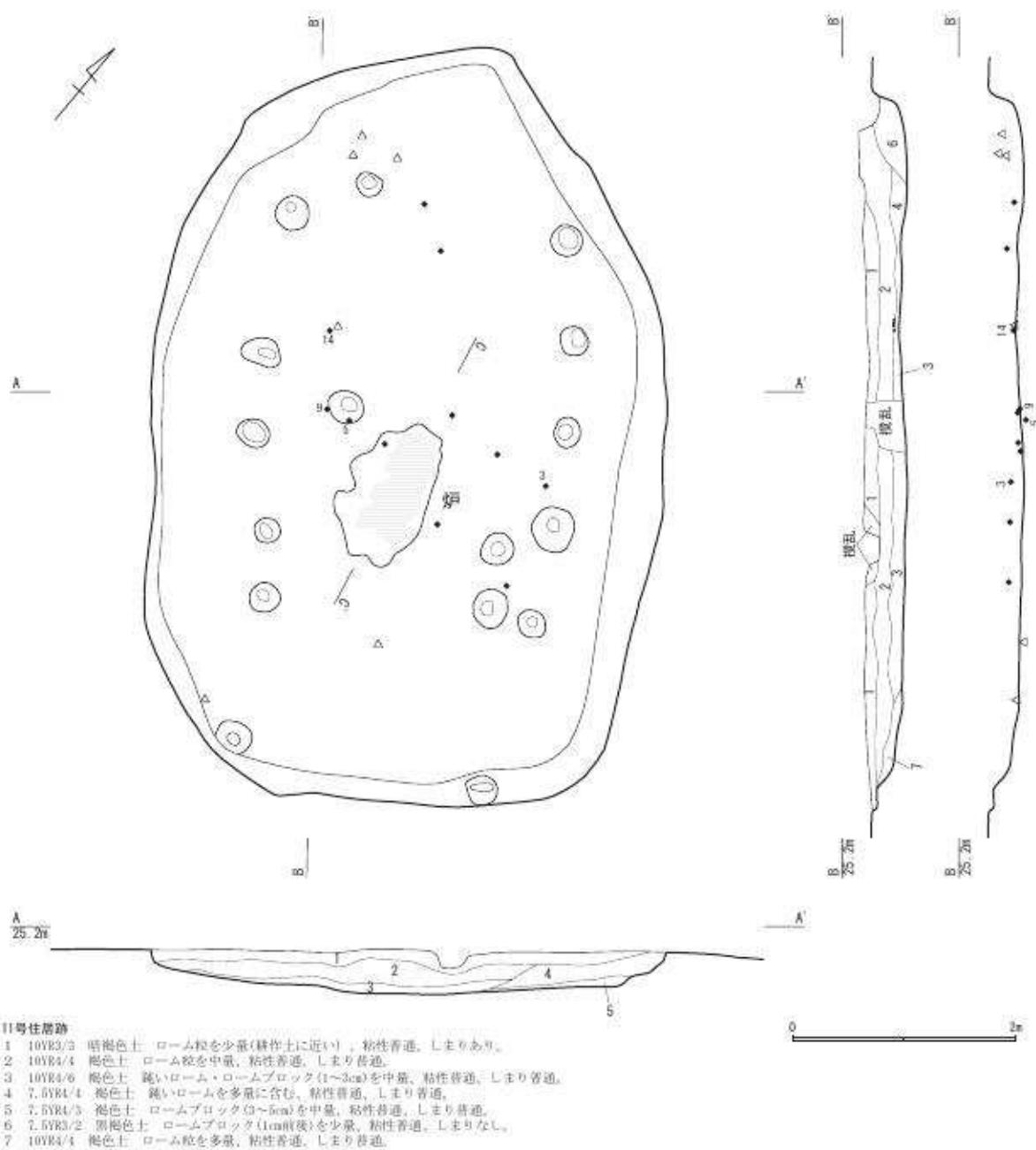


第13図 10号住居跡出土遺物（2）

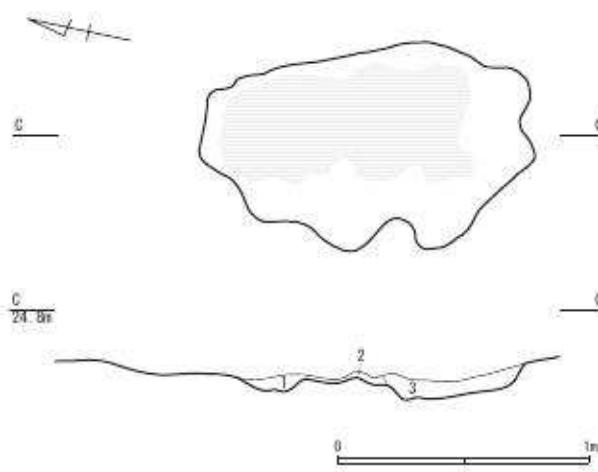
第3表 10号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	—	—	—	口唇部上に押圧を加え、口縁部は大きく外反する。張状の隆帯を施し、刺みを加える。隆帯に沿って沈線文、刺突文を施す。隆帯の上に加えた突起上には縦条体圧痕文が付されている。	織維 角閃石・石英 白色粒	明赤褐色	良好	田中上層式
2	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を刻みを有する2条の隆帯と縦文原体側面压痕文で区画し、区画内に斜位の沈線文を施す。	織維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式
3	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶下に刻みを付した2条の隆帯と横位の刺突文を施す。以下に横位L・R縦文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
4	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を刻みを有する2条の隆帯と縦文原体側面压痕文で区画し、区画内に斜位の沈線文を施す。以下に横位L・R縦文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	良好	花積下層式
5	深鉢	—	—	—	刻みを付した2条の横位の隆帯をめぐらし、上位の隆帯には斜位2条の斜位の刻みを付した隆帯を連絡させている。横位L・R縦文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
6	深鉢	—	—	—	全面に横位R・L縦文と横位L・R縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
7	深鉢	—	—	—	全面に横位R・L縦文を施す。	織維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式
8	深鉢	—	—	—	全面に横位R・L縦文と横位L・R縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
9	深鉢	—	—	—	全面に横位L・R縦文と横位R・L縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	黃褐色	普通	花積下層式
10	深鉢	—	—	—	波状貝殻文を2段に施す。	石英 白色粒	黒褐色	良好	浮島I～II式
11	深鉢	—	8.8	—	わずかに上底を呈する底部から体部は直立して開く。体部外面は剥落が著しく、施文は不明。底部外面に貝殻压痕文を施す。(筋条を引きずる)	織維 石英 白色粒	暗褐色	不良	花積下層式

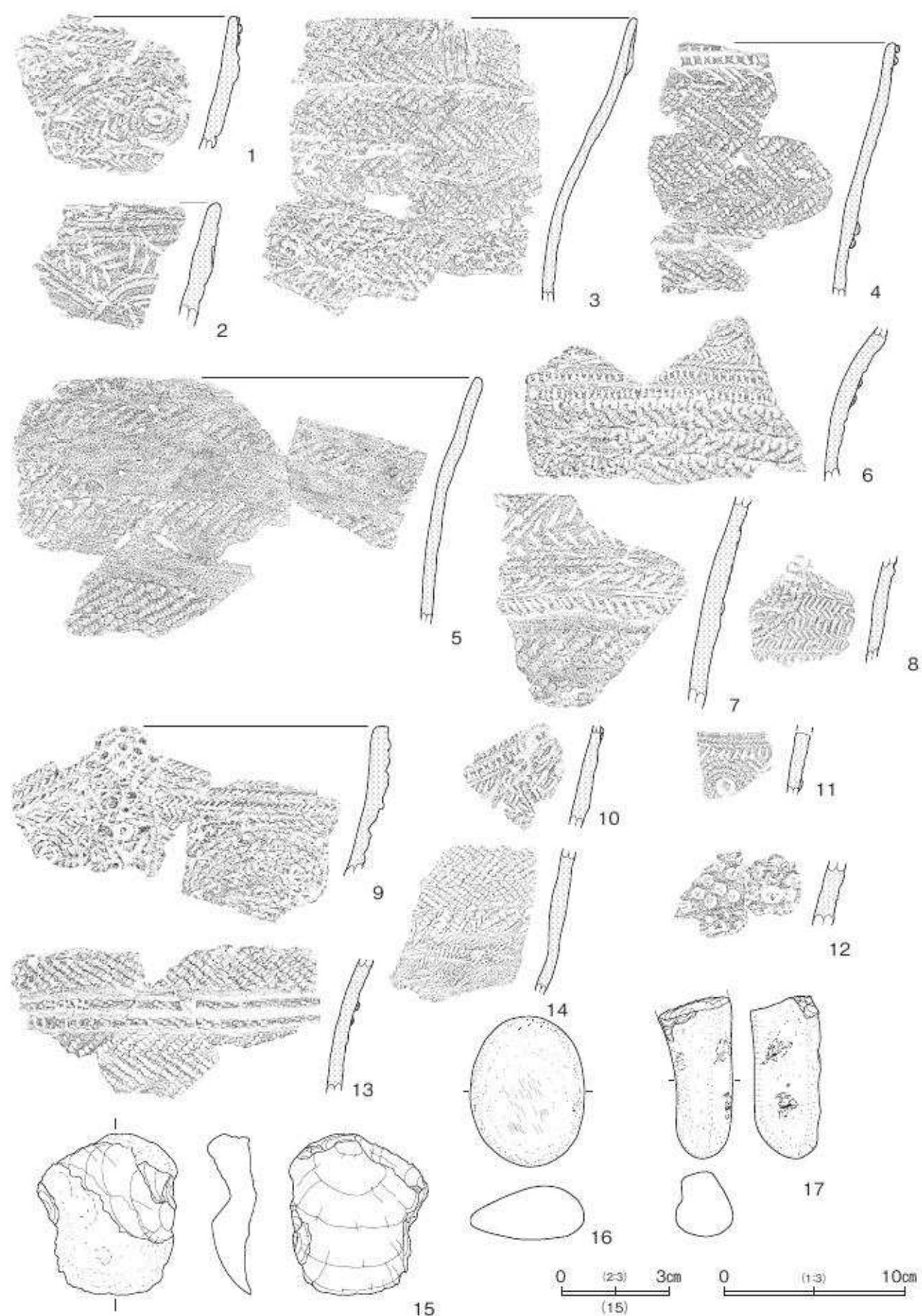
番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
12	二次加工 剥片	頁岩	7.0	6.8	2.6	92.7	素材は蝶の表皮部分の剥片。弧状を呈する縁辺に微細剥離痕が連続する。
13	磨石	砂岩	(6.9)	8.2	3.9	310.3	正面に溝状～不整形の擦痕。裏面に若干の磨耗痕。
14	敲石	砂岩	14.6	8.0	3.7	57.4	扁平蝶を素材を用い、上端、左側縁～下縁に剥離痕。蝶の表面は一部を除き微細な敲打痕に覆われる。打製石斧等の未製品の可能性有。
15	凹石	砂岩	13.1	8.6	3.8	528.4	表裏に凹み。
16	凹石	花崗閃綠岩	9.9	7.5	4.4	381.2	正面中央に凹み。上下に強い敲打痕。
17	凹石	流紋岩	8.8	6.8	4.6	265.3	中央部に凹み。右側縁に磨面。



第14図 11号住居跡 (1:60)



第15図 11号住居跡炉 (1:30)



第16図 11号住居跡出土遺物

第4表 11号住居跡出土遺物観察表

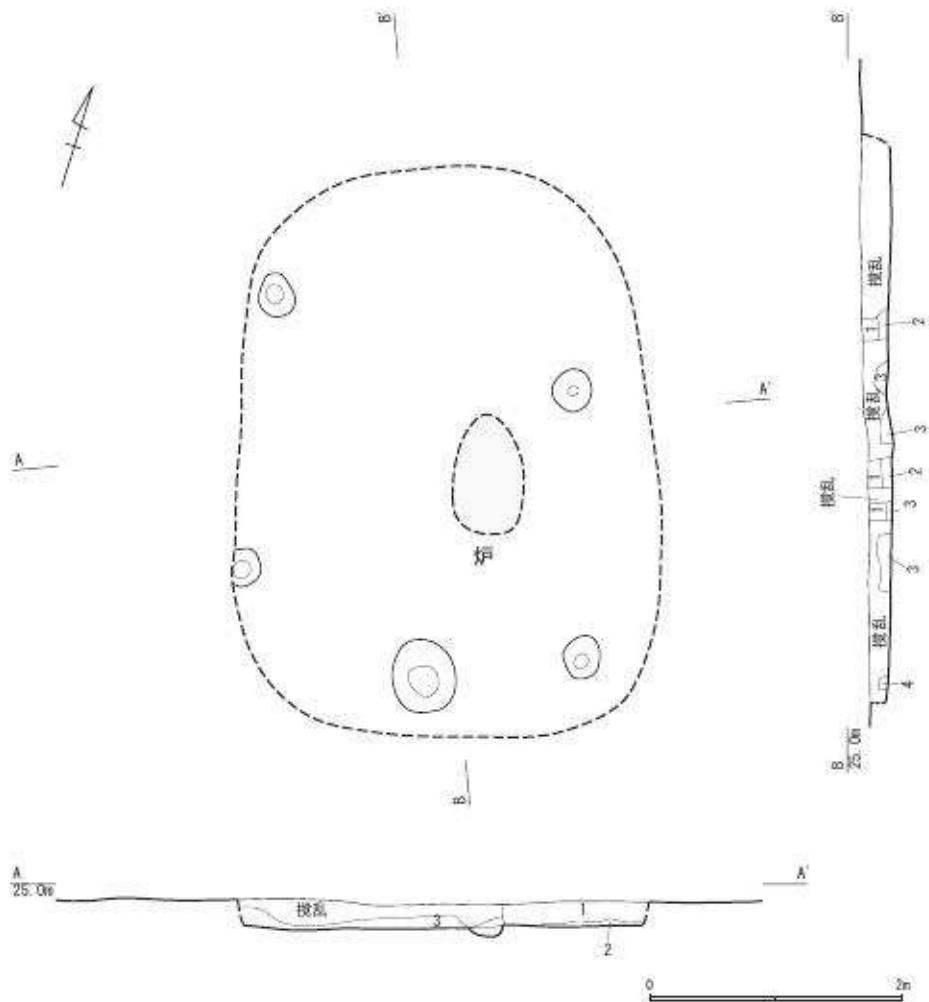
番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	-	-	-	波状縁深鉢。波状縁に沿って刻みを付した隆帯と縄文原体側面圧痕文を施し、同手法のワラビ手文を描き、円形竹管文を施し、空白部に羽状沈線文を施す。	纖維 石英 白色粒	暗褐色	不良	花積下層式
2	深鉢	-	-	-	口縁部文様帶を横位の縄文原体側面圧痕文で区画し、以下にワラビ手状のモチーフを同手法で描き、空白部に羽状沈線文を施す。	纖維 石英 白色粒	暗褐色	不良	花積下層式
3	深鉢	-	-	-	平縁深鉢。有段口縁を呈し。口縁部に2本単位の縦位の隆帯を施し、口縁部から横位L R縄文と横位R L縄文を羽状に施す。	纖維 白色粒 赤色粒	暗褐色	不良	花積下層式
4	深鉢	-	-	-	平縁深鉢。口縁部直下に横走する2条の隆帯をめぐらし、隆帯上には刻み目を付す。以下に斜行沈線文を加え、以下に横位L R縄文。横位R L縄文を施す。胴部に2条の横走する隆帯をめぐらし、隆帯上に横位R L縄文を施す。	纖維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式
5	深鉢	-	-	-	横位のL R縄文を口縁部から無文帯をはさんで施文する。	纖維 石英 白色粒 細粒砂	暗褐色	普通	花積下層式
6	深鉢	-	-	-	口縁部文様帶を横走する刻みを付した隆帯と縄文原体側面圧痕文で区画し、文様帶内にワラビ手状モチーフを側面圧痕文で描き、羽状沈線文を施す。以下にループ文を伴う横位R L縄文と横位L R縄文を施す。	纖維 石英 白色粒 チャート	暗褐色	普通	花積下層式
7	深鉢	-	-	-	口縁部文様帶を斜位の刻みを付した隆帯と縄文原体側面圧痕文で区画し、区画内には側面圧痕文、羽状沈線文を施す。以下に横位L R縄文を施す。	纖維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
8	深鉢	-	-	-	口縁部文様帶を刻みを付した隆帯と縄文原体側面圧痕文で区画し、区画内に同手法によるワラビ手文を描き、羽状沈線文を描く。	纖維 角閃石 石英	暗褐色	普通	花積下層式
9	深鉢	-	-	-	波状縁深鉢。波状縁に沿って斜位の刻みを付した隆帯を施し、波頂下から縦位の蛇行する隆帯を垂下させる(隆帯上に刻み)。その中に円形竹管文を付し、円形貼付文を加える。口縁部には縄文原体側面圧痕文によるワラビ手文を描き、円形竹管文や羽状沈線文を施す。円形刺突文を施す。	纖維 石英 白色粒	黄褐色	普通	花積下層式
10	深鉢	-	-	-	波状縁深鉢。波状縁に沿って刻みを付した隆帯と縄文原体側面圧痕文を施し、以下に同手法によるワラビ手文を描き、円形竹管文や羽状沈線文を施す。	纖維 角閃石 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
11	深鉢	-	-	-	口縁部文様帶と横位の側面圧痕文で区画し、同手法によるワラビ手文を描き。円形竹管文を付し、縦位、斜位の沈線文を充填する。	纖維 石英 白色粒	褐色	良好	花積下層式
12	深鉢	-	-	-	横位の縄文原体側面圧痕文と大小の円形竹管文を施す。	纖維 白色粒	暗褐色	不良	花積下層式
13	深鉢	-	-	-	頭部に2条の隆帯をめぐらし、隆帯上には褐文を施し、その上に一部には刻みを付す。隆帯より上位に横位R L縄文を施し、下位には横位L R縄文、横位R L縄文を施す。	纖維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式
14	深鉢	-	-	-	上位に横位R L縄文と横位L R縄文を羽状に施し、下位のみ横位の無節L R縄文を施す。以下には縦位のL R縄文を施す。	纖維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
15	二次加工 剥片	玉髓(メメウ)	4.5	3.9	1.5	199	縫表皮部分の剥片素材、側縁に不規則な加工痕。
16	磨石	砂岩	8.4	6.4	3.0	199.2	正面中央部分がわずかに磨耗。
17	砥石	細粒凝灰岩	(9.0)	4.2	3.9	158.2	上部欠損。自然縫の一部に滑状の深い隙状痕。

出された。全体に長軸線に沿って対応するような配列をみせており、本住居跡に伴う柱穴であった可能性が高い。平均口径 34 cm、深さ 28 cm を測る。炉跡は長軸線に沿った床面中央南東寄りに位置する。長軸 122 cm の長楕円形を呈する地床炉である。遺存状態は不良であるが、皿状に浅く窪み、底面は被熱している。覆土中から床面にかけて縄文土器 720 片、須恵器 10 片、土師器 20 片、石器 17 点が出土した。伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代前期初頭、花積下層式土器の時期の所産であった可能性が高い。

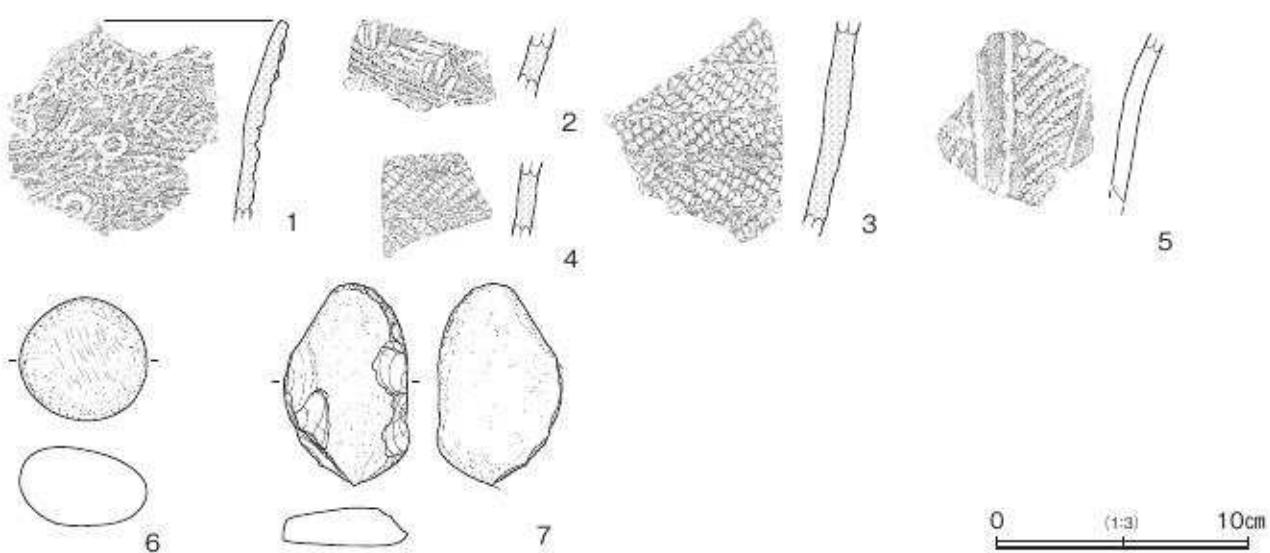
13号住居跡(第17・18図、第5表、図版4・13)

A区の中央部に位置する。南東側に近接して18号住居跡が分布する。各所に耕作による攪乱を受けており、遺存状態は不良であるが、平面形は東西方向 340 cm、南北方向 450 cm ほどの不整な長楕円形を呈するものと



- 13号住居跡
 1 7.5VR3/3 姫褐色土、軽いロームを少量、粘性普通、しまり普通。
 2 7.5VR4/4 黒褐色土、ローム小ブロック(1~3cm)を少量、粘性なし、しまりなし。
 3 7.5VR3/2 姫褐色土、ローム粒を少量、粘性なし、しまりなし。
 4 7.5VR4/6 黒褐色土、粘性普通、しまりあり。

第17図 13号住居跡 (1:60)



第18図 13号住居跡出土遺物

第5表 13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。底面部下に弧状の隆帯を施し、刻みを加える。 2~3条単位の縄文原体側面圧痕文により、弧状、斜状のセーフを描き、円形竹管文、斜沈線文、刺突文を加える。	織維 角閃石 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
2	深鉢	—	—	—	側面圧痕文のワラビ手文のモチーフに沿って羽状沈線文を施し、円形竹管文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
3	深鉢	—	—	—	全面に横位L R縄文と横位R L縄文を羽状に施す。	織維 角閃石 白色粒	黒褐色	普通	花積下層式
4	深鉢	—	—	—	横位L R縄文と横位R L縄文を羽状に施す。	織維 角閃石 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
5	深鉢	—	—	—	縦位沈線による直線的幅狭の巻消帯を施し、縦位R L縄文を施す。	石英 チャート 白色粒	明褐色	普通	加曾利E 2式

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
6	磨石	花崗岩	4.9	5.1	3.3	1022	蝶の平坦面に若干の磨耗痕。
7	敲石	ホルンフェルス	(8.1)	(5.0)	1.7	87.1	蝶の縁辺に剥離痕が連続する。

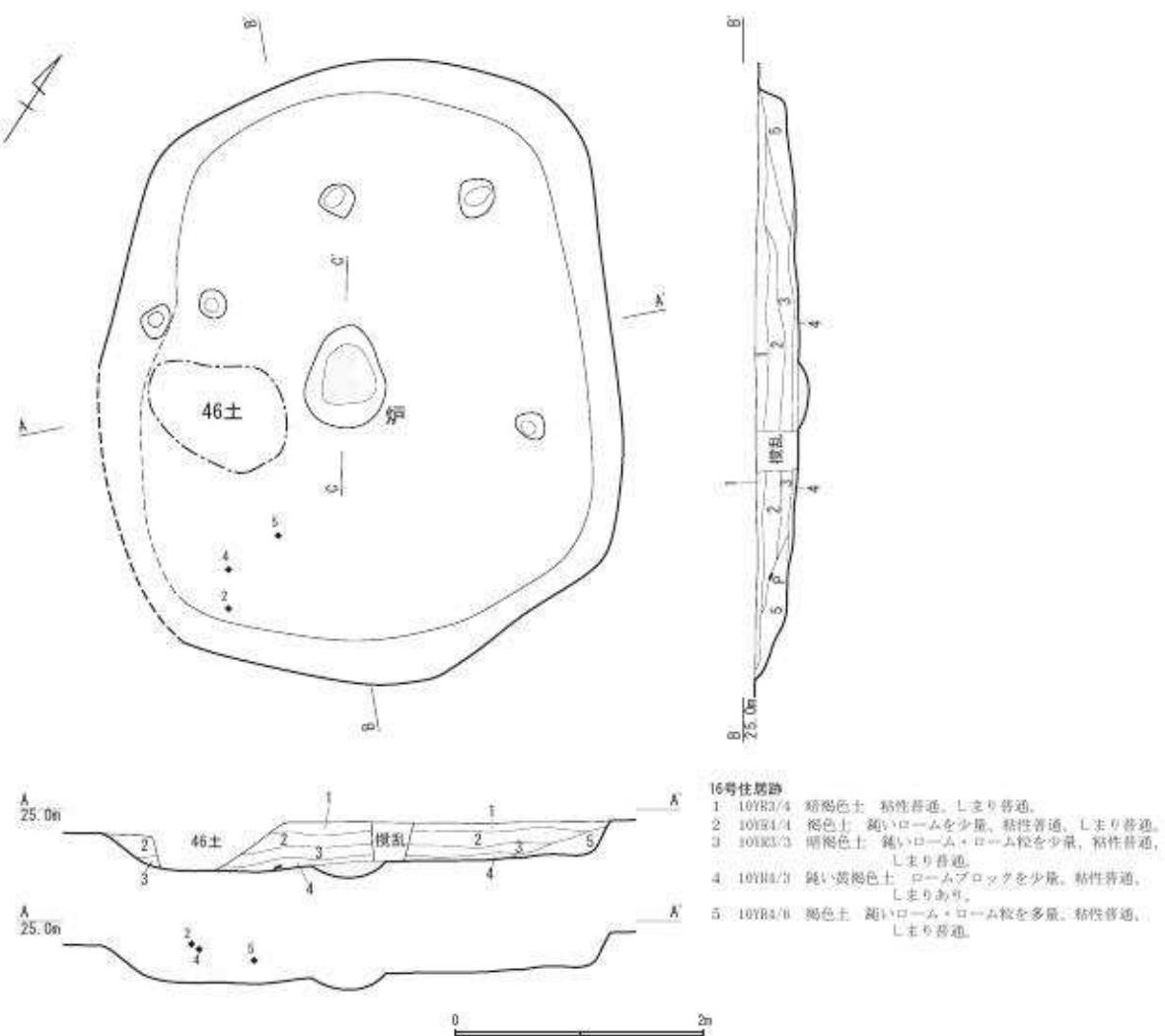
思われる。主軸方向は N - 23° - W を示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は 8 cm を測る。床面は IV 層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝は認められなかった。住居内から 5 個のピットが検出された。全体に壁面に沿って配列されており、本住居跡に伴う柱穴であった可能性が高い。平均口径 36 cm、深さ 27 cm を測る。炉跡は長軸線に沿った床面中央東寄りに位置する。長軸 88 cm の長椭円形を呈する地床炉である。遺存状態は不良であるが、皿状に浅く窪み、底面は被熱している。覆土中から床面にかけて縄文土器 49 片、須恵器 18 片、土師器 31 片、石器 2 点が出土した。伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代前期初頭、花積下層式土器の時期の所産であった可能性が高い。

16号住居跡（第 19 ~ 22 図、第 6 表、図版 5・16・17）

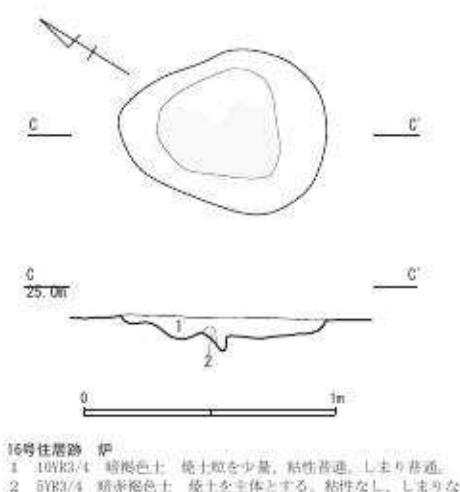
A 区の中央部に位置する。南西側に近接して 18 号住居跡が分布する。西側を 46 号土坑に切られる。各所に耕作による擾乱を受けているが、平面形は東西方向 405 cm、南北方向 498 cm の不整な楕円形を呈する。主軸方向は N - 32° - W を示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は 37 cm を測る。床面は IV 層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝は認められなかった。住居内から 5 個のピットが検出された。全体に壁面に沿って配列されており、本住居跡に伴う柱穴であった可能性が高い。平均口径 23 cm、深さ 21 cm を測る。炉跡は長軸線に沿った床面中央に位置する。長軸 82 cm の楕円形を呈する地床炉である。皿状に浅く窪み、底面は被熱している。覆土中から床面にかけて縄文土器 136 片、須恵器 19 片、土師器 59 片が出土した。伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代前期初頭、花積下層式土器の時期の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると 46 号土坑に先行する。

18号住居跡（第 23・24 図、第 7 表、図版 5・17）

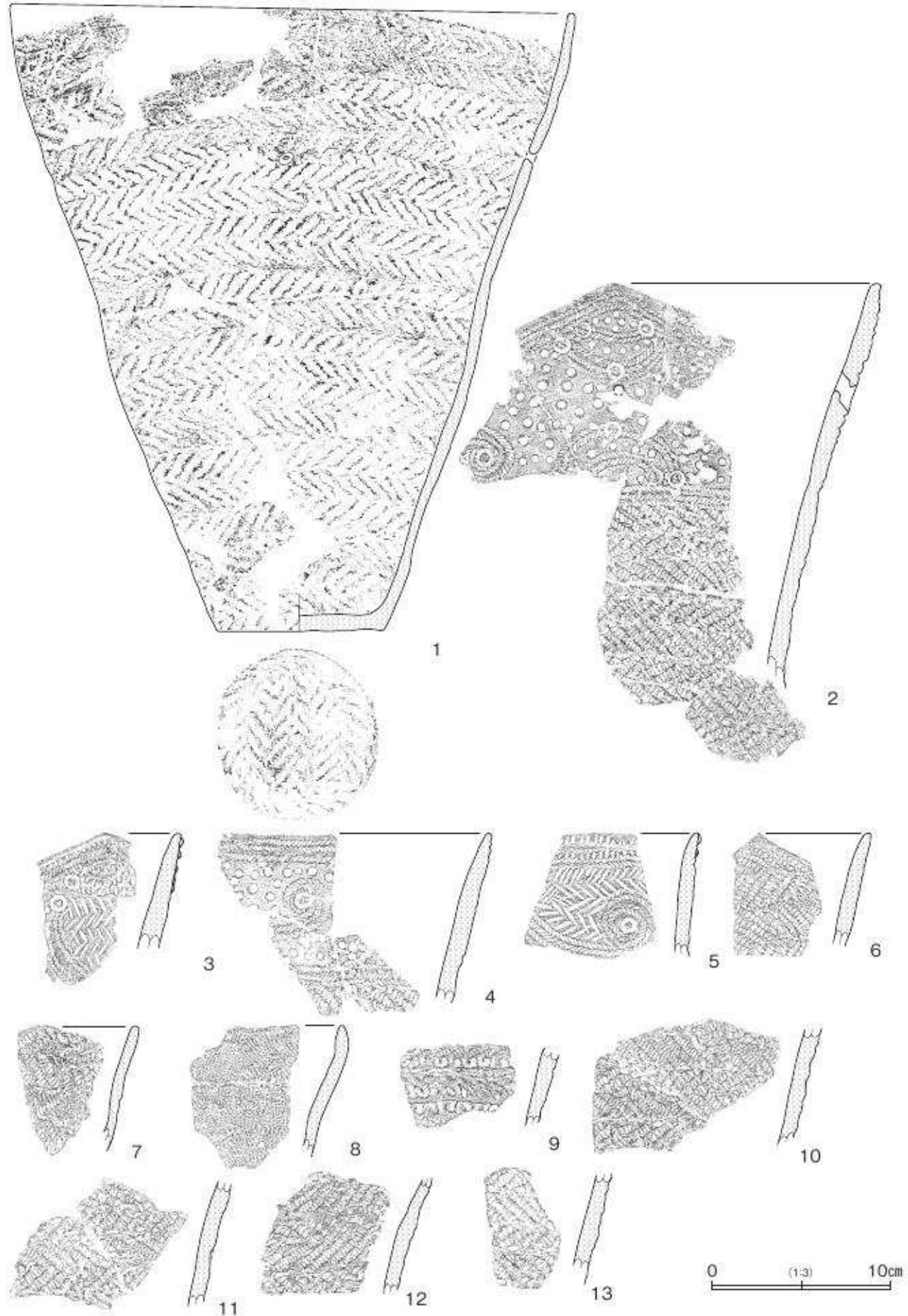
A 区の中央部に位置する。北東側に 16 号住居跡、北西側に 13 号住居跡がそれぞれ近接して分布する。各所に耕作による擾乱を受けているが、平面形は東西方向 450 cm、南北方向 394 cm の楕円形を呈する。主軸方向は N - 62° - E を示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は 23 cm を測る。床面は IV 層中に形成されており、比較的平坦である。周溝は認められなかった。住居内から 9 個のピットが検



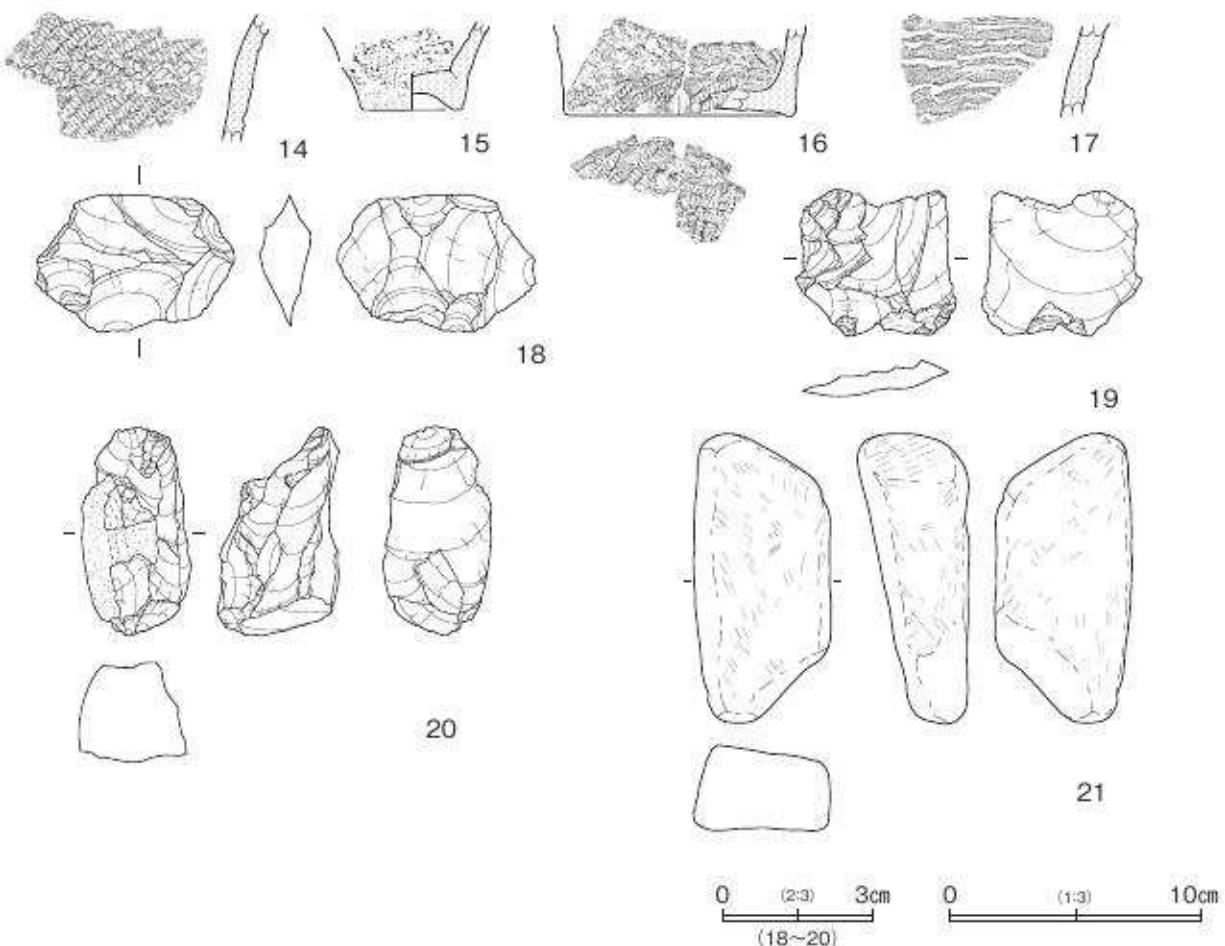
第19図 16号住居跡 (1:60)



第20図 16号住居跡 炉 (1:30)



第21図 16号住居跡出土遺物（1）



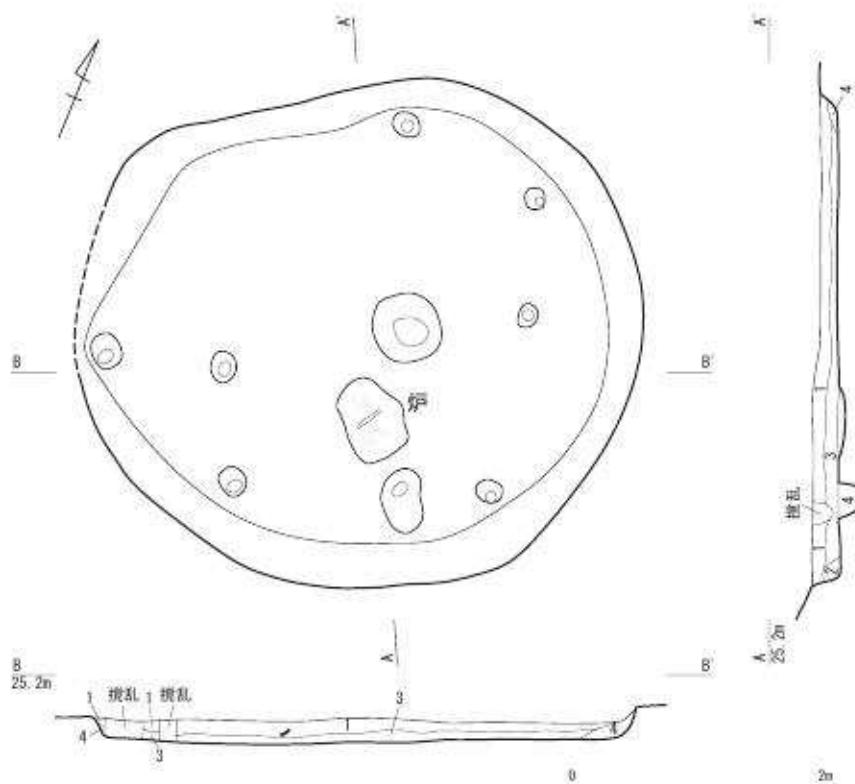
第22図 16号住居跡出土遺物（2）

第6表 16号住居跡出土遺物観察表

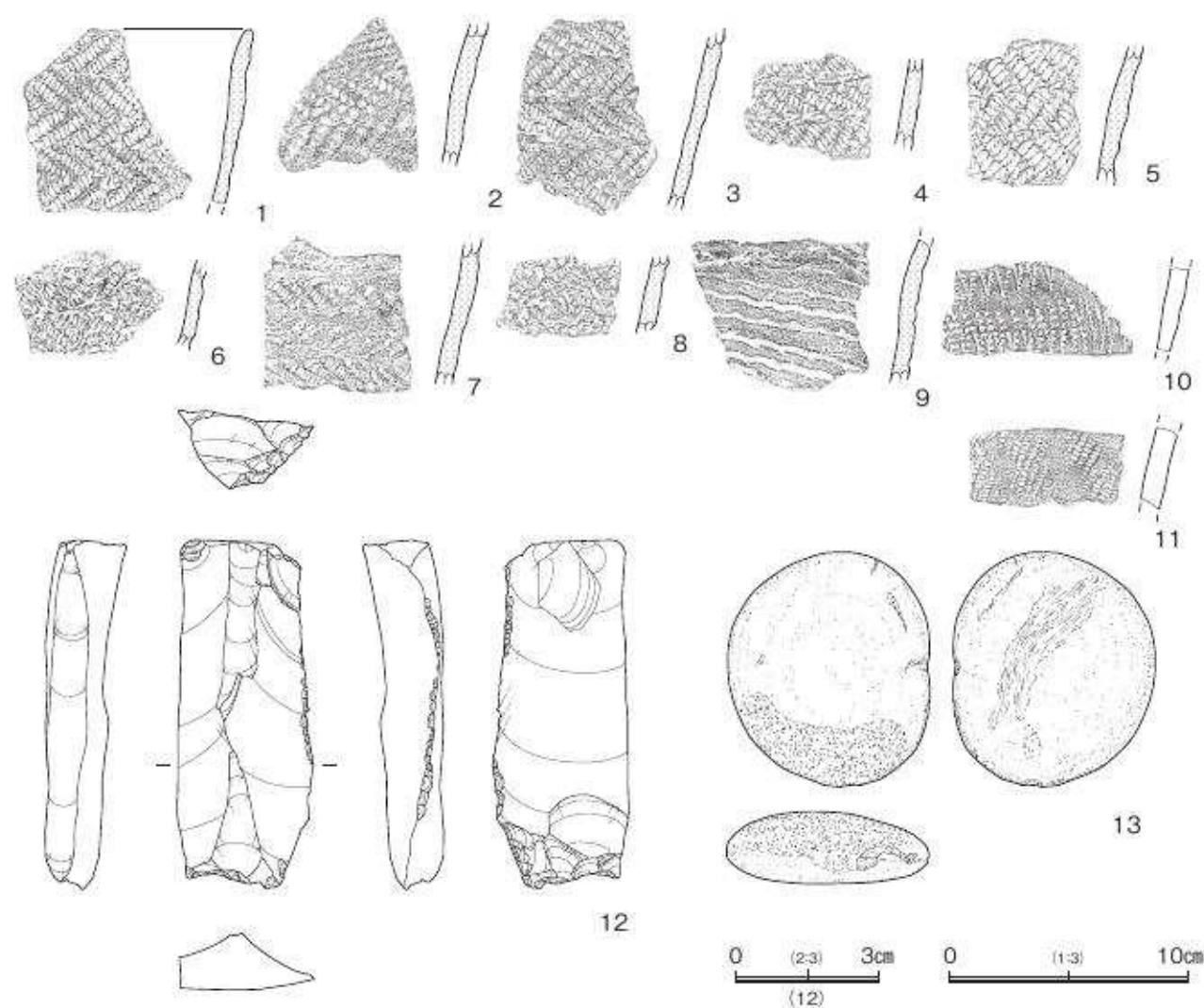
番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	31.7	9.4	35.1	底面に無節横位のR縄文とし縄文を施すやや上底を呈する底部から体部は外彫して立ちあがり、口縁部に至る。全面に無節横位のR縄文とし縄文を短い原体で横位羽状に施す。内面上位は横位、下位は縱位の丁寧なナリが施される。体部上位に1対の補修孔が穿たれている。	繊維 石英 白色粒	明褐色 ～ 暗褐色	普通	花積下層 式
2	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。波状線に沿って縄文原体側面圧痕文を施し、波頂下に半円弧状のモチーフを上下で対向するように同手法で表現し、モチーフ間および空白部に円形竹管文、円形刺突文を施す。口縁部に補修孔を二度の試みで穿っている。	繊維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層 式
3	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。波状線に沿って刻みを付した隆帯をめぐらし、波頂下には弧状、横位の隆帯を施す。口縁部には弧状の縄文原体側面圧痕文。短い洞状沈線文を描き、円形竹管文を加える。	繊維 石英 赤色粒 白色粒	黄褐色	普通	花積下層 式
4	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を横位2～3条の縄文原体側面圧痕文で区画し、区画間にワラビ手状のモチーフを同施文法で描き、円形竹管文を施す。文様帶の空白部には円形刺突文を加える。文様帶以下は横位のR L縄文を施す。	繊維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層 式
5	深鉢	—	—	—	口縁部に横位2条の隆帯をめぐらし、刻みを付す。隆帯間および口縁部に横位、弧状、同心円状の縄文原体側面圧痕文を施す。同心円紋内には円形竹管文を付し、空白部に羽状沈線文を加える。	繊維 石英 白色粒	暗褐色	良好	花積下層 式
6	深鉢	—	—	—	波状口縁部片。全面に横位R L縄文、横位L R縄文を羽状に施す。	繊維 石英 白色粒	褐色	良好	花積下層 式
7	鉢	—	—	—	縋い波状縁鉢。全面に横位R縄文と横位R L縄文を羽状に施す。	繊維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層 式
8	鉢	—	—	—	縋い波状縁鉢。全面に肋脈を有する貝殻背圧痕文を縦位、斜位に施す。	繊維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層 式

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
9	深鉢	—	—	—	横位LR縦文と横位筋節RL縦文を羽状に施し、ループ文を加える。	織維 チャート 白色粒	暗褐色	良好	花積下層式
10	深鉢	—	—	—	全面に横位LR縦文と横位RL縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
11	深鉢	—	—	—	全面に横位RL縦文と横位LR縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
12	深鉢	—	—	—	横位LR縦文と横位RL縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	赤褐色	普通	花積下層式
13	深鉢	—	—	—	全面に横位LR縦文と横位RL縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
14	深鉢	—	—	—	全面に横位LR縦文と横位RL縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	赤褐色	良好	花積下層式
15	深鉢	—	4.2	—	上底を呈する底部から体部は外傾して立ちあがる。外面に横位と斜位のRL縦文を施す。	織維 石英 白色粒	赤褐色	不良	花積下層式
16	深鉢	—	9.3	—	底面に横位LR縦文と横位RL縦文を施した上底から体部は直立気味に立ちあがる。外面に横位RL縦文と横位LR縦文を施す。	織維 黒褐色 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式
17	深鉢	—	—	—	全面に横位の波状沈線文を施す。	織維 角閃石 石英 白色粒	暗褐色	普通	積房式

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
18	楔形石器	ボルンフェルス	2.8	4.0	1.2	8.6	表裏共に対向する剥離痕に覆われる。
19	二次加工 剥片	チャート	2.9	3.2	0.8	5.4	剥片末端側に不規則な加工痕残す。
20	剥片	玉髓(メノウ)	4.2	2.2	2.5	23.0	石器背面に斜長剥片を連続的に剥離した痕跡を留める分厚い剥片。当初は石核。
21	砥石	流紋岩	11.5	5.5	4.6	344.5	角ばった端をそのまま用いる。表面に極浅い線条痕。



第23図 18号住居跡 (1:60)



第24図 18号住居跡出土遺物

第7表 18号住居跡出土遺物観察表

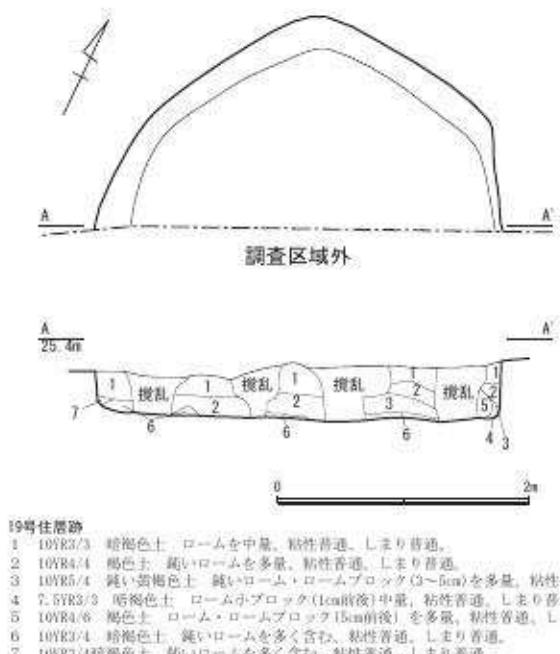
番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	—	—	—	全面に横位L R 縄文と横位R L 縄文を羽状に施す。	纖維 石英 白色粒 細粒砂	黒褐色	普通	花積下層式
2	深鉢	—	—	—	上位に縄文原体側面圧痕文を施し、以下に横位R L 縄文と横位L R 縄文を羽状に施す。	纖維 石英 白色粒	褐色	良好	花積下層式
3	深鉢	—	—	—	全面に横位R L 縄文と横位L R 縄文を羽状に施す。	纖維 石英 白色粒	暗褐色	不良	花積下層式
4	深鉢	—	—	—	全面に横位L R 縄文と横位R L 縄文を羽状に施す。	纖維 角閃石 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式
5	深鉢	—	—	—	全面に横位R L 縄文と横位L R 縄文を羽状に施す。	纖維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
6	深鉢	—	—	—	全面に横位L R 縄文と横位R L 縄文を羽状に施す。	纖維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
7	深鉢	—	—	—	全面に横位R L 縄文と横位L R 縄文を施す。	纖維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式
8	深鉢	—	—	—	全面に横位L R 縄文と横位R L 縄文を施す。	纖維 石英 白色粒	黒褐色	普通	花積下層式

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
9	深鉢	—	—	—	全面に横位の波状沈線文を施す。	職錐 石英 白色粒	黒褐色	普通	傾房式
10	深鉢	—	—	—	波状貝殻文、貝殻腹縁文、横位の刺突文を施す。	赤色粒 石英 白色粒	暗褐色	良好	興津式
11	深鉢	—	—	—	全面に縱位RL繩文を施す。	角閃石 石英 白色粒	明褐色	普通	加曾利E 1 式
番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考		
12	削器	珪質頁岩	7.4	3.0	1.8	25.6	調整打面を有する縦長剥片を用いる。右側縁に連続的な微細剥離痕。右側縁下部一下縁にかけて二次加工。左側縁には彫刀面状の槽状剥離。		
13	敲石	砂岩	10.0	8.6	3.2	358.2	正面下半一下縁にかけて微細な敲打痕。裏面には斜行する幅広い溝状の擦痕。		

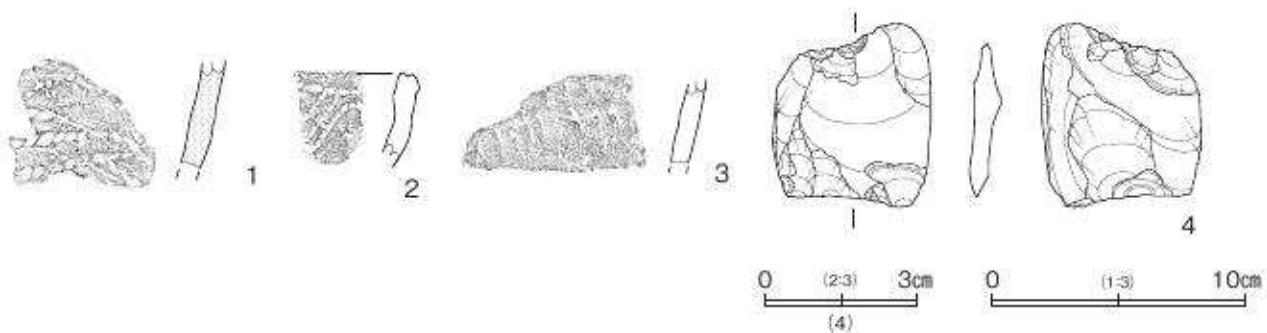
出された。中央部の1個を除くと全体に壁面に沿って配列されており、本住居跡に伴う柱穴であった可能性が高い。平均口径20 cm、深さ22 cmを測る。炉跡は長軸線に沿った床面中央南寄りに位置する。長軸66 cmの楕円形を呈する地床炉である。皿状に浅く窪み、底面は被熱している。覆土中から床面にかけて縄文土器64片、須恵器6片、土師器19片、石器10点が出土した。伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代前期初頭、花積下層式土器の時期の所産であった可能性が高い。

19号住居跡（第25・26図、第8表、図版5・17）

A区の南西側に位置する。北側を除いて大部分が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向326 cm以上、南北方向163 cm以上の楕円形を呈するものと思われる。推定主軸方向はN - 24° - Wを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は40 cmを測る。床面はIV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝やピット、炉跡は認められなかった。覆土中から床面にかけて縄文土器7片、須恵器9片、



第25図 19号住居跡 (1:60)



第26図 19号住居跡出土遺物

第8表 19号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	厚さ (cm)	文様・調査	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	—	—	—	横位LR縄文をまばらに施す。	織維 石英 白色粒	赤褐色	普通	花積下層式
2	深鉢	—	—	—	口縁部に横位、斜位、弧状の有節沈線文を施し。口唇部上に有節沈線文を施す。内面に棱を有する。	金雲母 石英 白色粒	褐色	普通	阿玉台1 b式
3	深鉢	—	—	—	横位のヒダ状压痕文を施す。	雲母 石英 白色粒	褐色	普通	阿玉台1 b式
番号 器種 石材 長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重量(g) 備考									
4	楔形石器	珪質頁岩	3.8	3.4	1.2	12.9	表裏共に上下から対向する剥離痕残す。		

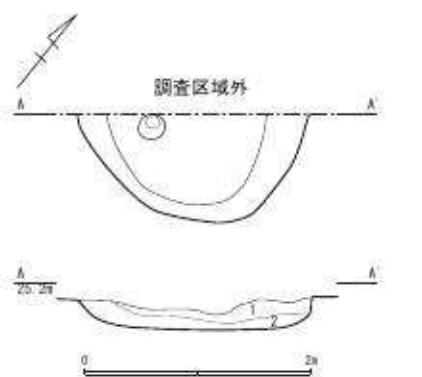
土師器27片、石器4点が出土した。伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代前期、花積下層式土器の時期の所産であった可能性が高い。

22号住居跡（第27・28図、第9表、図版5・17）

B区の北東側に位置する。南側を除いて大部分が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向194cm以上、南北方向92cm以上の楕円形を呈するものと思われる。推定主軸方向はN-30°-Wを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は22cmを測る。床面はIV層中に形成されており、おおむね平坦である。周溝や炉跡は認められなかった。住居内から1個のピットが検出された。南西壁寄りに分布しており、本住居跡に伴う柱穴であった可能性が高い。口径22cm、深さ18cmを測る。覆土中から床面にかけて縄文土器52片、弥生土器5片、須恵器22片、土師器126片、陶器1片、石器8点が出土した。伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代前期初頭、花積下層式土器の時期の所産であった可能性が高い。

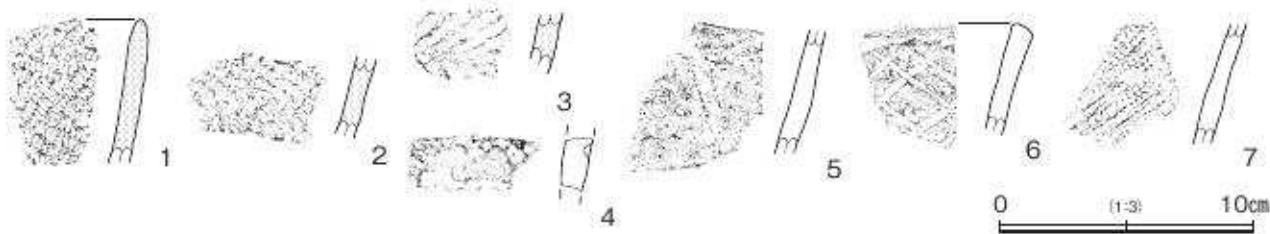
25号住居跡（第29・30図、第10表、図版5・18）

B区の中央部に位置する。北東側に1号溝が近接して分布する。北半分が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向244cm以上、南北方向313cm以上の長楕円形を呈するものと思われる。推



22号住居跡
1 LOYEA/3 細い黄褐色土、純いロームを少量、粘性普通、しまり普通。
2 LOYEA/4 黄褐色土、純いロームを多量ロームブロック(1cm前後)小量、粘性普通、しまり普通。

第27図 22号住居跡 (1:60)



第28図 22号住居跡出土遺物

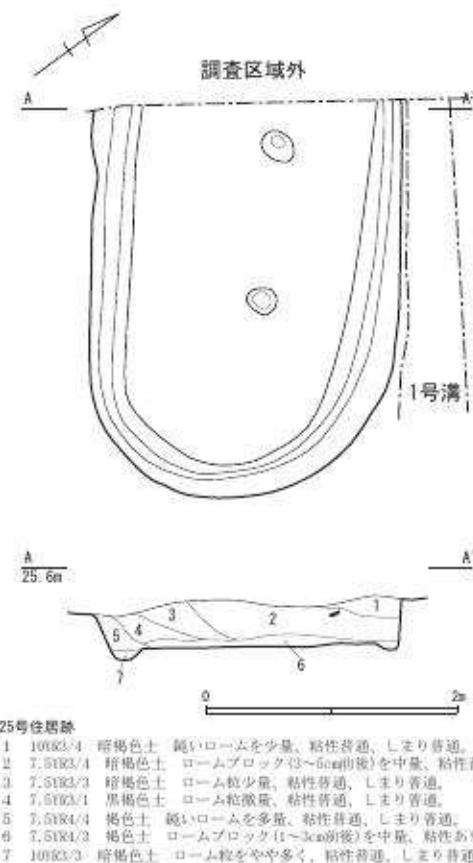
第9表 22号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	—	—	—	波状線を呈する口縁部片。LRとRL縄文による羽状縄文を施す。	織維 石英 白色粒	黒褐色	普通	花積下層式
2	深鉢	—	—	—	横位LRと横位RLの羽状縄文が施される。	織維 石英 雲母 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
3	深鉢	—	—	—	横位のLR縄文が施される。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
4	深鉢	—	—	—	押引文による強状モチーフが描かれる。	石英 雲母 白色粒	明赤褐色	普通	阿玉台1b式
5	深鉢	—	—	—	断面三角形の横縦縄文が垂下する。	石英 雲母 白色粒	明褐色	普通	阿玉台1b～II式
6	深鉢	—	—	—	粗い縄文地文上に斜格子目文が描かれる。口縁部内面に1条の沈線が施される。	白色粒 赤色粒	褐色	普通	加曾利B3式
7	深鉢	—	—	—	横位LR縄文が施される。	角閃石 石英 白色粒	褐色	普通	加曾利B式

定主軸方向はN - 47° - Wを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は34cmを測る。床面はIV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅18cm、深さ9cmを測り、確認部を全周する。住居内から2個のピットが検出された。長軸線に沿って配列されており、本住居跡に伴う柱穴であった可能性が高い。平均口径25cm、深さ22cmを測る。覆土中から床面にかけて縄文土器46片、弥生土器2片、須恵器7片、土師器16片、石器6点が出土した。伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代中期前葉、阿玉台1b式土器の時期の所産であった可能性が高い。

29号住居跡（第31・32図、図版6）

B区の北東側に位置する。中央部を除いて大部分が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向320cm以上、南北方向182cm以上の梢円形を呈するものと思われる。推定主軸方向はN - 22° - Wを示す。



25号住居跡

1 101R3/4 斑褐色土 鈍いロームを少量、粘性普通、しまり普通。

2 7.5TR3/4 斑褐色土 ロームブロック(3~6cm前後)を中心、粘性普通、しまり普通。

3 7.5TR3/3 斑褐色土 ローム粒少量、粘性普通、しまり普通。

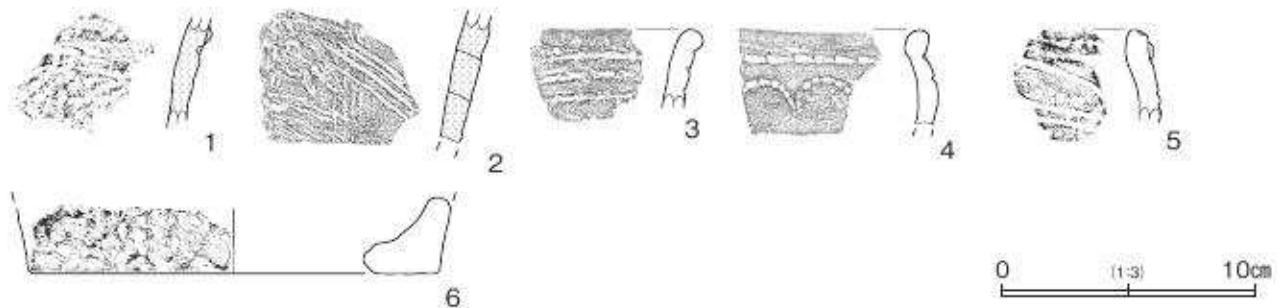
4 7.5TR3/1 黒褐色土 ローム粒微量、粘性普通、しまり普通。

5 7.5TR4/4 暗褐色土 鈍いロームを多量、粘性普通、しまり普通。

6 7.5TR4/3 暗褐色土 ロームブロック(1~3cm前後)を中心、粘性あり、しまりあり。

7 101R3/3 斑褐色土 ローム粒をやや多く、粘性普通、しまり普通。

第29図 25号住居跡 (1:60)

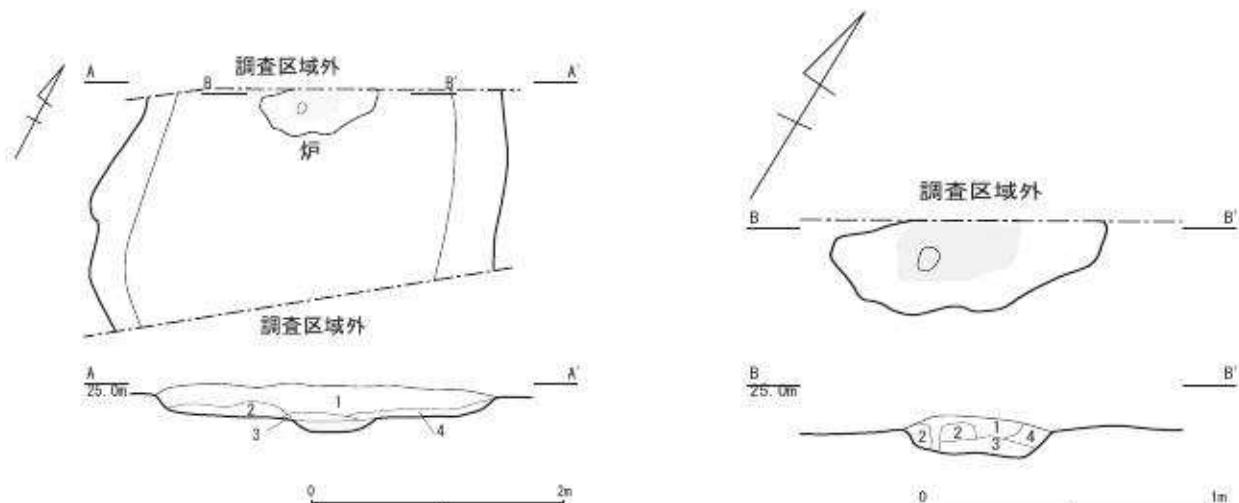


第30図 25号住居跡出土遺物

第10表 25号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	—	—	—	横走する隆線文の間に刺突文を加え、以下に横位L R網文と横位R L網文を施す。	纖維 石英 雲母 赤色粒	橙色	普通	花積下層式
2	深鉢	—	—	—	横位波状、斜行沈線文を施す。	纖維 角閃石 石英 白色粒	暗褐色	普通	積房式
3	深鉢	—	—	—	横位の刺突文を施す。	石英 チャート 白色粒	明赤褐色	普通	浮島I～II式
4	深鉢	—	—	—	横位の弧状の刺突文を施す。口縁部内面に棱を有する。	金雲母 石英 白色粒	暗赤褐色	普通	阿玉台I b式
5	深鉢	—	—	—	波状口縁を呈し、口唇部に刺突文が施され、隆帯による区画に沿って1～2条の押引文が施される。	角閃石 石英 雲母	暗褐色	普通	阿玉台I b式
6	深鉢	—	16.3	—	平底の深鉢。体部は無文。	石英 雲母 白色粒	明赤褐色	普通	阿玉台式

壁は緩傾斜で掘り込まれており、確認部の最大壁高は20cmを測る。床面はIV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝やピットは認められなかった。炉跡は長軸線に沿った床面中央近くに位置する。長軸



29号住居跡

- 1 10Y3/2 黒褐色土 ロームブロック(3cm前後)を少量。粘性普通。しまり普通。
- 2 10Y3/4 暗褐色土 疎いロームを中量。粘性普通。しまりなし。
- 3 10Y2/3 黒褐色土 硫土やや多く含む。炉跡の上部。粘性なし。しまりなし。
- 4 10Y4/4 黄褐色土 ロームブロック(3cm前後)を中量。粘性普通。しまり普通。

第31図 29号住居跡 (1:60)

29号住居跡 炉

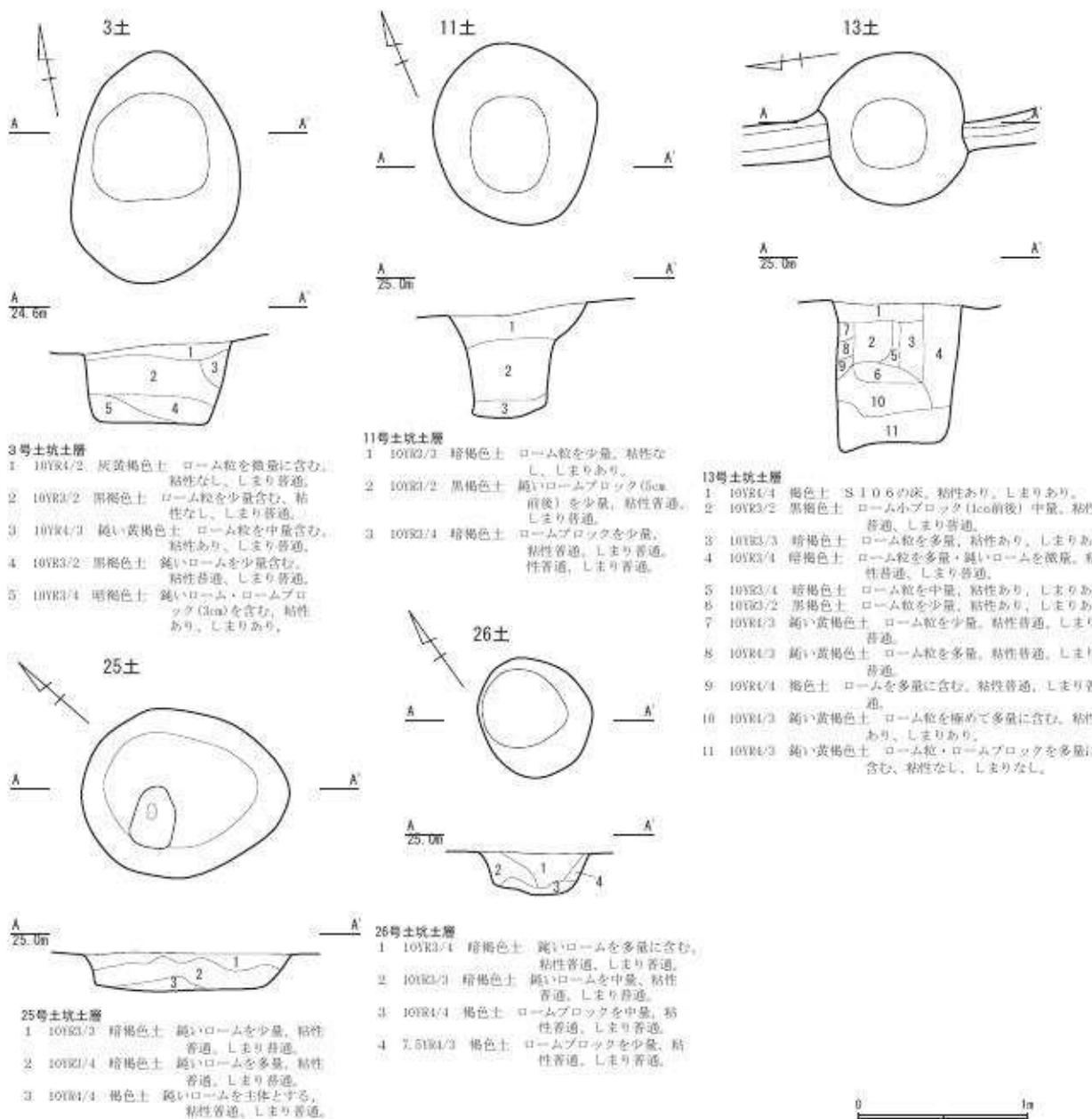
- 1 7.5YR3/3 暗褐色土 硫土粒を中量。粘性普通。しまり普通。
- 2 5YR3/6 暗赤褐色土 烧土層。粘性なし。しまり普通。
- 3 10YR5/6 黄褐色土 平緩けのローム。粘性なし。しまりあり。
- 4 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし。しまりなし。

第32図 29号住居跡炉 (1:30)

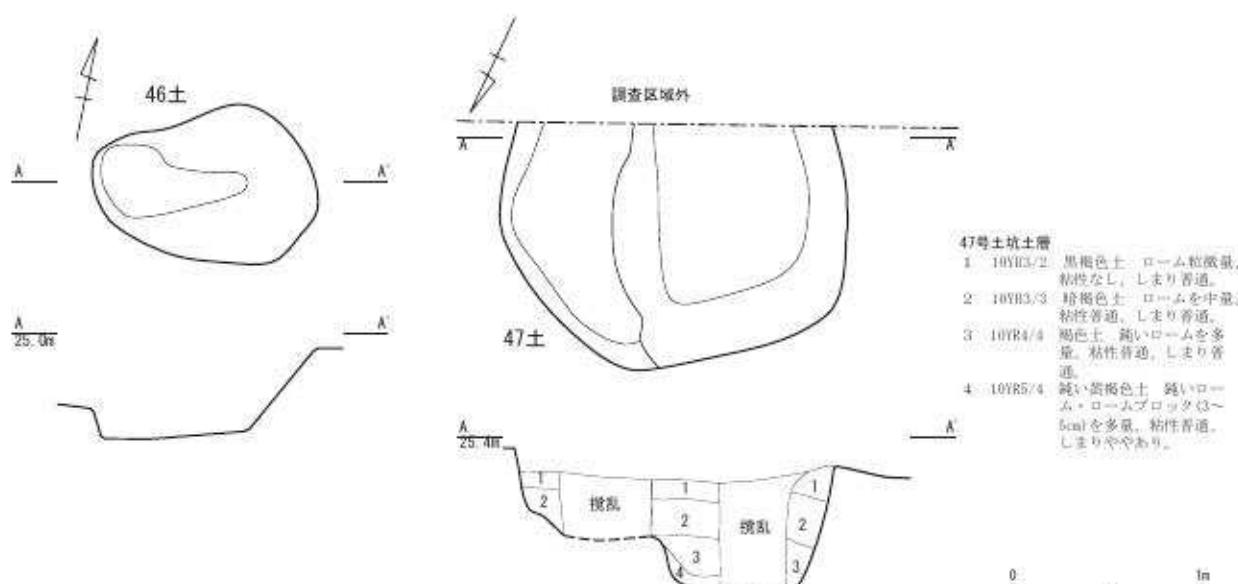
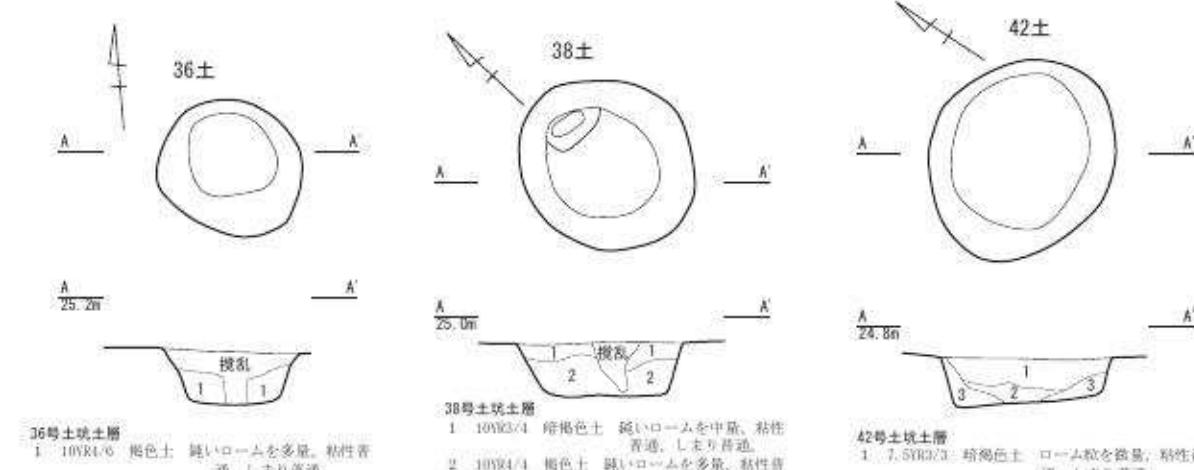
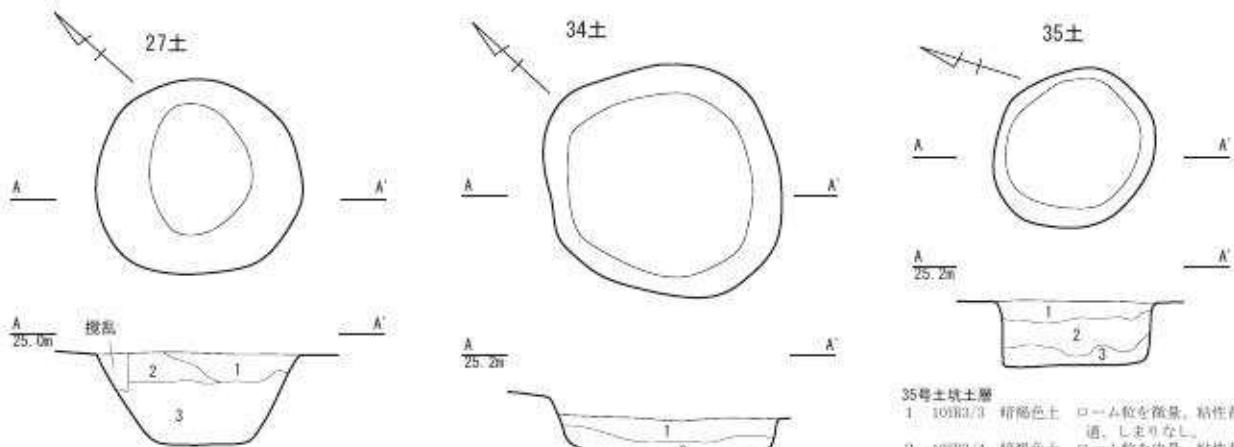
94 cm以上の楕円形を呈する地床炉である。鍋底状にやや深く窪み、底面は被熱している。遺物の出土は認められなかった。覆土や住居の形状などから判断して縄文時代前期の所産であった可能性が高い。

3-2 土坑（第33～44図、第11～19表、図版6・7・18・19）

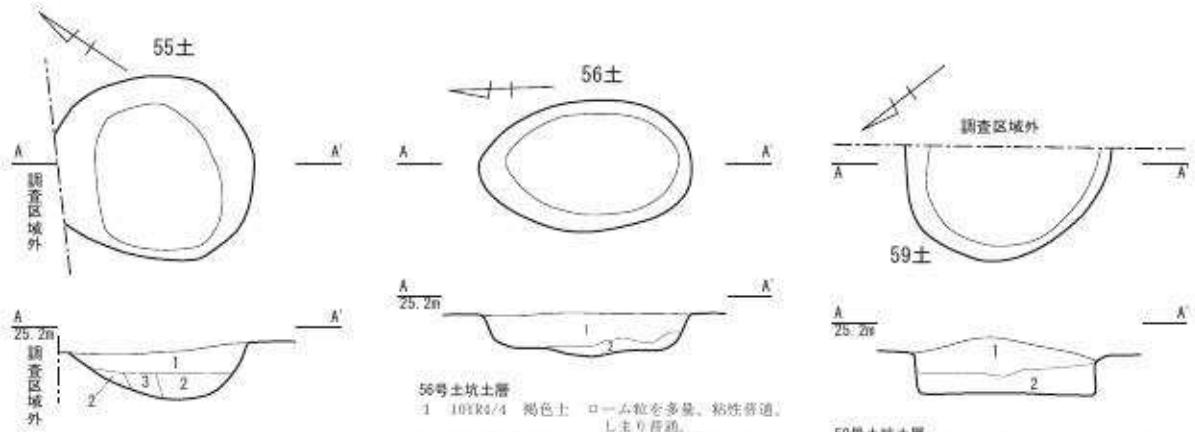
合計28基の土坑が検出されている。住居跡が集中するA区を中心に調査地点の広い範囲に分布する。平面形は円形および楕円形プランを基本としており、断面は筒状を呈するものが多く、鍋底状を呈するものがこれに次ぐ。28基中、7基の土坑で縄文土器の出土が確認されている。土器の出土が認められなかった土坑についても、形状や覆土のあり方などから、ほぼ同時期の所産であった可能性が考えられる。



第33図 土坑(1) (1:40)



第34図 土坑(2) (1:40)

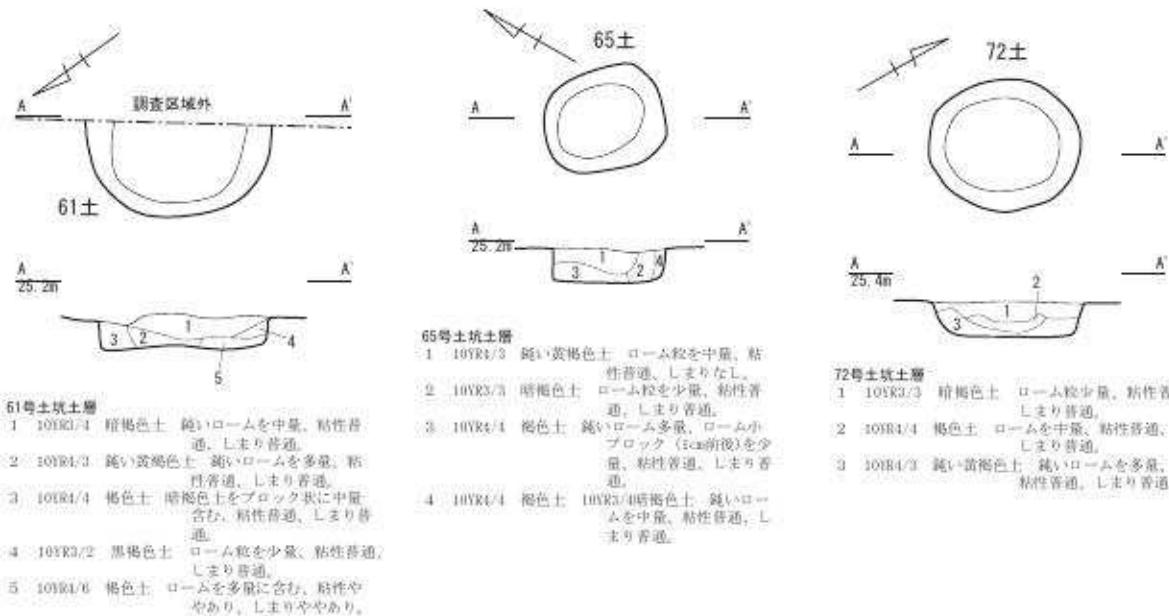


55号土坑土層

1 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒中量、細いローム少量、粘性普通、しまり普通。

2 10YR4/6 暗褐色土 細いローム粒を多量、粘性普通、しまり普通。

3 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒中量、粘性普通、しまり普通。



61号土坑土層

1 10YR3/4 暗褐色土 細いロームを中量、粘性普通、しまり普通。

2 10YR4/3 薄い黄褐色土 細いロームを多量、粘性普通、しまり普通。

3 10YR4/4 暗褐色土 暗褐色土をブロック状に中量含む、粘性普通、しまり普通。

4 10YR3/2 黑褐色土 ローム粒を少量、粘性普通、しまり普通。

5 10YR4/6 暗褐色土 ローム粒を多量に含む、粘性ややあり、しまりややあり。

73号土坑

80号土坑

82号土坑

調査区域外

A-A'

25.4m

25.2m

25.3m

1 10YR2/3 黑褐色土 ローム粒微量、粘性普通、しまりなし。

2 10YR3/3 暗褐色土 細いロームを少量、粘性普通、しまり普通。

3 10YR3/4 暗褐色土 細いロームを中量、粘性普通、しまり普通。

4 10YR3/2 黑褐色土 粘性普通、しまり普通、ローム粒、細いロームを少量、粘性普通、しまり普通。

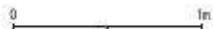
5 10YR4/6 暗褐色土 細いロームを多量、粘性普通、しまり普通。

6 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒中量、粘性普通、しまり普通。

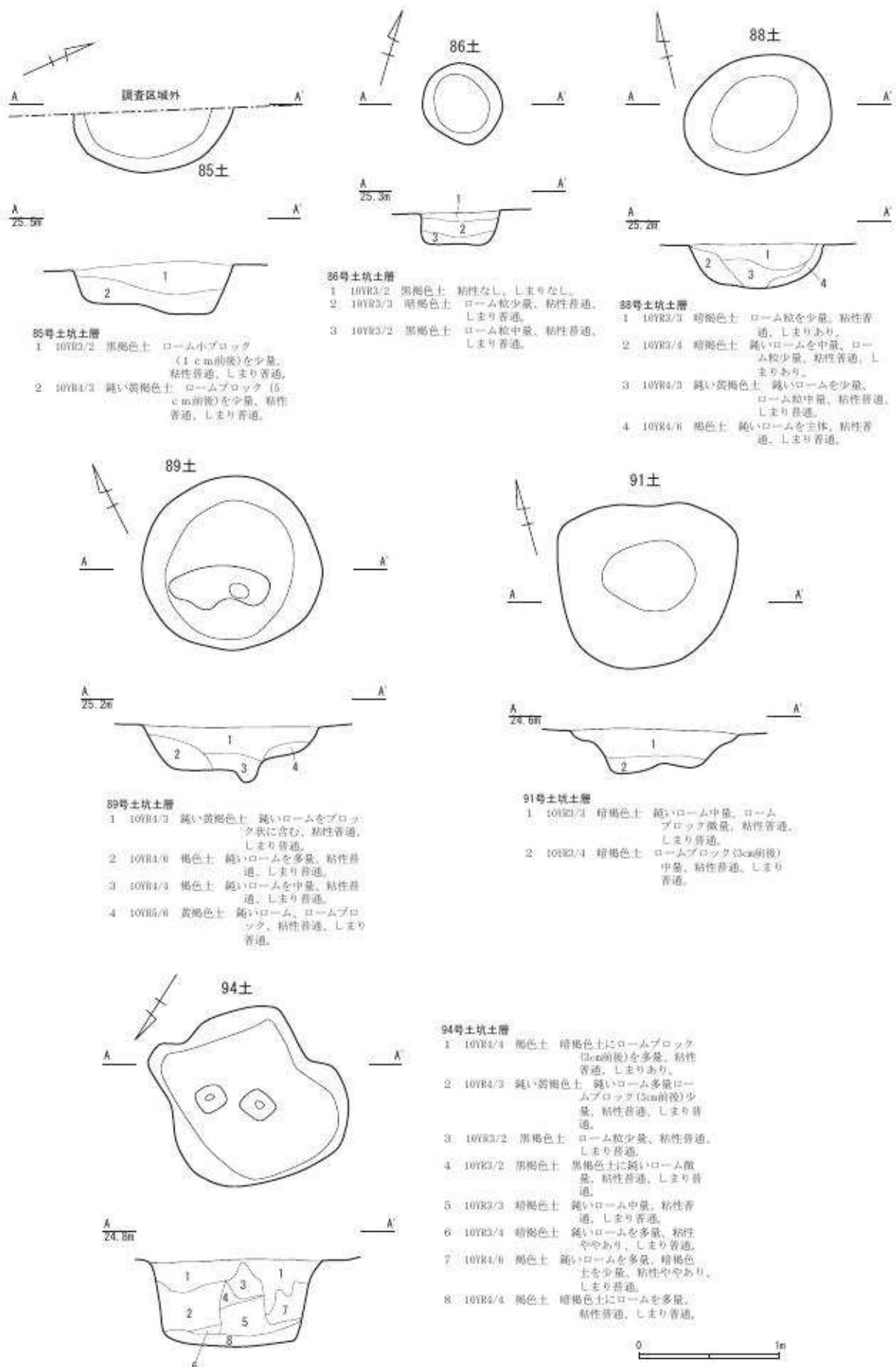
7 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒、細いローム多量、粘性普通、しまり普通。

80号土坑土層

82号土坑土層



第35図 土坑(3) (1:40)



第36図 土坑(4) (1:40)

第11表 繩文時代土坑一覧

No	位置	平面形	残存度	規模(長径×短径) cm	深さ cm	長軸方向	断面形	出土遺物	時期	備考
3	A区 北東側	椭円形	完存	137 × 99	73	N - 12° - E	筒状		縄文	
11	A区 北東側	略円形	完存	103 × 95	65	N - 13° - E	筒状	縄文土器 6片	縄文前期 黒浜期	
13	A区 北東側	略円形	完存	90 × 81	82	N - 85° - W	筒状		縄文	6号住居に切られる
25	A区 中央部	椭円形	完存	122 × 98	24	N - 39° - W	筒状 ないし 鍋底状	縄文土器 1片	縄文前期 花積下層期	
26	A区 中央部	略円形	完存	71 × 66	25	N - 3° - E	筒状 ないし 鍋底状		縄文	
27	A区 中央部	略円形	完存	108 × 100	50	N - 49° - W	鍋底状	縄文土器 10片	縄文前期 花積下層期	
34	A区 中央部	円形	完存	125 × 122	25	N - 40° - W	筒状 ないし 鍋底状		縄文	
35	A区 中央部	略円形	完存	89 × 80	34	N - 58° - W	筒状		縄文	
36	A区 中央部	椭円形	完存	76 × 67	28	N - 56° - W	筒状 ないし 鍋底状	縄文土器 2片	縄文中期 阿玉台 I b ~ II期	
38	A区 中央部	円形	完存	98 × 89	26	N - 1° - W	筒状 ないし 鍋底状		縄文	
42	A区 中央部	椭円形	完存	108 × 95	24	N - 70° - W	鍋底状		縄文	17号住居に切られる
46	A区 中央部	不整 椭円形	完存	111 × 82	34	N - 72° - E	筒状		縄文	16号住居を切る
47	A区 南西側	円形 or 椭円形	半欠	120 × 55 以上	37	不明	筒状	縄文土器 4片 須恵器 3片 土師器 10片 陶器 1片	縄文前期 花積下層期	
55	B区 北東側	不整 椭円形?	一部欠	95 以上 × 96	26	N - 28° - W	鍋底状	縄文土器 4片	縄文前期 花積下層期	
56	B区 中央部	長楕円形	完存	112 × 68	23	N - 4° - W	鍋底状		縄文	
59	B区 中央部	円形 or 椭円形	半欠	100 × 55 以上	34	不明	筒状		縄文	
61	B区 中央部	円形 or 椭円形	半欠	98 × 47 以上	34	不明	筒状		縄文	
65	B区 中央部	略円形	完存	62 × 51	25	N - 49° - W	筒状 ないし 鍋底状		縄文	
72	B区 南西側	略円形	完存	80 × 69	20	N - 69° - W	筒状 ないし 鍋底状		縄文	
73	B区 南西側	円形 or 椭円形	半欠	140 × 50 以上	25	不明	筒状 ないし 鍋底状	縄文土器 1片	縄文前期 浮島 I ~ II期	
80	B区 南西側	円形	完存	72 × 70	21	N - 80° - W	鍋底状		縄文	
82	B区 南西側	円形 or 椭円形	半欠	121 × 65	20	不明	筒状 ないし 鍋底状		縄文	
85	C区 北側	円形 or 椭円形	一部	112 × 70 以上	37	不明	鍋底状		縄文	
86	C区 北側	円形	完存	57 × 51	24	N - 73° - W	筒状		縄文	
88	C区 南側	椭円形	完存	106 × 81	32	N - 83° - E	筒状 ないし 鍋底状		縄文	
89	C区 南側	円形	完存	128 × 122	33	N - 52° - W	筒状 ないし 鍋底状		縄文	底面に小ピット

No.	位置	平面形	残存度	規模(長径×短径) cm	深さ cm	長軸方向	断面形	出土遺物	時期	備考
91	A区 北東側	不整 椭円形	完存	123 × 112	28	N - 74° - W	鍋底状	縄文土器 1片 土師器 2片	縄文前期 花積下層期	
94	A区 北東側	不整 椭円形	完存	150 × 122	65	N - 80° - E	筒状		縄文	2号住居に切られる?



第37図 11号土坑出土遺物

第12表 11号土坑出土遺物観察表

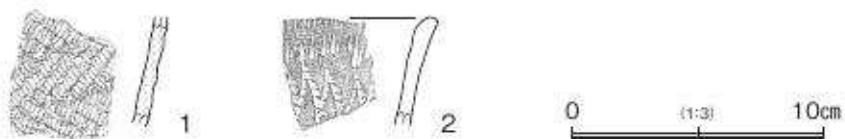
番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	-	-	-	全面に横位RL縄文と横位LR縄文を施す。	纖維 石英 白色粒	褐色	不良	黒浜式



第38図 25号土坑出土遺物

第13表 25号土坑出土遺物観察表

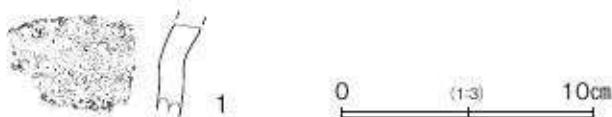
番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	-	-	-	全面に横位LR縄文と横位RL縄文を羽状に施す。	纖維 石英 白色粒	黒褐色	普通	花積下層 式



第39図 27号土坑出土遺物

第14表 27号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	-	-	-	全面に横位RL縄文と横位LR縄文を羽状に施す。	纖維 石英 白色粒	黒褐色	普通	花積下層 式
2	深鉢	-	-	-	口縁部に縱位の条線を施し。以下に波状貝殻文を施す。	石英 白色粒	暗褐色	良好	興津式



第40図 36号土坑出土遺物

第15表 36号土坑出土遺物観察表

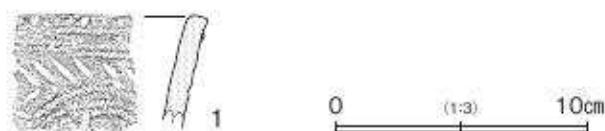
番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	-	-	-	無文の体部片。内面に棱を残す。	石英 雲母 白色粒	明褐色	普通	阿玉台I b～II式



第41図 47号土坑出土遺物

第16表 47号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	-	-	-	横位R L繩文を施す。	纖維 石英 雲母	暗褐色	不良	花積下層 式



第42図 55号土坑出土遺物

第17表 55号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	-	-	-	口縁部外縁に押捺を加え、横位の繩文原体側面圧痕文によって区画し、同手法によってワラビ手文を施す。空白部に斜位の短沈線を施す。	纖維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層 式



第43図 73号土坑出土遺物

第18表 73号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	-	-	-	2条単位の横走沈線文が施される。	石英 雲母	褐色	普通	浮島I～ II式



第44図 91号土坑出土遺物

第19表 91号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
I	深鉢	-	-	-	横位の沈線文を挟んで斜位の沈線文が施される。	石英 白色粒	褐色	普通	田戸下層 式

3-3 遺物 (第45~49図、第20表、図版19・20・21)

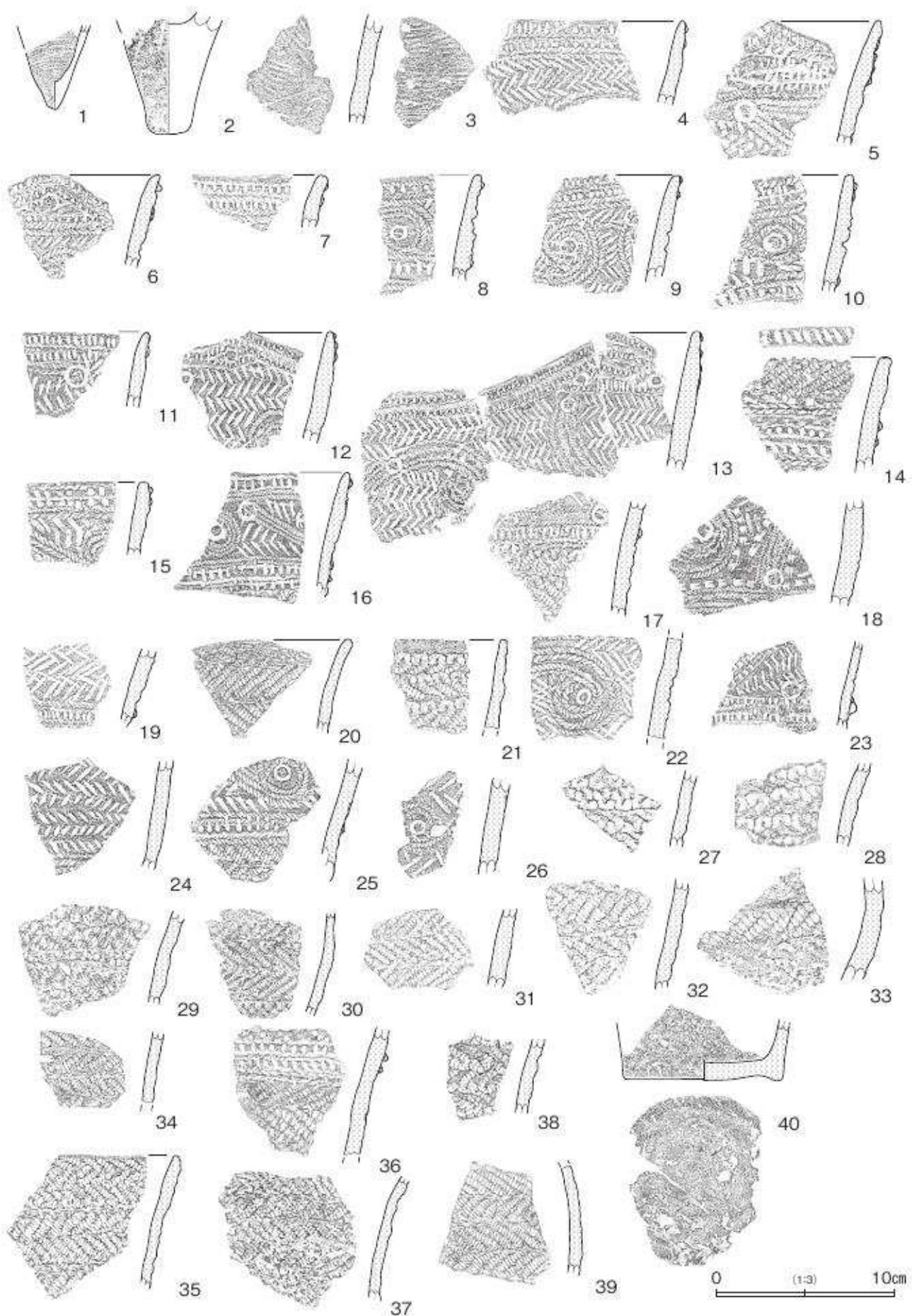
(1) 土器

縄文時代早・前・中・後期の各時期の土器が出土している。内訳は、早期・田戸式、茅山上層式、前期・花積下層式、関山式、黒浜式、植房式、諸磯式、浮島式、興津式、十三菩提式、大木5式、栗島式、中期・阿玉台式、加曾利E式、後期・堀之内式、加曾利B式、曾谷式、安行式などであり、きわめてバラエティーに富んでいることが注意される。

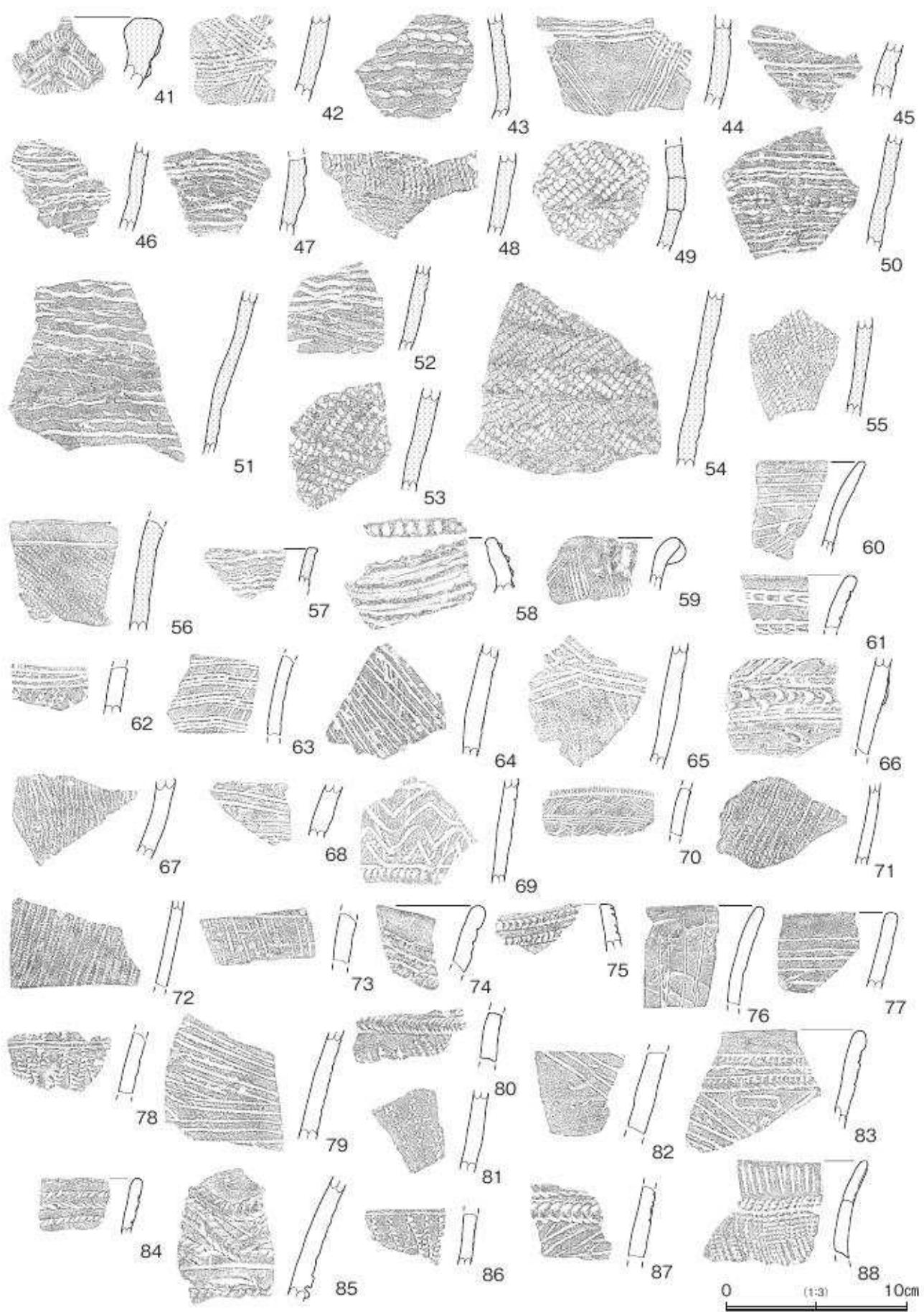
量的に主体を占めるのは前期土器である。特に前期初頭・花積下層式土器は多量に出土しており、住居跡や土坑出土土器の大半を占めているが、細片がほとんどであり、器形の復元できたものはわずか1点にとどまる。出土量は大分少なくなるが、これに次ぐのが黒浜式土器や浮島式土器、興津式土器などである。その他の時期の土器はいずれも少ないが、その中では阿玉台式土器の出土がやや目立つ。

(2) 石器

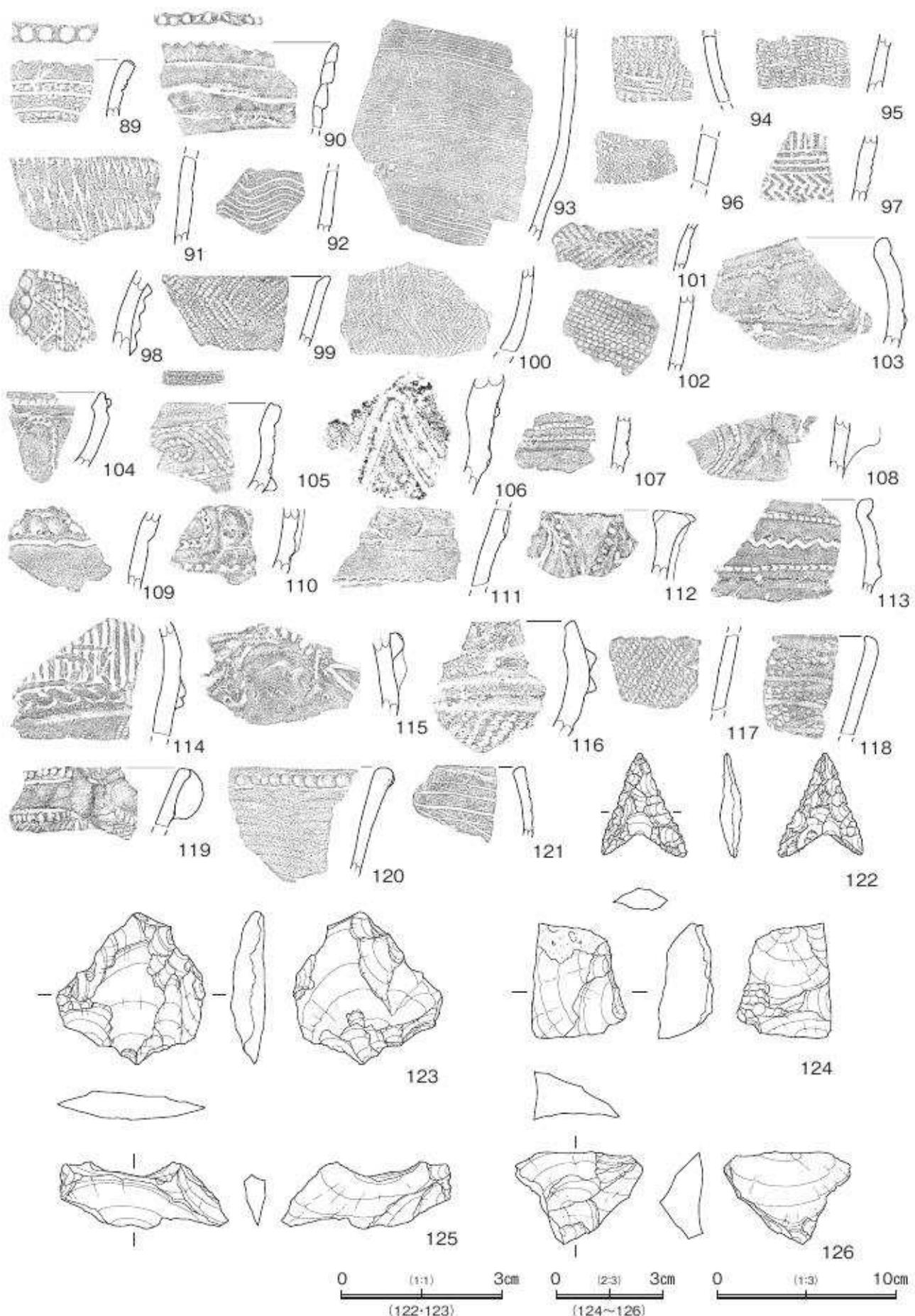
縄文時代の石器は主に住居跡から検出された。剥片石器では石鏃・楔形石器・削器・二次加工剥片、礫石器では磨石・敲石・凹石・磨製石斧などがある。土器と同様、前期を中心とした時期の所産と考えられるが、削器は時間的にやや古くなる可能性もある。石材は、剥片石器では玉髓(メノウ)・チャート・珪質頁岩・ホルンフェルスなどが使用される。磨石などの礫石器では砂岩・安山岩・流紋岩・花崗岩類が、磨製石斧は蛇紋岩が使用されている。(渡邊)



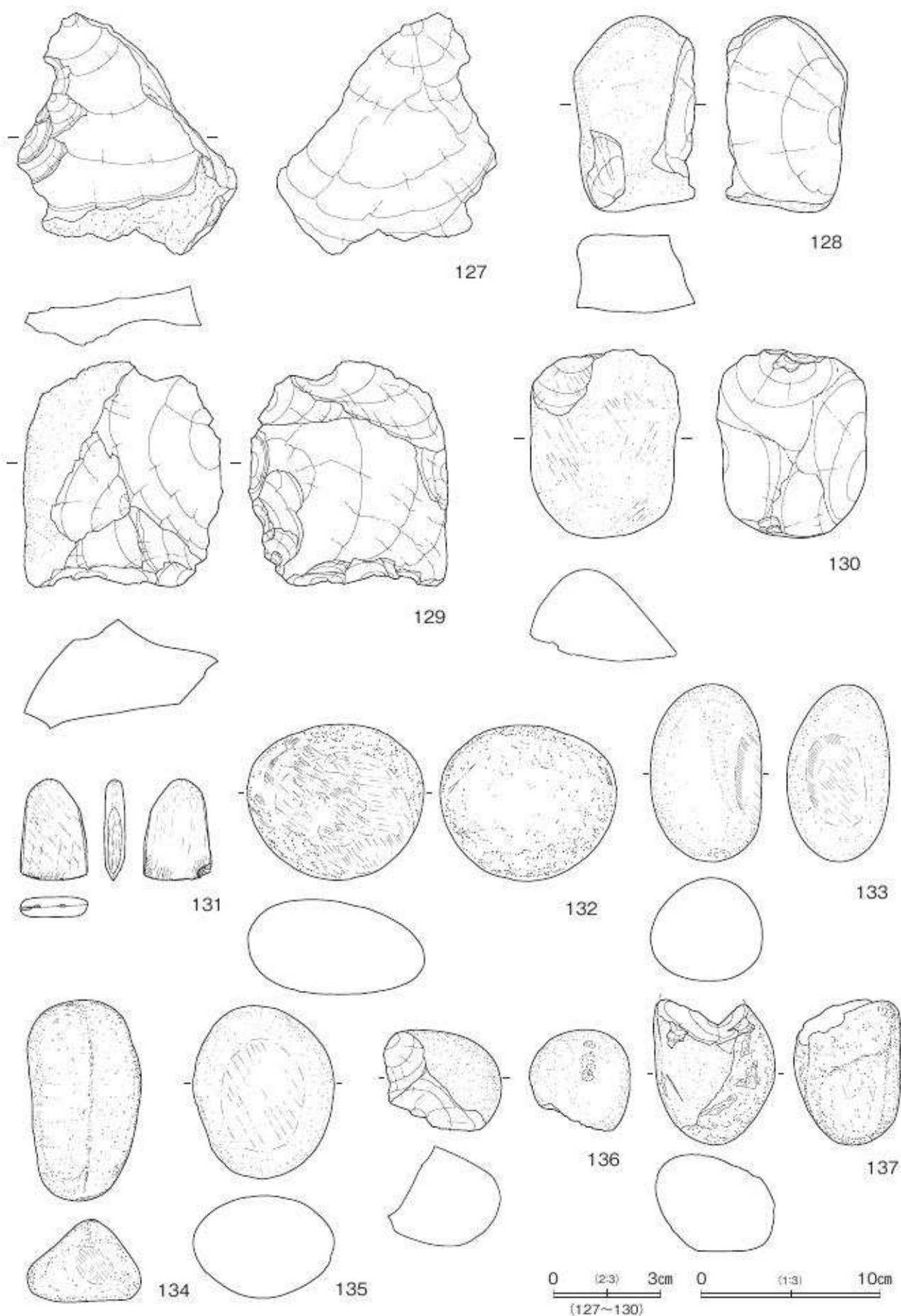
第45図 繩文時代遺構外出土遺物（1）



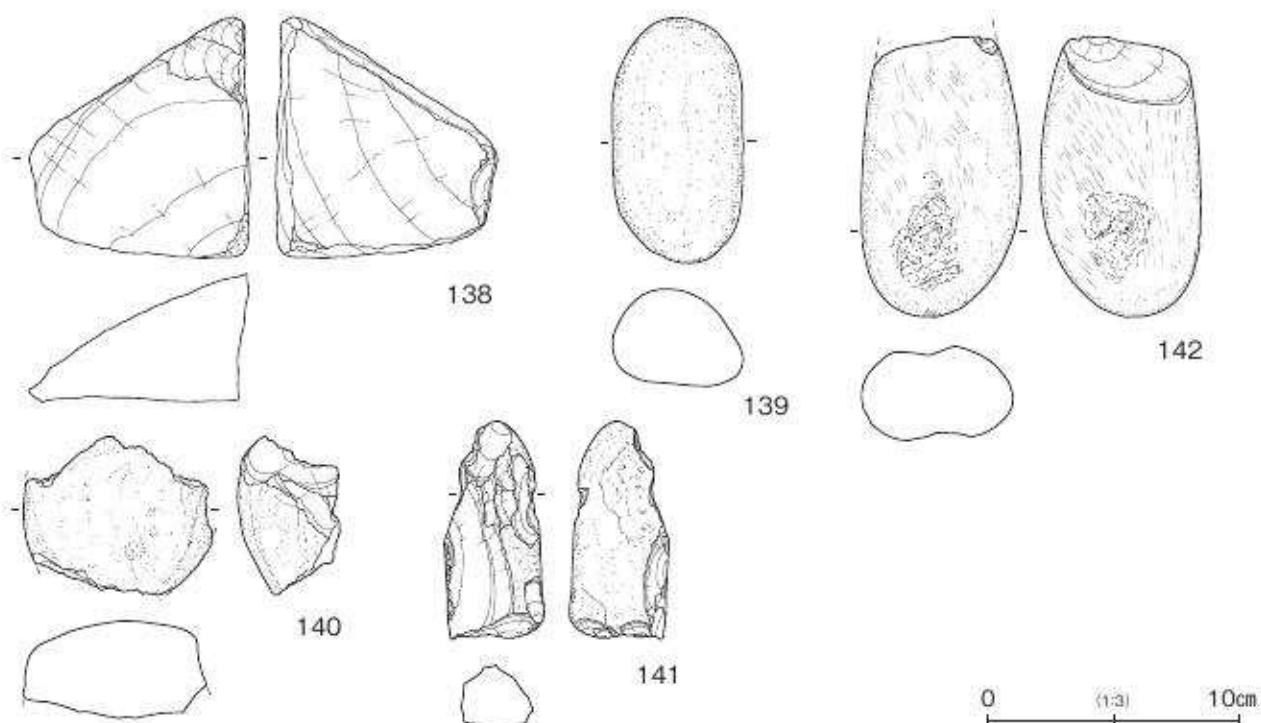
第46図 繩文時代遺構外出土遺物（2）



第47図 繩文時代遺構外出土遺物（3）



第48図 繩文時代遺構外出土遺物（4）



第49図 繩文時代遺構外出土遺物（5）

第20表 繩文時代遺構外出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	深鉢	—	—	—	尖底部片、横位の縦沈線文を短い単位で施す。	角閃石 石英 白色粒	褐色	良好	田戸下層式
2	深鉢	—	—	—	無文の尖底部片。縦位の整形痕を残す。	石英 白色粒	明褐色	普通	田戸下層式
3	深鉢	—	—	—	外面は横位の貝殻条痕文、内面は斜位横位の条痕文を施す。	織維 石英 白色粒	明褐色	普通	茅山式
4	深鉢	—	—	—	口縁部文様帯を刻みを付した横位2条の隆帶と縄文原体側面圧痕文で区画し、区画内に弧状の圧痕文を施し、縦位羽状の沈線文を施す。	織維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式
5	深鉢	—	—	—	波状口縁部片。波頂部に縦位の沈線文を施し、口縁部文様帯を刻みを有する3条の隆帶と縄文原体側面圧痕文で区画し、区画内に斜位の縄文原体側面圧痕文と縦位洞状沈線文と円形竹管文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
6	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。波状に沿って刻みを付した隆帶を貼付し、それに沿って縄文原体側面圧痕文を施し、円形竹管文を加える。以下に横位の隆帶と側面圧痕文を付し、羽状沈線文等を描く。	織維 石英 白色粒	黒褐色	普通	花積下層式
7	深鉢	—	—	—	平縁深鉢。口縁部に横走する2条の刻みを付した隆帶と縄文原体側面圧痕文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
8	深鉢	—	—	—	口縁部文様帯を刻みを付した隆帶と縄文原体側面圧痕文で区画し、区画内に側面圧痕文によるワラビ手文を描き、円形竹管文を施す。	織維 石英 白色粒	黒褐色	普通	花積下層式
9	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。波状線に沿って刻みを付した2条の隆帶と縄文原体側面圧痕文を施し、以下に側面圧痕文によるワラビ手文のモチーフを描き、円形竹管文、斜位の沈線文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
10	深鉢	—	—	—	口縁部文様帯を刻みを付した2条の隆帶と縄文原体側面圧痕文で区画し、区画内に側面圧痕文によるワラビ手文を施し、円形竹管文、短沈線文を施す。	石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
11	深鉢	—	—	—	平縁深鉢。口縁部に沿って刻みを付した2条の隆帶を施し、以下に側面圧痕文による施文を加えて、円形竹管文、羽状沈線文を施す。	織維 黑色粒 白色粒	黄褐色	普通	花積下層式
12	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。波状線に沿って刻みを付した2条の隆帶と縄文原体側面圧痕文を施し、波頂部に弧状の隆帶を施す。以下に側面圧痕文によるワラビ手文を施し、円形竹管文、羽状沈線文を施す。	織維 石英 白色粒	明褐色	普通	花積下層式

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
13	深鉢	—	—	—	平縁深鉢。口縁に沿って刻みを付した2条の隆帯と縄文原体側面圧痕文を施し、以下に側面圧痕文によるワラビ手文を描き、円形竹管文、羽状沈線文を充填する。	織維 石英 白色粒	明褐色	良好	花積下層式
14	深鉢	—	—	—	口唇部上に斜位の刻みを加え、口縁部に横位L R縄文を施し、以下に刻みを加えた横走する隆帯を2条施し、縄文原体側面圧痕文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
15	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。波状線に沿って横走する2条の刻みを付した隆帯と縄文原体側面圧痕文を施し、以下に側面圧痕文によるワタビ手状のモチーフを描き、円形竹管文、羽状沈線文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
16	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を刻みを加えた隆帯と縄文原体側面圧痕文で区画し、区画内に側面圧痕文によるワラビ手文を描き、円形竹管文、羽状沈線文を施す。以下に横位L R縄文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	良好	花積下層式
17	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を横走する刻みを付した隆帯と縄文原体側面圧痕文で区画し、区画内に側面圧痕文によるワラビ手状のモチーフを描き、円形竹管文。沈線文を施す。以下にループ文を伴う横位L R縄文と横位R L縄文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
18	深鉢	—	—	—	横位の縄文原体側面圧痕文で口縁部文様帶を区画し、区画内に側面圧痕文によるワラビ手文を施し、円形竹管文空白部に短沈線文、刺突文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
19	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を横走する刻みをもつ隆帯と縄文原体側面圧痕文で区画し、区画内に羽状沈線文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
20	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。全面に横位L R縄文と横位R L縄文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	黃褐色	良好	花積下層式
21	深鉢	—	—	—	口唇部上に刻みを付し、口縁部に無文帶を僅かに残し、以下に横位L R縄文と横位R L縄文を羽状に施す。ループ文を施文する。	織維 石英 白色粒	黑褐色	普通	花積下層式
22	深鉢	—	—	—	縄文原体側面圧痕文によるワラビ手文を描き、円形竹管文を付し、羽状沈線文を加える。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
23	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を刻みを付した横位の2条の隆帯と縄文原体側面圧痕文で区画し、2条の隆帯をつなぐように2ヶ半位の貼付文を付す。区画内には円形竹管文、波状沈線文、斜位の刺突文を加える。	織維 石英 白色粒	暗褐色	良好	花積下層式
24	深鉢	—	—	—	羽状沈線文下に横位の縄文原体側面圧痕文を施す。	石英 赤色粒 白色粒	褐色	良好	花積下層式
25	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を刻みを付した横走する隆帯と縄文原体側面圧痕文で区画し、区画内に側面圧痕文によるワラビ手文を描き、円形竹管文、斜位沈線文を施す。以下に横位R L縄文と横位L R縄文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
26	深鉢	—	—	—	縄文原体側面圧痕文でワラビ手状のモチーフを描き、円形竹管文、羽状沈線文を描く。	織維 白色粒	灰褐色	普通	花積下層式
27	深鉢	—	—	—	横位のループ文を施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
28	深鉢	—	—	—	ループを伴う無箇横位R縄文と無箇横位L縄文を施す。	織維 白色粒	褐色	普通	花積下層式
29	深鉢	—	—	—	横位L R縄文と横位R L縄文を羽状に施す。	織維 石英 角閃石	赤褐色	普通	花積下層式
30	深鉢	—	—	—	横位L R縄文と横位R L縄文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
31	深鉢	—	—	—	横位L R縄文と横位R L縄文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
32	深鉢	—	—	—	横位R L縄文と横位L R縄文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	黑褐色	普通	花積下層式
33	深鉢	—	—	—	横位R L縄文と横位L R縄文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
34	深鉢	—	—	—	短い原体による横位R L縄文と横位L R縄文を羽状に施す。	織維 黑色粒 白色粒	褐色	普通	花積下層式
35	深鉢	—	—	—	全面に横位R L縄文と横位L R縄文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式
36	深鉢	—	—	—	口縁部に刻みを付した隆帯を2条施し、以下に2条の縄文原体側面圧痕文を施す。以下に横位L R縄文と横位R L縄文を施す。	織維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
37	深鉢	—	—	—	全面に横位RL縦文と横位LR縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
38	深鉢	—	—	—	全面に横位LR縦文と横位RL縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	褐色	良好	花積下層式
39	深鉢	—	—	—	全面に横位RL縦文と横位LR縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	花積下層式
40	深鉢	—	(9.0)	—	上底を呈する底部片。外面に横位LR縦文と横位RL縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	褐色	普通	花積下層式
41	深鉢	—	—	—	波状口縁部片。口唇部は内削ぎ状を呈し、波頂部および口唇部上面に刻みを加えた貼付文を施す。文様は半截竹管による鋸歯状モチーフを描き、爪形文を施す。その上に円形貼付文を付す。	織維 石英 白色粒	赤褐色	普通	関山1式
42	深鉢	—	—	—	横位の条縦文の後に斜位の条縦文を施す。	織維 石英 白色粒	褐色	普通	黒浜式
43	深鉢	—	—	—	横走する波状文を施す。	織維 角閃石 白色粒	暗褐色	普通	黒浜式
44	深鉢	—	—	—	横位、斜位の沈線文を描き、斜格子目状のモチーフを施す。	織維 石英 白色粒	黄褐色	普通	黒浜式
45	深鉢	—	—	—	横走する平行沈線文を描く。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	黒浜式
46	深鉢	—	—	—	横走する平行沈線文、波状文を描く。	織維 石英 白色粒	赤褐色	普通	黒浜式
47	深鉢	—	—	—	横走する平行沈線文を描く。	織維 白色粒	黄褐色	普通	黒浜式
48	深鉢	—	—	—	縱位、横位の捺条文を施す。	織維 白色粒	褐色	普通	黒浜式
49	深鉢	—	—	—	全面に横位RL縦文、横位LR縦文を羽状に施す。	織維 石英 白色粒	黄褐色	普通	黒浜式
50	深鉢	—	—	—	横位の平行押引沈線文、刺突文を施す。	織維 石英 白色粒	赤褐色	普通	黒浜式
51	深鉢	—	—	—	横走する沈線文を描く。	織維 石英 白色粒	暗褐色	普通	黒浜式
52	深鉢	—	—	—	横位の平行、波状沈線文を施す。	織維 石英	明褐色	普通	黒浜式
53	深鉢	—	—	—	全面に横位LR縦文と横位RL縦文を施す。	織維 石英 白色粒	褐色	普通	黒浜式
54	深鉢	—	—	—	全面に横位RL縦文と横位LR縦文を羽状に施す。	織維 石英	褐色	普通	黒浜式
55	深鉢	—	—	—	全面に横位RL縦文を施す。	織維 石英 白色粒	褐色	普通	黒浜式
56	深鉢	—	—	—	横位の沈線文下に横位RL縦文を施す。	織維 白色粒	褐色	普通	黒浜式
57	深鉢	—	—	—	口唇部が平坦に作出される小型土器。有節沈線文、波状文が施される。	織維 白色粒	明褐色	普通	須房式
58	深鉢	—	—	—	波状縁を呈し、口唇部上に押圧を加える。波状縁に沿って細い粘土紐を施す。	角閃石 石英 チャート	暗褐色	普通	諸磯1式
59	深鉢	—	—	—	平縁深鉢。口縁部に縱位の貼瘤を施し、地文は縱位、斜位の条縦文を施す。	角閃石 石英 白色粒	黄褐色	普通	諸磯C式
60	深鉢	—	—	—	横位、斜位の平行沈線文を施す。	石英 赤色粒 白色粒	暗褐色	普通	浮島1式
61	深鉢	—	—	—	横位の沈線間の「C」字形の爪形文を描く。	石英 白色粒	明赤褐色	良好	浮島1式
62	深鉢	—	—	—	まばらな貝殻腹縁文の地文上に横走する沈線文を描く。	石英 赤色粒 小蝶	明赤褐色	普通	浮島1式

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
63	深鉢	—	—	—	まばらな撚糸文の地文上に横走する沈線文を施す。	角閃石 石英 白色粒	褐色	良好	浮島I式
64	深鉢	—	—	—	まばらな撚糸文の地文上に斜行する沈線文を施す。	石英 赤色粒 白色粒	明褐色	普通	浮島I式
65	深鉢	—	—	—	横位、斜位の沈線文を施す。	石英 赤色粒 白色粒	暗赤褐色	普通	浮島I式
66	深鉢	—	—	—	横走する沈線文の後に斜位の沈線文を施す。横走沈線文間に「D」字形の爪形文を施す。	赤色粒 白色粒	明赤褐色	普通	浮島I式
67	深鉢	—	—	—	縦位の撚糸文を施す。	石英 赤色粒 白色粒	明赤褐色	良好	浮島I式
68	深鉢	—	—	—	横走する沈線文を施す。	石英 赤色粒 白色粒	明赤褐色	良好	浮島I式
69	深鉢	—	—	—	横位の沈線文間に爪形文を施し、まばらな撚糸文の地文上に波状沈線文を描く。	赤色粒 石英 白色粒	明黄褐色	普通	浮島I式
70	深鉢	—	—	—	横位の沈線文間に爪形文を施し、まばらな撚糸文の地文上に3~4条の横位の平行沈線文、波状文を描く。	角閃石 黒色粒 石英	明黄褐色	普通	浮島I式
71	深鉢	—	—	—	斜位の撚糸文を施す。	石英 白色粒 細粒砂	灰褐色	普通	浮島I式
72	深鉢	—	—	—	斜位の撚糸文を施す。	黑色粒 白色粒	灰褐色	良好	浮島I式
73	深鉢	—	—	—	まばらな撚糸文の地文上に横位の沈線文を施す。	石英 白色粒	明褐色	良好	浮島I式
74	深鉢	—	—	—	波状口縁部片。波状線に沿って横位沈線文間に爪形文を付し、刻文を加える。	石英 白色粒	褐色	普通	浮島I~II式
75	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。波状線に沿って2条の爪形文列を施す。	石英 白色粒	明褐色	良好	浮島I~II式
76	深鉢	—	—	—	縦位のヘラ描沈線文を施す。	石英 赤色粒 白色粒	暗褐色	普通	浮島I~II式
77	深鉢	—	—	—	横位の沈線文を施す。	角閃石 石英 白色粒	褐色	普通	浮島I~II式
78	深鉢	—	—	—	波状貝殻文の地文上に横走する沈線文を描く。	石英 チャート 白色粒	暗褐色	普通	浮島I~II式
79	深鉢	—	—	—	横位、斜位の平行沈線文を施す。	石英 赤色粒 白色粒	明褐色	普通	浮島I~II式
80	深鉢	—	—	—	平行沈線文間に爪形文をめぐらし、以下に波状貝殻文を施す。	石英 白色粒	黄褐色	良好	浮島I~II式
81	深鉢	—	—	—	貝殻復縁文を縦位波状に施す。	石英 白色粒	黄褐色	良好	浮島I~II式
82	深鉢	—	—	—	斜位の平行沈線文を施す。	石英 赤色粒 白色粒	明赤褐色	普通	浮島I~II式
83	深鉢	—	—	—	口縁部の横位の沈線文間に爪形文を加え、以下に斜位の沈線文、長梢円形モチーフを描く。	石英 白色粒	暗褐色	良好	浮島II式
84	深鉢	—	—	—	横位の変形爪形文を施す。	赤色粒 白色粒	明赤褐色	普通	浮島II式
85	深鉢	—	—	—	横位の沈線文の上下に変形爪形文を横位、斜位に施す。	角閃石 細粒砂	黄褐色	普通	浮島II式
86	深鉢	—	—	—	横位沈線文下に波状貝殻文を施す。	石英 白色粒	暗褐色	良好	浮島II式
87	深鉢	—	—	—	まばらな斜位の撚糸文の地文上に変形爪形文を2列以上施す。	角閃石 石英 白色粒	黑褐色	良好	浮島II式
88	深鉢	—	—	—	口縁部に縦位の沈線文を施し、以下に柳葉状工具による刺突文、縦位の貝殻腹縁文を施す。	石英 赤色粒 白色粒	赤褐色	良好	興津式
89	深鉢	—	—	—	横走する沈線文を貝殻腹縁文の地文上に施し、上段には刺突文を加える。口唇部上面に棒状工具による押圧を施す。	石英 白色粒	暗赤褐色	普通	興津式
90	深鉢	—	—	—	無文土器で4段の輪横模を残す。口唇部には押圧を加える。	石英 白色粒 雲母	暗褐色	普通	興津式

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
91	深鉢	—	—	—	縦位の液状貝殻文を全面に施す。	黒色粒 石英 白色粒	黄褐色	良好	興津式
92	深鉢	—	—	—	横位の液状文を描く。	黒色粒 石英 白色粒	褐色	普通	興津式
93	深鉢	—	—	—	横位の液状文を条線で描く。	石英 白色粒 小繖	明褐色	普通	興津式
94	深鉢	—	—	—	縦位の貝殻腹縁文の地文上に横位の短沈線文を施す。	赤色粒 白色粒	暗赤褐色	良好	興津式
95	深鉢	—	—	—	波状貝殻文を施す。施文原体は肋脈を有する貝による。	石英 チャート 白色粒	黄褐色	普通	興津式
96	深鉢	—	—	—	竹管による刺突文を横位に施す。	石英 赤色粒 白色粒	暗赤褐色	良好	興津式
97	深鉢	—	—	—	半波竹管文による縦位、横位の沈線文の下位に縦位の筋衝状文を描く。	金雲母 石英 白色粒	暗赤褐色	良好	十三若提式
98	深鉢	—	—	—	押圧を加えた隆帯を垂下させ。縦位、弧状、横位の爪形文を加える。	石英 白色粒 黑色粒	黄褐色	普通	大木5式
99	深鉢	—	—	—	全面に横位L R縞文、横位R L縞文を施す。口唇部断面形は内削ぎ状を呈する。	黒色粒 石英 白色粒	黑褐色	普通	栗島台式
100	深鉢	—	—	—	縦位の縞文原体側面压痕文を施し、その上にR L縞文を横位、縦位、斜位に施す。	角閃石 石英 白色粒	褐色	普通	栗島台式
101	深鉢	—	—	—	横位R L縞文と横位L R縞文を羽状に施す。	石英 黑色粒 白色粒	褐色	普通	栗島台式
102	深鉢	—	—	—	全面に横位表し縞文を施す。	角閃石 石英 白色粒	褐色	良好	前期後半
103	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。口頂部から断面三角形の隆帯が垂下し横走する隆帯と交わる。隆帯区間に押引刺突文によって弧状モチーフを描く。横走する隆帯下に波状沈線文を施す。	金雲母 石英 チャート	暗褐色	普通	阿玉台1b式
104	深鉢	—	—	—	平縁深鉢。口唇部に沿って刺突を施し、口縁部に弧状のモチーフを刺突文で描く。口縁部内面に稜を有する。	金雲母 石英 白色粒	暗赤褐色	普通	阿玉台1b式
105	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。口縁部文様帶を横位隆帯で区画し、刻文を加える区間に溝巻状、斜位の押引文を施す。口縁部内面に稜を有する。	金雲母 石英 白色粒	暗赤褐色	普通	阿玉台1b式
106	深鉢	—	—	—	波状縁深鉢。波頂下から斜位、縦位の隆帯を施し、それに沿って刺突文を施す。口縁部内面に稜を有する。	金雲母 石英 チャート	明赤褐色	普通	阿玉台1b式
107	深鉢	—	—	—	断面三角形の隆帯に沿って有節沈線文を施す。	金雲母 石英 白色粒	暗赤褐色	良好	阿玉台1b式
108	深鉢	—	—	—	突起を付した梢円区面の隆帯に沿って有節沈線文を施す。	金雲母 石英 チャート	暗褐色	普通	阿玉台1b式
109	深鉢	—	—	—	無文地にヒダ状圧痕文、波状沈線文を横走させる。	石英 白色粒	明褐色	普通	阿玉台1b式
110	深鉢	—	—	—	口縁部に横位、梢円形の隆帯による区画文を描き、それに沿って爪形文、刺突文を施す。円形貼付文もみられる。	金雲母 石英 白色粒	褐色	普通	阿玉台1b式
111	深鉢	—	—	—	横位の断面三角形の隆帶上に貼付文を付し、以下に横位の波状文を描く。	金雲母 石英 チャート	暗褐色	普通	阿玉台1b式
112	深鉢	—	—	—	波状口縁部片。「V」字状の隆帯を貼付し、刻みを付す。側面に刻みを加える。隆帯に沿って沈線を加える。	金雲母 石英 白色粒	黄褐色	普通	阿玉台1b~II式
113	深鉢	—	—	—	口縁部を横位の隆帯で区画し、区画に沿って押引文を描く。区画内に波状沈線文を施す。口縁部内面に稜をもつ。	金雲母 石英 白色粒	明褐色	普通	阿玉台1b~II式
114	深鉢	—	—	—	口縁部文様帶を横位隆帯で区画し、区画内に縦位沈線を施し、波状の貼付文を加える。以下に縦位R L縞文を施す。	金雲母 石英 白色粒	明黃褐色	普通	加曾利E1式
115	深鉢	—	—	—	口縁部に刻みを付した弧状の隆帯を施し、隆帯に沿って沈線文を施す。	金雲母 石英 白色粒	暗褐色	普通	加曾利E1式

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
116	深鉢	—	—	—	口縁部無文帯を2条の断面三角形の隆帯で区画し、以下に横位L R綱文を施す。	金雲母 石英 中粒砂	暗褐色	普通	加曾利E 1式
117	深鉢	—	—	—	全面に横位L R綱文施文。	角閃石 石英 白色粒	灰褐色	普通	堀之内2 式
118	深鉢	—	—	—	口縁部の紐線文は剥落する。横位L R綱文の地文上に横位の沈線文を施す。	角閃石 石英 白色粒	褐色	普通	加曾利B 1 式
119	深鉢	—	—	—	平縁深鉢。口縁に刻みを付し、横位2条の沈線をめぐらし、間を無文帯とする。以下に刻みを施し、横位L R綱文を施す。2条の沈線文をまたぐように縦位の貼瘤を加える。	石英 白色粒	暗褐色	良好	曾谷式
120	深鉢	—	—	—	平縁粗製深鉢。口縁部に押圧を加えた1条の縦綱文を付し、以下に横位の条線文を施す。	石英 白色粒 細粒砂	褐色	普通	安行1式
121	深鉢	—	—	—	口縁部に横位、斜位の沈線文を施す。	角閃石 石英 白色粒	赤褐色	普通	安行2式

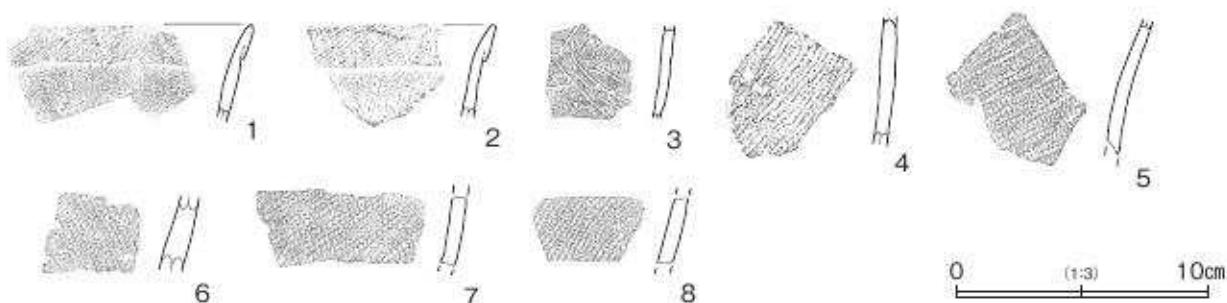
番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
122	石鑼	チャート	20	1.6	0.4	0.6	凹基無茎鑼。
123	石鑼未製品	チャート	29	2.8	0.7	5.0	周縁部からの不規則な加工痕。石鑼未製品。
124	楔形石器	玉髓(メノウ)	3.4	2.7	1.5	11.7	表裏共に上下、左右から対向する剥離痕残す。
125	二次加工 剥片	玉髓(メノウ)	1.9	4.7	1.0	6.5	横長剥片。加工痕を一部に残す。
126	二次加工 剥片	チャート	2.6	3.6	1.6	9.6	不規則な加工痕残す。意図的なものが不明。
127	二次加工 剥片	玉髓(メノウ)	6.8	6.2	1.8	43.1	左側縁に不規則な加工痕。
128	石核	玉髓(メノウ)	5.5	3.4	1.3	62.7	礫を半削し、その面を打面とする。
129	石核	玉髓(メノウ)	6.3	5.6	3.6	130.2	礫を半削した素材を用い、正面側・裏面側に交互に作業面を設定。
130	石核	泥岩	5.3	4.2	2.7	58.1	自然礫をそのまま石核とし、求心的な剥離を行う。
131	磨製石斧	蛇紋岩	5.7	3.7	1.2	38.8	基部に磨面を残す。素材の形状を生かし、敲打工程を経ずに研磨される。
132	磨石	砂岩	8.7	9.8	5.3	563.2	正面になめらかな磨面と凸凹のある擦痕。縁辺に微細な敲打痕。
133	磨石	砂岩	9.9	6.3	5.8	489.7	右側縁に磨面形成。下端に微細な敲打痕。
134	磨石	砂岩	11.3	6.5	4.6	437.7	下端部に磨耗痕。
135	磨石	安山岩	9.7	8.0	5.8	546.3	正面に磨面形成。
136	敲石	結晶質石灰岩	6.6	5.7	5.6	232.5	円礫をそのまま用いる。下縁に微細な敲打痕。
137	敲石	砂岩	(8.1)	6.7	5.5	376.2	広い範囲に微細な敲打痕。
138	敲石	砂岩	9.6	8.8	5.3	449.6	自然面を残さないブロック状の礫片素材。敲打痕が観察される。
139	敲石	花崗斑岩	9.8	5.2	3.8	285.2	上端部に微細な敲打痕。
140	敲石	石英斑岩	(6.3)	(7.6)	4.3	212.6	微細な敲打痕を一部に残す。
141	敲石	流紋岩	8.8	4.0	2.3	101.3	縁辺部からの大小の剥離痕。打製石斧等の未製品の可能性有。
142	凹石	砂岩	(11.6)	6.4	4.0	396.2	上部欠損。器体下位に表裏に凹み。

第4章 弥生時代

弥生時代後期土器の出土が確認されている。いずれも遺構外で確認されたものであり、当該期に伴う遺構は不明である。

4-1 遺物（第50図、第21表、図版21）

弥生時代後期初頭の型式不明土器、後期・上稲吉式土器などが出土しているが、量的にはごくわずかである。当該期のものと思われる石器類も出土していない。（渡邊）



第50図 弥生時代遺構外出土遺物

第21表 弥生時代遺構外出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎土	色調	焼成	時期
1	甕	—	—	—	緩やかな波状口縁を呈し、有段口縁を呈する。有段部に横位LR縄文を施す。以下を無文帶とする。	石英 白色粒	灰褐色	普通	後期初頭
2	甕	—	—	—	緩やかな波状口縁を呈し、有段口縁を呈する。有段部に横位LR縄文を施す。以下を無文帶とする。	石英 白色粒	灰褐色	普通	後期初頭
3	甕	—	—	—	横位羽状のモチーフを沈線文で描く。	石英 白色粒	暗褐色	良好	後期初頭
4	甕	—	—	—	附加条縄文(LR+R)を施す。	角閃石 チャート 白色粒	黄褐色	普通	上稲吉式
5	甕	—	—	—	附加条縄文(LR+R)を施す。	雲母 石英 白色粒	黒褐色	良好	上稲吉式
6	甕	—	—	—	全面に附加条縄文(RL+L)を施す。	角閃石 石英 白色粒	黄褐色	普通	上稲吉式
7	甕	—	—	—	全面に附加条縄文(LR+R)を施す。	石英 チャート 白色粒	暗褐色	普通	上稲吉式
8	甕	—	—	—	全面に附加条縄文(LR+R)を施す。	石英 黒色粒 白色粒	明黄褐色	良好	上稲吉式

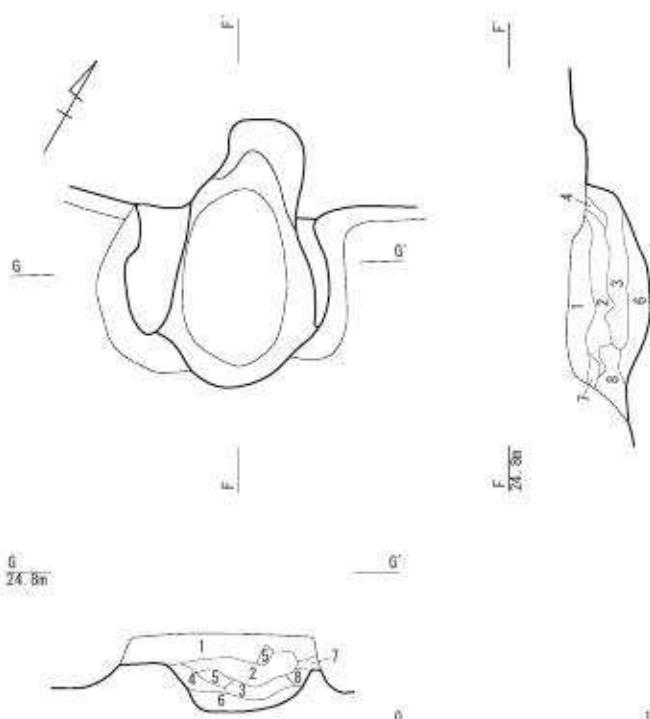
第5章 古墳時代

住居跡8軒、円形周溝状遺構2基が検出されている。住居跡はA区の北東側と南西側に集中する傾向をみており、B・C区からは一切検出されていない。カマドの位置は、北側が2軒、北西側が3軒、不明3軒という構成を示している。円形周溝状遺構は以上の住居跡に挟まるようにA区中央部の北東寄りと南西寄りに位置する。いずれも耕作による搅乱や削平が著しく、遺物の出土も限られることから、性格や内容、時間的位置などについては不明瞭な部分が残るが、類似した遺構は古墳時代後期を中心に分布している。

5-1 住居跡

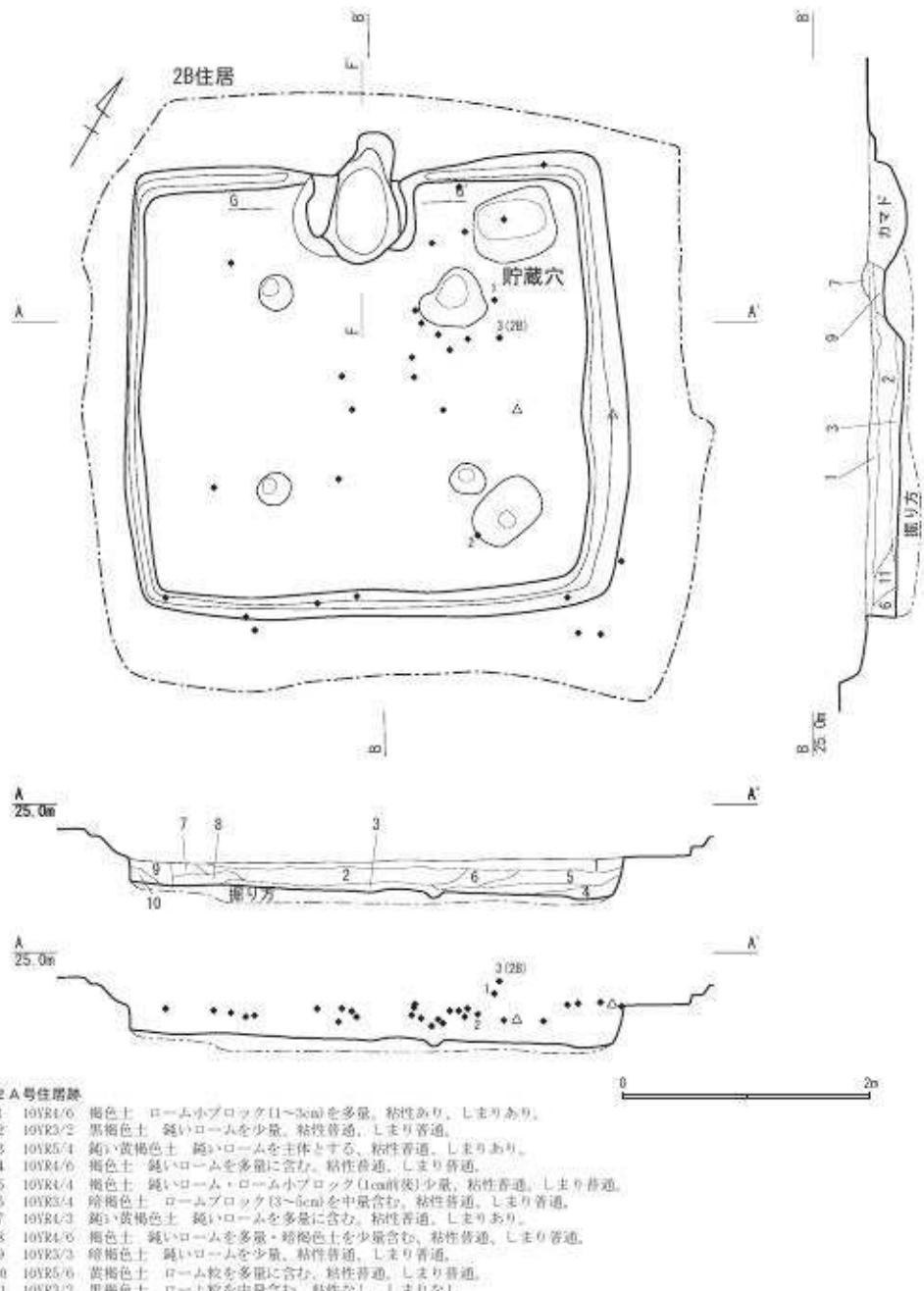
2A号住居跡（第51～53図、第22表、図版7・8・22）

A区の北東側に位置する。北西側に1号住居跡、北東側に3号住居跡がそれぞれ近接して分布する。上面を2B号住居跡に切られる。平面形は東西方向403cm、南北方向364cmの隅丸方形を呈する。主軸方向はN-33°-Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は30cmを測る。褐色土を用いて貼床面が形成されていた。全体に起伏をもつ。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅14cm、深さ10cmを測り、住居内を全周する。住居内から5個のピットが検出された。このうち、四隅の対になった4個が本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径41cm、深さ32cmを測る。カマドは短軸線に沿った北西壁中央



2号住居跡カマド
1 10VR4/6 棕色土 砂質粘土主体・ロームブロック(3cm前後)中量。粘性あり、しまりあり。
2 10VR4/3 純い黄褐色土 焼土少量・ローム小ブロック(1cm前後)微量。粘性なし、しまりなし。
3 10VR4/8 赤褐色土 焼土層、粘性なし、しまりなし。
4 7.SVIG5/4 黄褐色土 砂質粘土を多量に含む、粘性普通、しまりあり。
5 10VR3/3 暗赤褐色土 焼土を多く・ローム小ブロック(1cm前後)少量。粘性普通、しまり普通。
6 10VR3/4 暗褐色土 焼土少量・半焼けロームを多量。粘性なし、しまりなし。
7 10VR3/4 暗褐色土 ローム無・ロームブロックを微量。粘性普通、しまり普通。
8 10VR4/4 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒を中量。粘性普通、しまり普通。

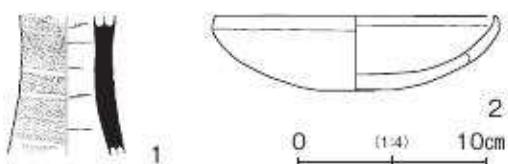
第51図 2A号住居跡カマド (1:30)



第52図 2A号住居跡 (1:60)

に位置し、壁外に逆U字形に35 cmほど突出する。袖部は黄白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は55 cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ

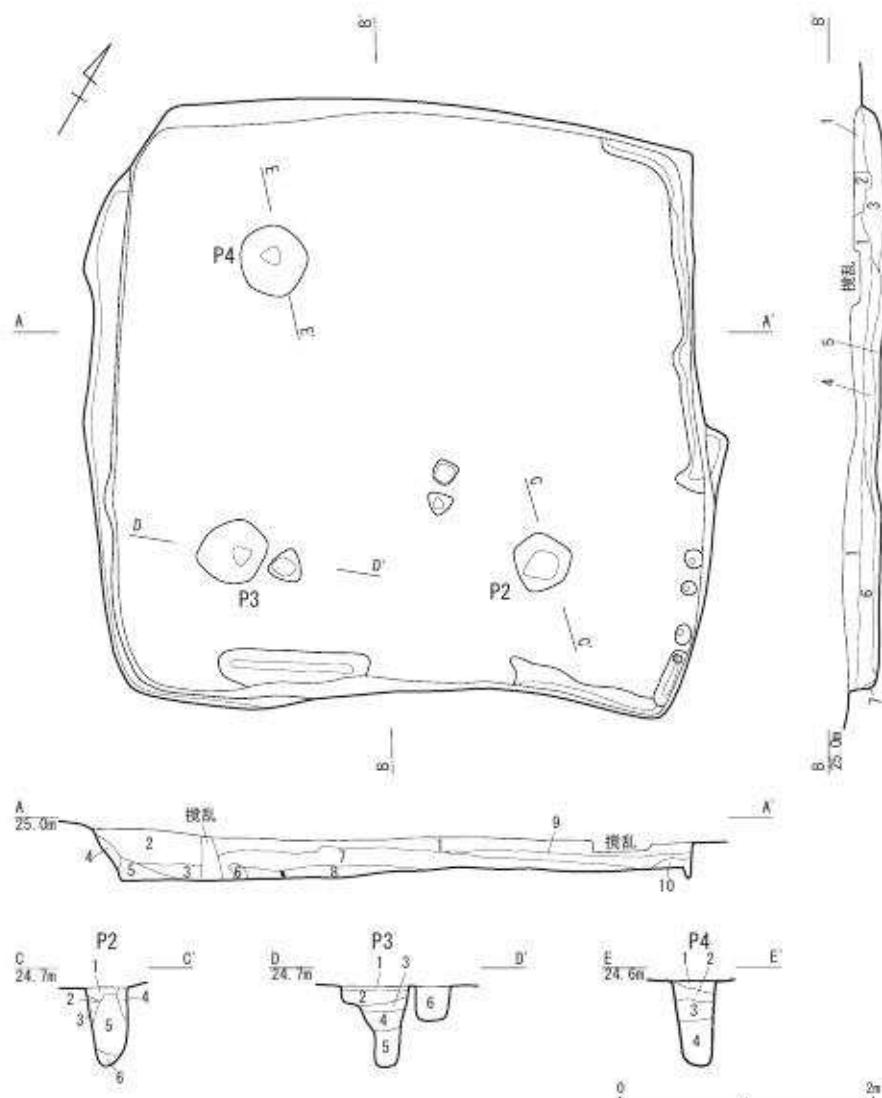
20 cmほどの楕円形に掘り込まれている。カマドの右側、北東隅には貯蔵穴状の土坑がみられる。長径67 cmの隅丸方形を呈する。掘り方は床下全面に及んでいる。床面からの深さは6~20 cmを測る。覆土中から床下にかけて縄文土器76片、須恵器5片、土師器251片、陶磁器3片、土製品1点、石製品8点が出土した。伴出土



第53図 2A号住居跡出土遺物

第22表 2A号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土層位	備考
1	別形器 長頸壺	—	—	<7.4>	—	ロクロ成型。頸部のみ残存。全体的に肉厚。外面上半を刮削ナデ。横位と波状の微擦文。	石英多量 スコリア少量	褐灰色	普通		7c 後 木葉下窓 跡群産か
2	土師器 壺	(14.8)	—	<4.0>	—	やや丸みをもつ平底。口縁部内側し、下端に棱をもたない。体部はやや直線的。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面多方向ヘラケケズリ後ナデ。内面ナデ。底部一方向のヘラカズリ。	中央に暗褐色 の粘土を 挟む。 白色粒微量	鍛い 黄褐色	良好	上層	7c 前



2B号住居跡

- 1 10YR5/4 鍛い黄褐色土 純いロームを多量に含む。粘性あり。しまり強い。
 2 10YR5/6 黄褐色土 純いローム・ローム粒を多量に含む。粘性普通。しまりあり。
 3 10YR4/6 褐色土 ローム粒・ローム小ブロック(1cm以下)を中量含む。粘性普通。しまり普通。
 4 10YR5/4 黄褐色土 鍛いローム・ローム小ブロック(1cm以下)を中量含む。粘性普通。しまり普通。
 5 10YR5/8 黄褐色土 純いロームを多量に含む。粘性普通。しまり普通。
 6 10YR5/8 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。粘性あり。しまり普通。
 7 10YR4/4 褐色土 ローム粒を中量含む。粘性なし。しまりなし。
 8 10YR3/4 褐褐色土 ローム小ブロック・硬土小ブロック(1cm以下)を含む。粘性なし。しまりなし。
 9 10YR3/3 喀褐色土 ローム小ブロック(1cm以下)・炭化物粒を中量含む。粘性なし。しまりなし。
 10 10YR5/6 黄褐色土 純いロームを主体とする。粘性あり。しまりあり。

P 2

- 1 10YR1/3 鍛い黄褐色土 ローム粒を少量含む。粘性普通。しまり普通。
 2 10YR1/6 褐色土 ロームブロック(1cm前後)を中量含む。粘性普通。しまり普通。
 3 10YR3/4 細褐色土 純いロームを少量含む。粘性普通。しまりなし。
 4 10YR1/6 褐色土 純いローム・ローム小ブロックを多量に含む。粘性普通。しまり普通。
 5 10YR1/1 黑褐色土 ブロック状の純いロームを中量。粘性なし。しまりなし。
 6 10YR2/3 黑褐色土 ロームブロック(3cm前後)を少量含む。粘性普通。しまり普通。

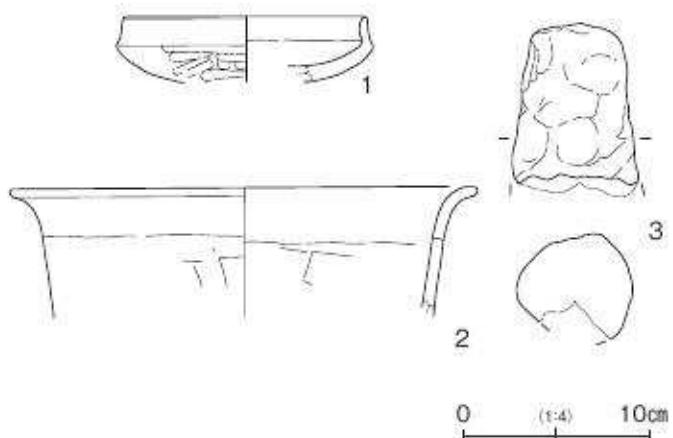
P 3

- 1 7.5H4/4 褐褐色土 ローム粒をやや多く含む。粘性普通。しまり普通。
 2 7.5H3/2 黑褐色土 ローム粒を少量含む。粘性普通。しまり普通。
 3 10YR2/2 細褐色土 粘性普通。しまり普通。
 4 10YR2/2 黑褐色土 純いロームを微量含む。粘性普通。しまり普通。
 5 10YR2/2 黑褐色土 純いロームを少量含む。粘性普通。しまりあり。
 6 10YR1/4 細褐色土 ローム粒・ローム小ブロック多量に含む(擾乱か?)。粘性なし。しまりなし。

P 4

- 1 10YR4/4 褐色土 ローム小ブロック(1cm前後)を多量。硬土ブロックを微量に含む。粘性普通。しまり普通。
 2 10YR1/4 細褐色土 純いロームを少量含む。粘性普通。しまり普通。
 3 10YR1/6 褐色土 鍛いロームを多量含む。粘性普通。しまり普通。
 4 10YR2/3 細褐色土 ローム粒を中量含む。粘性普通。しまり普通。

第54図 2B号住居跡 (1:60)



第 55 図 2B 号住居跡出土遺物

第 23 表 2B 号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他の特徴	胎土	色調	焼成	出土層位	備考
1	土師器 环	(12.8)	-	<3.5>	-	丸底。口縁部内傾して、下端に明瞭な稜をもつ。体部はややふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横位ヘラケズリ。内面ナデ。	褐色粒多量 雲母少量	暗褐色	良好	中層	7c 前
2	土師器 鉢	(24.8)	-	<6.9>	-	口縁部は大きく外反する。胴部は直線的に外傾。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面横位ヘラケズリ。内面ヘラナデ後ナデ。	石英・スコリア多量 雲母少量	暗褐色	普通	中層	7c ~ 8c
3	土製品 支脚	4.5	<6.5>	<9.2>	244	断面形は重な拵円形である。全面を指頭やヘラケズリで整形して、ナデで調整する。	白色粒・スコリア多量	明褐色	普通	中層	

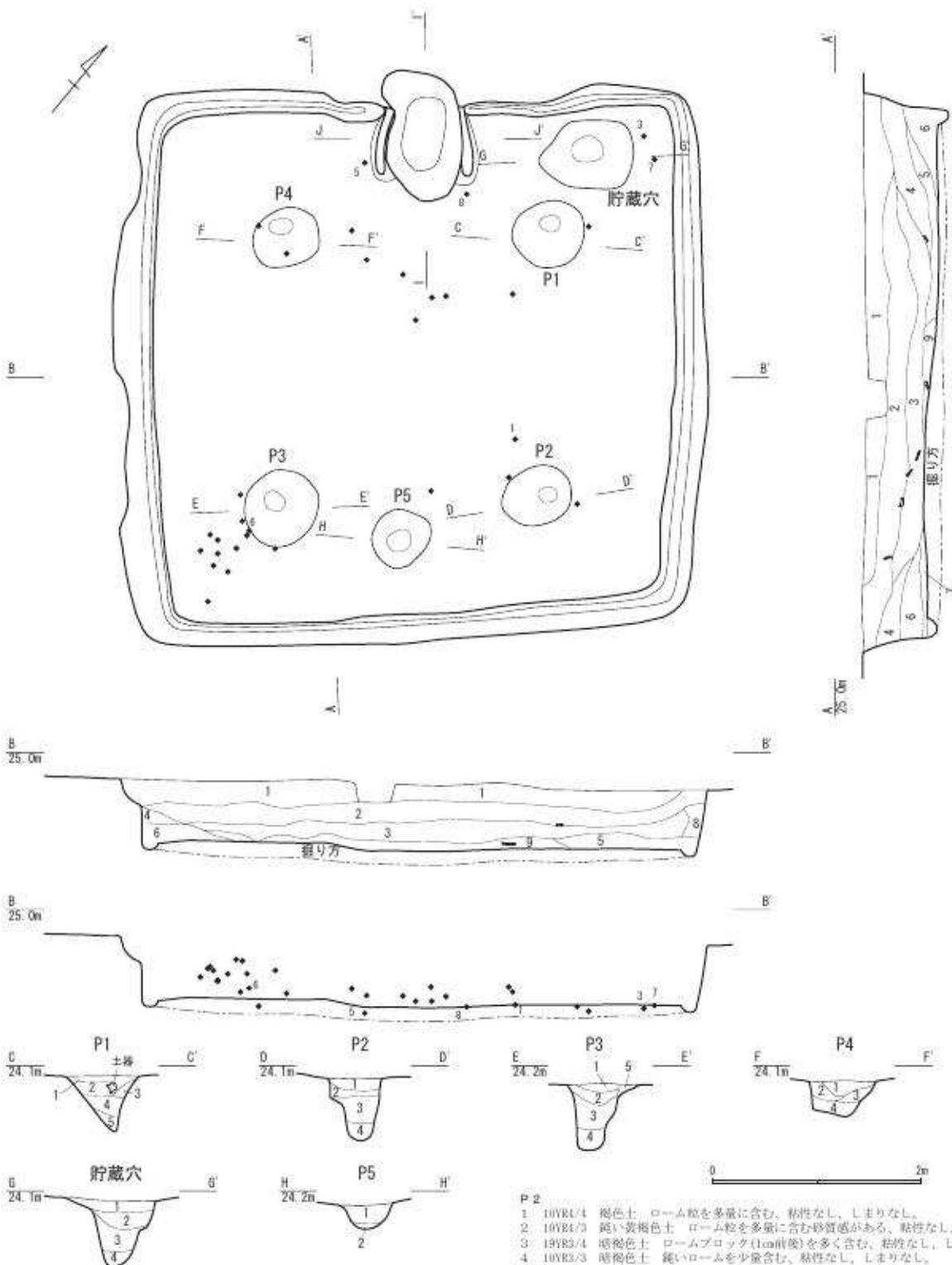
器や覆土のあり方などから判断して 7 世紀前半～中葉の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると 2B 号住居跡に先行する。

2B 号住居跡（第 54・55 図、第 23 表、図版 8・22）

A 区の北東側に位置する。北西側に 1 号住居跡、北東側に 3 号住居跡がそれぞれ近接して分布する。2A 号住居跡の上面を切る。各所に耕作による攪乱を受けている。平面形は東西方向 490 cm、南北方向 468 cm の隅丸方形を呈する。主軸方向は N - 33° - W を示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は 43 cm を測る。床面は IV 層および 2A 号住居跡の覆土中に形成されており、全体に起伏をもつ。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅 10 cm、深さ 9 cm を測り、北西側を除いてほぼ全周する。住居内から 6 個のビットが検出された。このうち、南東隅と南西隅、北西隅近くに位置する 3 個が本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径 53 cm、深さ 65 cm を測る。カマドは認められなかった。覆土中から床下にかけて縄文土器 45 片、須恵器 7 片、土師器 173 片、石製品 5 点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して 7 世紀前半～中葉の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると 2A 号住居跡に後続する。

3 号住居跡（第 56～58 図、第 24 表、図版 8・22）

A 区の北東側に位置する。南西側に 2 号住居跡が近接して分布する。各所に耕作による攪乱を受けている。平面形は東西方向 562 cm、南北方向 532 cm の隅丸方形を呈する。主軸方向は N - 40° - W を示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は 70 cm を測る。褐色土を用いて貼床面が形成されてい



3号住居跡

- 10YR4/2 灰黄褐色土 ローム粒を少量含む、粘性普通、しまりなし。
- 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロック(1cm)中量、粘性普通、しまり普通。
- 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒少含む、粘性なし、しまり普通。
- 10YR4/7 灰黄褐色土 ローム粒や多量含む、粘性普通、しまりなし。
- 10YR3/4 暗褐色土 黒色土を多量に含む、粘性なし、しまりなし。
- 7.5YR4/4 暗褐色土 築いロームを多量に含む、粘性なし、しまりなし。
- 7.5YR4/6 暗褐色土 ロームブロック(3~5cm)。築いローム中量、粘性なし、しまりなし。
- 10YR5/6 黄褐色土 築いロームを主体とする、粘性あり、しまりあり。
- 10YR3/2 黄褐色土 岩化物粒を中量含む、粘性なし、しまりなし。

P 1

- 10YR3/2 黑褐色土 ローム粒を中量に含む、粘性普通、しまり普通。
- 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、砂質土、粘性なし、しまりなし。
- 10YR4/6 暗褐色土 築いロームを多量に含む、粘性普通、しまりなし。
- 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック(5cm前後)を多く含む、粘性普通、しまりなし。

P 2

- 10YR1/4 暗褐色土 ローム粒を多量に含む、粘性なし、しまりなし。
- 10YR1/3 跳い黄褐色土 ローム粒を多量に含む、砂質感がある、粘性なし、しまりなし。
- 10YR3/4 塗泥色土 ロームブロック(1cm前後)を多く含む、粘性なし、しまりなし。
- 10YR3/3 黄褐色土 跳いロームを少量含む、粘性なし、しまりなし。

P 3

- 7.5YR4/3 暗褐色土 ローム粒・塗泥色土を中量含む、粘性なし、しまりなし。
- 7.5YR4/6 暗褐色土 ローム粒・塗泥色土を多量含む、粘性なし、しまりなし。
- 7.5YR4/4 暗褐色土 ローム粒を多量に含む砂質感がある、粘性なし、しまりなし。
- 7.5YR3/4 塗泥色土 ローム粒を多量に含む、粘性なし、しまりなし。

P 4

- 10YR1/2 黑褐色土 粘性なし、しまりなし。
- 10YR4/6 暗褐色土 ローム粒を主体とし砂質感あり、粘性なし、しまりなし。
- 10YR3/3 跳い黄褐色土 ローム粒を多量に含む、粘性なし、しまりなし。
- 10YR5/6 黄褐色土 ローム粒を主体とする、粘性なし、しまりなし。

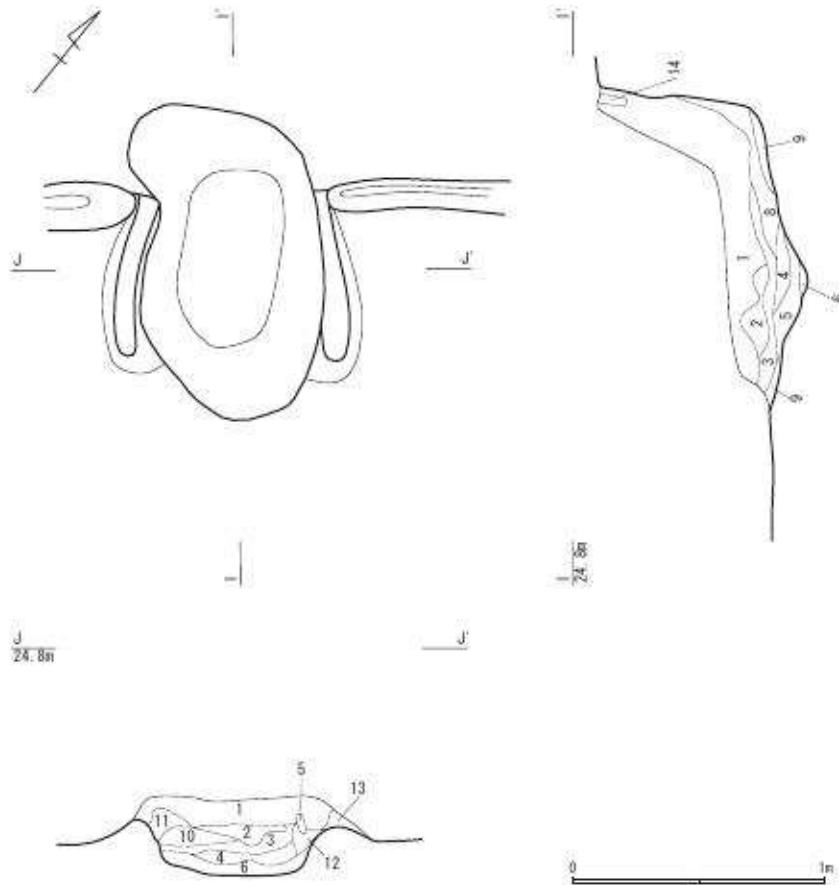
貯藏穴

- 7.5YR4/3 暗褐色土 築いロームを多量に含む、粘性普通、しまり普通。
- 7.5YR4/6 暗褐色土 築いローム・ローム粒を少量含む、粘性普通、しまり普通。
- 7.5YR3/4 暗褐色土 ローム小ブロック(1~3cm)を多く含む、粘性普通、しまり普通。
- 7.5YR3/3 暗褐色土 ローム小ブロック(1~3cm)を少量含む、粘性普通、しまり普通。

P 5

- 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロック(1cm)を多量に含む、粘性なし、しまりなし。
- 10YR4/6 暗褐色土 ロームブロック(5cm前後)、ローム粒を含む、粘性普通、しまり普通。

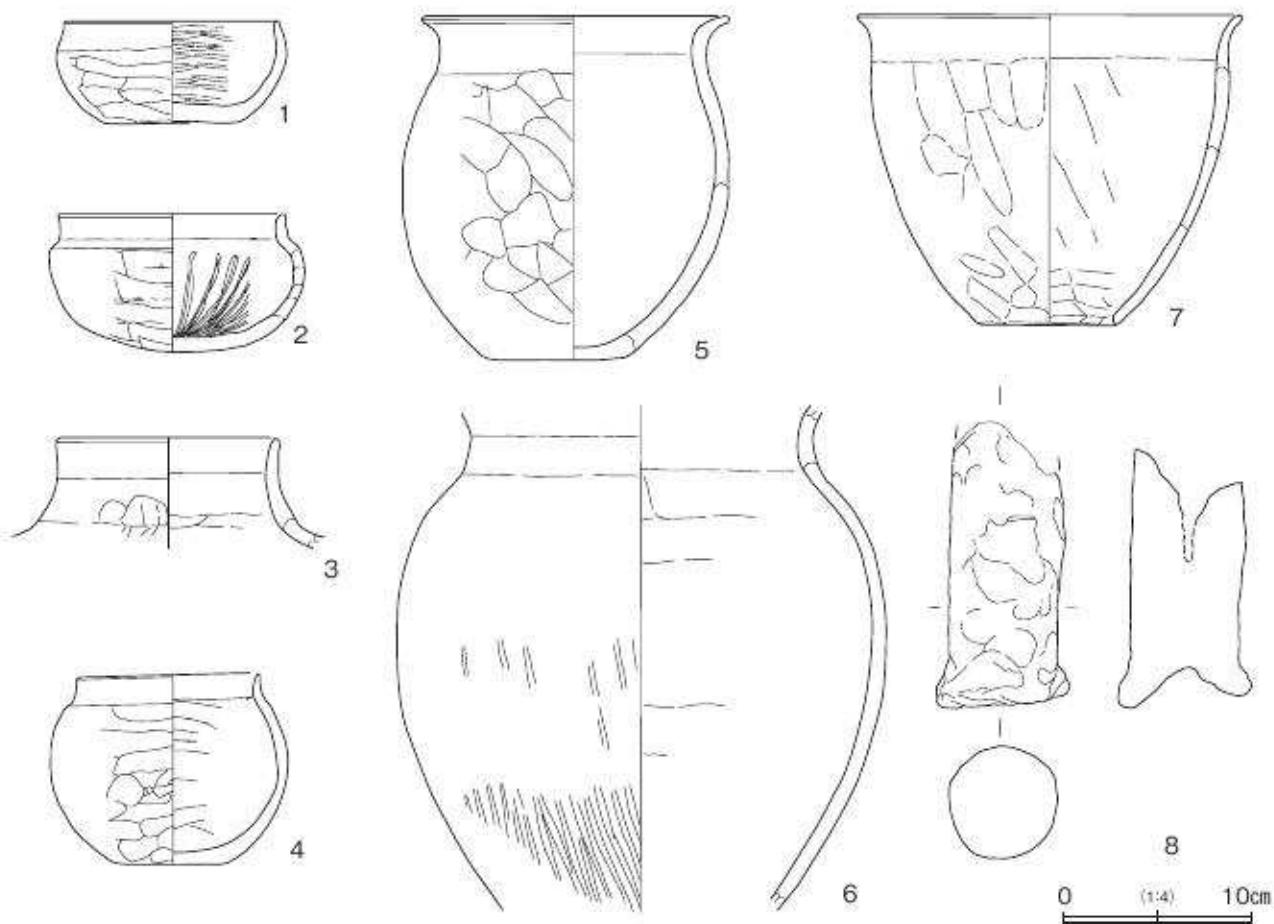
第56図 3号住居跡 (1:60)



- 3号住居跡カマド**
1. 10VR1/4 海色土 ローム小ブロック(1cm前後)、焼土ブロックを少量、砂質粘土を中量含む。粘性なし。しまりなし。
 2. 5VR4/3 黄い赤褐色土 烧土ブロック・焼土板を多量に含む。粘性なし。しまりなし。
 3. 7.5VR4/3 橙色土 烧土を少量含む。粘性なし。しまりなし。
 4. 7.5VR4/4 海色土 烧土ブロック(3cm前後)を少量含む。粘性なし。しまりなし。
 5. 5VR4/8 赤褐色土 烧土を主体とする。粘性なし。しまりなし。
 6. 10VR1/2 黄い黄褐色土 手焼けのロームブロック(3cm前後)を多量。粘性なし。しまりなし。
 7. 10VR2/2 黒褐色土 烧土板・黑色土粒少量。粘性なし。しまりなし。
 8. 7.5VR4/3 橙色土 手焼けのロームブロック(3cm前後)を多量。粘性なし。しまりなし。
 9. 10VR2/4 橙褐色土 烧土板・炭化物を少量含む。粘性なし。しまりなし。
 10. 5VR4/8 赤褐色土 烧土を主体とする。粘性なし。しまりなし。
 11. 10VR6/4 黄い黄褐色土 灰褐色粘土多量。暗褐色粘土少量。粘性普通。しまり普通。
 12. 10VR3/2 橙褐色土 ローム板を少量。粘性普通。しまり普通。
 13. 10VR6/2 黄い黄褐色土 烧土を多量に。焼土を少量含む。粘性あり。しまりあり。

第 57 図 3号住居跡カマド (1:30)

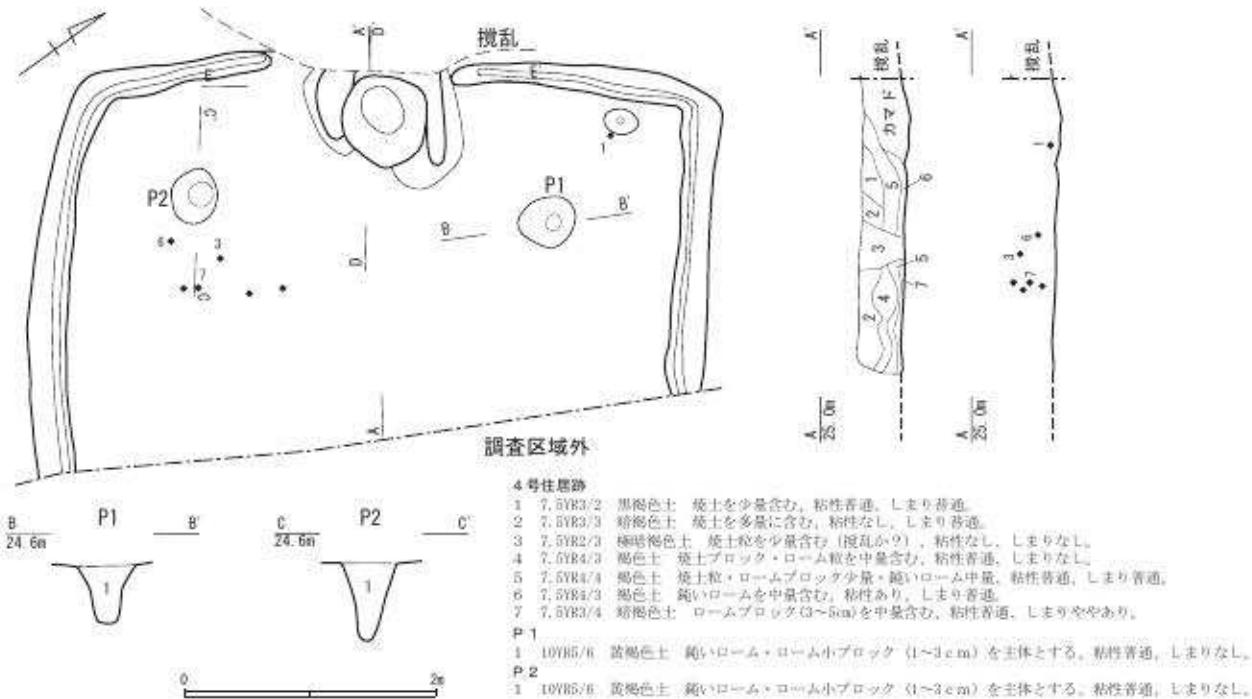
た。全体に起伏をもつ。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅 18 cm、深さ 10 cm を測り、住居内を全周する。住居内から 5 個のピットが検出された。このうち、四隅の対になった 4 個が本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径 68 cm、深さ 52 cm を測る。南東壁中央近くの 1 個は出入口施設であった可能性が高い。口径 55 cm、深さ 25 cm を測る。カマドは短軸線に沿った北西壁中央に位置し、壁外に逆 U 字形に 30 cm ほど突出する。袖部は黄白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は 70 cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ 24 cm ほどの楕円形に掘り込まれている。カマドの右側、北東隅には貯蔵穴状の土坑がみられる。長径 92 cm、深さ 62 cm の楕円形を呈し、断面は筒状に近い。掘り方は床下全面に及んでいる。床面からの深さは 5 ~ 20 cm を測る。覆土中から床下にかけて縄文土器 23 片、須恵器 4 片、土師器 95 片、土製品 1 点、石製品 15 点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して 7 世紀前半の所産であった可能性が高い。



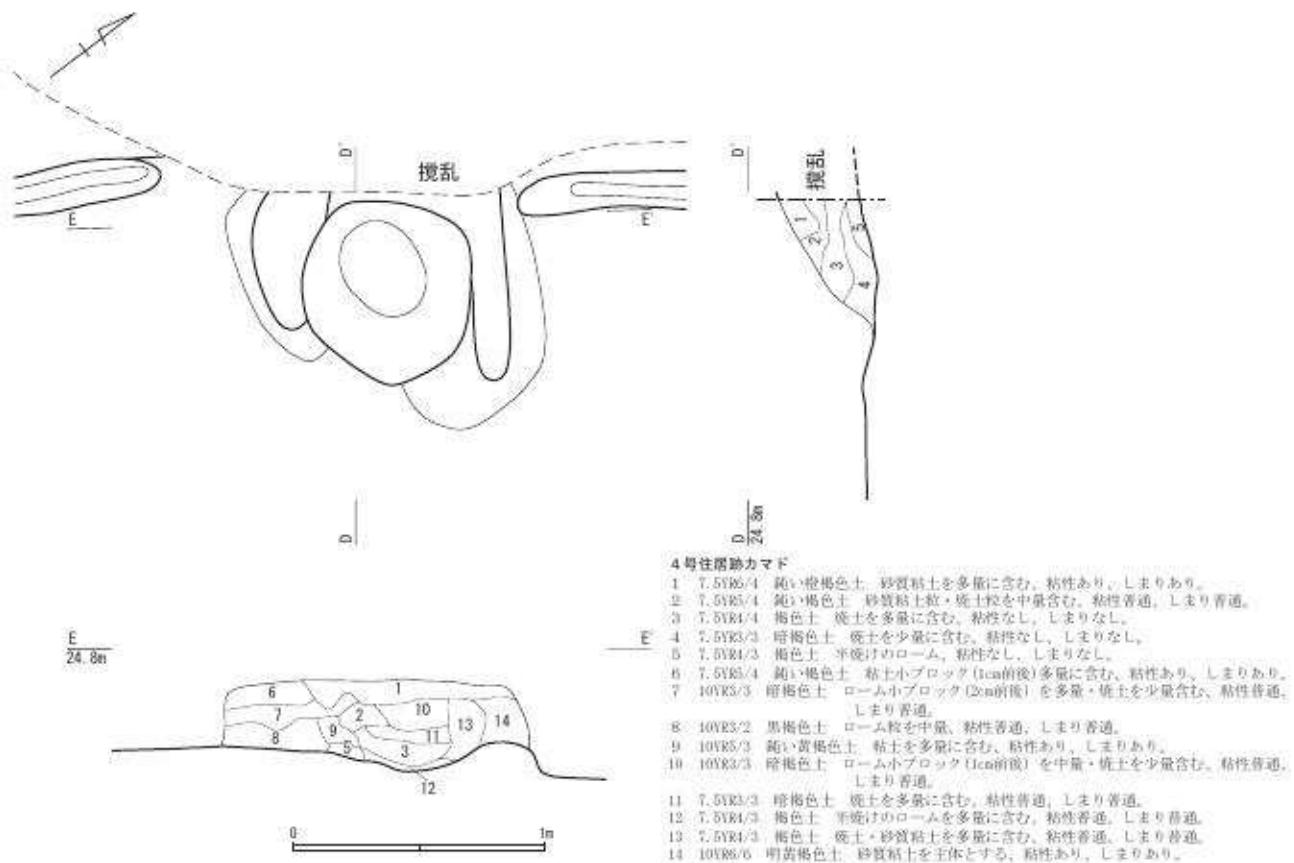
第 58 図 3号住跡出土遺物

第 24 表 3号住跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土層位	備考
1	土師器 壺	11.2	7.0	5.4	-	口縁部は内側して下端に稜をもたない。体部はふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横位ヘラケズリ後ナデ。内面横方向のミガキ。底部多方向のヘラケズリ。	白色粒多量 雲母微量	黒色	良好		7c 前
2	土師器 壺	11.8	-	7.3	-	口縁部は直線的に立ち上がり、下端に明瞭な稜をもつ。体部はふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上位横位ヘラケズリ後ナデ、中位以下多方向のヘラケズリ後ナデ。内面に放射状暗文。	チャート・砂 粒 中量 雲母少量	明褐色	良好		7c 前
3	土師器 壺	11.4	-	<5.9>	-	口縁部はほぼ直立する。胴部は大きくふくらむ。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦位ヘラケズリ。内面横位ヘラナデ後ナデ。	白色粒・黒 色 粒多量 雲母中量	明褐色	良好		7c
4	土師器 小型壺	9.4	6.0	10.0	-	口縁部は穂やかに外反して、下位に明瞭な稜をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面横位のヘラケズリ、内面横位のヘラナデ。底部多方向のヘラケズリ調整。胴部中位に最大径をもつ。胴部上位穿孔か。	白色粒多量 砂粒少量 雲母少量	赤褐色 ～黒褐色	良好		7c
5	土師器 甕	15.8	7.5	18.2	-	口縁部は大きく外反。胴部はややふくらむ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面は斜位ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ後ナデ。	白色粒多量 黒褐色粒、雲 母少量	明褐色 ～黒色	良好		7c 前
6	土師器 甕	-	-	<26.7>	-	常磐型甕。胴部大きくふくらみをもつ。胴部外面上位ヘラケズリ後丁寧なナデ、中から下位斜方向ヘラミガキ。内面ヘラナデ後ナデ。肩部の一部赤化。最大径は胴部中位。	白色粒・砂 粒 を多量 雲母微量	暗褐色	良好	上層	7c 前～ 中
7	土師器 甕	20.0	底径 7.4 孔径 6.8	16.5	-	口縁部が大きく外反する。胴部はわずかにふくらみを持ち、下位ですぼまる。単孔。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上位縦位ヘラケズリ後丁寧なナデ、下位斜位ヘラケズリ。内面縦方向ヘラナデ後丁寧なナデ。開口部面取り 2 回。	砂粒中量 小石・石英 少量	明褐色	良好		7c
8	土製品 支脚	6.0	7.1	<15.2>	567	底部と上部が若干開く。上部の中央に勝穴状の窪み。基部は円柱形。整形は指頭やヘラケズリで整形、ナデで調整。表面にカマドの粘土が付着。	白色粒多量 スコリア中量	黄褐色	普通		



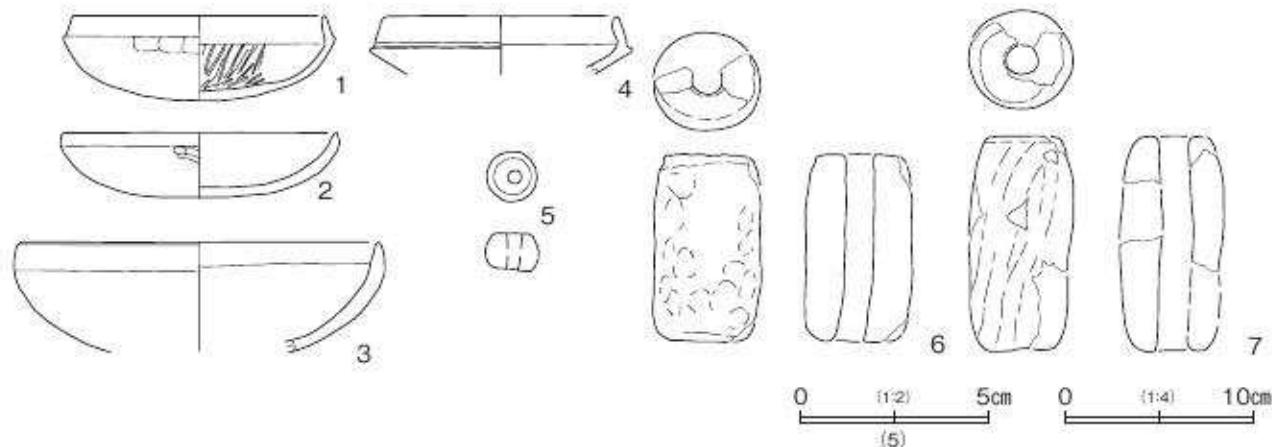
第59図 4号住居跡 (1:60)



第60図 4号住居跡カマド (1:30)

4号住居跡（第59～61図、第25表、図版8・9・22）

A区の北東側に位置する。各所に耕作による攪乱を受けている。南側が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向531cm、南北方向323cm以上の隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-53°-Wを示す。壁は緩傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は33cmを測る。床面はIV層中に形成されていた。おおむね平坦である。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅13cm、深さ6cmを測り、確認部を全周する。住居内から3個のピットが検出された。このうち、北東側と北西側の対になる2個が本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径32cm、深さ55cmを測る。カマドは北西壁中央に位置するが、煙道部は削平されている。袖部は黄白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は65cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。覆土中から床下にかけて縄文土器36片、須恵器3片、土師器311片、土製品3点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して7世紀前半の所産であった可能性が高い。



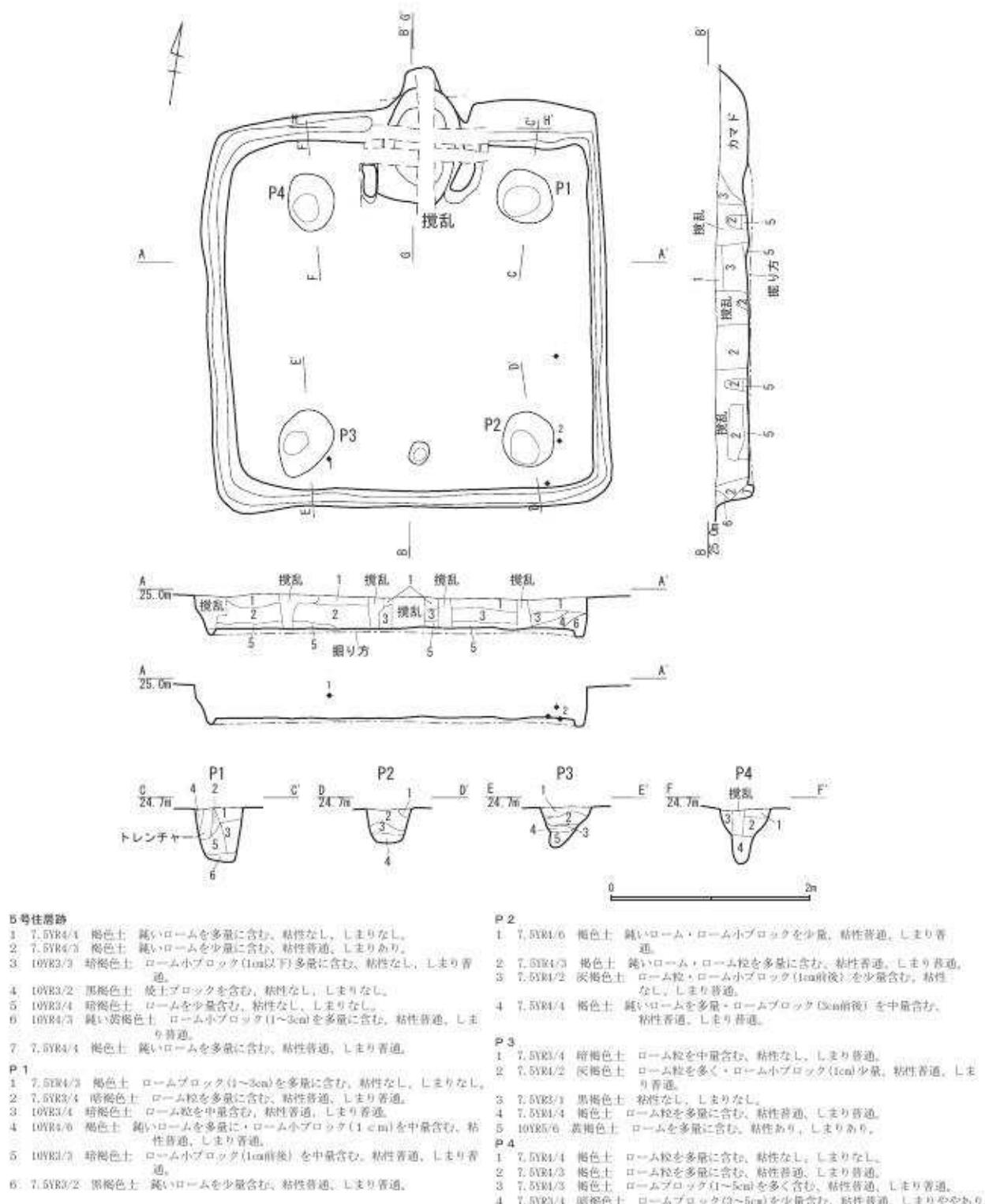
第61図 4号住居跡出土遺物

第25表 4号住居跡出土遺物観察表

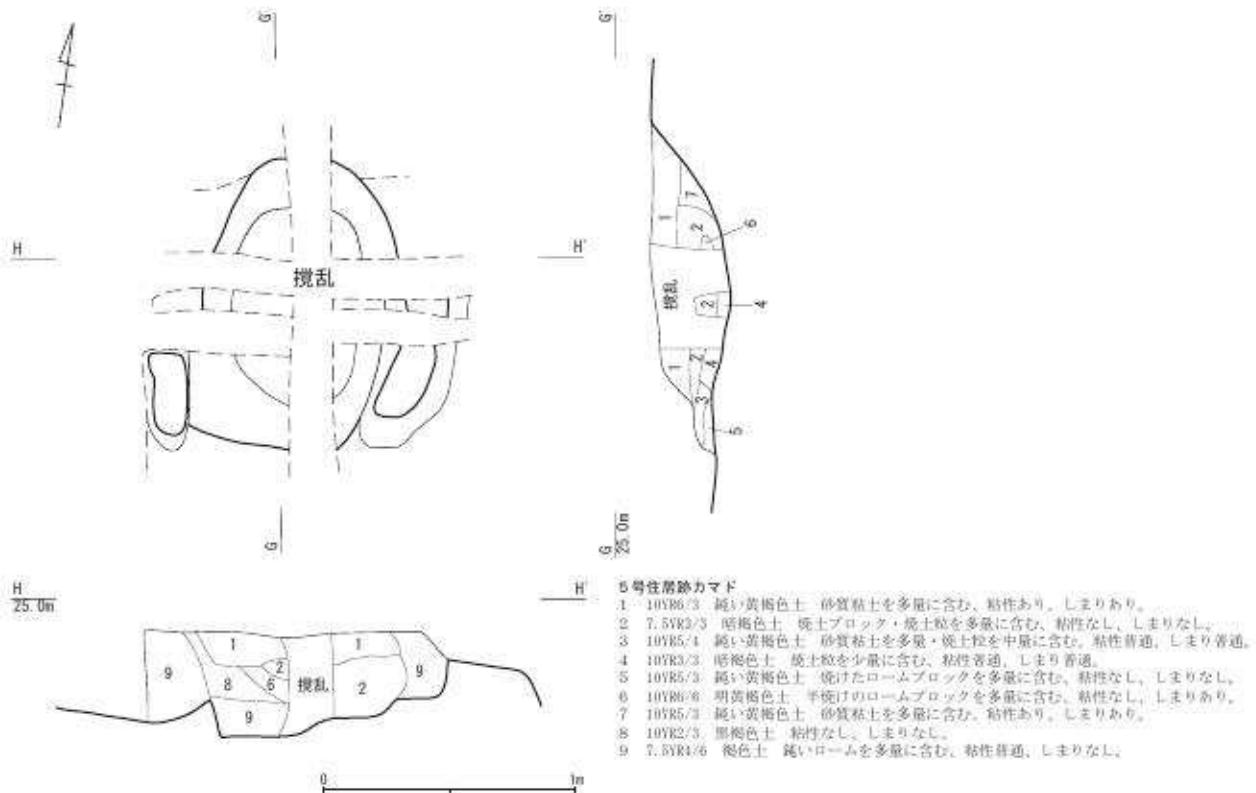
番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土 層位	備考
1	土師器 环	13.2	-	4.5	-	丸底の須恵器模倣环。口縁部は内傾して、体部はふくらみをもつ。口縁部下端に明瞭な棱をもつ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面多方向のヘラケズリ後、弱いナデ。内面ナデ後、単位数不明の放射状暗文。	石英・チャート 少量 雲母多量	鈍い褐色	良好		7c 前
2	土師器 环	(14.4)	-	3.4	-	丸底。口縁部はわずかに内傾して。体部わずかにふくらみをもつ。口縁部下端に棱をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面外方向ヘラケズリ、内面ナデ。	白色粒微量	暗褐色	良好	中層	7c 前
3	土師器 环	(18.8)	-	<5.8>	-	口縁部は内傾して、下端に棱をもたない。体部はふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横線ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。	黒色粒微量 雲母微量	暗褐色	良好		7c 前
4	土師器 环	(12.2)	-	<3.1>	-	須恵器模倣环。口縁部は内傾して、下端で明瞭な棱をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横線ヘラケズリ、内面ナデ。	砂粒微量	明黄褐色	良好	下層	6c 後～ 7c 前
5	土製品 土玉	2.1	孔径 0.6	2.0	18	形状は上下面が面となる球形。上面をヘラケズリで面を造っている。全面をヘラケズリで整形して、ナデで調整。孔は一方向からの焼成前穿孔。	スコリア中量 砂粒微量	明黄褐色	良好	床直	
6	土製品 土鍤	5.5	孔径 1.6	9.7	182	ヘラケズリおよび指頭による整形。軸棒に粘土を巻き付け成形。	砂粒少量 石英・チャート 微量	黒褐色	普通		
7	土製品 土鍤	4.9	孔径 1.5	11.1	172	ヘラケズリおよび指頭による整形。軸棒に粘土を巻き付け成形。	砂粒多量 雲母微量	黒褐色	普通		

5号住居跡（第62～64図、第26表、図版9・23）

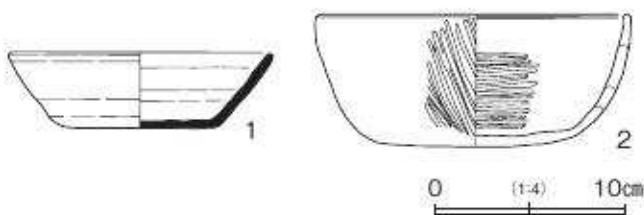
A区の北東側に位置する。北側に1号住居跡が近接して分布する。各所に耕作による攪乱を受けしており、遺存状態は不良である。平面形は東西方向398cm、南北方向408cmの隅丸方形を呈する。主軸方向はN-11°-Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は35cmを測る。褐色土を用いて



第62図 5号住居跡 (1:60)



第63図 5号住居跡カマド (1:30)



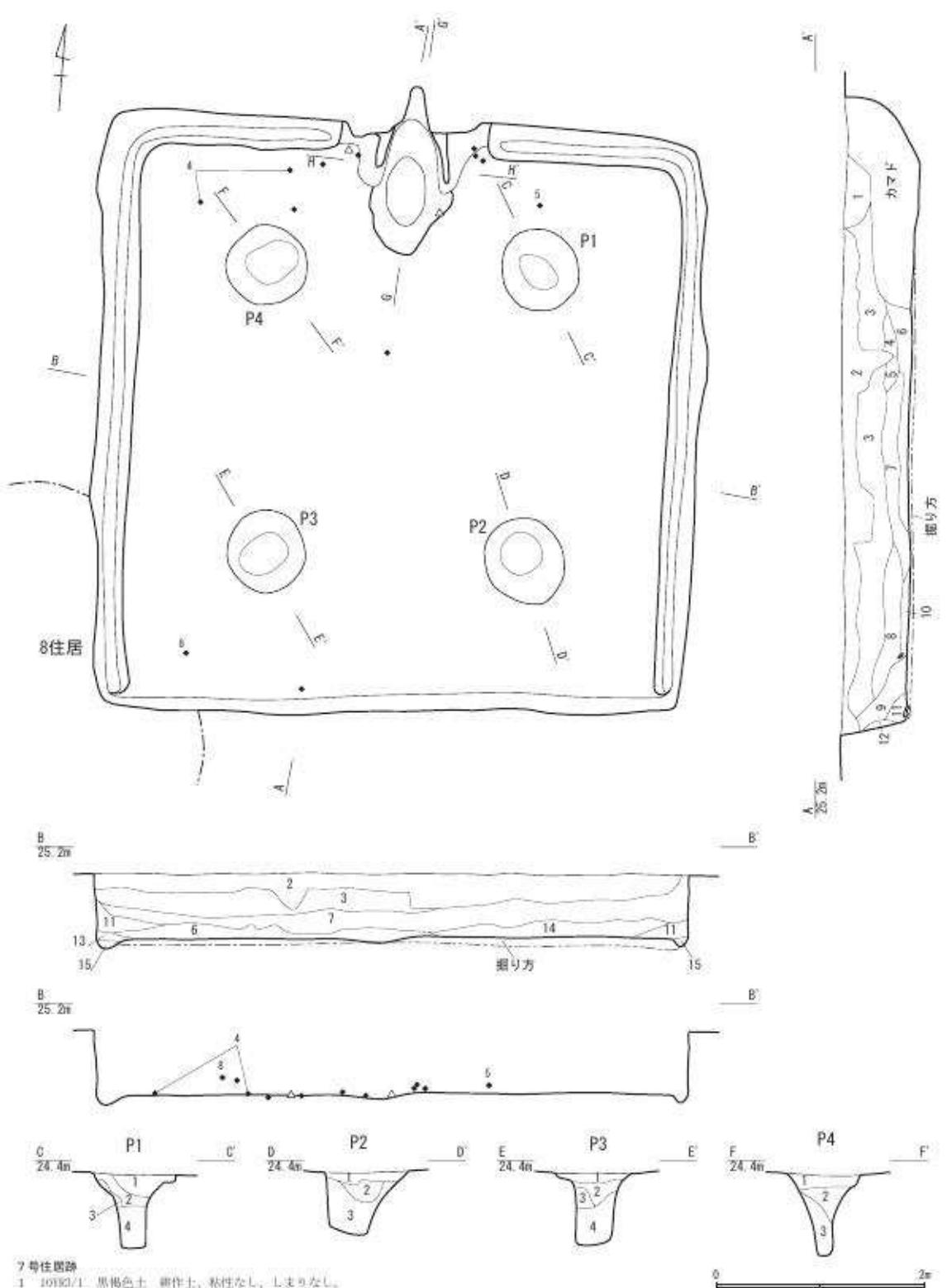
第64図 5号住居跡出土遺物

貼床面が形成されていた。全体に起伏をもつ。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅10cm、深さ8cmを測り、住居内を全周する。住居内から5個のピットが検出された。四隅の対になつた4個が本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径60cm、深さ46cmを測る。南壁中央近くの1個は出入口施設であった可能性

第26表 5号住居跡出土遺物観察表

番号	種類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重さ(g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土層位	備考
1	縁付器 壺	13.9	8.9	3.7	-	口クロ成形。体部はわずかに外反する。口縁部ヨコナデ。体部内外面回転ナデ、外面下端手持ちヘラケズリ。底部切り離し技法不明で、一方向のヘラケズリ、周縁細い手持ちヘラケズリ。	砂粒多量 雲母多量	褐灰色	良好		8c 中 新泊窯跡群 流れ込み
2	土師器 壺	16.4	9.4	6.9	-	平底。口縁部は直立して、体部はふくらみをもつ。口縁部の内面がわずかに肥厚。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横位ヘラケズリ後斜位ミガキ。内面ナデ後、横位ミガキ。底部多方向ヘラケズリ。	石英・長石 中量 雲母多量	暗褐色			7c 前～ 中

が高い。口径23cm、深さ10cmを測る。カマドは長軸線に沿った北壁中央に位置し、壁外に逆U字形に30cmほど突出する。袖部は黄白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は75cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ18cmほどの楕円形に掘り込まれている。掘り方は床下全面に及んでいる。床面からの深さは4～8cmを測る。覆土中から床下にかけて縄文



7号住居跡

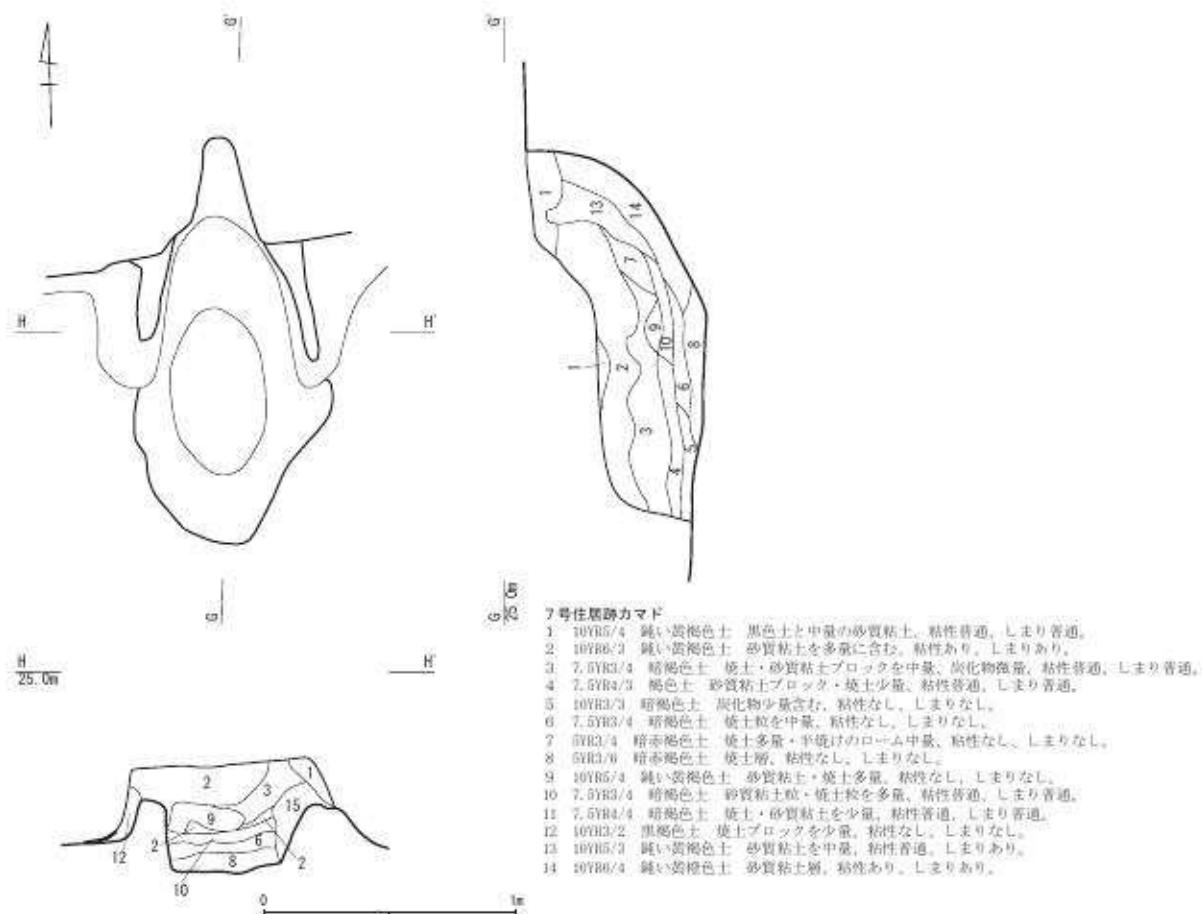
- 1 10YR3/1 黒褐色土 研作土、粘性なし、しまりなし。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 研作土、粘性なし、しまりなし。
- 3 10YR3/3 楊色土 ローム粒・焼土粒を中量、燒土粒少量、粘性なし、しまり普通。
- 4 7.5YR4/3 楊色土 ローム粒・焼土粒を中量、粘性普通、しまり普通。
- 5 7.5YR4/3 楊色土 細質粘土を多量に含む、粘性あり、しまりあり。
- 6 10YR4/4 楊色土 細質粘土を多量・ローム粒・焼土粒中量、粘性あり。しまりあり。
- 7 7.5YR4/2 黑褐色土 ローム粒を中量、粘性普通、しまりあり。
- 8 7.5YR3/3 暗褐色土 ローム粒を少量、粘性普通、しまり普通。
- 9 10YR3/2 黑褐色土 細質粘土を少量含む、粘性普通、しまり普通。
- 10 10YR2/3 黑褐色土 ロームブロック(3cm前後) 少量、粘性普通、しまりあり。
- 11 7.5YR3/2 黑褐色土 ローム粒を少量、粘性なし、しまりなし。
- 12 10YR4/6 楊色土 ロームブロック(3cm前後) 多量、粘性なし、しまりなし。
- 13 10YR4/6 楊色土 細いローム・ロームブロック(3cm前後) 多量、粘性なし、しまりなし。
- 14 7.5YR4/3 楊色土 ローム粒・砂質粘土を中量、粘性普通、しまり普通。
- 15 7.5YR4/2 黑褐色土 ローム粒を少量、粘性なし、しまりなし。

- P 1
- 1 10YR4/3 細い黄褐色土 燃土粒・ローム粒・砂質粘土粒を中量、粘性普通、しまりあり。
 - 2 10YR4/4 楊色土 細いローム・ローム粒多量、粘性普通、しまり普通。
 - 3 10YR4/6 楊色土 ロームブロック(6cm前後) 中量、粘性普通、しまりあり。
 - 4 10YR4/2 黑褐色土 ローム小ブロック(1cm前後) 多量、粘性なし、しまりなし。

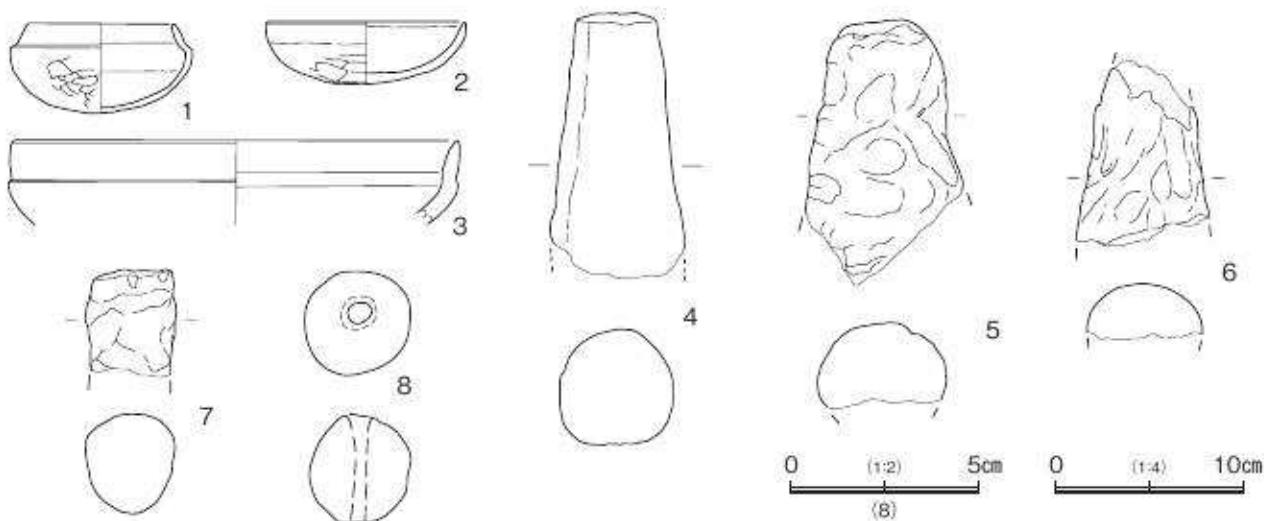
- P 2
- 1 10YR3/4 暗褐色土 燃土粒・炭化物粒を少量、粘性なし、しまりあり。
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 ローム小ブロック(1cm前後) 少量、粘性普通、しまり普通。
 - 3 10YR5/0 暗褐色土 ロームブロック(6cm前後) 多量、粘性なし、しまりなし。
- P 3
- 1 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量・燃土粒微量、粘性なし、しまりなし。
 - 2 10YR3/4 明褐色土 ローム小ブロック(1~2cm前後) 中量、粘性なし、しまりなし。
 - 3 10YR4/3 細い黄褐色土 細いロームを多量、粘性普通、しまり普通。
 - 4 10YR4/6 楊色土 細いロームを多量・ロームブロック(1~3cm) を中量含む、粘性なし、しまりなし。
- P 4
- 1 10YR4/3 細い黄褐色土 砂質粘土粒・燃土粒を中量、粘性普通、しまり普通。
 - 2 10YR4/4 楊色土 ローム粒を多量・燃土粒を少量、粘性普通、しまり普通。
 - 3 10YR4/6 楊色土 ロームブロック(1~3cm) を多量、粘性なし、しまりなし。

第65図 7号住居跡 (1:60)

土器6片、土師器14片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して7世紀前半～中葉の所産であった可能性が高い。



第66図 7号住居跡カマド (1:30)



第67図 7号住居跡出土遺物

第27表 7号住居跡出土遺物観察表

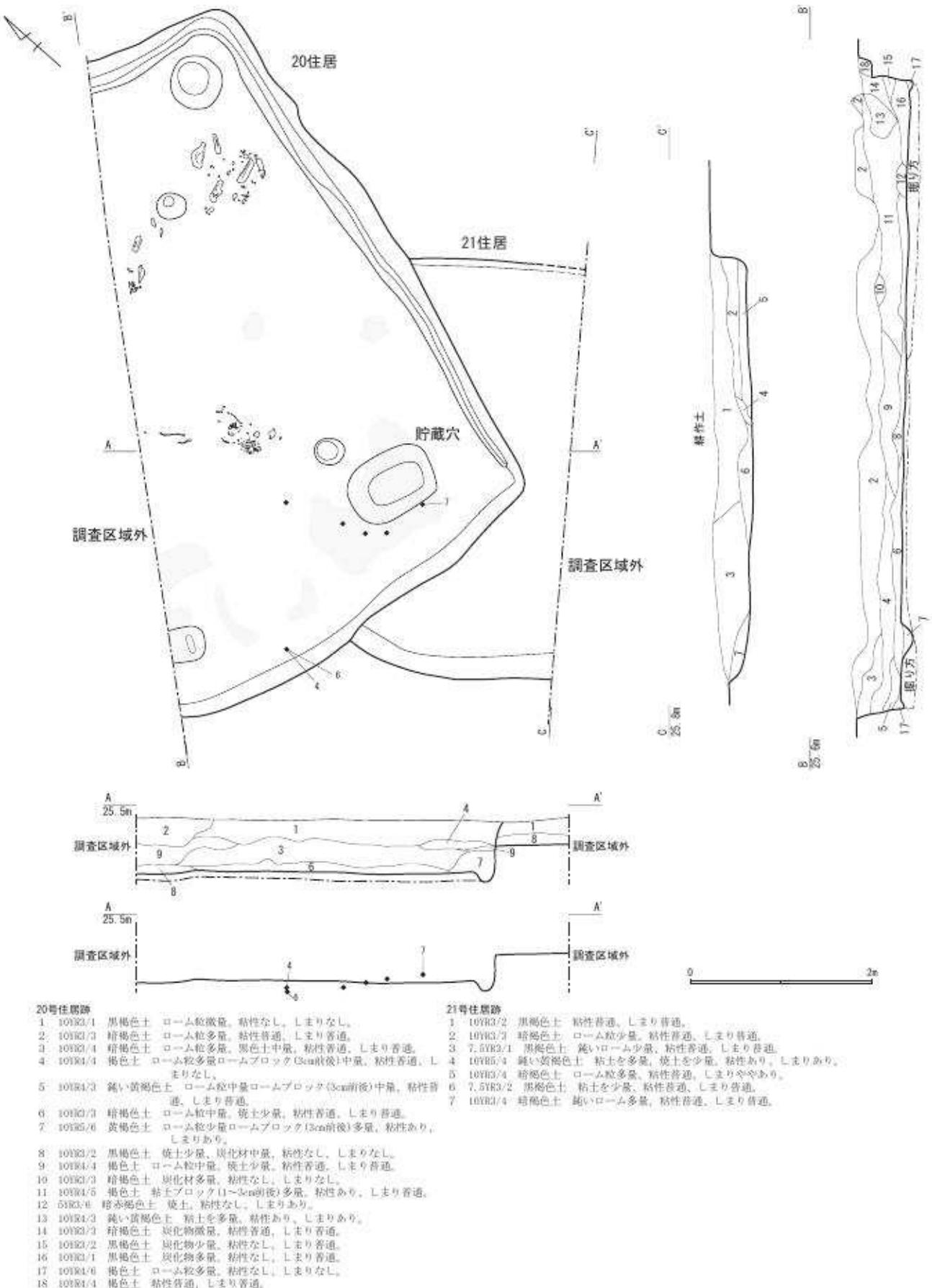
番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土 層位	備考
1	土師器 小型杯	7.7	-	4.8	-	丸底の須恵器模倣。口縁部内傾。下端に明瞭な稜をもつ。体部はふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横位ヘラケズリ後ナデ。内面丁寧なナデ。小型品。	石英・長石 多量 雲母中量	黄褐色	良好	下層	7c 前
2	土師器 壺	10.4	-	3.4	-	丸底。口縁部は直線的に立ち上がり。下端に稜をもたない。体部は丸味をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横位ヘラケズリ後ナデ。内面丁寧なナデ。体部外面にスス付着。	石英・長石 多量 雲母中量	明褐色	良好	カマド	7c 前
3	土師器 壺	(23.2)	-	<4.5>	-	須恵器模倣壺。底部形状は不明。口縁部ほぼ直線的に立ち上がり。下端に明瞭な稜をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横位ヘラケズリ後ナデ。内面丁寧なナデ。大型品。	白色粒・赤色 粒少量 雲母中量	赤褐色	良好	カマド	6c 後～ 7c 前
4	土製品 支脚	4.3	6.7	<14.3>	540	端部欠損。断面形は丸みを帯びた台形に近い。全面をヘラケズリで整形して、ナデで調整。	白色粒多量 砂粒少量 雲母微量	黄褐色	普通		
5	土製品 支脚	5	(8.5)	<13.3>	389	端部欠損。断面形はほぼ円形である。全面をヘラケズリで整形して、ナデで調整。	砂粒多量	黄褐色	不良		
6	土製品 支脚	<5.6>	<7.5>	<9.5>	219	先端部と下部・体部は欠損。全面をヘラケズリで整形して、ナデで調整。	白色粒中量 スコリア多量 雲母微量	黄褐色	普通	覆土	
7	土製品 支脚	5	-	<5.6>	142	断面形が指円形に近い。全面をヘラケズリで整形して、ナデで調整。	白色粒・スコ ア少量 雲母微量	灰褐色	良好	カマド	
8	土製品 土玉	2.7	孔径 0.4	2.8	21	形状は球形。焼成前に一方向から穿孔。全面をヘラケズリで整形し、ナデで調整。	白色粒・砂粒 中量	鈍い 黄褐色	良好		

7号住居跡（第65～67図、第27表、図版9・23）

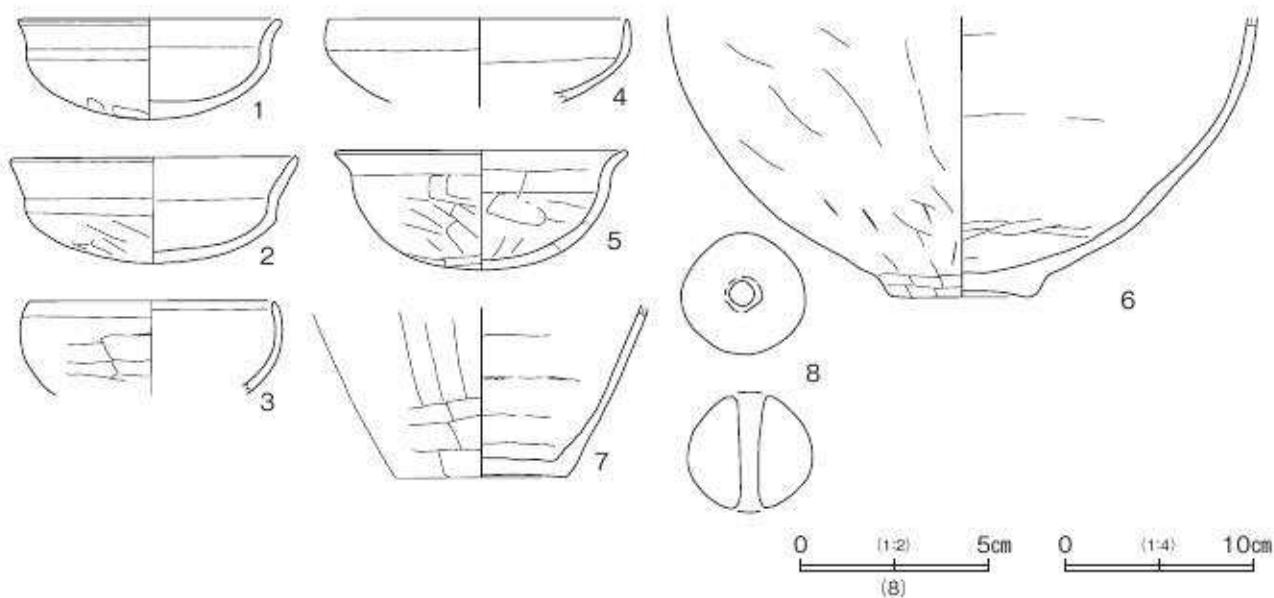
A区の北東側に位置する。西側に6号住居跡が近接して分布する。西側で縄文時代の8号住居跡を切る。各所に耕作による攪乱を受けている。平面形は東西方向578cm、南北方向570cmの隅丸方形を呈する。主軸方向はN-2°-Wを示す。壁は垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は66cmを測る。褐色土を用いて貼床面が形成されていた。全体に起伏をもつ。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅20cm、深さ12cmを測り、南側を除いてほぼ全周する。住居内から4個のピットが検出された。四隅に位置しており、本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径80cm、深さ71cmを測る。カマドは短軸線に沿った北壁中央に位置し、壁外に逆U字形に40cmほど突出する。袖部は黄白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は55cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ20cmほどの楕円形に掘り込まれている。掘り方は床下全面に及んでいる。床面からの深さは5～8cmを測る。覆土中から床下にかけて縄文土器108片、須恵器14片、土師器428片、土製品5点、石製品15点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して6世紀後半～7世紀前半の所産であった可能性が高い。切り合ひ関係をみると8号住居跡に後続する。

20号住居跡（第68・69図、第28表、図版9・23）

A区の南西側に位置する。南東側で21号住居跡を切る。各所に耕作による攪乱を受けている。北西側が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向453cm以上、南北方向678cmの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-17°-Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は58cmを測る。褐色土を用いて貼床面が形成されていた。おおむね平坦である。床面の広い範囲にわたって焼土や炭化材が分布しており、本住居は焼失住居であった可能性が高い。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅20cm、深さ8cmを測り、南西側を除いて確認部をほぼ全周する。住居内から5個のピットが検出された。北東側と南東側の対になる2個が本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径31cm、深さ21cmを測る。カマドの位置は不明である。北東隅には貯蔵穴状の土坑がみられる。長径60cm、深さ39cmの略円形を呈し、断面は筒状



第68図 20・21号住居跡 (1:60)



第69図 20号住居跡出土遺物

第28表 20号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土層位	備考
1	土師器 壺	13.6	—	5.4	—	丸底の須恵器模倣壺。口縁部大きく外反。体部はややふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面多方向のヘラケズリ後ナデ。内面丁寧なナデ。	砂粒・スコリア少量 雲母微量	赤褐色 ～黒褐色	良好		7c 中
2	土師器 壺	15.0	—	5.6	—	丸底の須恵器模倣壺。体部はふくらみをもつ。口縁部は大きく外反する。下端に不明瞭な稜をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面多方向のヘラケズリ後ナデ。内面丁寧なナデ。	小石微量 チャート少量 雲母少量	赤褐色	普通	上層	7c 中～後
3	土師器 壺	12.9	—	<5.0>	—	体部ふくらみをもち、口縁部は内傾する。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横位ヘラケズリ後弱いナデ。内面丁寧なナデ。	白色粒少量 スコリア多量 雲母微量	明褐色	良好	下層	7c 前～中
4	土師器 壺	15.7	—	<4.4>	—	体部ふくらみをもち、口縁部はわずかに内傾する。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横位ヘラケズリ後ナデ。内面丁寧なナデ。	砂粒多量 雲母微量	明黄褐色	良好		7c 中～後
5	土師器 壺	15.2	—	6.3	—	丸底の須恵器模倣壺。口縁部大きく外反、下端は稜をもたない。体部はふくらみをもつ。体部外面横位ヘラケズリ後ナデ。内面丁寧なナデ。内外面に黒斑。	砂粒多量 雲母中量	明褐色	良好	貯蔵穴	7c 中～後
6	土師器 壺	—	7.5	<15.1>	—	胴部が大きくふくらみ、底部が突出する形状。胴部外面縦位ヘラケズリ後ナデ、下位ミガキ様の縦位ヘラケズリ。内面ヘラナデ後ナデ。底部多方向のヘラケズリ調整。	白色粒・スコリア中量 雲母少量	暗褐色	良好		7～8c
7	土師器 甕	—	9.1	<9.0>	—	常緑型甕か。胴部は直線的に外傾。胴部外面縦位ヘラケズリ、下端横位ヘラケズリ。内面ナデ、底部ヘラケズリ、丁寧なナデ。最大径は不明。	白色粒・スコリア中量 雲母少量	黒褐色	良好	下層	
8	土製品 土玉	径3.3	孔径 0.7	3.1	33	ほぼ球形、孔は直線的に棒状の工具で穿たれ、出口で粘土が詰られる。全面をヘラケズリで整形し、ナデで調整をしている。表面赤彩か。	砂粒多量	明黄褐色	良好		

に近い。掘り方は床下全面に及んでいる。床面からの深さは4～13cmを測る。覆土中から床下にかけて縄文土器44片、弥生土器44片、須恵器10片、土師器524片、土製品1点、石製品3点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して7世紀前半の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると21号住居跡に後続する。

21号住居跡（第68図、図版10）

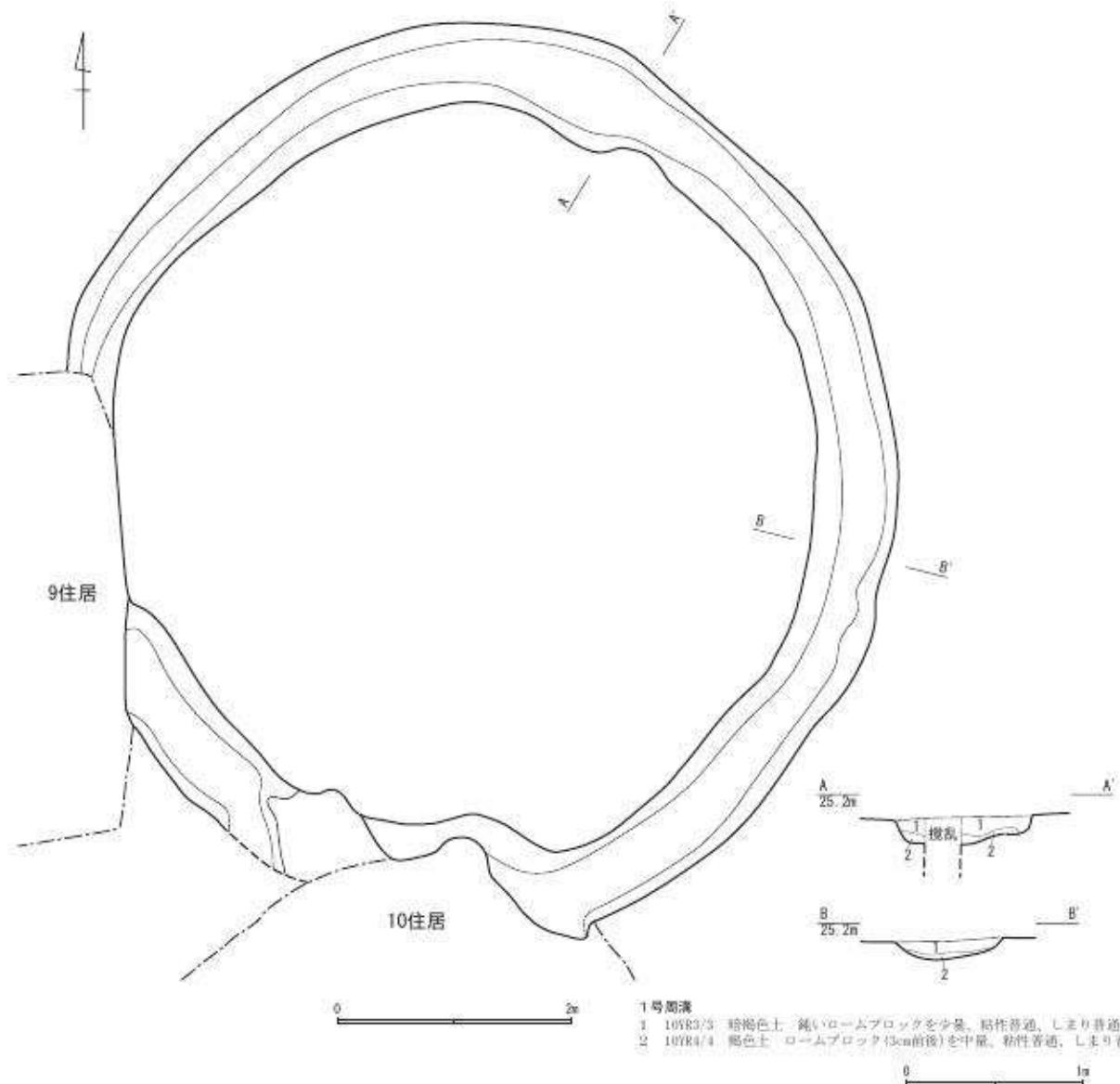
A区の南西側に位置する。北側を20号住居跡に切られる。各所に耕作による攪乱を受けている。南東側の一部が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向455cm、南北方向222cm以上の隅丸方形を呈するものと

思われる。主軸方向は不明である。壁は急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は38cmを測る。床面はIV層中に形成されていた。全体に起伏をもつ。周溝やピットは認められなかった。カマドの位置は不明である。覆土中から床面にかけて縄文土器8片、弥生土器12片、須恵器1片、土師器95片、石製品2点が出土したが、細片のため、図示するまでには至らなかった。覆土や住居の形状などから判断して古墳時代の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると20号住居跡に先行する。

5-2 円形周溝状遺構

1号円形周溝状遺構（第70図、図版10）

A区中央部の北東側に位置する。南側で縄文時代の10号住居跡を切り、西側を奈良時代の9号住居跡に切られる。各所に耕作による攪乱や削平を受けており、遺存状態は不良である。東西径7.2m、南北径7.7

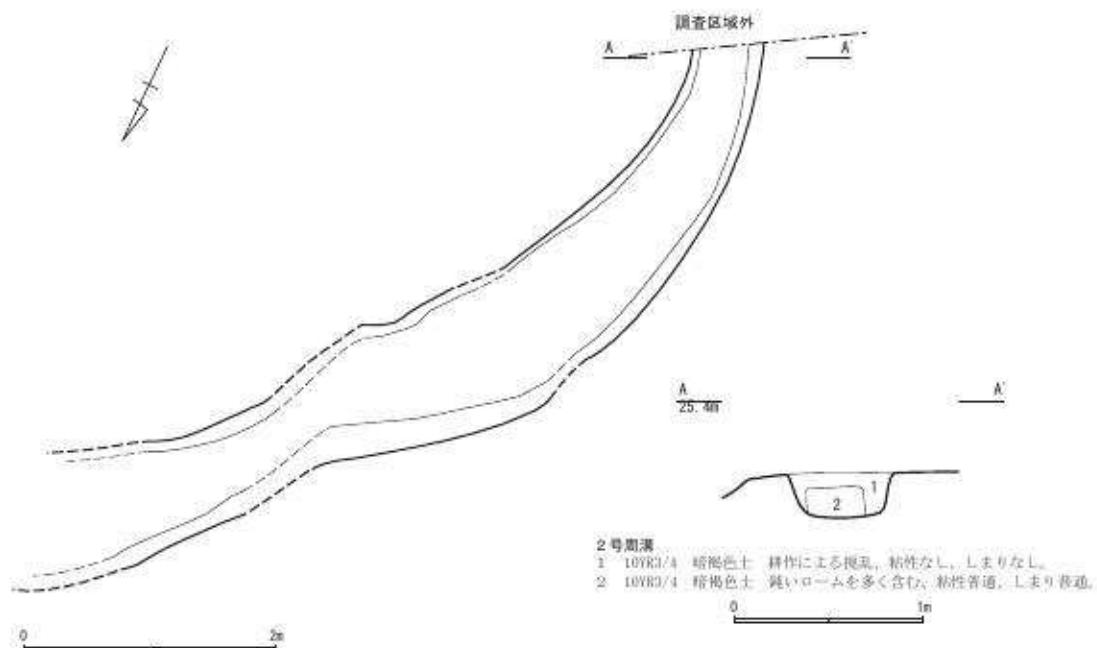


第70図 1号円形周溝状遺構 (1:60, 1:40)

mの略円形の周溝であり、周溝の上幅48～92cm、底幅15～62cm、深さ12～17cmを測る。断面はU字状に近いが、上面を削平されているため、本来の規模や形状は不明である。底面は全体に起伏をもつ。付属施設や遺物の出土は認められなかった。遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古墳時代後期の所産であった可能性が強い。切り合い関係をみると9号住居跡に先行し、10号住居跡に後続する。

2号円形周溝状遺構（第71図、図版10）

A区中央部の南西側に位置する。各所に搅乱や削平を受けている。特に北東側は搅乱が激しく、全容は不明であるが、直径10mを超える円形周溝状遺構であった可能性が高い。確認部分の全長は7.3m、上幅55～115cm、底幅38～86cm、深さ40cmを測る。断面はU字状を呈する。底面はやや起伏をもつ。流れ込みと思われる縄文土器7片、弥生土器2片、須恵器2片、土師器13片が出土している。遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古墳時代後期の所産であった可能性が高い。



第71図 2号円形周溝状遺構（1:60、1:40）

5-3 遺物

奈良・平安時代に次いで多くの遺物が出土している。内訳は、土師器・壺、塹、鉢、壺、小型壺、甕、瓶、土製支脚、土玉などである。当該期のものと思われる須恵器や石製品などは出土していない。（渡邊）

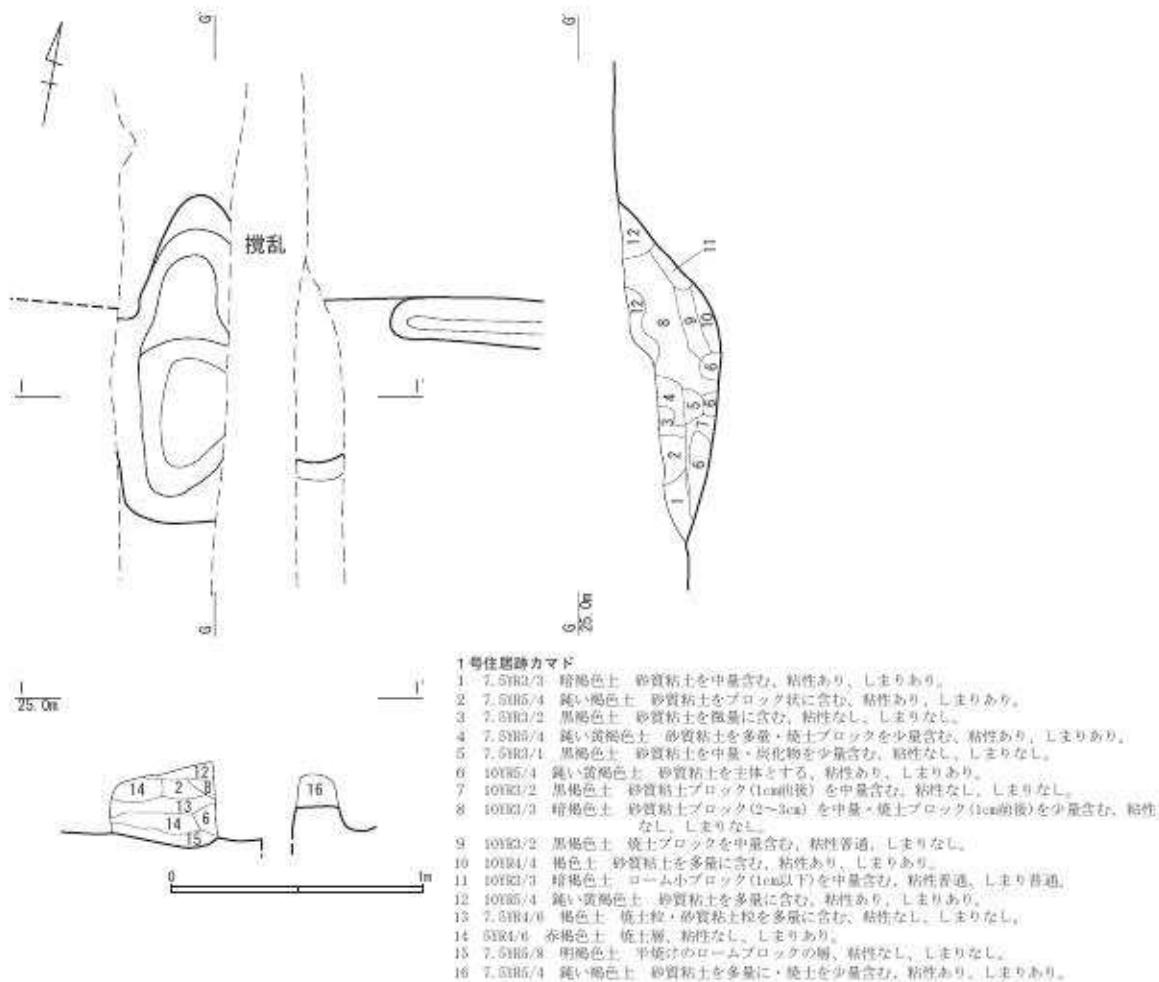
第6章 奈良・平安時代

住居跡 13軒が検出されている。耕作による搅乱や削平が著しく、遺存状態は良好とはいえないが、A区の北東側を中心に調査地点のほぼ全域にわたって分布している。カマドの位置は、北側が9軒、不明5軒という構成を示しており、年代による偏りはみられない。

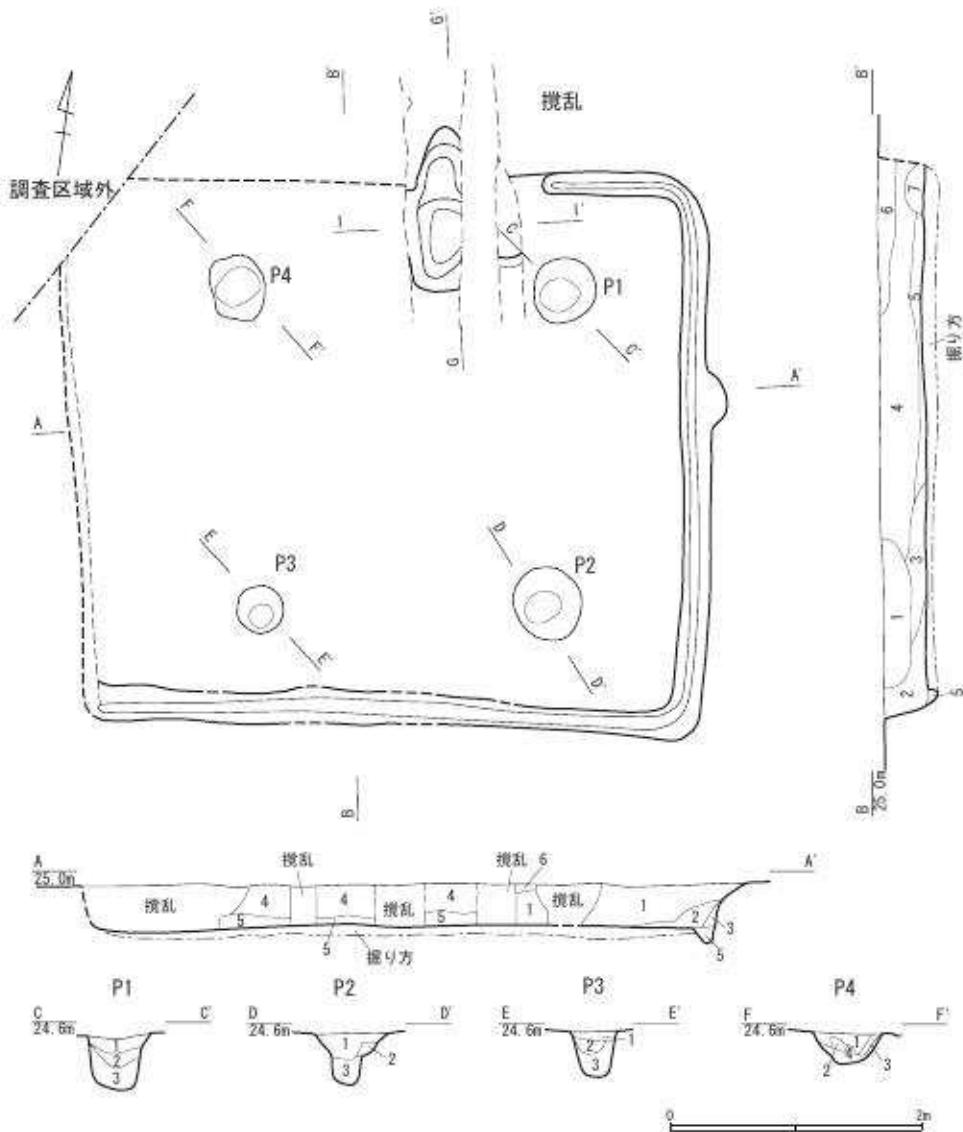
6-1 住居跡

1号住居跡（第72～74図、第29表、図版10・23）

A区の北東側に位置する。南東側に2号住居跡、南側に5号住居跡がそれぞれ近接して分布する。各所に耕作による搅乱を受けており、遺存状態は不良である。北西側の一部が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向498cm、南北方向446cmの隅丸方形を呈する。主軸方向はN-8°-Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は38cmを測る。褐色土を用いて貼床面が形成されていた。全体に起伏をもつ。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅20cm、深さ9cmを測り、確認部をほぼ全周する。住居内から4個のピットが検出された。四隅に位置しており、本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径48cm、



第72図 1号住居跡カマド (1-30)



1号住居跡

1 10YR3/0 黄褐色土 ローム粒多量・ロームブロック [3cm] 少量、燒土粒少量含む。粘性なし。しまり普通。

2 10YR2/4 稲褐色土 ローム粒中量・焼土・ローム少量。粘性普通。しまり普通。

3 10YR4/3 黄褐色土 ローム粒多量・ローム小ブロック [1cm] 中量、燒土粒少量含む。粘性普通。しまり平やかあり。

4 10YR4/3 稲い黄褐色土 ローム小ブロック [1~2cm] ローム粒中量、燒土粒少量含む。粘性普通。しまり普通。

5 10YR3/2 黑褐色土 ローム粒・ロームブロック微量に含む。粘性普通。しまり普通。

6 10YR2/1 黑褐色土 単一層、粘性なし。しまりなし。

7 10YR3/2黑褐色土 磷質粘土を多量含む〔カマド下部の段階〕、粘性あり。しまりあり。

P1

1 10YR3/4 稲褐色土 ローム小ブロック [1cm以下] 中量含む。粘性普通。しまり普通。

2 10YR4/3 稲い黄褐色土 ローム粒を中量含む。粘性普通。しまりあり。

3 10YR3/2 黄褐色土 稲いロームを少量含む。粘性あり。しまりあり。

P2

1 10YR3/2 黒褐色土 ローム小ブロック [1cm以下] を中量含む。粘性なし。しまりなし。

2 10YR4/3 稲い黄褐色土 ロームブロック [1~3cm] を多量含む。粘性なし。しまり普通。

3 10YR3/4 黑褐色土 ロームブロック [1cm前後] を中量含む。粘性なし。しまり普通。

P3

1 10YR3/4 稲褐色土 ローム粒を中量含む。粘性普通。しまり普通。

2 10YR3/4 稲褐色土 稲いローム・ローム粒を中量含む。粘性なし。しまり普通。

3 10YR3/3 黑褐色土 稲いロームを少量含む。粘性普通。しまり普通。

P4

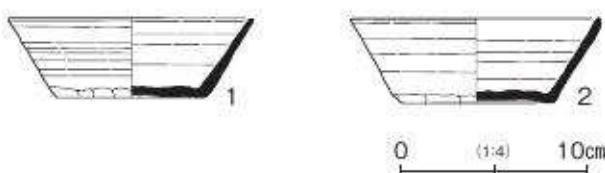
1 10YR3/4 稲褐色土 ローム小ブロック [1cm以下] を中量含む。粘性なし。しまり普通。

2 10YR3/3 黑褐色土 稲いロームを少量含む。粘性なし。しまりなし。

3 10YR3/4 稲褐色土 ローム小ブロック [1cm以下] を微量含む。粘性なし。しまりなし。

4 10YR4/6 黄褐色土 稲いロームをブロック状に多量含む。粘性普通。しまり普通。

第73図 1号住居跡 (1:60)

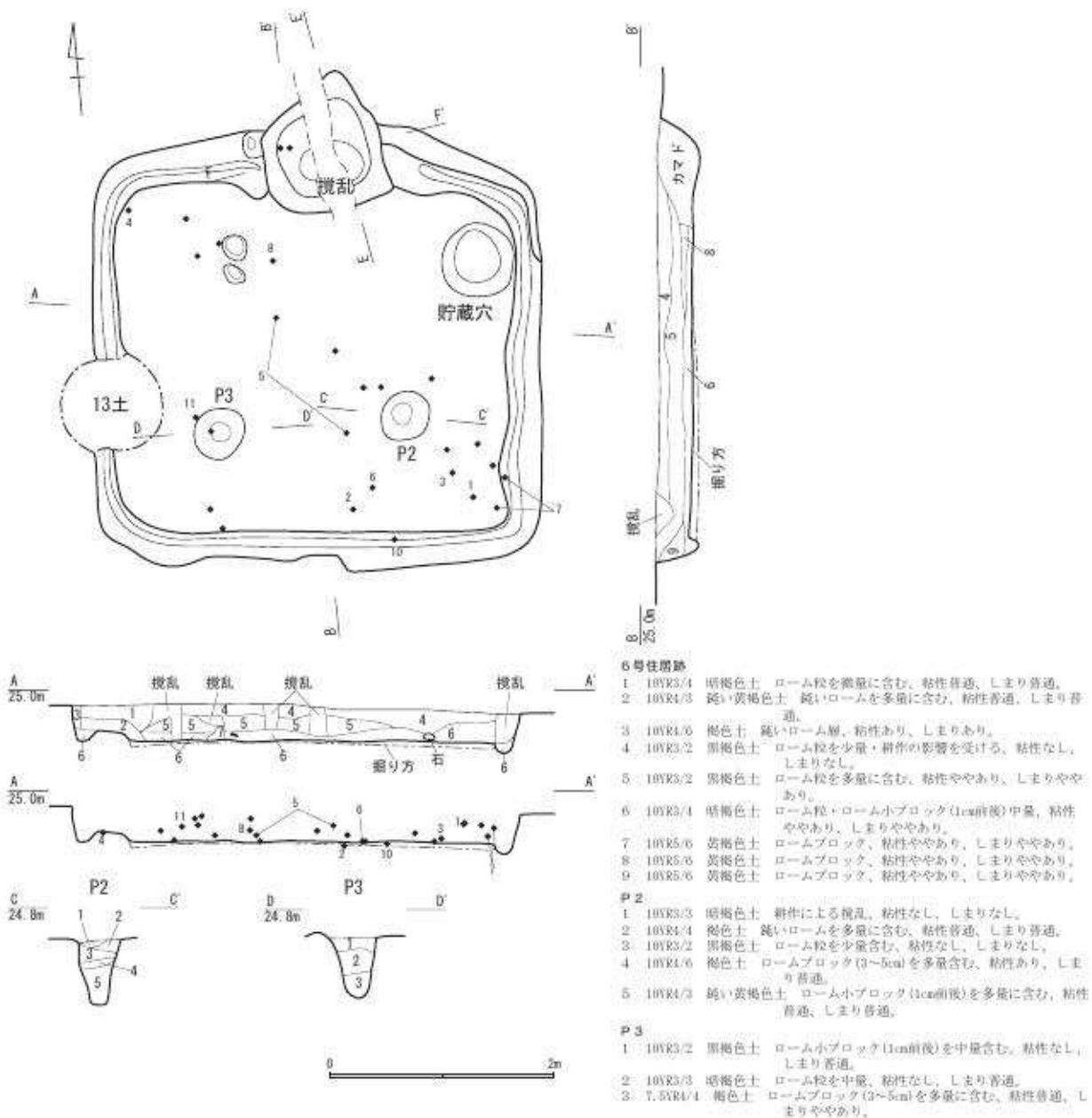


第74図 1号住居跡出土遺物

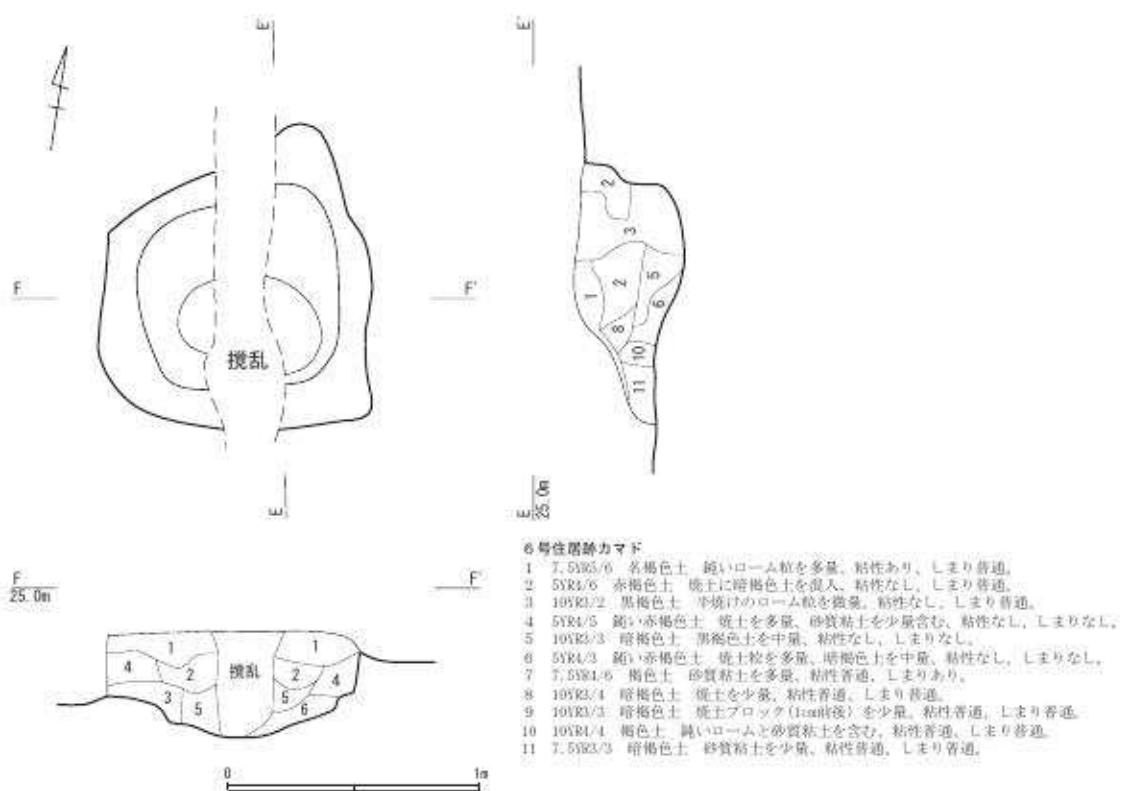
第29表 1号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土 層位	備考
1	須恵器 壺	12.9	8	4.2	-	口クロ成形。体部は直線的に外傾、体部ロクロ目顯著。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。下縁手持ちヘラケズリ。底部外面切り離し技法不明で一方向のヘラケズリ後口縁細いヘラケズリ。	小石少量 白色粒少量 雲母中量	褐色	良好	下層	Sc 後半 新治窯跡 群產
2	須恵器 壺	13.1	8.1	4.5	-	口クロ成形。体部は直線的に外傾、体部ロクロ目顯著。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。下縁細い手持ちヘラケズリ。底部外面左回転ヘラ切り離し後ナデ。	白色小石 多量 雲母中量	褐色	良好	下層	Sc 後半 新治窯跡 群產

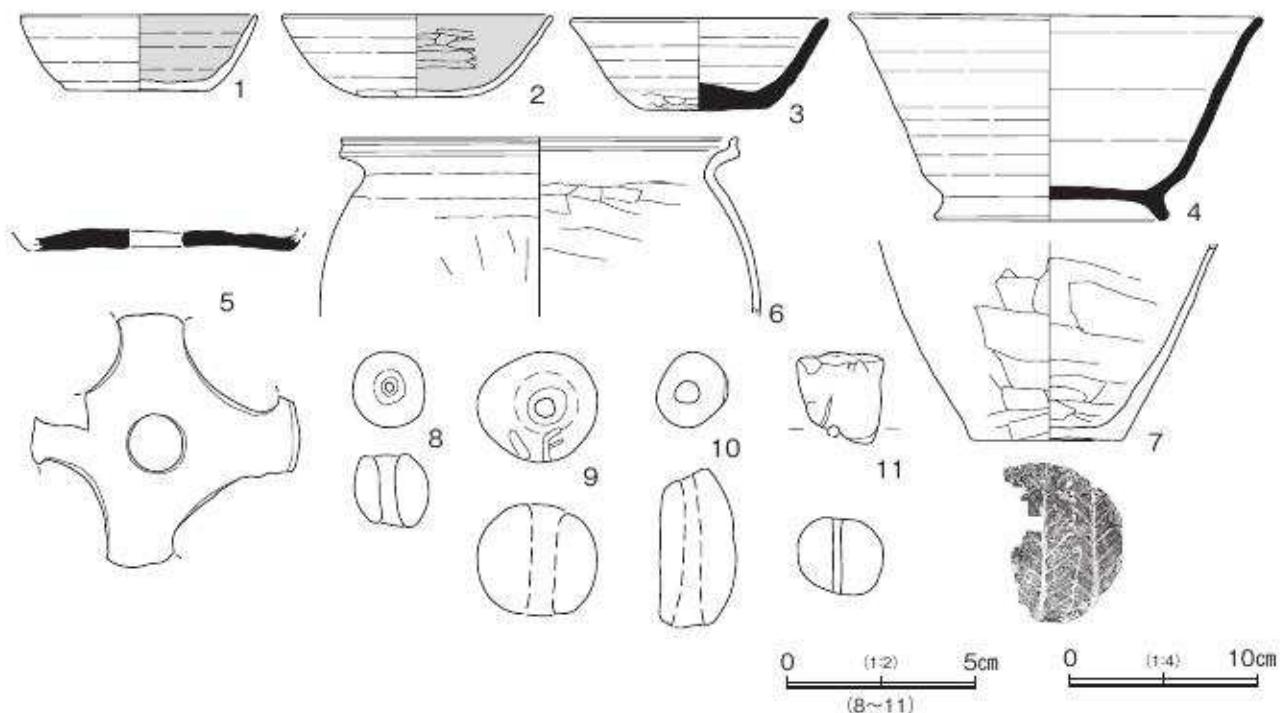
深さ35cmを測る。カマドは短軸線に沿った北壁東寄りに位置し、壁外に逆U字形に50cmほど突出する。袖部は黄白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は約70cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ20cmほどの梢円形に掘り込まれている。掘り方は



第75図 6号住居跡 (1:60)



第76図 6号住居跡カマド (1:30)



第77図 6号住居跡出土遺物

第30表 6号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土 層位	備考
1	土師器 壺	12.4	7.4	4	—	ロクロ成形の内黒坏。体部はわずかにふくらみをもつ。ロクロ目顯著。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ。外面下端手持ちヘラケズリ。底部左回転ヘテ切り離し後、多方向のヘラケズリ。周縁手持ちヘラケズリ。外面スス付着。	白色粒中量 小石少量 雲母少量 白色針状物質 微量	暗褐色	良好		8c 後 搬入品 か。
2	土師器 壺	14.2	6.5	3.9	—	内黒坏。体部はふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面丁寧なナデ、内面横位ヘラミガキ。外面下端手持ちヘラケズリ。底部切り離し技法不明で一方向のヘラケズリ。外面に墨斑あり。	砂粒多量 雲母多量	鍍い 黄褐色	良好		8c 後
3	須恵器 壺	13.3	6.5	4.9	—	ロクロ成形。体部はわずかにふくらみをもち、ロクロ目は顯著。口縁部はわずかに外反する。口縁部内外面ヨコナデ。体部回転ナデ。外面下端手持ちヘラケズリ。底部左回転ヘラ切り離し後、一方向ヘラケズリ。周縁手持ちヘラケズリ。内面器窓の半分位まで黒色付着物。外面黒斑あり。	白色粒・砂粒 多量 雲母少量	黒褐色 — 赤褐色	良好		8c 後 新治窯跡 群産
4	須恵器 高台付鉢	21.6	12.4	10.9	—	胴部は直線的に外傾して、口縁部はわずかに外反する。高台は貼り付けで「ハ」字状に開く。口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面回転ナデ。底部切り離し技法不明で全面を丁寧なナデ。内側を黒色化させている。	石英中量 雲母多量	褐色	良好	カマド	8c ~ 9c 新治窯跡 群産
5	須恵器 壺	—	(14.0)	<1.1>	—	底底部、5孔で中央部が円形で底は半月状にヘラ状工具を用いて穿孔している。底部内面ヘラナデ後ナデ。外面ナデ。周縁ヘラケズリ。孔の粗面は上下より面取りをしている。	石英多量 雲母中量	黄褐色	普通		9c 新治窯跡 群産
6	土師器 甕	(20.8)	—	<9.5>	—	常緑型甕。口唇部を上方に摘まみあげる。胴部はややふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上端横位ヘラケズリ、上位縁位ヘラケズリ後ナデ。内面上端横位ヘラケズリ、上位縁位ヘラナデ後ナデ。最大径は胴部上位。	白色粒多量 雲母少量	明褐色	普通		8c ~ 9c
7	土師器 甕	—	8.0	<10.5>	—	胴部は直線的に外傾。胴部外面横位ヘラケズリ。内面横位ヘラナデ後ナデ。底部2ないし3枚からなる木葉痕。	砂粒中量 チャート微量 雲母微量	暗褐色 鍍い 黄褐色	良好		奈良・平
8	土製品 土玉	2.0	孔径 0.6	2.1	8	形状はやや歪な球形。焼成前に一方向からの穿孔。全面をヘラケズリで整形して、ナデで調整する。	砂粒少量	明黄褐色	良好		
9	土製品 土玉	3.2	孔径 0.6	2.9	20	形状は歪みをもつ球形。焼成前に一方向から穿孔後、粘土をヘラを使って削り取っている。全面をヘラケズリで整形後ナデで調整している。	スコリア多量 白色粒微量	明黄褐色	普通	覆土	
10	土製品 土錘	1.9	孔径 0.5	4.3	15	穢やかに渦曲する形状。孔は焼成前に一方向から直線的に穿孔。全面をヘラケズリで整形して、ナデで調整する。	砂粒多量	明黄褐色	良好		
11	不明土製品	2.317	孔径 (0.4)	(3.2)	11	柱状の土製品。横断面が梢円形、円柱形。円柱の中央部に縦い孔を穿つ。	砂粒中量	明黄褐色	良好	上層	

床下全面に及んでいる。床面からの深さは4~12cmを測る。覆土中から床下にかけて縄文土器31片、須恵器35片、土師器114片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して8世紀後半の所産であった可能性が高い。

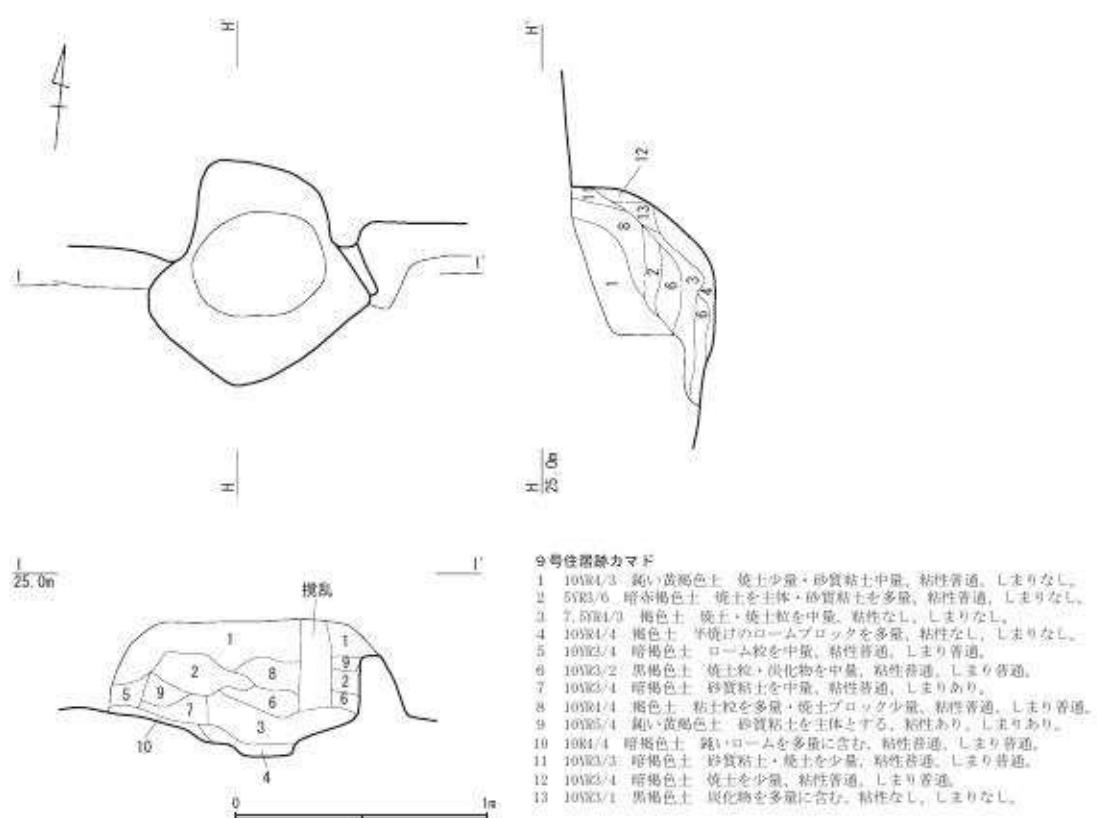
6号住居跡（第75~77図、第30表、図版10・23・24）

A区の北東側に位置する。東側に7号住居跡、北西側に5号住居跡がそれぞれ近接して分布する。西側で13号土坑を切る。各所に耕作による攪乱を受けている。平面形は東西方向397cm、南北方向376cmの隅丸方形を呈する。主軸方向はN-4°-Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は34cmを測る。褐色土を用いて貼床面が形成されていた。おおむね平坦である。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅17cm、深さ8cmを測り、住居内を全周する。住居内から4個のピットが検出された。南東側と南西側の対になる2個が本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径48cm、深さ56cmを測る。カマドは長軸線に沿った北壁中央に位置し、壁外に逆U字形に50cmほど突出する。袖部は残存していない。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ20cmほどの梢円形に掘り込まれている。カマドの右側、南東隅には貯蔵穴状の土坑がみられる。長径66cmの梢円形を呈する。掘り方は床下全面に及んでいる。床面からの深さは3~9cmを測る。覆土中から床下にかけて縄文土器69片、須恵器111片、土師器707片、陶磁器6片、土製品4点、石製品1点が出土した。伴出土器や覆

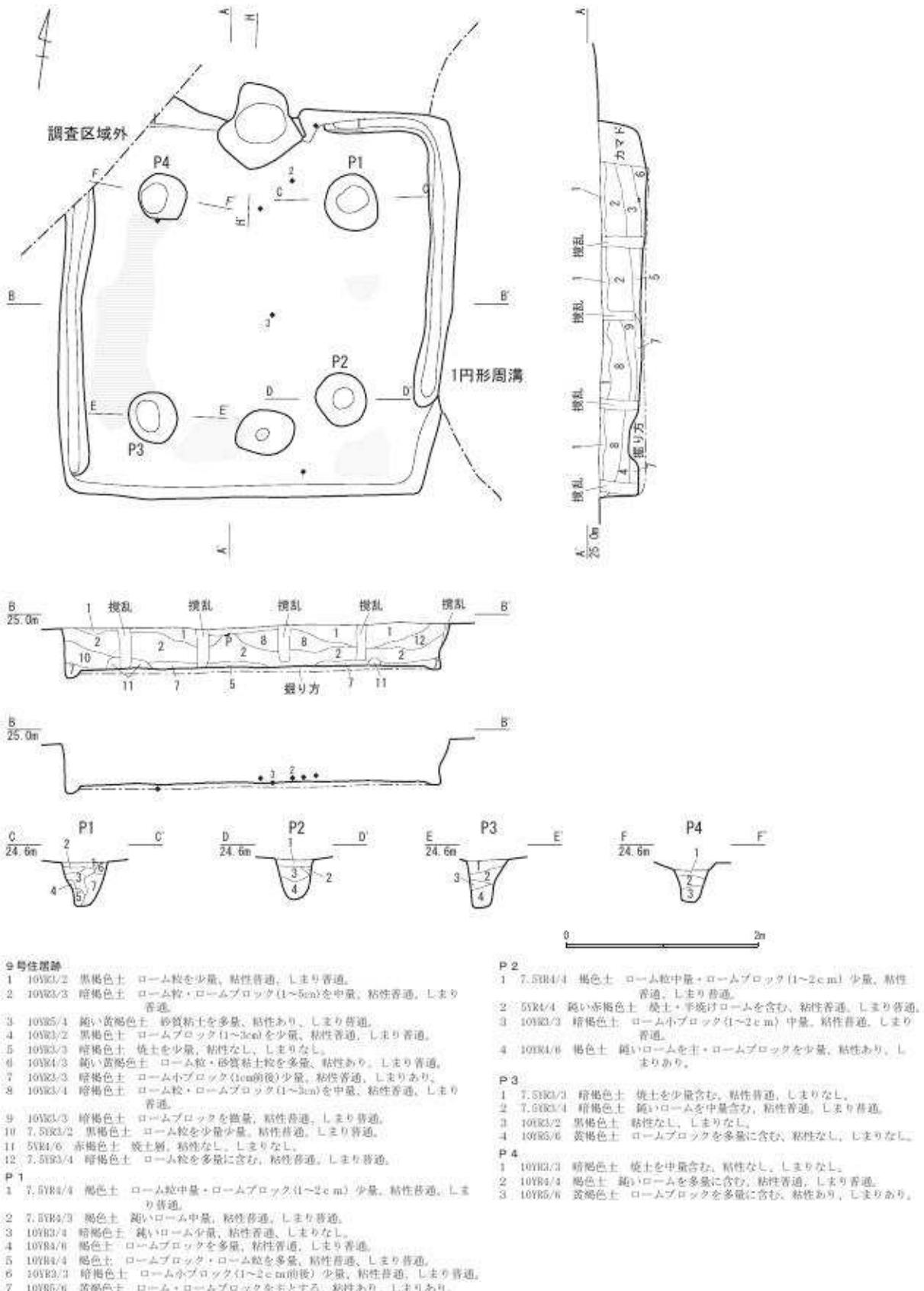
土のあり方などから判断して8世紀後半～9世紀前半の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると13号土坑に後続する。

9号住居跡（第78～80図、第31表、図版11・24）

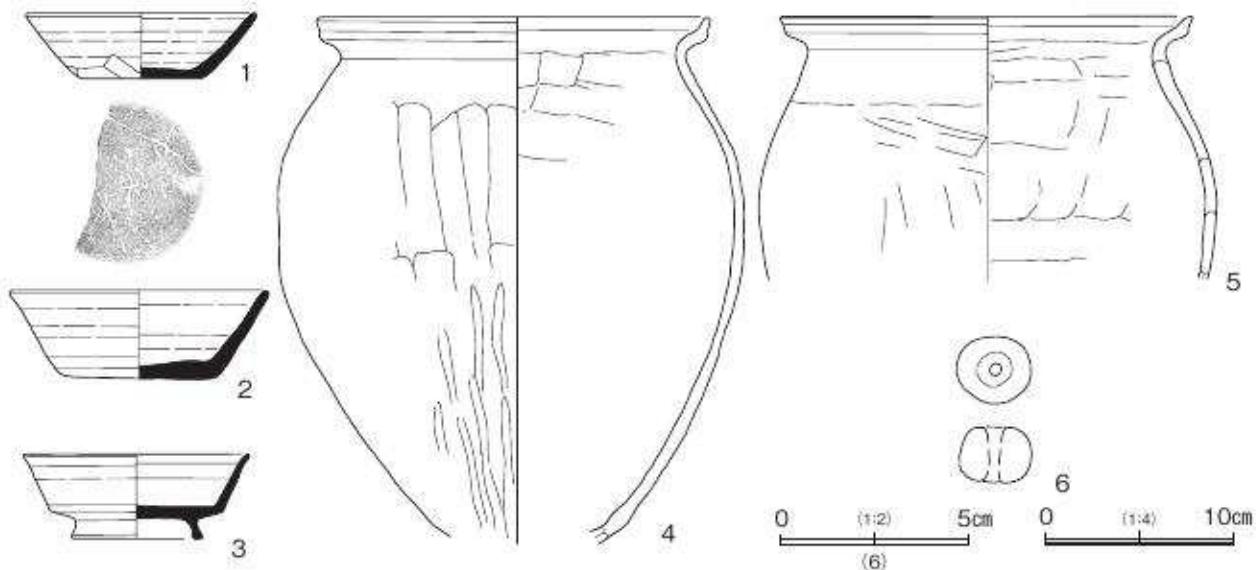
A区の中央部に位置する。東側で1号円形周溝状遺構を切る。各所に耕作による攪乱を受けている。北西側の一部が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向401cm、南北方向396cmの隅丸方形を呈する。主軸方向はN-4°-Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は46cmを測る。褐色土を用いて貼床面が形成されていた。おむね平坦である。床面の広い範囲にわたって焼土が分布しており、本住居は焼失住居であった可能性が高い。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅15cm、深さ8cmを測り、南側を除いて確認部をほぼ全周する。住居内から5個のピットが検出された。四隅の対になつた4個が本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径51cm、深さ34cmを測る。南壁中央近くの1個は出入口施設であった可能性が高い。口径58cm、深さ22cmを測る。カマドは短軸線に沿った北壁中央に位置し、壁外に逆U字形に20cmほど突出する。袖部は白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は約80cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ17cmほどの梢円形に掘り込まれている。掘り方は床下全面に及んでいる。床面からの深さは4～8cmを測る。覆土中から床下にかけて縄文土器29片、須恵器107片、土師器332片、陶器1片、土製品1点、石製品6点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して8世紀後半の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると1号円形周溝状遺構に後続する。



第78図 9号住居跡カマド (1・30)



第79図 9号住居跡 (1:60)



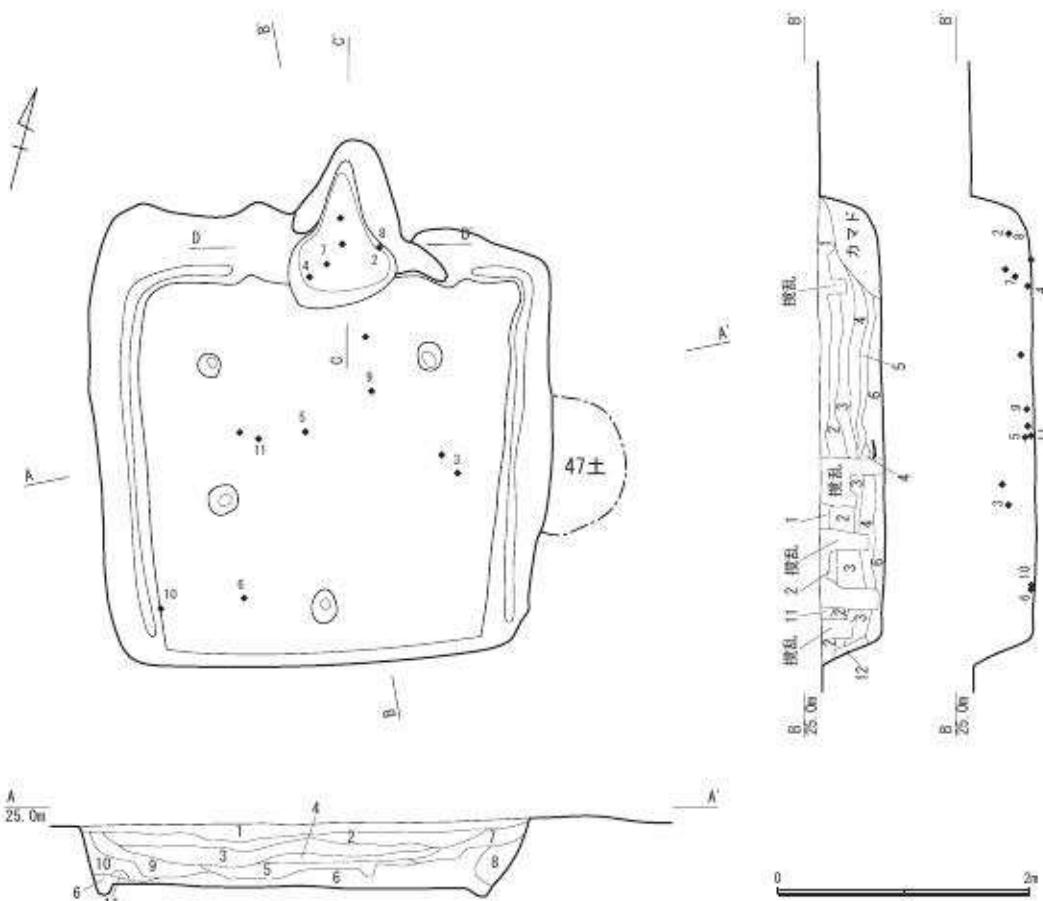
第 80 図 9号住居跡出土遺物

第 31 表 9号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土層位	備考
1	須恵器 环	(12.0)	(6.0)	3.5	—	ロクロ成型。体部は直線的に外傾。ロクロ目顯著。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。外面下端手持ちヘラケズリ。底部切り離し技法不明で一方向のヘラケズリ。底部外面ヘラ記号。	白色粒・石英 多量 雲母中量	褐灰色	良好		8c 後 新治窯跡群 群產
2	須恵器 环	13.5	8.0	4.7	—	ロクロ成型。体部は直線的に外傾。口縁部内外面ヨコナデ。外面下端手持ちヘラケズリ。底部左回転ヘラ切り離し後ナデ。周縁弱いヘラケズリ。	石英・スカリ ア少量 雲母微量	褐灰色	良好		8c 後 新治窯跡群 群產
3	須恵器 高台付环	(11.8)	6.9	4.5	—	ロクロ成型。体部下位で角度を変え直線的に外傾する。口縁部は外反。高台は貼り付けで「ハ」字状に開く。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ、底部左回転ヘラ切り離し後ナデ。	石英・白色粒 中量	褐灰色	良好		8c 後 新治窯跡群 群產
4	土器 甕	20.5	—	<27.9>	—	常総型甕。口唇部を折り返し後、上方向に摘まみあけられる。肩部はややふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上から中位綫位のヘラケズリ。中から下位斜位のヘラミガキ後ナデ。内面綫位ヘラナデ後ナデ。最大径は胴部上位。	白色粒少量 砂粒多量 雲母多量	暗褐色	良好		8c 後～ 9c 前
5	土器 甕	21.6	—	<14.0>	—	常総型甕。口唇部を上方に摘まみあげる。肩部はわずかにふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外斜位ヘラケズリ後丁寧なナデ。中位斜方回ヘラミガキ。内面上位横位ヘラナデ後ナデ。中位横位ヘラナデ後ナデ。最大径は胴部上位。	砂粒多量 雲母多量	明褐色	良好	カマド	8c 後～ 9c 前
6	土製品 土玉	径 20	孔径 0.4	1.5	6	形状は上下面が平面の球形。軸棒に粘土を巻き付けて成形。雑なヘラケズリで整彫後ナデで調整。	スカリ多量 白色粒少量 雲母微量	明褐色	良好	覆土	

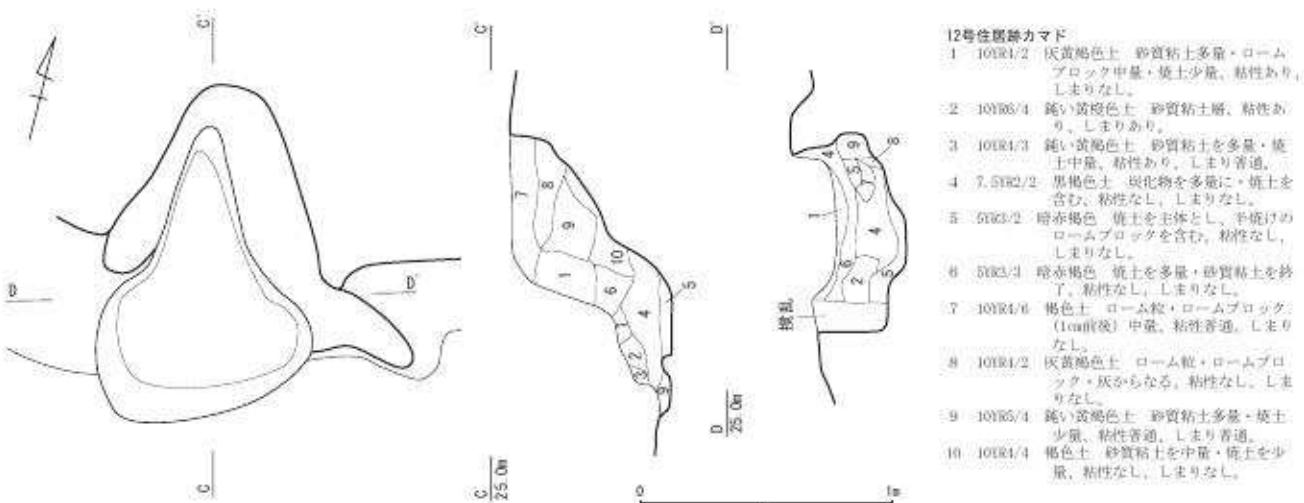
12号住居跡（第 81～83 図、第 32 表、図版 11・24・25）

A 区の中央部に位置する。各所に耕作による攪乱を受けている。平面形は東西方向 363 cm、南北方向 348 cm の隅丸方形を呈する。主軸方向は N - 13° - W を示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は 53 cm を測る。床面は IV 層中に形成されていた。おおむね平坦である。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅 20 cm、深さ 9 cm を測り、南側を除いて住居内をほぼ全周する。住居内から 4 個のピットが検出された。北東側と南西側、北西側の対になる 3 個が本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径 20 cm、深さ 18 cm を測る。南壁中央近くの 1 個は出入口施設であった可能性が高い。口径 26 cm、深さ 13 cm を測る。カマドは短軸線に沿った北壁中央に位置し、壁外に逆 U 字形に 50 cm ほど突出する。袖部は黄白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は 60 cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ 15 cm ほどの梢円形に掘り込まれている。覆土中から床面にかけて縄文土

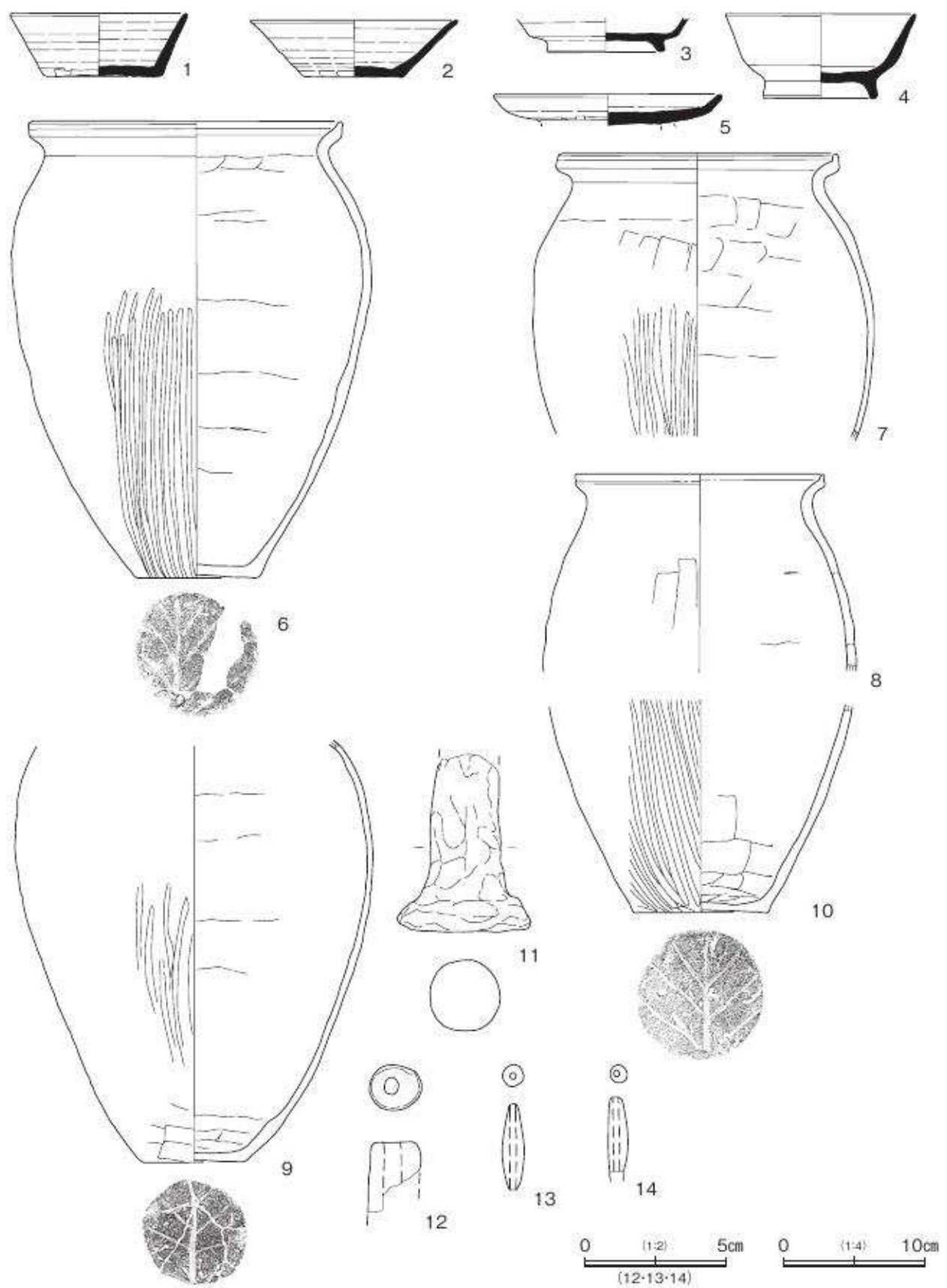


- 12号住居跡
- 1 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒を少量(耕作土?)。粘性普通。しまり普通。
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒を多量、粘性普通。しまり普通。
 - 3 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒を少量、粘性普通。しまり普通。
 - 4 10YR3/2 精褐色土 ローム粒中量・ローム小ブロック(1cm前後)少量、粘性普通。しまり普通。
 - 5 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒を微量、粘性普通。しまりなし。
 - 6 10YR3/4 黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック(1~2cm)中量、粘性普通。しまり普通。
 - 7 10YR3/5 薄い黄褐色土 薄いローム多量、ローム小ブロック(1cm前後) 少量、粘性普通。しまり普通。
 - 8 10YR2/5 黑褐色土 粘土を微量。粘性なし。しまりなし。
 - 9 10YR3/6 黄褐色土 薄いローム多量、粘性普通。しまり普通。
 - 10 10YR3/2 黑褐色土 ローム小ブロック(1~2cm)を少量、粘性普通。しまり普通。
 - 11 10YR5/2 灰黄褐色土 砂質粘土ブロック多量。粘性あり。しまりあり。
 - 12 10YR5/6 黄褐色土 ロームブロック、粘性あり。しまりあり。

第81図 12号住居跡 (1:60)



第82図 12号住居跡カマド (1:30)



第 83 図 12 号住居跡出土遺物

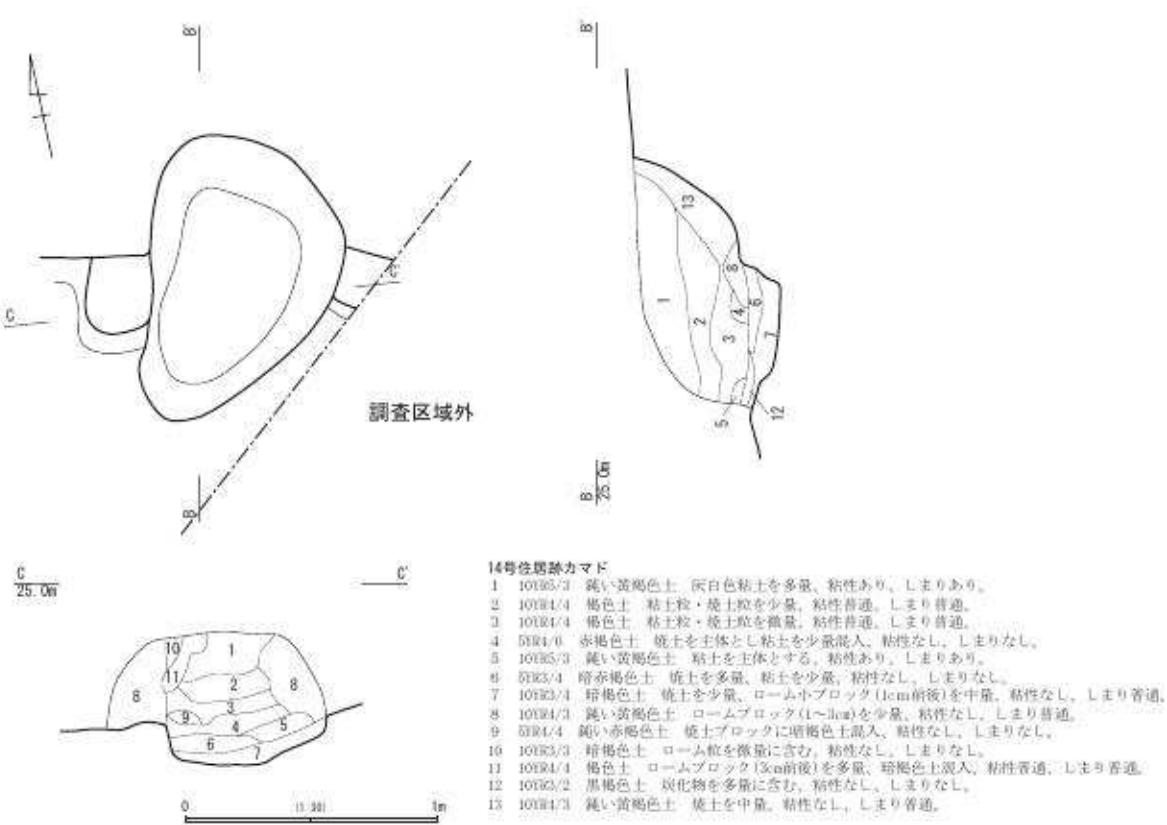
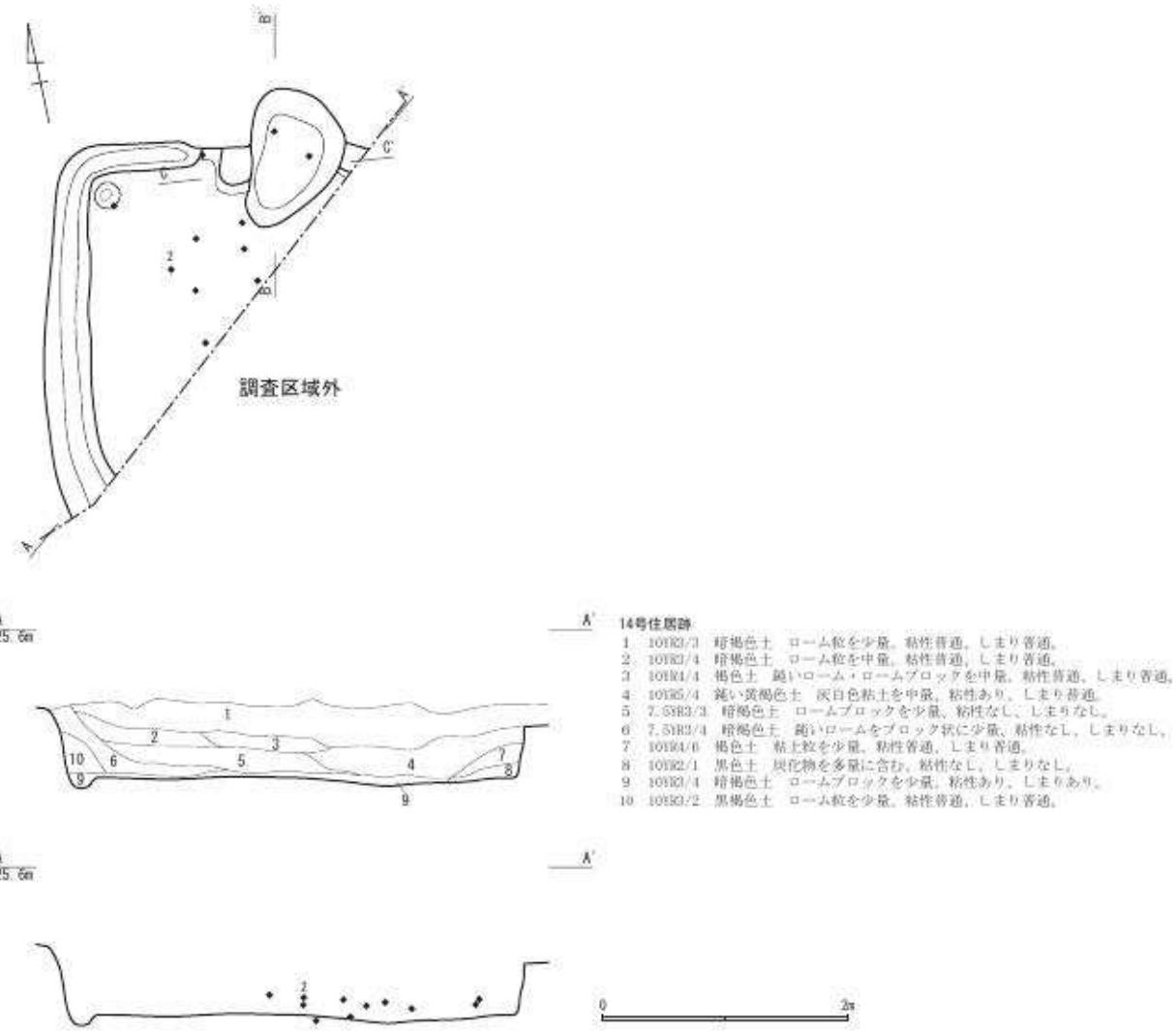
第32表 12号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土 層位	備考
1	須恵器 环	12.3	8.4	4.5	-	ロクロ成形。体部はわずかに外反する。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ。外面下端細い手持ちヘラケズリ。底部左回転ヘラ切り離し後、一方向の弱いヘラケズリ、ナデ、周縁手持ちヘラケズリ。底部周縁4か所に工具痕様のくぼみ。	石英少量 白色粒微量 雲母中量	褐色	良好	中層	8c 中～ 後 木葉下窓 跡群産
2	須恵器 环	14.4	7.0	4.0	-	ロクロ成形。体部は直線的に外傾し、口縁部は外反する。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ。外面下端幅広の手持ちヘラケズリ、底部左回転ヘラ切り離し後弱いヘラケズリ、ナデ、周縁細い手持ちヘラケズリ。体部内面にスス付着。	石英・チャート 中量 小石微量 雲母中量	褐色	良好		9c 前 木葉下窓 跡群産
3	須恵器 高台付环	-	(8.2)	<24>	-	ロクロ成形。体部は角度を変えて直線的に外傾。高台部は貼り付けで「ハ」字状に開く。体部内外面回転ナデ後ナデ、底部左回転ヘラ切り離し後ナデ。黒色突出物付着。	石英少量 雲母中量	褐色	良好		8c 後 木葉下窓 跡群産
4	須恵器 高台付环	13.3	8.0	6.0	-	ロクロ成形。器面の剥離が多い。体部下位で角度を変え直線的に立ち上がる。高台は貼り付けで「ハ」字状に開く。高台高は1.2cm。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面調整不明。底部左回転系切り離し後ナデ。	黑色粒多量 小石少量 雲母中量	明黄褐色	不良		8c 後 新泊窓跡 群産
5	須恵器 高台付盤	15.8	-	<22>	-	ロクロ成形。体部わずかにふくらみをもち、角度を変えて直線的に立ち上がる。高台は貼り付け、口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ、外面下端手持ちヘラケズリ。底部左回転ヘラ切り離し後ナデ。	白色粒多量 石英微量 雲母中量	褐色	良好		8c 後～ 9c 中 木葉下窓 跡群産
6	土師器 甕	21.8	8.6	32.2	-	常輪型甕。口唇部を上方に摘まみあげる。胴部はやや長胴気味。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上から中位、横から斜方向のヘラケズリ後ナデ。下位斜方向へラミガキ後ナデ。内面へラナデ後ナデ。底部木葉痕。最大径は胴部上位。	石英・砂粒 多量 雲母中量	赤褐色	良好	カマド	8c 後～ 9c 前
7	土師器 甕	19.4	-	<20.0>	-	常輪型甕。口唇部を上方に摘まみあげる。胴部はわずかにふくらむ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部上位縫合ヘラケズリ後丁寧なナデ。中から下位斜方向へラミガキ。内面多方向へラナデ後ナデ。最大径は胴部上位。	砂粒多量 雲母多量	褐色	良好	カマド	8c 後～ 9c 前
8	土師器 甕	(12.4)	-	<13.9>	-	常輪型甕。口唇部を上方に摘まみあげる。胴部はふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縫合ヘラケズリ後ナデ。内面横位へラナデ後ナデ。最大径は胴部上から中位。	白色粒多量 砂粒中量 雲母中量	明褐色	不良	カマド	8c 後～ 9c 前
9	土師器 甕	-	7.2	<29.7>	-	常輪型甕。胴部外面中位斜方向へラミガキ後ナデ。下位横位ヘラケズリ。内面へラナデ後ナデ。底部木葉痕。最大径は胴部上位か。胴部に焼成粘土付着。	白色粒中量 砂粒少量 雲母中量	明褐色	良好	下層	8c 後～ 9c 前
10	土師器 甕	-	9.0	<15.0>	-	常輪型甕。胴部は直線的に外傾。胴部外面斜方向へラミガキ。下端横位ヘラケズリ。内面へラナデ後丁寧なナデ。下端へラナデ。底部木葉痕。最大径は不明。	砂粒多量 雲母中量	外黒褐色・内 明褐色	良好		奈良・平
11	土製品 支脚	5	9.8	<12.6>	554	底部が「ハ」の字に開く。基部は円柱状。中実。外面を指頭およびヘラケズリで整形して、ナデで調整する。底部は縫なヘラケズリ後ナデ。基部に粘土状の白色付着物。	砂粒中量	黃褐色	良好		
12	土製品 土錐	径 1.6	孔径 0.6	<27>	7	形状は円柱状。軸棒に粘土を巻き付け成形。全面をヘラケズリで整形後ナデで調整。	砂粒中量	暗褐色	良好	覆土	
13	土製品 土錐	径 0.8	孔径 0.2	2.0	1	両端がすぼまる形状。軸棒に粘土を巻き付け成形。全面をナデで調整。	混入物なし	黃褐色	良好	覆土	
14	土製品 土錐	径 0.7	孔径 0.2	3.1	1	両端がすぼまる形状。軸棒に粘土を巻き付け成形。全面をナデで調整。	混入物なし	黃褐色	良好	覆土	

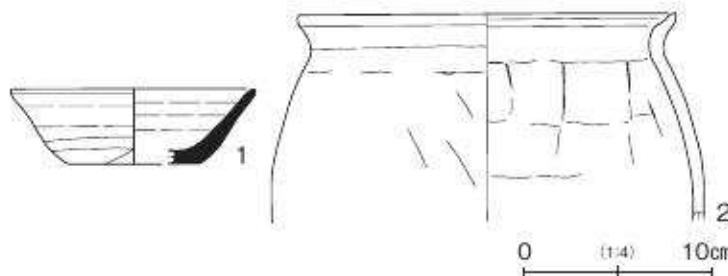
器40片、須恵器82片、土師器247片、土製品4点、石製品5点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して8世紀後半～9世紀前半の所産であった可能性が高い。

14号住居跡(第84～86図、第33表、図版11・25)

A区の北東側に位置する。各所に耕作による攪乱を受けている。南東側が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向201cm以上、南北方向290cm以上の隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-10°-Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は64cmを測る。床面はIV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅18cm、深さ7cmを測り、確認部を全周する。北西隅から1個のピットが検出されたが、口径20cm、深さ10cmと小さく、本住居跡に伴う主柱穴とみなすことはできない。カマドは北壁中央に位置し、壁外に逆U字形に40cmほど突出する。袖部は黄白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は約60cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積して



第 85 図 14 号住居跡カマド (1 : 30)



第 86 図 14 号住居跡出土遺物

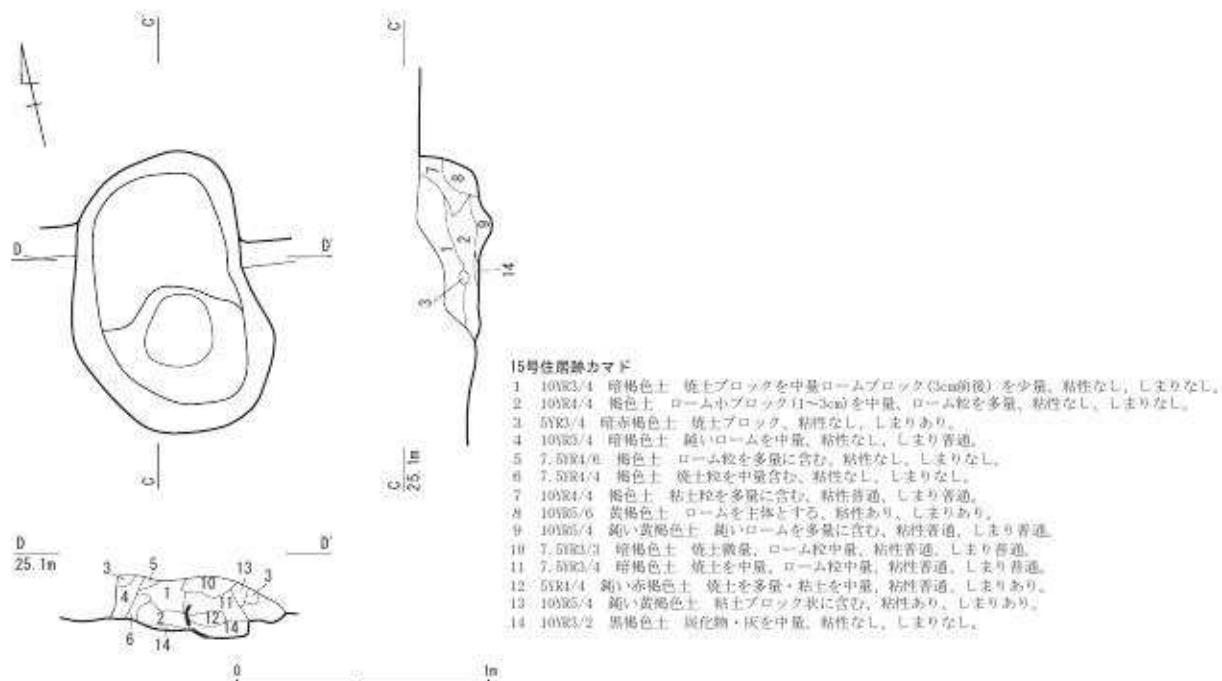
第 33 表 14 号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土層位	備考
1	須恵器 环	(12.7)	(6.9)	4.0	-	ロクロ成型。体部はほぼ直線的に外傾する。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。外面下部手待ちヘラケズリ。底部切り離し技法不明でナデ。	白色粘土多量 雲母中量	褐灰色	良好	上層	8c 後 木葉下窯 跡群産
2	土師器 甕	19.8	-	<11.0>	-	常輪型甕。口唇部が折り返し後、斜く上方に摘まみあげられる。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面、底位のヘラケズリ後ナデ。内面横位ヘラナデ後ナデ。最大径は胴部上位。	白色粘土極めて 多量	暗褐色	不良		8c 後～ 9c 前

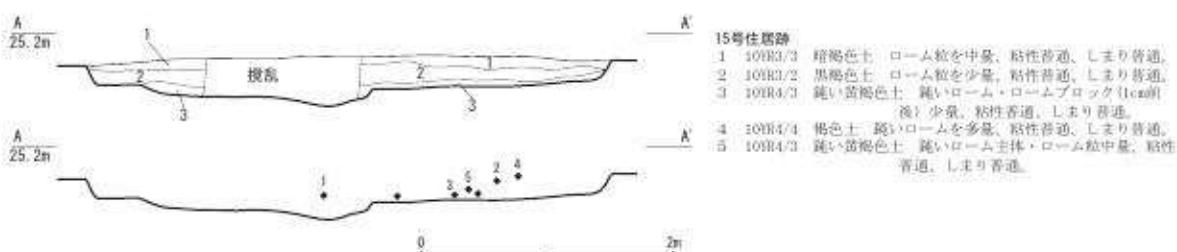
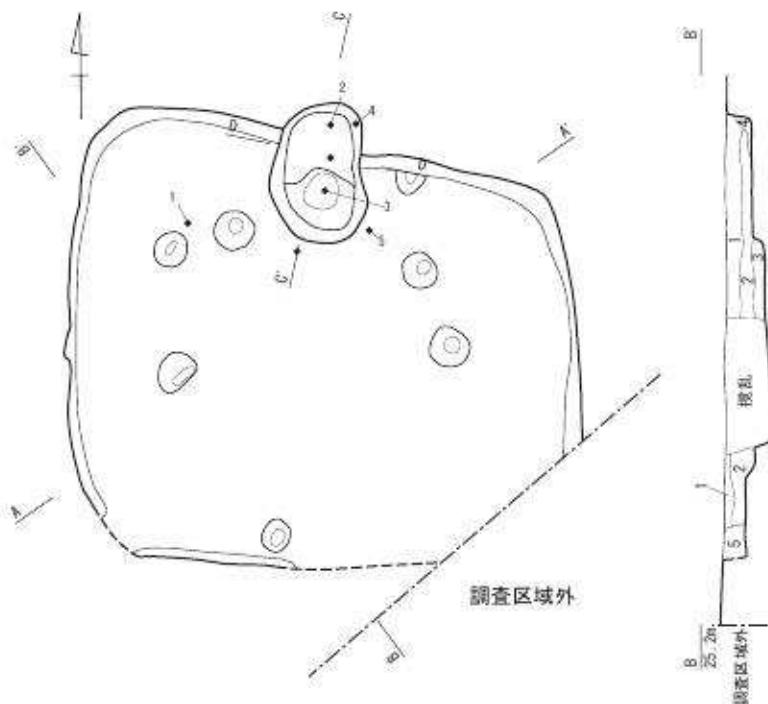
いる。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ 26 cm ほどの梢円形に掘り込まれている。覆土中から床面にかけて縄文土器 14 片、須恵器 59 片、土師器 151 片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して 8 世紀後半～9 世紀前半の所産であった可能性が高い。

15 号住居跡（第 87～89 図、第 34 表、図版 12・25）

A 区の中央部に位置する。各所に耕作による擾乱を受けている。南東側の一部が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向 404 cm、南北方向 352 cm の隅丸方形を呈する。主軸方向は N - 4° - E を示す。壁は急

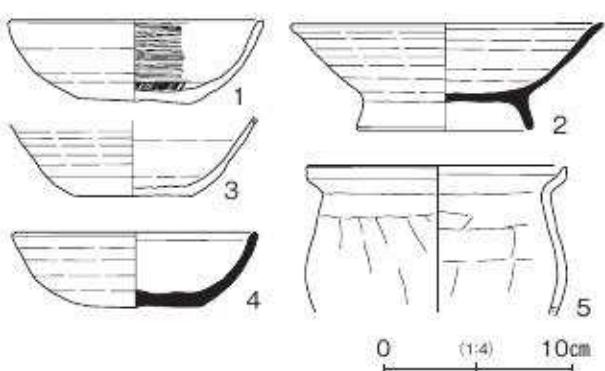


第 87 図 15 号住居跡カマド (1 : 30)



第88図 15号住居跡 (1:60)

傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は25cmを測る。床面はIV層中に形成されており、全体に起伏をもつ。周溝は認められなかった。住居内から6個のピットが検出された。北東側と北西側の対になる2個が本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径30cm、深さ36cmを測る。カマドは短軸線に沿った北壁中央に位置し、壁外に逆U字形に30cmほど突出する。袖部は残存していない。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ16cmほどの楕円形に掘り込まれている。覆土中から床面にかけて縄文土器18片、須恵器32片、土師器66片、石製品1点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して9世紀の所産であった可能性が高い。



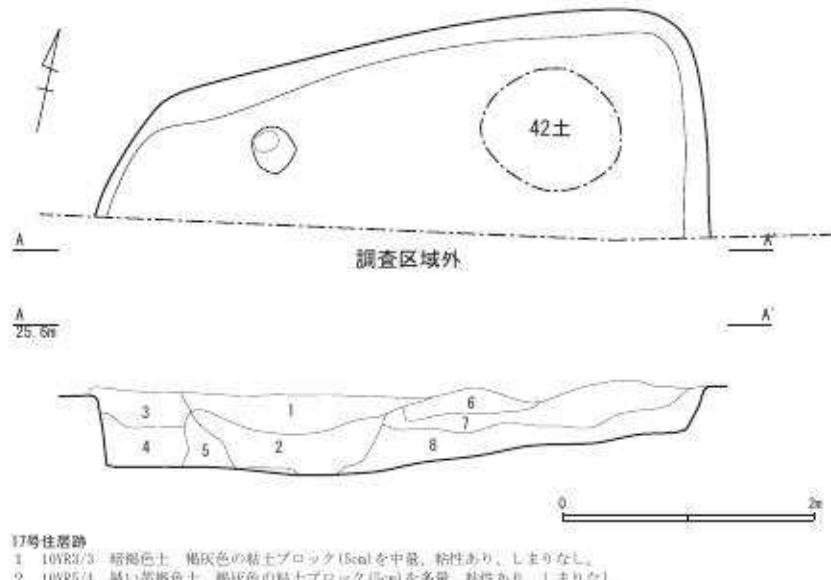
第89図 15号住居跡出土遺物

第34表 15号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土層位	備考
1	土師器 壺	13.3	5.8	4.5	—	ロクロ成形。体部はふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部回転ナデ。下端手持ちヘラケズリ。内面、一方向のヘラミガキ。底部左回転ヘラ切り離し後、一方向のヘラケズリ。周縁幅広の回転ヘラケズリ。	白色粒・赤褐色 砂粒多量 雲母中量	褐色	良好		8c後～ 9c前
2	須恵器 高台付壺	16.2	9.3	5.7	—	ロクロ成形。体部がわずかにふくらみをもち外反、口縁部で強く外反する。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部左回転ヘラ切り離し後未調整。高台部は「ハ」字状に外反して、高台高は1.6cm貼り付け高台。	砂粒・白色粒 ・雲母中量	銹い 黄橙色	良好	カマド	9c前～ 中 新治窯跡群產
3	土師器 壺	—	6.3	<4.2>	—	体部はわずかにふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ後丁寧なナデ、内面ナデ。底部上げ底状で、回転ヘラ切り離し後未調整。	チャート粒中 量 雲母少量	黄褐色	良好	カマド	8c後
4	須恵器 壺	12.8	6.2	4.0	—	ロクロ成形。体部はわずかにふくらみをもつ。ロクロ目が顯著。体部内外面回転ナデ、外面下端手持ちヘラケズリ。底部左方向回転ヘラ切り離し後未調整。	石英・白色 粒中量 雲母多量	暗褐色	良好	カマド	8c後 新治窯跡群產
5	土師器 甕	(13.7)	—	<7.8>	—	常緑型甕。口唇部を上方に摘まみあげる。肩部はふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。肩部外面縦位ヘラケズリ後ナデ。内面上端横位ヘラナデ。上位縦位ヘラナデ後ナデ。	砂粒多量 雲母少量	赤褐色	良好		8c後～ 9c前

17号住居跡（第90図、図版12）

A区の中央部に位置する。42号土坑の上面を切る。各所に耕作による攪乱を受けている。北側を除いて大部分が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向487cm、南北方向176cm以上の隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-12°-Wを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は62cmを測る。床面はIV層中に形成されており、全体に傾斜をもつ。周溝は認められなかった。北西隅近くから1個のピットが検出された。口径27cm、深さ16cmを測る。カマドの位置は不明である。遺物の出土は認められなかった。覆土や住居の形状などから判断して奈良・平安時代の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると42号土坑に後続する。

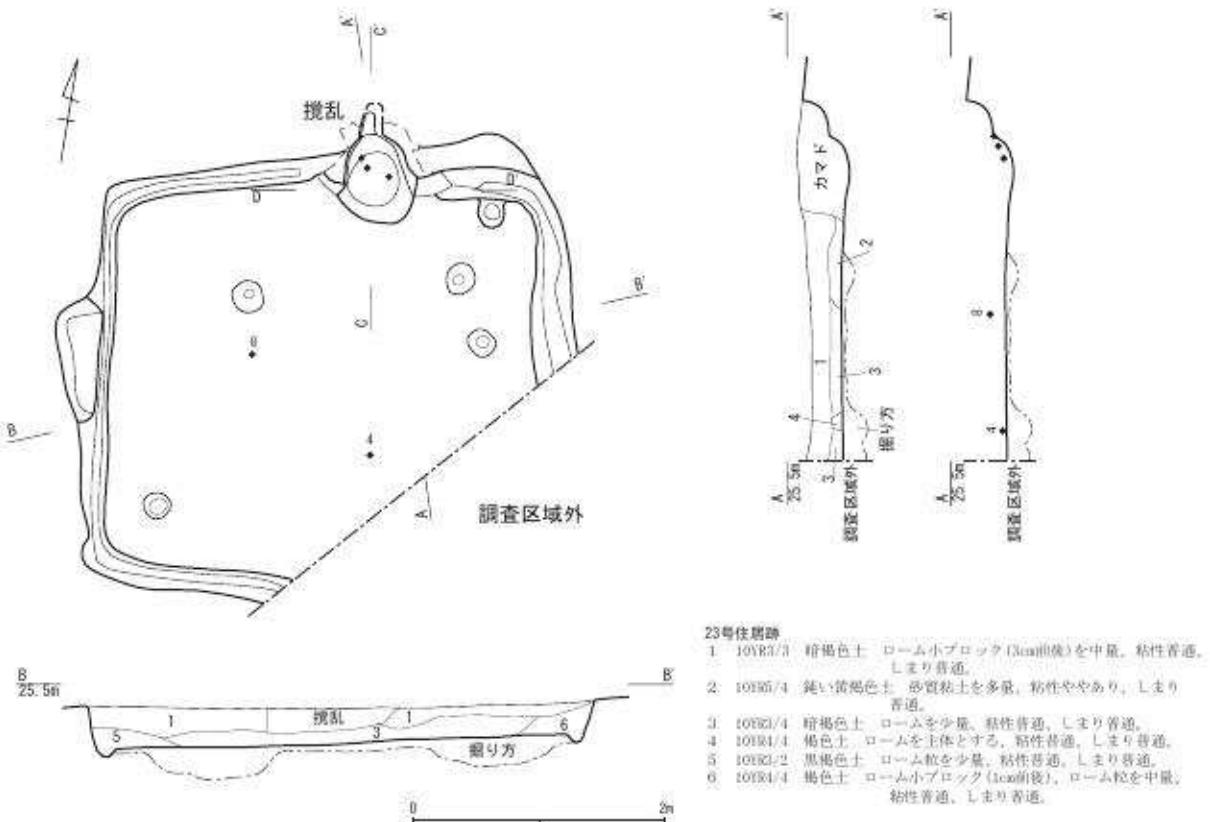


- 17号住居跡
- 1 10VR3/3 暗褐色土 細灰色の粘土ブロック(Scal)を中混、粘性あり、しまりなし。
 - 2 10VR5/1 黒い紫褐色土 細灰色の粘土ブロック(Scal)を多量、粘性あり、しまりなし。
 - 3 10VR4/3 黒い黄褐色土 細灰色を多量、粘性普通、しまり普通。
 - 4 10VR4/4 黄褐色土 ローム紋を少量、粘性普通、しまり普通。
 - 5 10VR5/3 黒い黄褐色土 ロームブロック(3~5cm)を少量、粘性普通、しまり普通。
 - 6 10VR3/4 黄褐色土 ロームを中混、粘性普通、しまり普通。
 - 7 10VR3/3 黄褐色土 細灰色土を多量に含む、粘性あり、しまりあり。
 - 8 10VR4/7 黒い黄褐色土 純いロームを多量に含む、粘性あり、しまりあり。

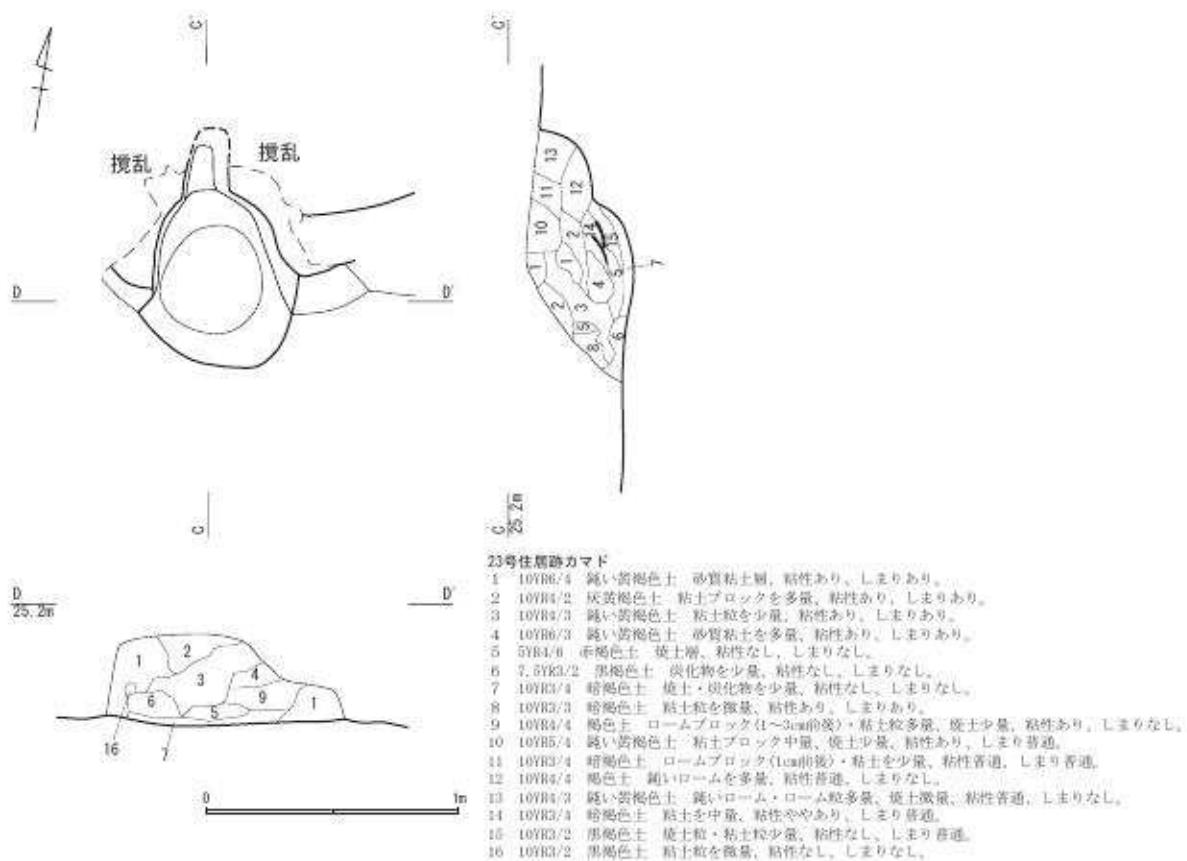
第90図 17号住居跡 (1:60)

23号住居跡（第91～93図、第35表、図版12・25・26）

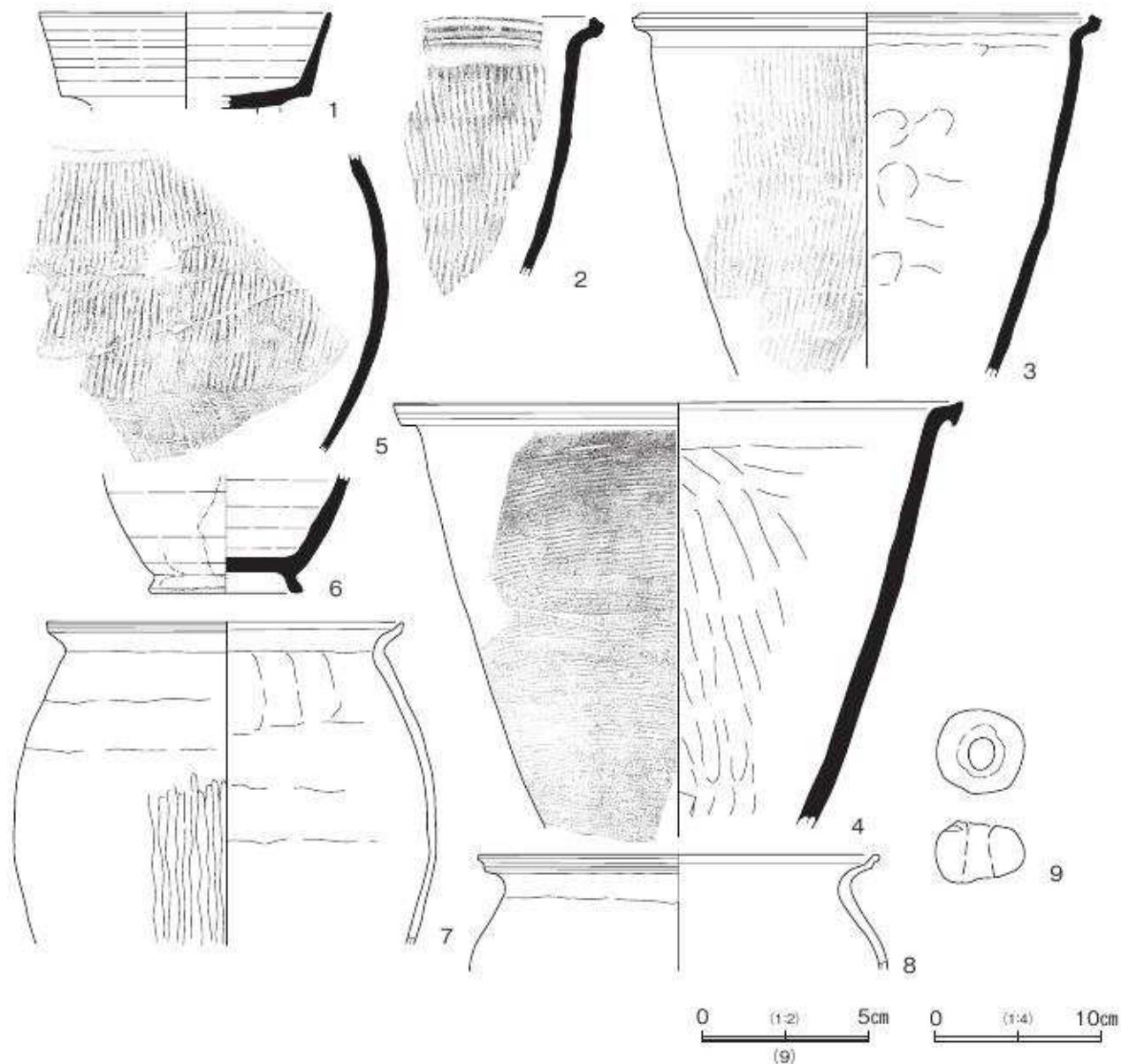
B区の北東側に位置する。西側に24号住居跡が近接して分布する。各所に耕作による攪乱を受けている。南東側の一部が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向375cm、南北方向349cmの隅丸方形を呈する。主軸方向はN-6°-Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は33cmを測る。褐色土を用いて貼床面が形成されていた。おおむね平坦である。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅13cm、



第91図 23号住居跡 (1:60)



第92図 23号住居跡カマド (1:30)



第93図 23号住居跡出土遺物

第35表 23号住居跡出土遺物観察表

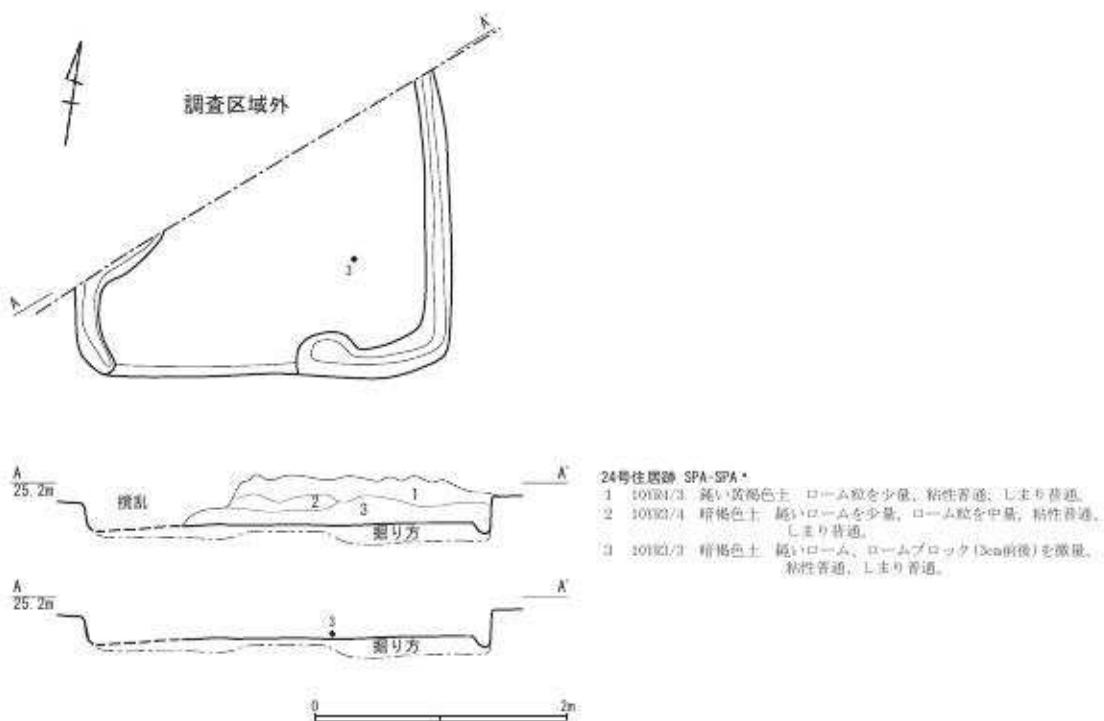
番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土 層位	備考
1	須恵器 高台付壺	17.2	-	<5.8>	-	口クロ成形。体部下位で角度を変え、わずかに外反して立ち上がる。高台は貼り付け。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部切り難い技法不明で丁寧なナデ。	白色粒少量 石英微量 白色粒状物質微量	褐灰色	良好	床直	8c後 木莢下塗 跡群產
2	須恵器 鉢	-	-	<16.2>	-	バケツ状を呈する。口唇部を内側上方に摘まみあげ、口縁部を折り込む。口縁部は大きく外反する。胴部は直線的に外傾。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縱位平行タタキ、内面多方向ヘラナデ後ナデ。(3と同一個体の可能性高い)	白色粒多量 石英少量 雲母中量	褐灰色	良好	下層	8c後 新治塗跡 群產
3	須恵器 鉢	(27.2)	-	<21.7>	-	バケツ状を呈する。口唇部を内側上方に摘まみあげ、口縁部を折り込む。口縁部は大きく外反する。胴部は直線的に外傾。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縱位平行タタキ、内面多方向ヘラナデ後ナデ。	白色粒・砂粒 ・小石中量 雲母少量	褐灰色	普通	下層	8c後 新治塗跡 群產
4	須恵器 鉢	(33.6)	-	<25.6>	-	バケツ状を呈する。口唇部を上方に摘まみあげ、口縁部大きく外反する。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面横位平行タタキ、下端横位ヘラケズリ、内面斜方向のヘラナデ後丁寧なナデ。	白色粒中量 砂粒少量 雲母多量	褐灰色	良好		8c後 新治塗跡 群產
5	須恵器 壺	-	-	-	-	胴部が大きくふくらむ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縱位の平行タタキ後、下位は横位ヘラケズリ。内面ヘラナデ後弱いナデ。當て具痕あり。	白色粒多量 砂粒中量 雲母中量	暗褐色	良好	下層	8c～9c 新治塗跡 群產

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土層位	備考
6	須恵器 壺	—	9.0	<7.1>	—	口クロ成形。肩部はわずかにふくらみをもつ。高台部貼り付けで「ハ」字状に開く。胴部内外面回転ナデ。胴部外面全体に自然釉。	石英微量 黒色粒多量	内褐灰色 外黒褐色	良好		8c～9c
7	土師器 甕	21.2	—	<19.4>	—	常輪型甕。口唇部を上方に摘まみあげる。肩部はわずかにふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上から中位縦位へラケズリ後丁寧なナデ。中位斜方向へラミガキ。内面横位ヘラナデ後丁寧なナデ。最大径は胴部中位。	石英・砂粒 多量 雲母中量	暗褐色	良好		7c後～ 8c中
8	土師器 甕	(23.7)	—	<7.0>	—	常輪型甕。口唇部を斜方に摘まみあげる。肩部はふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上から中位縦位へラケズリ後丁寧なナデ。内面横位ヘラナデ後ナデ。最大径は不明。	白色粒中量 砂粒少量 雲母多量	暗褐色	良好		7c～8c
9	土製品 土玉	2.7	孔径 0.8	1.8	13	形状は球状であるが、断面形が台形に近い。全面を織なへラケズリで整形し、ナデで調整をしている。孔は焼成前に数回の棒状工具を用いているためか平面形が並んだ梢円形を呈する。	白色粒少量 スコリア少量	明褐色	普通	覆土	

深さ7cmを測り、確認部を全周する。住居内から5個のピットが検出された。北東側と北西側の対になる2個が本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径25cm、深さ19cmを測る。カマドは短軸線に沿った北壁東寄りに位置し、壁外に逆U字形に40cmほど突出する。袖部は黄白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は41cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ8cmほどの梢円形に掘り込まれている。掘り方は床下のほぼ全面に及んでいる。床面からの深さは5～25cmを測る。覆土中から床下にかけて縄文土器7片、須恵器21片、土師器33片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して8世紀後半の所産であった可能性が高い。

24号住居跡（第94・95図、第36表、図版12・26）

B区の北東側に位置する。東側に22号住居跡が近接して分布する。各所に耕作による攪乱を受けている。北西側の一部が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向298cm、南北方向221cm以上の隅丸方形を呈す

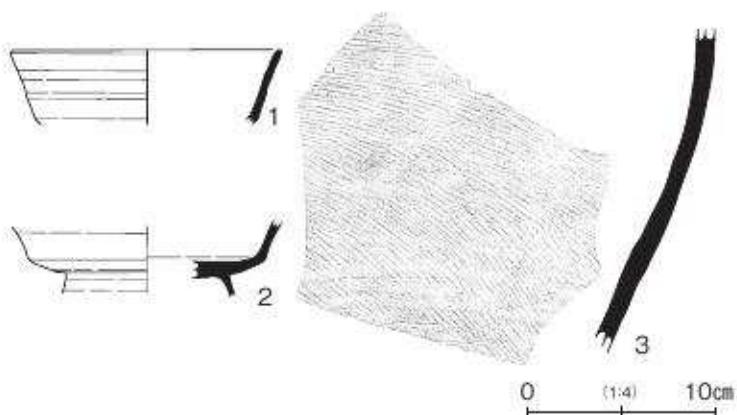


第94図 24号住居跡 (1:60)

るものと思われる。主軸方向は N - 8° - W を示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は 34 cm を測る。褐色土を用いて貼床面が形成されていた。おおむね平坦である。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅 14 cm、深さ 8 cm を測り、

南側の一部を除いて確認部を全周する。

ピットは認められなかった。カマドの位置は不明である。掘り方は床下全面に及んでいる。床面からの深さは 5 ~ 15 cm を測る。覆土中から床下にかけて縄文土器 19 片、弥生土器 2 片、須恵器 20 片、土師器 64 片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して 8 世紀の所産であった可能性が高い。



第 95 図 24 号住居跡出土遺物

第 36 表 24 号住居跡出土遺物観察表

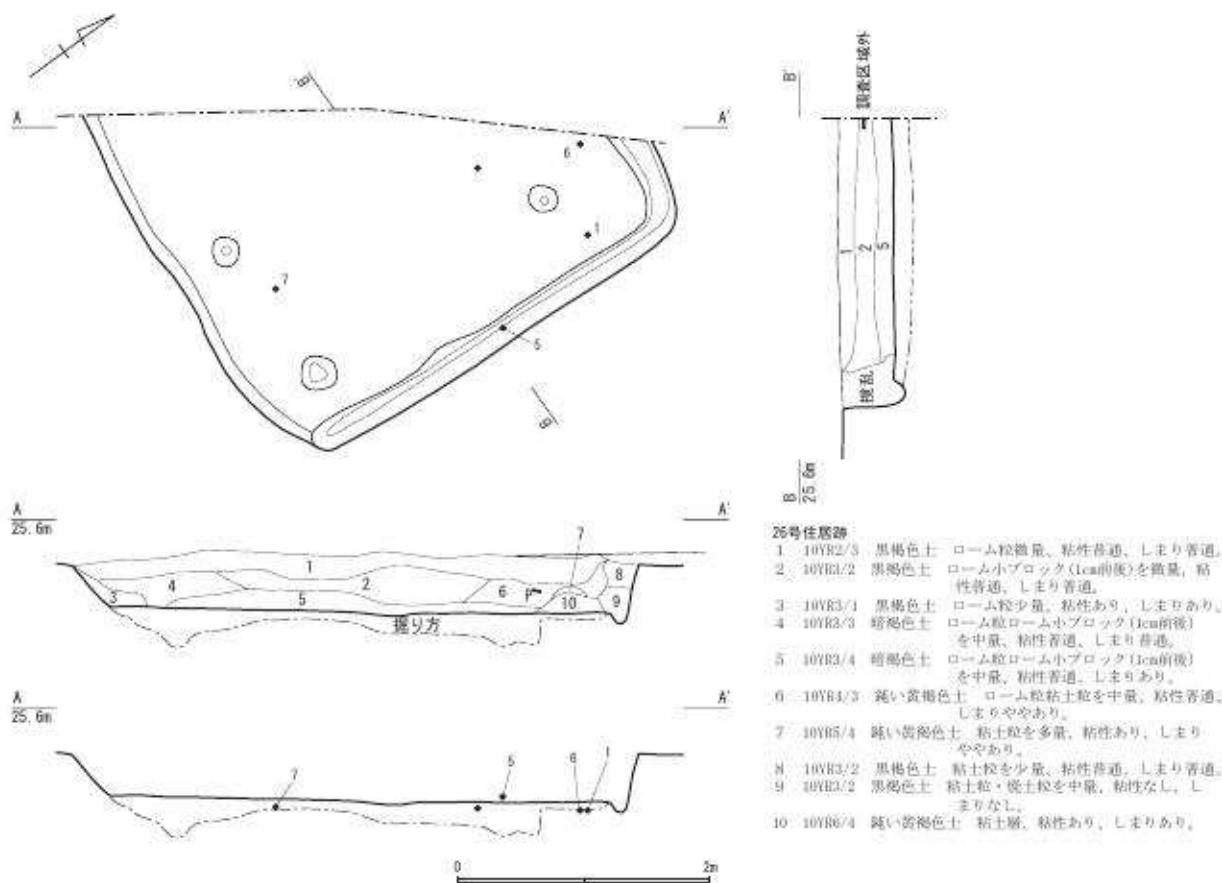
番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土 層位	備考
1	須恵器 高台付環	(14.1)	-	<4.0>	-	ロコロ成型。体部下位で角度を変え、わずかに外反して立ち上がる。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ。	白色粒少量 スコリア中量 雲母微量	褐配色	良好	下層	8c 中木葉下窯跡群産
2	須恵器 高台付環	-	-	<3.5>	-	ロコロ成型。体部下位より角度を変えて、わずかに外反し立ち上がる。高台貼り付けで「ハ」字状に開く。体部内外面回転ナデ、底部切り離し技法不明で未調整。	石英・長石 中量 雲母中量	灰白色	良好	下層	8c 後新治窯跡群産
3	須恵器 甕	-	-	-	-	胴部外面、斜方向平行タタキ、内面ヘラナデ後ナデ。	白色粒多量 雲母中量	褐配色	良好		8c 新治窯跡群産

26 号住居跡（第 96・97 図、第 37 表、図版 12・13・26）

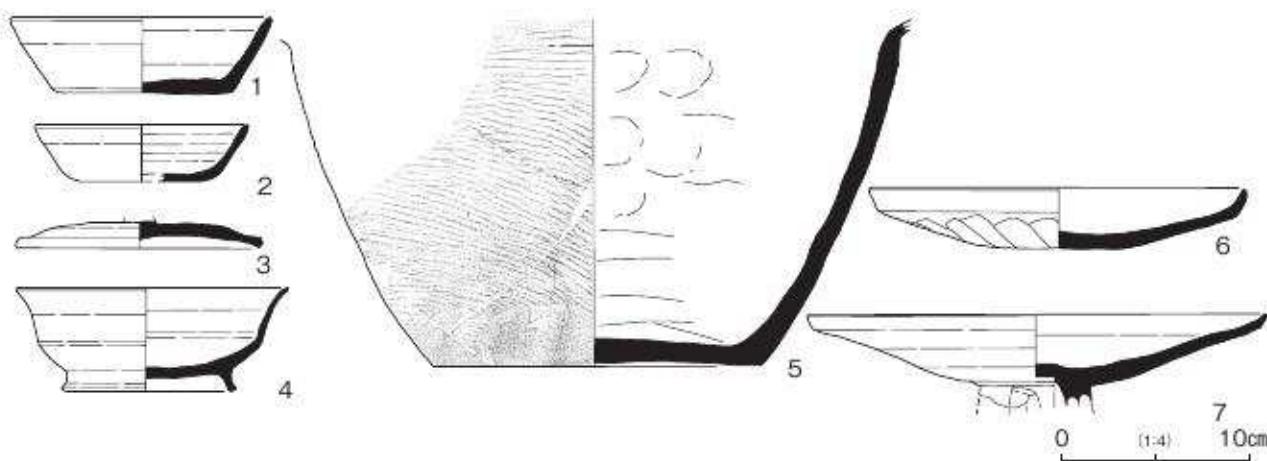
B 区の中央部に位置する。南側に 1 号溝が近接して分布する。各所に耕作による攪乱を受けている。北西側が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向 305 cm 以上、南北方向 377 cm の隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向は N - 4° - E を示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は 50 cm を測る。褐色土を用いて貼床面が形成されていた。おおむね平坦である。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅 12 cm、深さ 25 cm を測り、南側を除いて確認部を全周する。住居内から 3 個のピットが検出された。北東側と南東側の対になる 2 個が本住居跡に伴う主柱穴と思われる。平均口径 26 cm、深さ 18 cm を測る。南壁中央近くの 1 個は出入口施設であった可能性が高い。口径 24 cm、深さ 14 cm を測る。カマドの位置は不明である。掘り方は床下全面に及んでいる。床面からの深さは 8 ~ 22 cm を測る。覆土中から床下にかけて縄文土器 3 片、須恵器 14 片、土師器 27 片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して 8 世紀後半の所産であった可能性が高い。

27 号住居跡（第 98 ~ 100 図、第 38 表、図版 13・26・27）

C 区の北側に位置する。各所に耕作による攪乱を受けている。東側が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向 272 cm 以上、南北方向 402 cm の隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向は N - 8° - E を示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は 55 cm を測る。褐色土を用いて貼床面が形成されて



第96図 26号住居跡 (1:60)



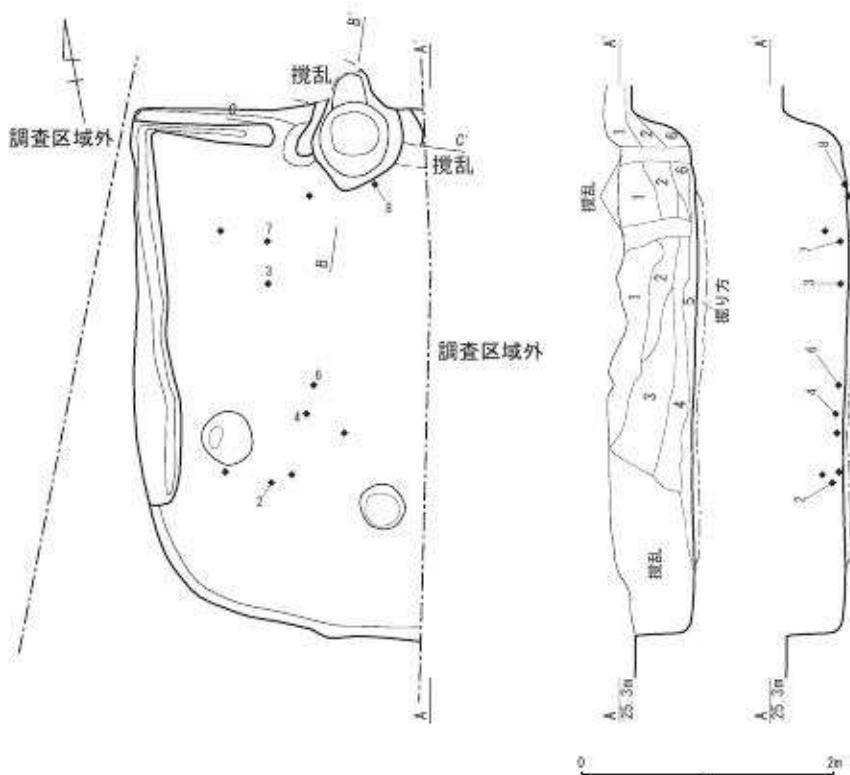
第97図 26号住居跡出土遺物

第37表 26号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土 層位	備考
1	須恵器 环	13.6	9.2	4.0	-	ロクロ成型。体部は直線的に外傾。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部切り離し技法不明で一方向へラケスリ、周縁手持ちヘラケスリ、外面に白色の付着物。	白色粒・砂粒 中量 雲母中量	灰黄色	良好		8c 中 新治窯跡 群產
2	須恵器 环	11.2	(6.5)	3.0	-	ロクロ成型。体部は僅かに湾曲して外反する。外面は器面が磨耗して不明瞭。内面はナデ。	砂粒中量 小石微量 雲母中量	明黄褐色	普通	上層	8c 後

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土層位	備考
3	須恵器 蓋	12.8	-	<1.5>	-	やや扁平な形状。かえりは短い。摘まみ部欠損。天井部外面左回転ヘラケズリ、内面右回転ヘラケズリ。	白色粒多量	褐灰色	良好	上層	8c 後～ 9c 前 木葉下窓跡群產
4	須恵器 高台付杯	14.2	9.0	5.5	-	ロクロ成形。体部下位で角度を要えややくらみをもち立ち上がる。口縁部は外反。高台は「ハ」字状に開く。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面回転ナデ、底部左回転ヘラ切り離し後未調整。	砂粒中量 雲母中量	灰白色	良好	上層	9c 前 新治窓跡群產
5	須恵器 壺	-	17.3	<18.4>	-	胴部はわざかにふくらみをもつ。胴部外面斜位の平行タタキ。下端横位の手持ちヘラケズリ。内面横位ヘラナデ後丁寧なナデ。底部一方向のヘラケズリ後ナデ。内面に白色の付着物。	白色粒少量	黄褐色	良好		8c～9c
6	須恵器 盤	23.8	-	3.2	-	ロクロ成形。体部は緩やかに開き、口縁は直線的にやや強く立ち上がる。底部は手持ちヘラ切り離し、底部に煤付着、内外面ともナデ整形。	石英少量 雲母多量 スコリア	灰白色	良好		8c 後
7	須恵器 高盤	24.1	-	<5.0>	-	ロクロ成形。体部は弱く湾曲して開く。口縁は強く屈曲し立ち上がる。高台部は盤の接合部に4本の孔を穿つ。	石英多量 白色粒多量	褐灰色	良好		9c 中～ 後

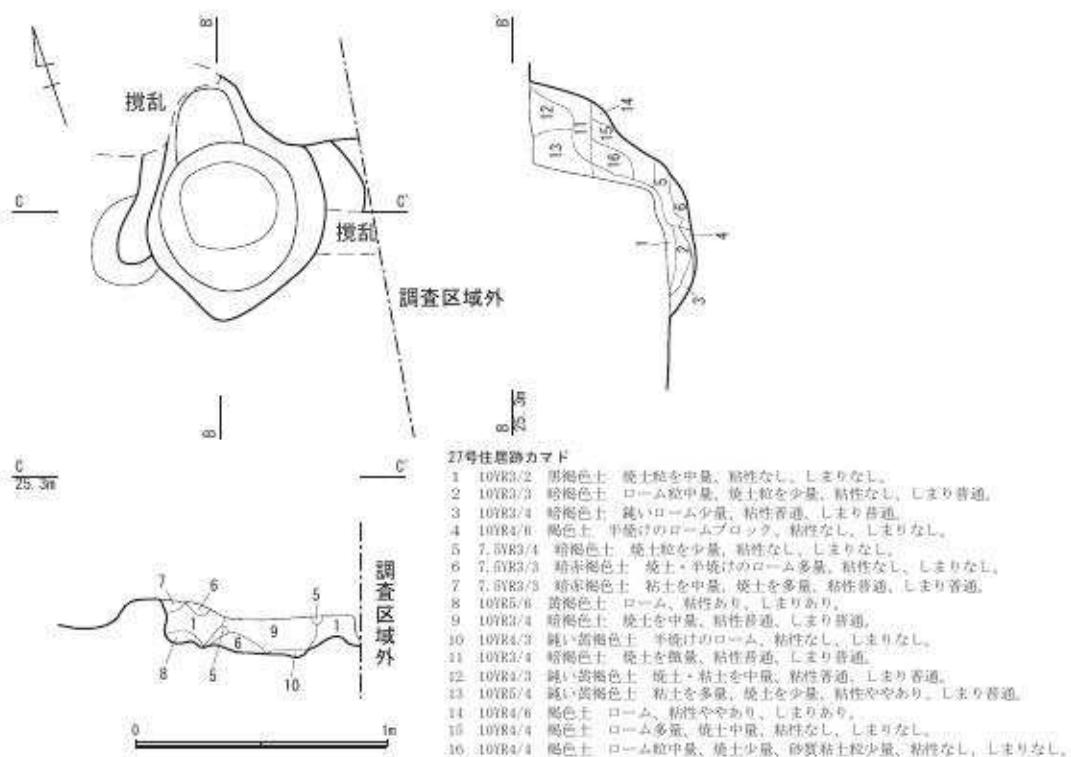
いた。おおむね平坦である。壁面に沿って周溝が検出された。平均幅12cm、深さ12cmを測り、南側を除いて確認部を全周する。住居内から2個のピットが検出された。南西側の1個は本住居跡に伴う主柱穴と思われる。口径40cm、深さ45cmを測る。南壁中央近くの1個は出入口施設であった可能性が高い。口径33cm、深さ18cmを測る。カマドは北壁中央に位置し、壁外に逆U字形に35cmほど突出する。袖部は黄白色粘土を用いて造られている。両袖部の内径は71cm。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底部は深さ12cmほどの略円形に掘り込まれている。掘り方は床下のほぼ全面に及



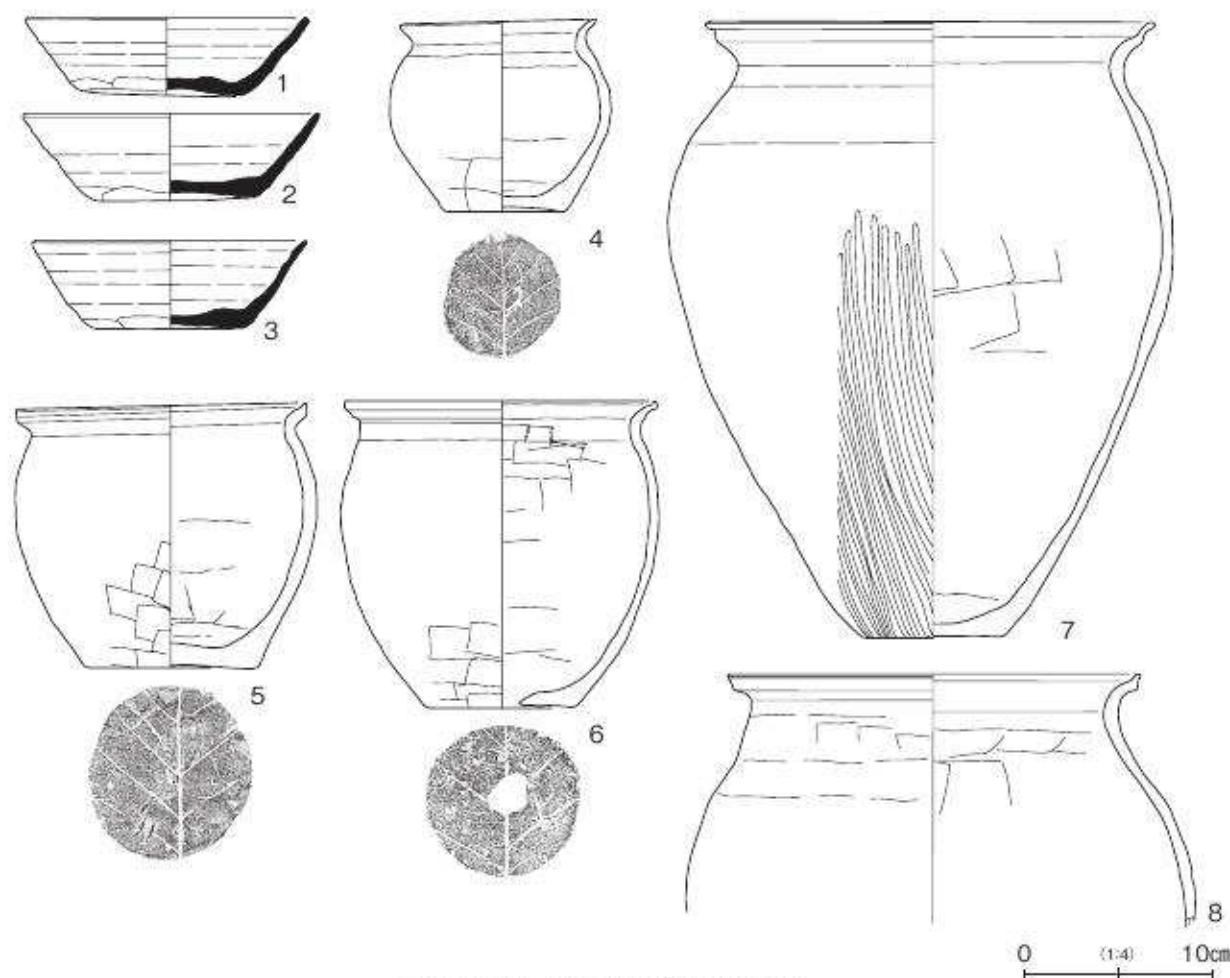
27号住居跡

- 1 10ER1/3 黒い黄褐色土 ローム粒少量、粘性普通、しまりあり。
- 2 10ER1/2 黒褐色土 ローム粒微量、粘性普通、しまり普通。
- 3 10ER1/4 粘褐色土 ローム粒、ロームブロック(1～2cm前後)微量、粘性普通、しまり普通。
- 4 10ER2/3 粘褐色土 ローム粒中量、ロームブロック(2cm前後)少量、粘性普通、しまり普通。
- 5 10ER4/6 棕褐色土 ローム粒多量、粘性なし、しまりなし。
- 6 10ER1/4 棕褐色土 ローム粒中量、粘性普通、しまり普通。

第98図 27号住居跡 (1:60)



第99図 27号住居跡カマド (1:30)



第100図 27号住居跡出土遺物

第38表 27号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土 層位	備考
1	須恵器 壺	14.8	8.5	41	—	ロクロ底形。体部は直線的に外反。ロクロ目顯著。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ、外面下端細い手持ちヘラケズリ。底部左回転ヘラ切り離し後ナデ、周縁手持ちヘラケズリ。	石英・砂粒 少量 雲母微量	灰白色	良好		8c 後 新治窯跡群産
2	須恵器 壺	15.4	8.4	46	—	ロクロ底形。体部は直線的に外反。ロクロ目顯著。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ、外面下端細い手持ちヘラケズリ。底部左回転ヘラ切り離し後、一方向のヘラケズリ。周縁手持ちヘラケズリ。内面に帯状となる黒色付着物。	石英・長石 雲母少量	灰白色	良好		8c 後 新治窯跡群産
3	須恵器 壺	14.3	7.8	47	—	ロクロ底形。体部がわずかにふくらみをもつ。ロクロ目顯著。やや底部肉厚。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。外面下端手持ちヘラケズリ。底部左回転ヘラ切り離し後、一方向の弱いヘラケズリ。周縁細い手持ちヘラケズリ。	石英多量 白色粒多量	灰白色	良好		8c 後 本茅下窯跡群産
4	土師器 小型壺	10.1	6.3	10.2	—	口縁部が大きく外反。胴部は上位がふくらむ形状。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上から中位横位ヘラケズリ後ナデ。下位横位ヘラケズリ後ナデ。底部木葉痕。最大径は胴部上位。	白色粒多量 砂粒少量 雲母少量	内黒褐色 外赤褐色	普通		9c 前
5	土師器 小型壺	15.1	9.0	13.8	—	常総型壺。口唇部を上方に摘まみあげる形状。胴部は寸胴氣味。口縁部内外面ヨコナデ。胴部上から中位横位ヘラケズリ後丁寧なナデ。下位横位ヘラケズリ。内面横位ヘラナデ後ナデ。底部木葉痕をもち、中央部意図的な穿孔がある。	石英多量 チャート小石 少量	暗褐色	良好		9c 前
6	土師器 壺	16.3	7.7	16.2	—	常総型壺。口唇部を上方に摘まみあげる形状。胴部は寸胴氣味。口縁部内外面ヨコナデ。胴部上から中位横位のヘラケズリ後丁寧なナデ。下位横位ヘラケズリ。内面横位ヘラナデ後ナデ。底部木葉痕をもち、中央部意図的な穿孔がある。	白色粒多量 雲母少量	褐色	良好		9c 前～中
7	土師器 壺	23.3	7.2	32.7	—	常総型壺。底部平底。胴部の張りは弱く、上部に最大径を持つ。口縁部は「S」字状に外反し、折り返し後に軽く摘まみあげる。胴部下半はヘラミガキ。口縁はナデ。	石英・雲母 中量	明黄褐色	良好		8c 後～ 9c 前
8	土師器 壺	21.6	—	<13.2>	—	常総型壺。口唇部が上方に摘まれている。胴部はややふくらみをもつ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面向多方向のヘラケズリ後丁寧なナデ。内面多方向のヘラナデ後ナデ。	石英多量 砂粒少量 雲母微量	赤褐色	良好	下層	8c 後～ 9c 前

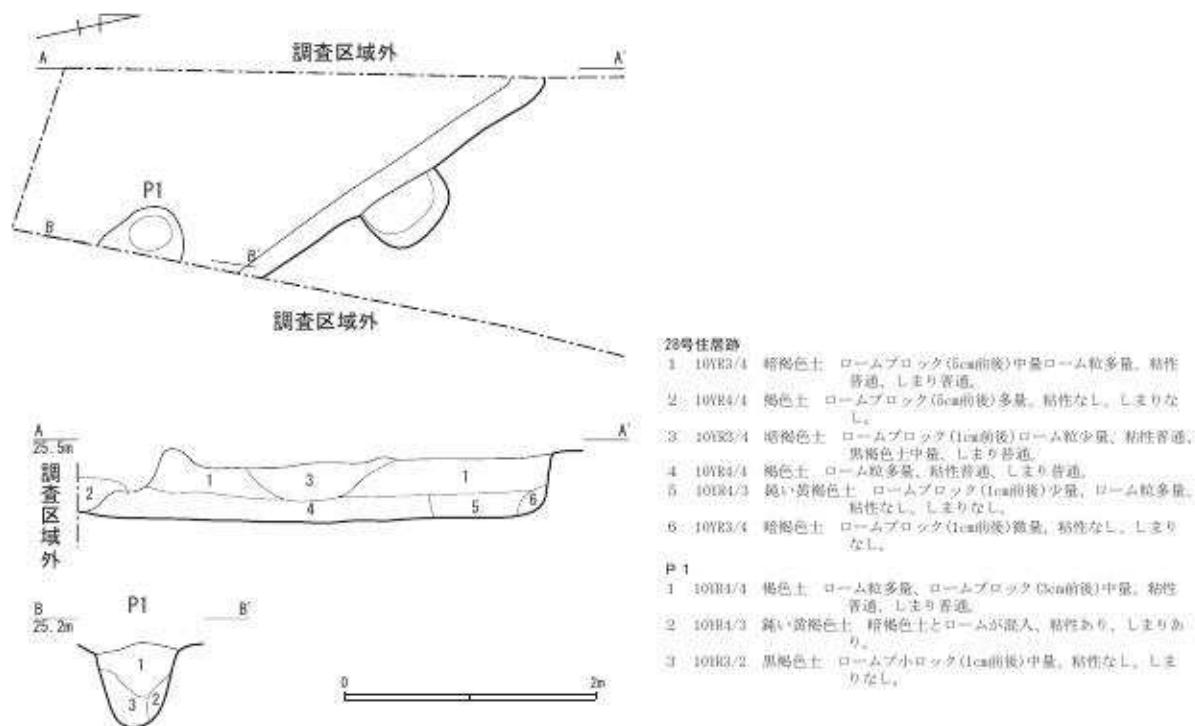
んでいる。床面からの深さは5～10cmを測る。覆土中から床下にかけて縄文土器16片、弥生土器2片、須恵器3片、土師器62片、陶器1片が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して8世紀後半～9世紀前半の所産であった可能性が高い。

28号住居跡（第101図、図版13）

B区の南西端に位置する。各所に耕作による攪乱を受けている。東側の一部を除いて調査区域外にかかるが、平面形は東西方向151cm以上、南北方向282cm以上の隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向は不明である。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は66cmを測る。床面はIV層中に形成されていた。おおむね平坦である。周溝は認められなかった。住居内から1個のピットが検出された。東壁近くに位置しており、本住居跡に伴う主柱穴と思われる。口径70cm以上、深さ65cmを測る。カマドの位置は不明である。覆土中から縄文土器4片、土師器6片が出土した。覆土中住居の形状などから判断して奈良・平安時代の所産であった可能性が高い。

30号住居跡（第102・103図、第39表、図版13・27）

A区の南西側に位置する。各所に耕作による攪乱を受けている。北西側が調査区域外にかかるが、平面形は東西方向312cm以上、南北方向224cm以上の隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-17°-Wを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は38cmを測る。床面はIV層中に形成されていた。おおむね平坦である。周溝は認められなかった。住居内から1個のピットが検出された。南東隅近くに位置しており、本住居跡に伴う主柱穴と思われる。口径28cm、深さ20cmを測る。カマドの位置は不明

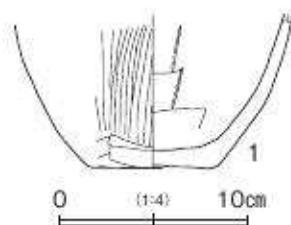


第101図 28号住居跡 (1:60)

である。覆土中から床面にかけて縄文土器1片、須恵器2片、土師器11片、石製品1点が出土した。伴出土器や覆土のあり方などから判断して奈良・平安時代の所産であった可能性が高い。



第102図 30号住居跡 (1:60)



第103図 30号住居跡出土遺物

第39表 30号住居跡出土遺物観察表

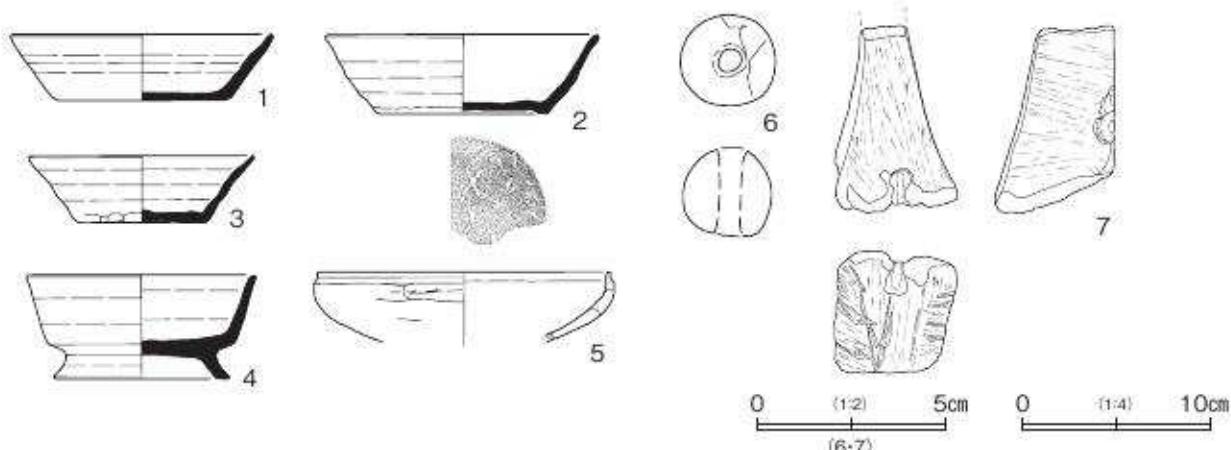
番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土 層位	備考
1	土師器 甕	—	6.5	<8.2>	—	常輪型甕。胴部がわずかにふくらむ形状。胴部外面斜面ヘラミガキ、下腹横縫ヘラケズリ。一部に布目痕。内面多方向のヘラナデ後ナデ。底部一方のヘラミガキ様ヘラケズリ。最大径は不明。	白色粒多量 砂粒中量 雲母多量	明赤褐色	良好		

6-2 遺物 (第104図、第40表、図版27)

奈良・平安時代の遺物は今回の調査でもっとも多く出土しており、内容もバラエティーに富む。内訳は、須恵器・壺、蓋、高台付壺、鉢、盤、高盤、壺、長頸壺、甕、瓶、土師器・壺、塊、塊、鉢、壺、甕、瓶、土製支脚、土玉、管玉、土錘などである。量的に多数を占めるのは土師器であり、器形を復元できたものも少くない。当該期の住居跡を中心とした分布をみせている。これに次いで須恵器が出土している。

奈良・平安時代の石器は凝灰岩製の砥石一点のみである。砥面は5面にわたり、穿孔の痕跡をとどめる。

(渡邊)



第104図 奈良・平安時代遺構外出土遺物

第40表 奈良・平安時代遺構外出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重さ (g)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土層位	備考
1	須恵器 壺	13.8	9.0	3.5	-	ロクロ成型。体部は直線的に外傾。器面の剥離が多いため、調整は不明瞭。	石英微量 砂粒中量 雲母多量	褐灰色	不良	A区表 探	8c 中～ 後 新治窯跡 群産
2	須恵器 壺	14.4	9.0	4.2	-	ロクロ成型。体部はロクロ口目が顯著で、わずかにふくらみをもち口縁部が外反する形狀。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。外面下端手持ちヘラケズリ。底部切り離し技法不明で一方向のヘラケズリ調整。底部は粘土を充填して厚みをつくる。底部文字種不明ヘル書き。	砂粒多量 雲母多量	褐灰色	良好	A区表 探	8c 後
3	須恵器 環	11.8	6.8	3.6	-	ロクロ成型。体部はわずかに外反する形狀。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。外面下端手持ちヘラケズリ。底部左回転ヘラ切り離し後、一方向のヘラケズリ調整。	白色粒多量 スコリア少量 雲母微量	褐灰色	良好	A区表 探	8c 後 新治窯跡 群産
4	須恵器 高台付壺	12.0	9.2	5.5	-	ロクロ成型。体部下位で角度を変えわずかに内湾して立ち上がる。高台は貼り付けで「ハ」字状に開く。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面回転ナデ。底部左回転ヘラ切り離し後ナデ。周縁左回転ヘラケズリ。	白色粒・砂粒 少量	褐灰色	良好	A区表 探	8c 後～ 9c 前 本葉下窯 跡群産
5	土師器 壺	15.5	-	<40>	-	丸底の須恵器模倣壺。口縁部は短く内傾して、下端に明瞭な稜をもつ。口縁部内外面ヘラケズリ。体部外面横位ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。	スコリア中量	明黄褐色		A区表 探	7c 前
6	土製品 土玉	2.1	孔径 0.7	2.4	14	形狀は正な球形。焼成前に一方向からの穿孔。全面をヘラケズリで整形して、ナデで調整。	白色粒多量	明褐色	良好	A区表 探	
7	砥石	長さ 6.0	幅 3.3	厚さ 3.3	44.9	下面には深い溝状の擦痕。その他の面は滑らかな底面。正面下部から下面にかけて穿孔の痕跡を留める。					凝灰岩

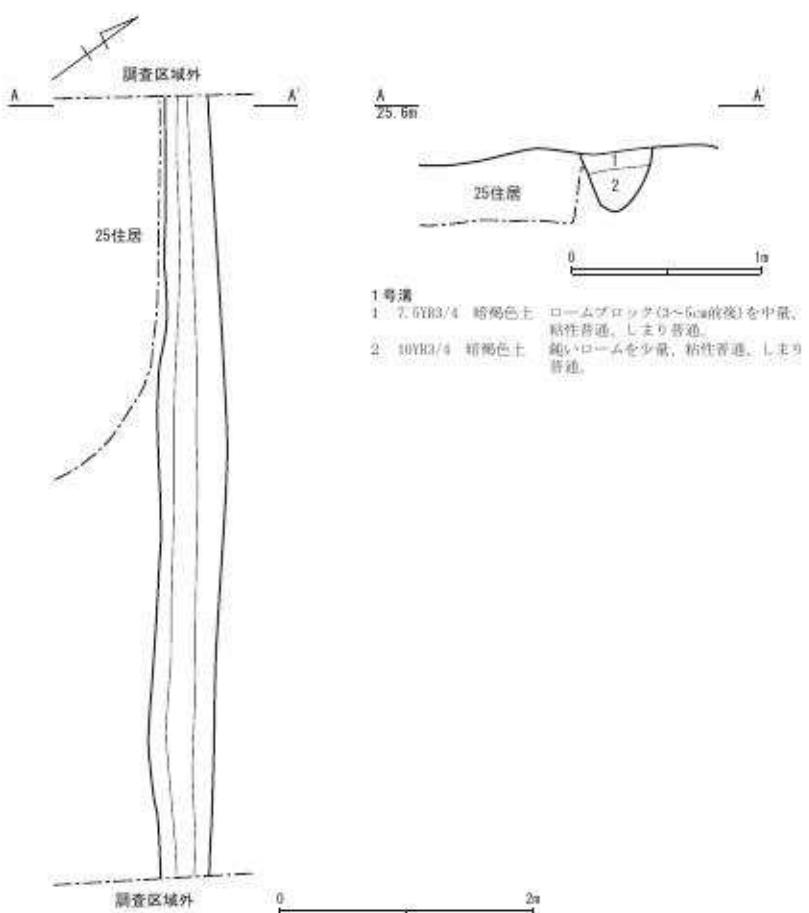
第7章 中・近世

1条の溝が検出されている。B区の中央部を南東から北西方向に直進する。確認されたのは一部であり、全体の形状や規模、性格などは不明である。

7-1 溝

1号溝（第105図）

B区の中央部を南東から北西方向に直進する。各所に搅乱を受けている。南東端と北西端はいずれも調査区外に延びており、全容は不明である。確認部分の全長は6.2m、上幅35～56cm、底幅10～21cm、深さ40cmを測る。主軸方向はN-55°-Wである。断面はU字状を呈する。底面はやや起伏をもつ。流れ込みと思われる縄文土器3片、弥生土器1片が出土している。遺構の形状や覆土のあり方などから判断して中・近世の所産であった可能性が高い。

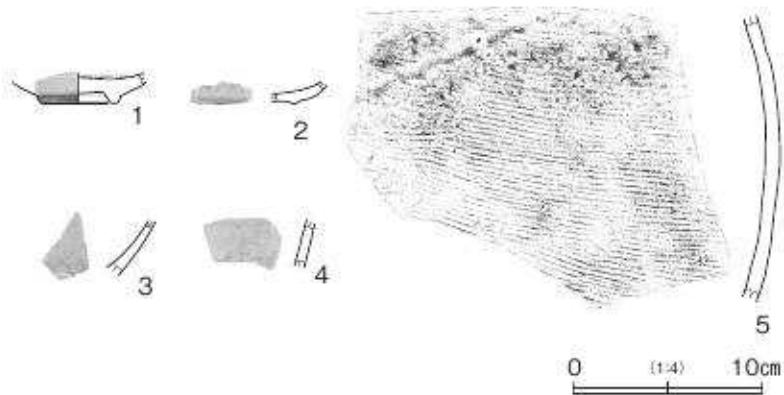


第105図 1号溝 (1:60, 1:40)

7-2 遺物（第106図、第41表、図版27）

中・近世の遺物としては、磁器皿、陶器皿・鉢・壺・瓶・甕などが出土している。出土量はごくわずかであり、遺構に伴うものはまったく認められない。

(渡邊)



第 106 図 中・近世遺構外出土遺物

第 41 表 中・近世遺構外出土遺物観察表

番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法・その他	胎土	色調	焼成	出土 層位	備考
1	磁器 中皿	—	(4.0)	<1.6>	見込み縁の目輪剥ぎ。17世紀中～後葉。肥前系白磁種。体部下半無釉。胎土は灰白色。底部破片		灰白色	良好	A 区表探	近世
2	陶器 皿	—	—	—	高台内無釉。肥前系。底部破片。	砂粒多量	明褐色	普通	表探	中・近世
3	陶器 碗	—	—	—	灰釉。瀬戸・美濃系。		灰白色	良好	表探	近世
4	陶器 瓶	—	—	—	瀬戸・美濃系。透明釉。		褐灰色	良好	表探	近世
5	陶器 大甕	—	—	—	口クロ整形。外面灰釉・内面鉄泥塗り。外面横位のタクキ目胴部破片	砂粒中量 スコリア中量 雲母多量		良好	表探	近世

第8章 出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

1. はじめに

下ノ宮遺跡は恋瀬川右岸に広がる台地上に立地する、縄文時代から近世にかけての遺跡である。ここでは、焼失した住居跡から出土した炭化材の樹種同定を行なった。

2. 試料と方法

試料は、焼失した住居跡 SI-20 から出土した炭化材である。炭化材は、トレンチである T1、T2、T3 から各 1 袋であったが、袋内には多数の炭化材が入っていたため、大きな炭化材が多数みられた T2 からは 10 点、あまり大きな炭化材がみられなかった T1 と T3 からは各 5 点を抽出した。したがって、同定試料は T1 から 5 点、T2 から 10 点、T3 から 5 点の、計 20 点の出土炭化材である。住居跡の時期は、7 世紀前半と考えられている。各試料について、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は試料に残存している半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定は、試料をまず乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）の各断面について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VE-9800）で検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、広葉樹のケヤキとクワ属、サクラ属、ムクロジの 4 分類群が産出した。クワ属が最も多く 10 点で、サクラ属が 4 点、ケヤキとムクロジが各 3 点であった。年輪数の計測では、残存半径 1.6cm 内に 4 年輪がみられた試料 No.5 のムクロジや、残存半径 2.2cm 内に 4 年輪がみられた試料 No.12 のクワ属のように年輪幅の広い樹種と、残存半径 1.3cm 内に 20 年輪がみられた試料 No.1 のケヤキや、残存半径 0.5cm 内に 6 年輪がみられた試料 No.20 のサクラ属のように年輪幅の狭い樹種の両方がみられた。同定結果を第 42 表に、一覧を第 43 表に示す。

第 42 表 出土炭化材の樹種同定結果

樹種 / トレンチ名	T1	T2	T3	合計
ケヤキ	3			3
クワ属		10		10
サクラ属			4	4
ムクロジ	2		1	3
合計	5	10	5	20

次に同定された材の特徴を記載し、各樹種の走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 第 107 図 1a-1c (No.3), 2a (No.1)

年輪のはじめに大型の道管が 1 ~ 2 列並び、晩材部では径を急に減じた道管が多数複合して接線～斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は單穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端 1 列が方形となる異性で、幅 1 ~ 5 列となる。放射組織の上下端には大型の結晶がみられる。

ケヤキは温帯から暖帯にかけての肥沃な谷間などに好んで生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難でない。

(2) クワ属 *Morus* クワ科 第 107 図 3a-3c (No.11), 4a-4c (No.14)

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合して斜め方向に配列する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は單穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が方形となる異性で、幅1～5列となる。

クワ属にはヤマグワやマグワなどがあり、温帯から亜熱帯に分布し日本全国の山中にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で保存性が高く、切削加工はやや困難である。

(3) サクラ属(広義) *Prunus* s.l. バラ科 第107図 5a-5c (No.20)

小型の道管が単独ないし2～4個斜め方向または接線方向に複合して密に散在する散孔材である。道管は單穿孔を有し、内壁には鮮明ならせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、幅1～6列となる。

広義のサクラ属には、モモ属、スモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属、バクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、モモ属とバクチノキ属以外のサクラ属とした。

(4) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 第107図 6a-6c (No.5)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が数個複合して疎らに散在する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状、翼状、帶状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、1～4列となる。

ムクロジは関東、新潟、富山県境以西の本州、四国、九州に分布する落葉高木の広葉樹である。材は中庸ないしやや重硬である。

4. 考察

T1ではケヤキが3点とムクロジが2点、T3ではサクラ属が4点とムクロジが1点産出し、それぞれ2種類の炭化材が確認できた。また、10点を同定したT2では、クワ属のみが産出した。年輪幅も10点とも広いため、同一個体由来の破片であった可能性が高い。T1～T3のいずれの試料も住居跡の建築材の一部であった可能性が高いと考えられるが、原形を留めている試料はなく、部材の区別はできなかった。

産出したケヤキとクワ属、サクラ属、ムクロジは、いずれも重硬な樹種である。クワ属とムクロジは、加工が困難であるという材質をもち、年輪幅の広い試料が多くあった。ケヤキとサクラ属は、加工性が比較的良好であるという材質をもち、年輪幅の狭い試料が多くあった。一般的に、年輪幅の詰まった樹木は成長が悪く、年輪幅の広い樹木は成長が良いといわれている。木材としてみると、年輪幅の詰まった材はヌカ目といわれ、耐朽性や強度が落ちるが、加工性が良くなるという。一方、年輪幅の広い材は、狭い材よりも加工性は悪いが強度がある。SI-20では、もともと加工が困難なクワ属とムクロジには、年輪幅の詰まった加工性の良い材ではなく、年輪幅が広いために加工性は悪いがより強度のある材が使われており、加工性よりも強度が重視された可能性がある。また、もともと加工性の良いケヤキやサクラ属には、強度は落ちるが加工性の良い、目の詰まった材が用いられている。試料が全て建築材であったとすれば、同じ住居の中で部材によって強度重視の材と加工性重視の材が用いられていた可能性がある。あるいは、加工性重視の材の方は建築材ではなく木製品や燃料材であった可能性も考えられる。

鹿島市鍛冶台遺跡の6世紀前半の竪穴住居跡SB2とSB9でムクロジが最も多く産出している例にもみられるように(野村・佐々木, 2007)、関東地方の南部・北部の時期別使用樹種では、弥生時代から古代にかけてムクロジが多く産出することが明らかにされている(山田, 1993)。下ノ宮遺跡のSI-20でもムクロジ

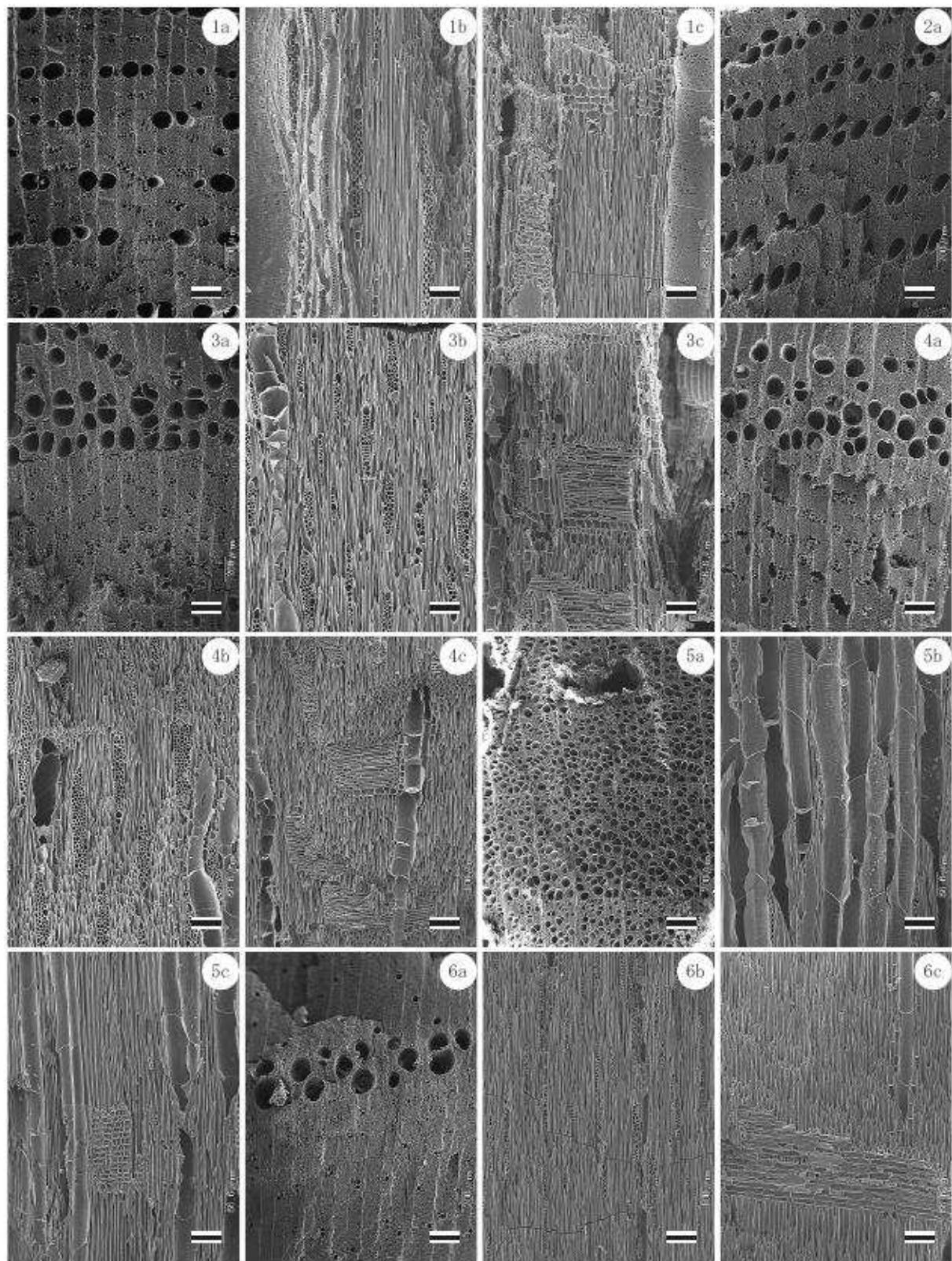
が一定量産出しており、同様の傾向が認められた。ムクロジは現代では顯著に生育する樹種ではなく、あまり利用されない材である（平井、1996）。古代の関東地方の森林ではムクロジが多く生育していた、またはムクロジを有用材として選択利用していた、などの可能性が考えられる。

引用文献

- 平井信二（1996）木の大百科－解説編－、642p、朝倉書房。
 野村敏江・佐々木由香（2007）鍛冶台遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定、鹿島市文化スポーツ振興事業団編「鍛冶台遺跡」：80-92、鹿島市文化スポーツ振興事業団。
 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史、242p、植生史研究 特別第1号。

第43表 出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料No	出土遺構	トレンチ名	樹種	残存半径 (cm)	残存年輪数	備考
1	SI-20	T1	ケヤキ	1.3	20	同一袋内 から抽出
2			ムクロジ	1.1	4	
3			ケヤキ	1.4	24	
4			ケヤキ	1.1	18	
5			ムクロジ	1.6	4	
6	T2	SI-20	クワ属	2.4	8	同一袋内 から抽出
7			クワ属	2.1	6	
8			クワ属	2.1	6	
9			クワ属	1.9	5	
10			クワ属	2.6	4	
11			クワ属	2.1	4	
12			クワ属	2.2	4	
13			クワ属	1.1	2	
14			クワ属	1.8	4	
15			クワ属	1.7	3	
16	T3	SI-20	サクラ属	0.6	5	同一袋内 から抽出
17			サクラ属	0.6	5	
18			サクラ属	0.7	6	
19			ムクロジ	0.6	7	
20			サクラ属	0.5	6	



第107図 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c.ケヤキ (No.3)、2a.ケヤキ (No.1)、3a-3c.クワ属 (No.11)、4a-4c.クワ属 (No.14)、5a-5c.サクラ属 (No.20)、6a-6c.ムクロジ (No.5)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第9章 総括

下ノ宮遺跡は石岡市の南端、西に筑波山を望む恋瀬川右岸の台地上に所在する。本遺跡では2006年に発掘調査が行われ、縄文時代から弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世に至る各時期の遺構・遺物の出土が確認されている。今回の調査地点は2006年の調査地点の北東側に隣接しており、同じく縄文時代から弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世の各時期の遺構・遺物を検出することができた。調査地点は全体に耕作に伴う擾乱や削平が著しく、遺構の遺存状態は必ずしも良好とはいえないが、確認された遺構は住居跡31軒、円形周溝状遺構2基、溝1条、土坑28基ときわめて多様かつ多数にのぼることが注意される。以下、本章では、時代ごとに今回の調査の成果を概観する。

1. 縄文時代

今回の調査で確認された縄文時代の遺構は、住居跡10軒、土坑28基を数える。このうち、中期前葉・阿玉台I b期の25号を除くと、8軒の住居跡は前期初頭・花積下層期に属しており、残る1軒も前期に比定される。調査範囲が限定的であることから、全体の状況や規模は不明であるが、空間的には調査地点北東側のA地点に集中する傾向をみせており、調査地点中央のB区確認例もA区と接する北東側に分布する。調査地点南西側のC区からの発見例はみられない。楕円形プランを中心としており、長軸方向にもある程度の規則性が認められる。また、長軸線を挟んで柱穴が対応するように配置され、地床炉の多くが長軸線のやや南寄りに設けられている点でも共通する。詳細な分析は今後の課題であるが、茨城県における花積下層期の集落に新たな類例を加えるものであり、その意義はきわめて大きい。

阿玉台I b期の住居跡はB区の中央部に位置する。前期の住居跡とは異なり、周溝をもつ長楕円形プランを特徴としている。今回、確認されたのは25号の1軒のみであるが、隣接する2006年調査地点では阿玉台III～IV期の不整楕円形の住居跡1軒が検出されている。

28基の土坑は調査地点の広い範囲に分布している。円形および楕円形プランを基本とするが、花積下層期例の他にも、早期・田戸下層期に比定されるもの、前期中葉・黒浜期に比定されるものなどが含まれていることが注意される。本地点から出土した小ピットの多くは当該期に伴うものと思われるが、配列などに明瞭な規則性は認められない。

出土した縄文土器は、早期・田戸式、茅山上層式、前期・花積下層式、関山式、黒浜式、植房式、諸磯式、浮島式、興津式、十三菩提式、大木5式、栗島式、中期・阿玉台式、加曾利E式、後期・堀之内式、加曾利B式、曾谷式、安行式と非常にバラエティーに富んでいる。主体を占めるのは前期土器、とりわけ花積下層式土器であり、住居跡や土坑出土土器の大半を占める。

当該期の石器は石鏃、楔形石器、削器、二次加工剥片、磨石、敲石、凹石、磨製石斧と同じくバラエティーに富むが、土器に比べると出土量は少ない。住居跡に伴うものが多く、前期を中心とした時期の所産と考えられるが、削器は時間的にやや古くなる可能性もある。

2. 弥生時代

後期初頭の型式不明土器、後期中葉の上稻吉式土器などが出土しているが、量的にはごくわずかであり、当該期の遺構もまったく検出されていない。2006年調査地点では中期の土坑1基と有角石器（足洗型石器）1点が出土している。

3. 古墳時代

古墳時代後期の住居跡8軒と円形周溝状遺構2基が検出されている。このうち、住居跡はA区の北東側と南西側に集中分布する傾向をみせており、この中には長軸6～7m近い比較的大型の例も2軒含まれる。カマドの位置は、北側が2軒、北西側が3軒、不明3軒という構成を示している。2006年地点でも、北側を中心に古墳時代後期の住居跡5軒、土坑9基が確認されており、本地点例との関連が注意される。

1号円形周溝状遺構は最大径7.7m、2号円形周溝状遺構は最大径10m以上を測り、古墳時代後期を中心に分布する類似遺構との関連が注目される。耕作による搅乱や削平が著しく、遺物の出土も限られることから、性格や内容、時間的位置などについては不明瞭な部分が残るが、いずれも住居跡に挟まれたA区中央部の北東寄りと南西寄りに位置することが注目される。

当該期の遺物は奈良・平安時代に次ぐ出土量を誇る。内訳は、土師器・壺、塊、鉢、壺、小型壺、甕、甌、土製支脚、土玉などである。当該期に属する須恵器や石製品などの出土はみられない。

4. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の住居跡13軒が検出されている。8世紀～9世紀前半例を中心とするが、耕作による搅乱や削平が著しく、遺存状態は良好とはいえない。A区の北東側を中心に調査地点のほぼ全域にわたって分布している。カマドの位置は、北側が9軒、不明5軒という構成を示している。2006年地点北側でも10世紀前半の住居跡1軒、土坑2基が確認されており、本地点例との関連が注意される。

当該期の遺物は今回の調査でもっとも出土量が多く、内容もバラエティーに富んでいる。内訳は、須恵器・壺、蓋、高台付壺、鉢、盤、高盤、壺、長頸壺、甕、甌、土師器・壺、塊、鉢、壺、甕、甌、土製支脚、土玉、管玉、土錘、砥石などである。量的に多数を占めるのは土師器であり、これに次いで須恵器が出土している。住居跡に伴うものが大部分であり、遺構外から出土したものは少ない。石製品は凝灰岩製の砥石一点のみが確認された。5砥面であり、穿孔の痕跡がみられる。

5. 中・近世

1条の溝が検出されている。B区の中央部を南東から北西方向に直進する。上幅35～56cm、深さ40cmを測る断面U字状の溝であるが、確認されたのは一部であり、搅乱も激しいことから、全体の形状や規模、性格などは不明である。2006年地点では、区画溝と思われる重複する溝3条と土坑4基が確認されている。

当該期の遺物としては、磁器皿、陶器皿・鉢・壺・瓶・甕などが出土している。出土量はごくわずかであり、遺構に伴うものは認められない。

参考・引用文献

- 安藤敏孝・新山保和ほか 2001『石岡市遺跡分布調査報告』石岡市教育委員会
石岡市文化財関係資料編さん委員会 1996『石岡の地名－ひたちのみやこ1300年の物語－』石岡市教育委員会
石岡市史編纂委員会 1979『石岡市史 上巻』石岡市
石岡市史編纂委員会 1985『石岡市史 下巻 通史編』石岡市
株式会社東京航業研究所 2008『茨城県石岡市国分遺跡』石岡市教育委員会
小杉山大輔 2005『代官屋敷遺跡発掘調査報告書』石岡市教育委員会
小杉山大輔 2006『市内遺跡調査報告書』石岡市教育委員会
小杉山大輔 2007『市内遺跡調査報告書 第2集』石岡市教育委員会
小松崎博一 2002『国分遺跡－確認調査報告書－』石岡市教育委員会

齊藤弘道 2006『茨城の縄文土器』茨城県立歴史館
佐々木義則 2007「茨城県における奈良・平安時代土器研究の現状」『考古学の深層－瓦吹堅先生還暦記念論文集－』瓦吹堅
先生還暦記念論文集刊行会
地域文化財研究所 2009『下ノ宮遺跡』石岡市教育委員会
有限会社勾玉工房 Mogi 2011『中島遺跡』石岡市教育委員会

写 真 図 版



調査区全景（南から）



調査区 A 区

図版 2



調査区 B 区



調査区 C 区



8号住居遺物出土状況（南から）



8号住居遺物出土状況（東から）



8号住居遺物出土状況



8号住居炉（南から）



8号住居（南から）



10号住居遺物出土状況（南から）



10号住居炉（南から）

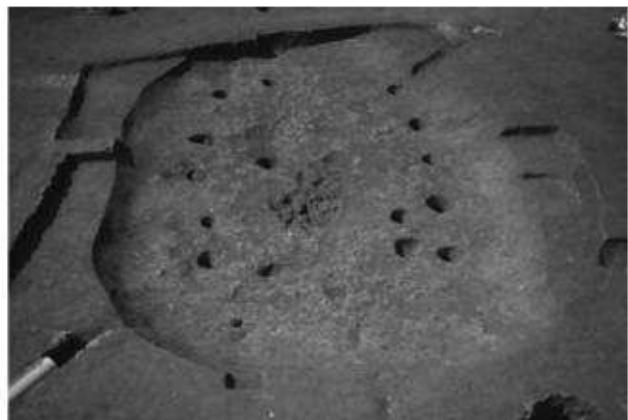


10号住居（南から）

図版 4



10号住居遺物出土状況



11号住居（南から）



11号住居遺物出土状況（西から）



11号住居遺物出土状況1（東から）



11号住居遺物出土状況2（東から）



11号住居炉（南から）



13号住居炉（南から）



13号住居（南から）



16号住居炉（南から）



16号住居（東から）



16号住居遺物出土状況（南から）



18号住居炉（南から）



18号住居（南から）



19号住居（西から）



22号住居（東から）



25号住居、1号溝（東から）

図版 6



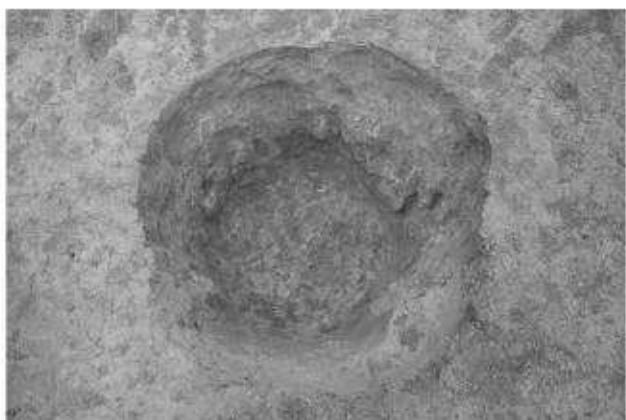
29号住居炉（東から）



29号住居（東から）



3号土坑（西から）



11号土坑（南から）



13号土坑（西から）



26号土坑（南から）



27号土坑（南から）



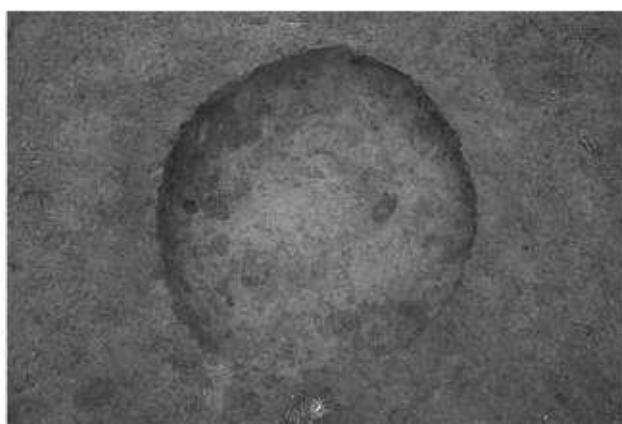
38号土坑（南から）



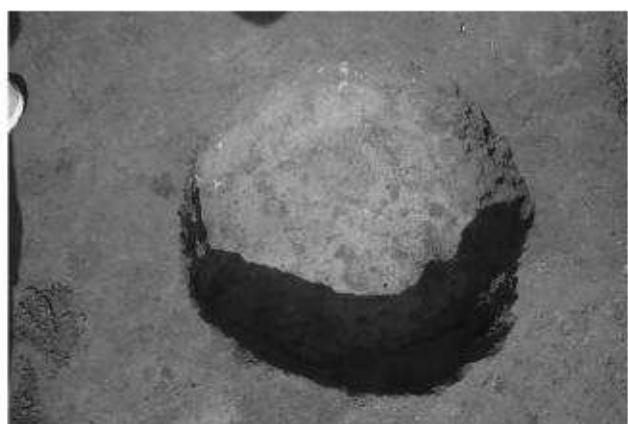
46号土坑（南から）



65号土坑（南から）



72号土坑（南から）



86号土坑（南から）



88号土坑（南から）



89号土坑（南から）



94号土坑（南から）



2A号住居カマド（南から）

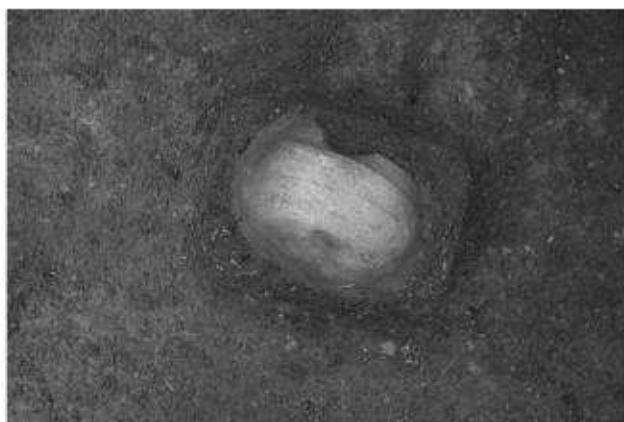
図版 8



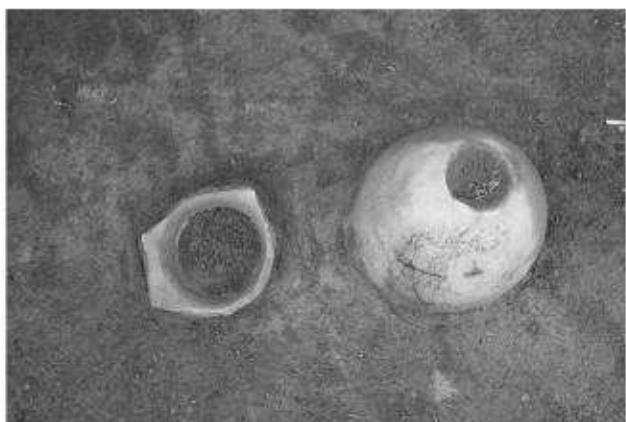
2 A号住居（南から）



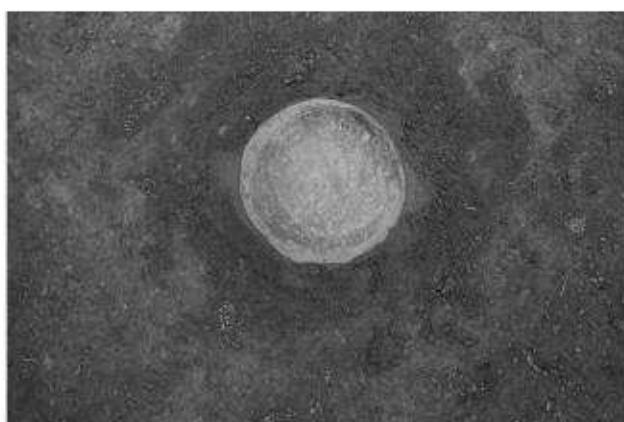
2 B号住居（南から）



3号住居遺物出土状況1



3号住居遺物出土状況2



3号住居遺物出土状況3



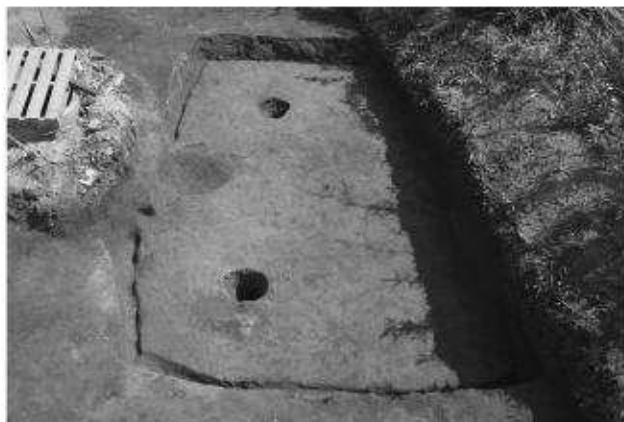
3号住居カマド（南から）



3号住居（南から）



4号住居カマド（東から）



4号住居（南から）



5号住居遺物出土状況



5号住居カマド



5号住居（南から）



7号住居カマド（南から）



7号住居（南から）



20号住居遺物出土状況（南から）

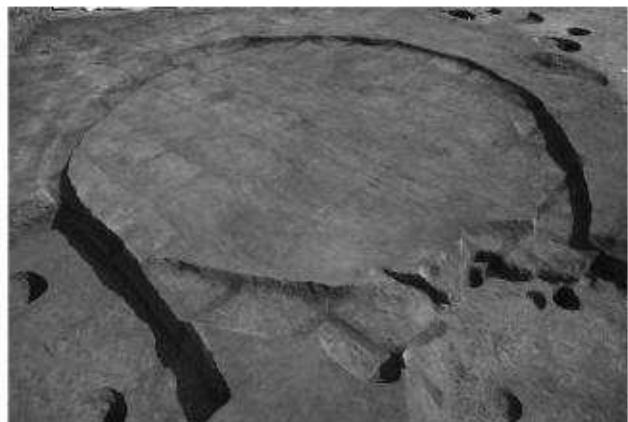


20号住居（東から）

図版 10



21号住居（西から）



1号円形周溝状遺構（南から）



2号円形周溝状遺構（西から）



1号住居カマド（南から）



1号住居（南から）



6号住居遺物出土状況



6号住居カマド（南から）



6号住居（南から）



9号住居遺物出土状況



9号住居カマド（南から）



9号住居（南から）



12号住居カマド（南から）



12号住居（南から）



12号住居遺物出土状況



14号住居カマド内遺物出土状況（南から）



14号住居（西から）

図版 12



15号住居カマド（南から）



15号住居（南から）



17号住居 SPA ~ A'（西から）



17号住居（西から）



23号住居カマド（南から）



23号住居（南から）



24号住居（東から）



26号住居遺物出土状況 1



26号住居遺物出土状況2



26号住居遺物出土状況3



26号住居（東から）



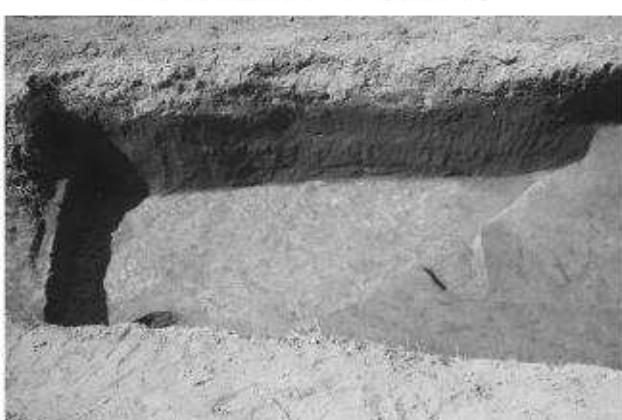
27号住居遺物出土状況（南から）



27号住居カマド（南から）



27号住居（南から）

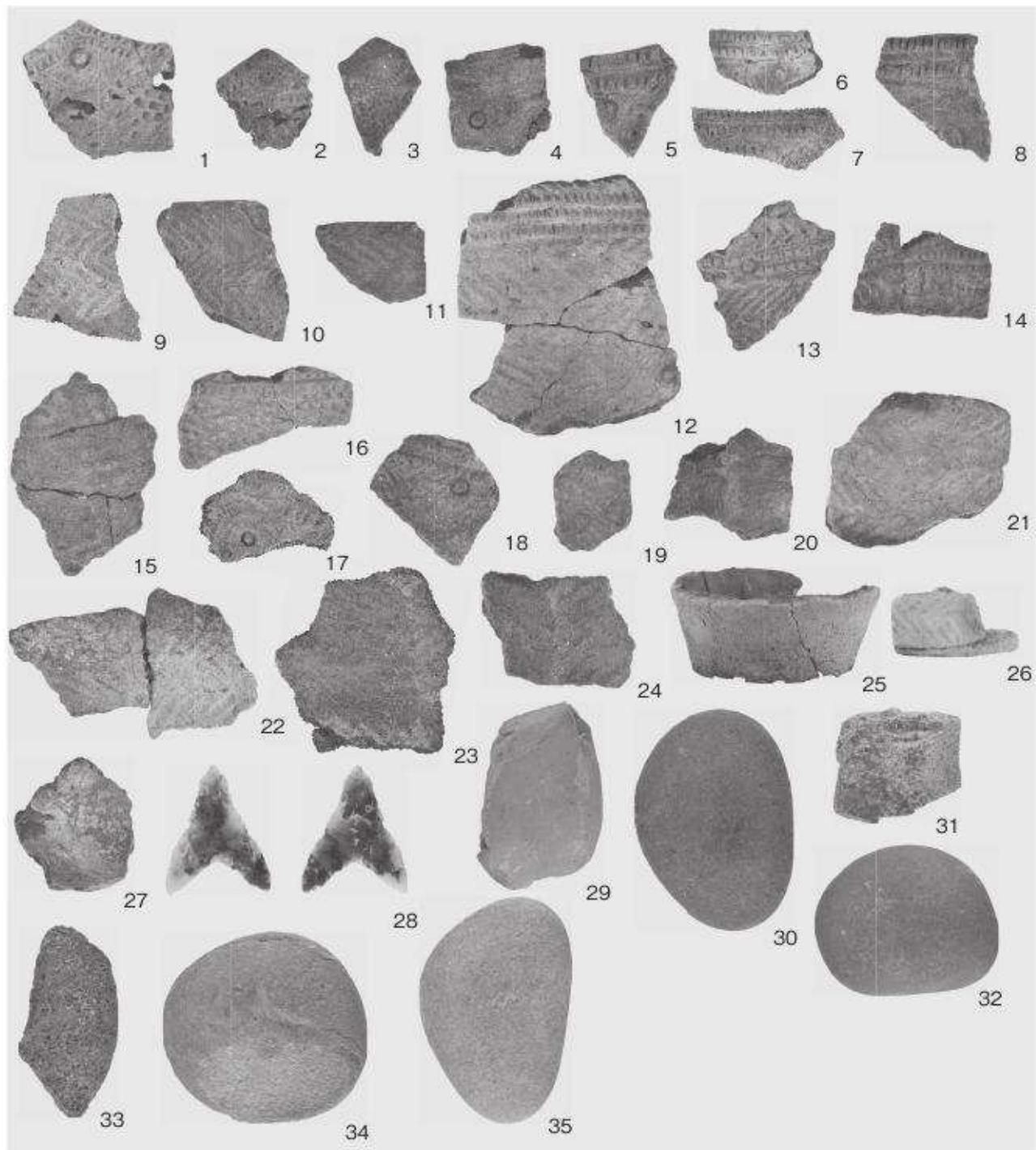


28号住居（東から）

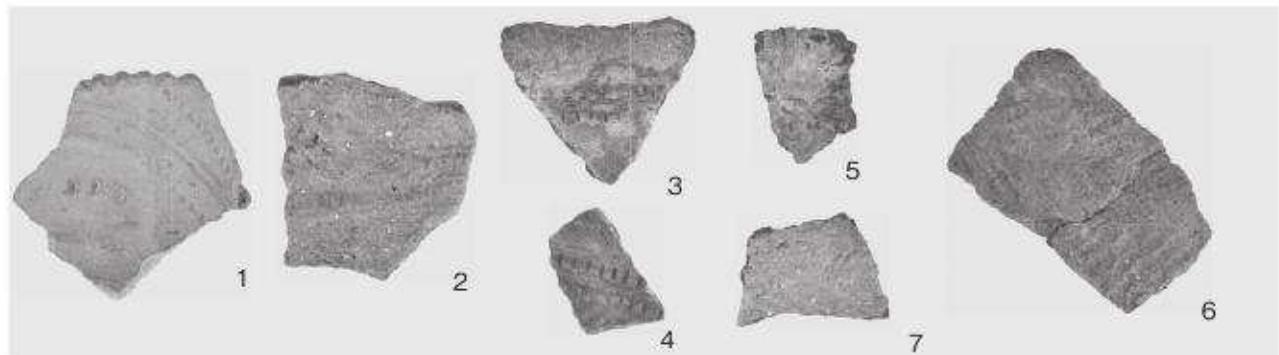


30号住居（南から）

図版 14

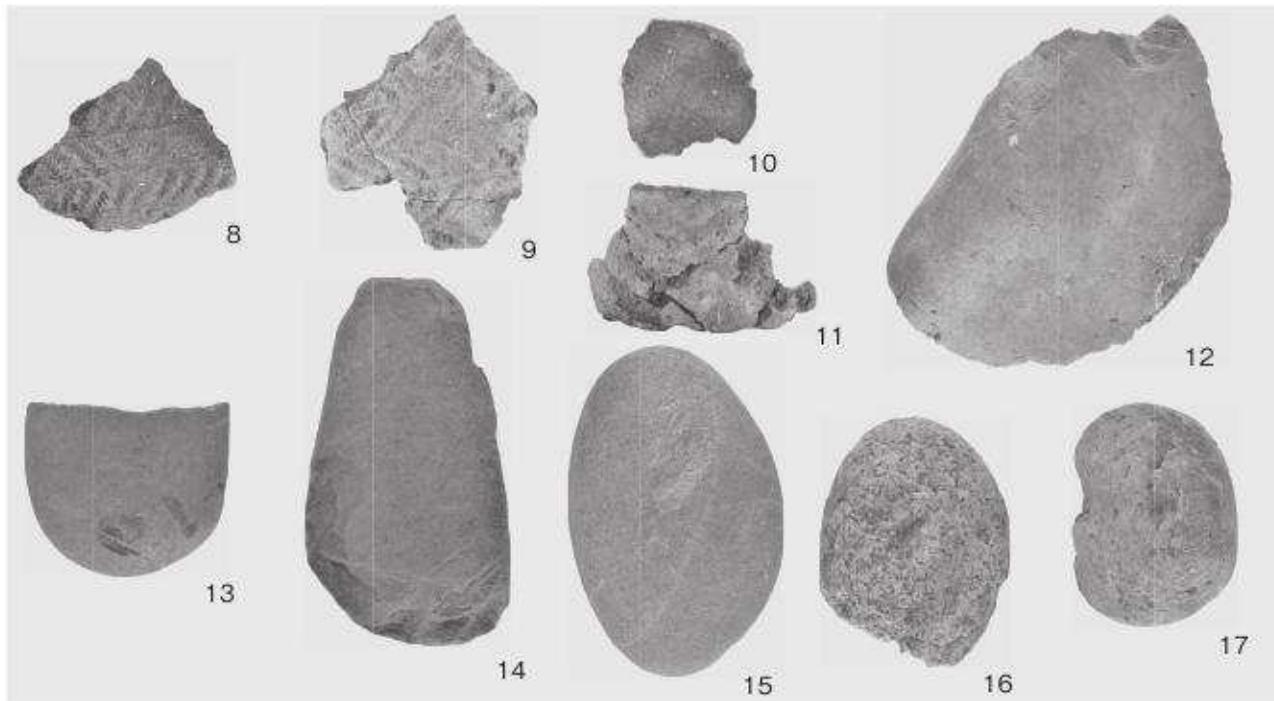


縄文時代 8号住居出土遺物

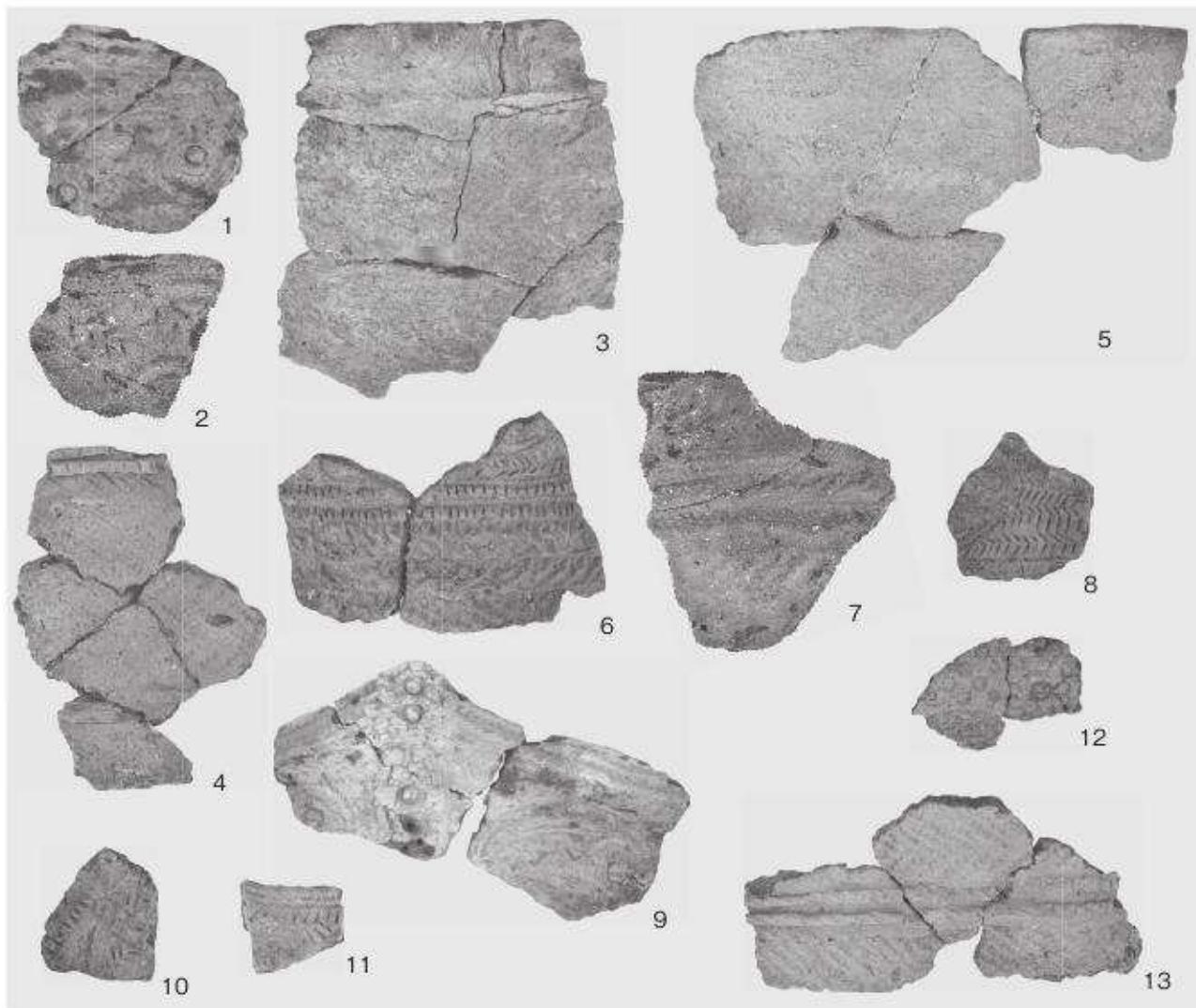


縄文時代 10号住居出土遺物(1)

図版 15

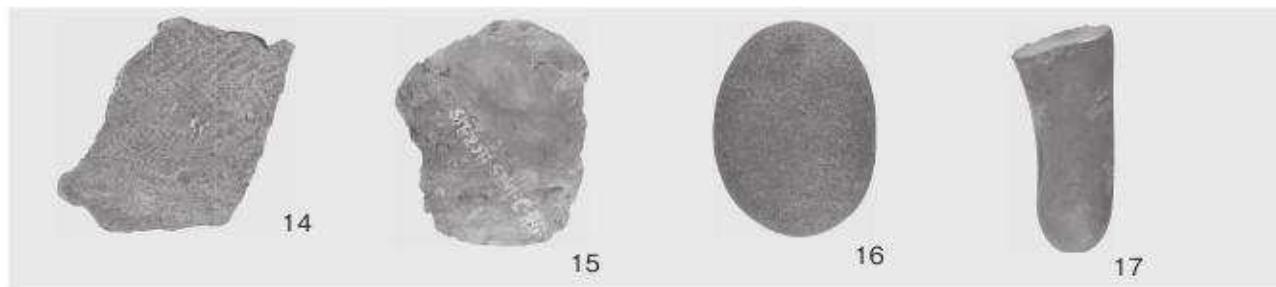


縄文時代 10号住居出土遺物(2)

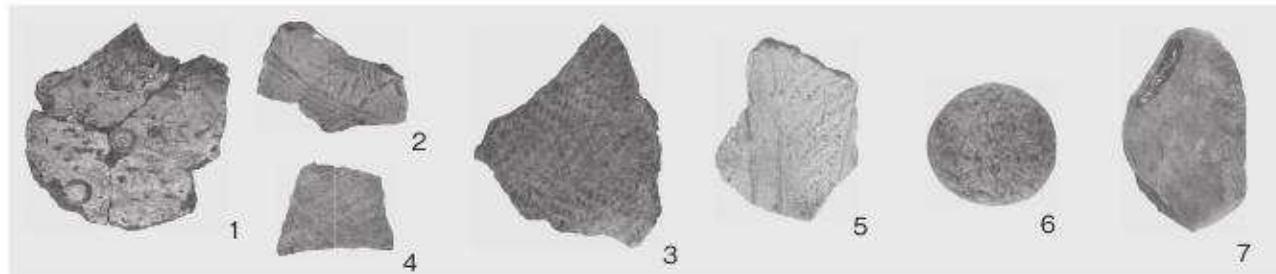


縄文時代 11号住居出土遺物(1)

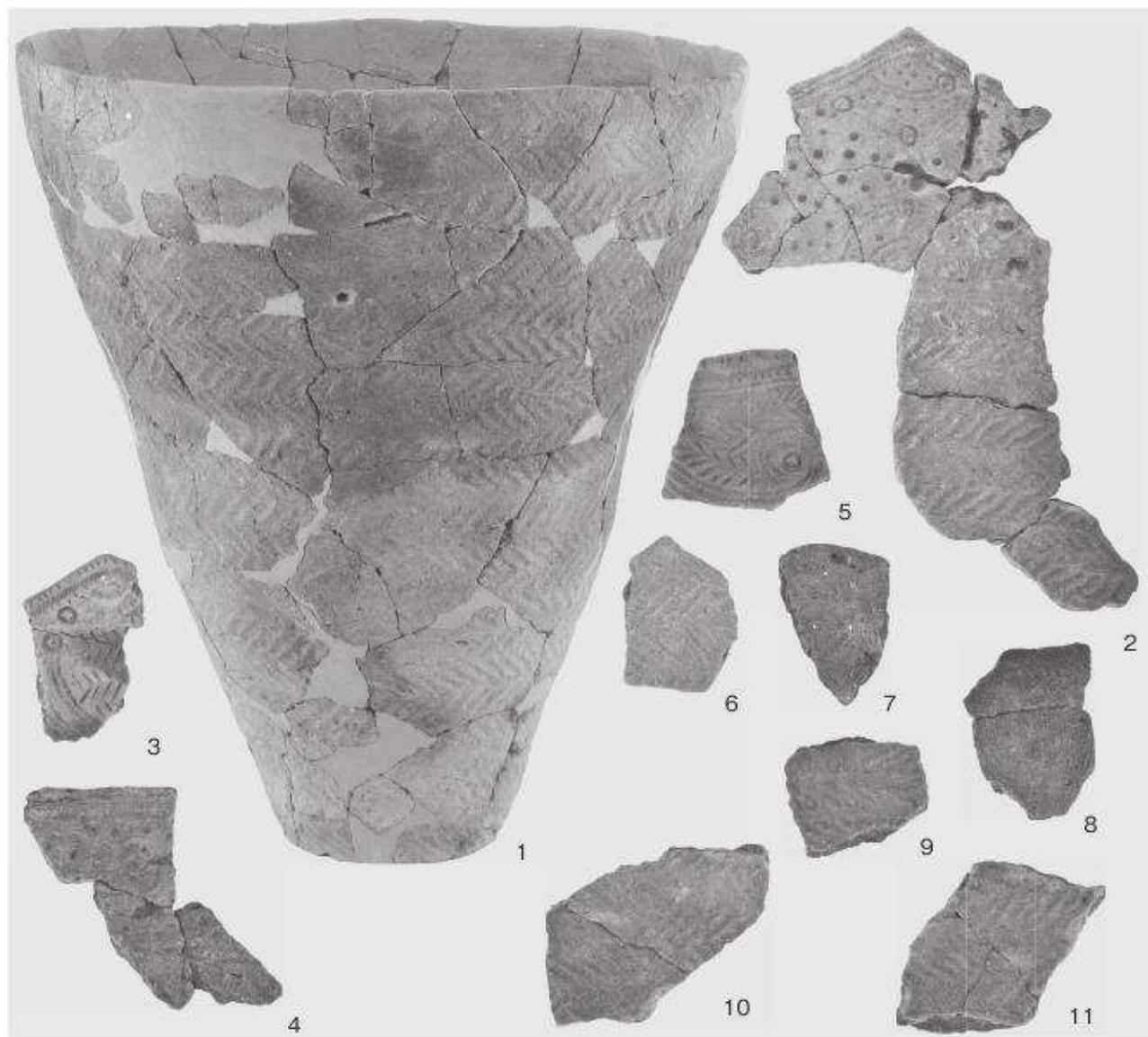
図版 16



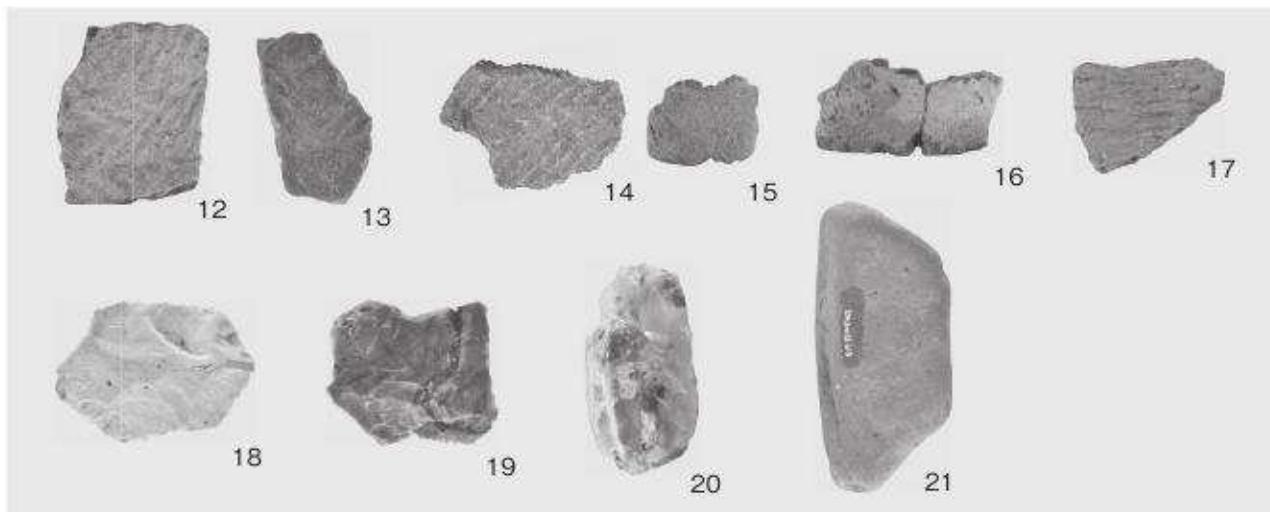
縄文時代 11号住居出土遺物(2)



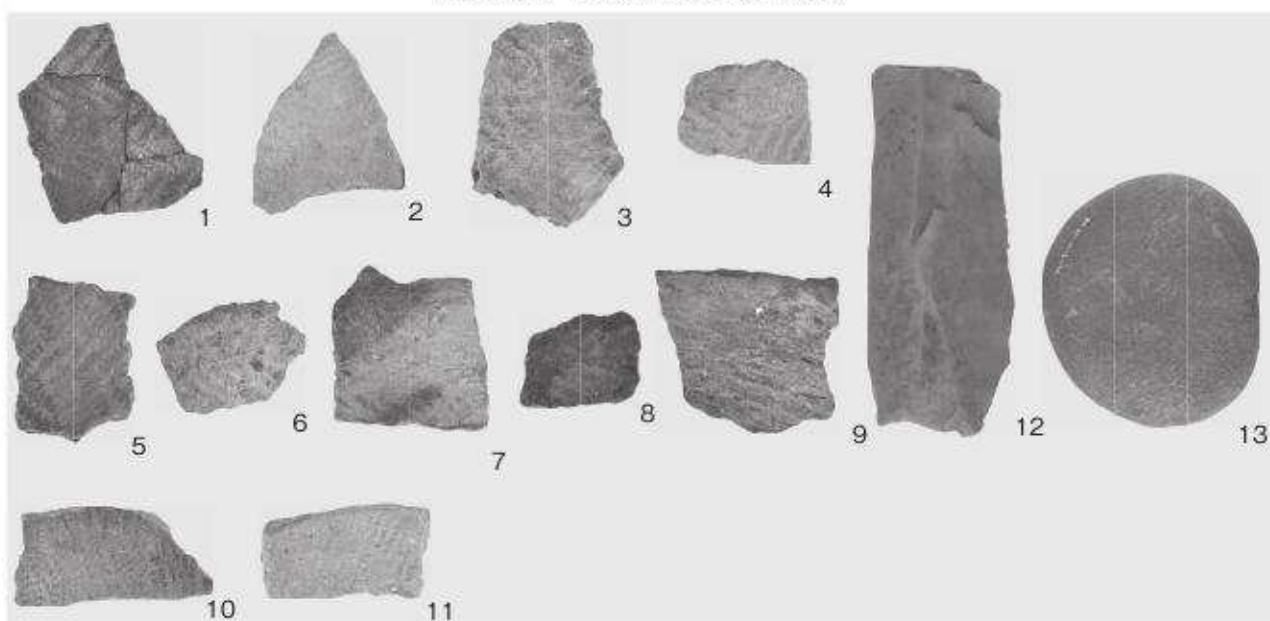
縄文時代 13号住居出土遺物



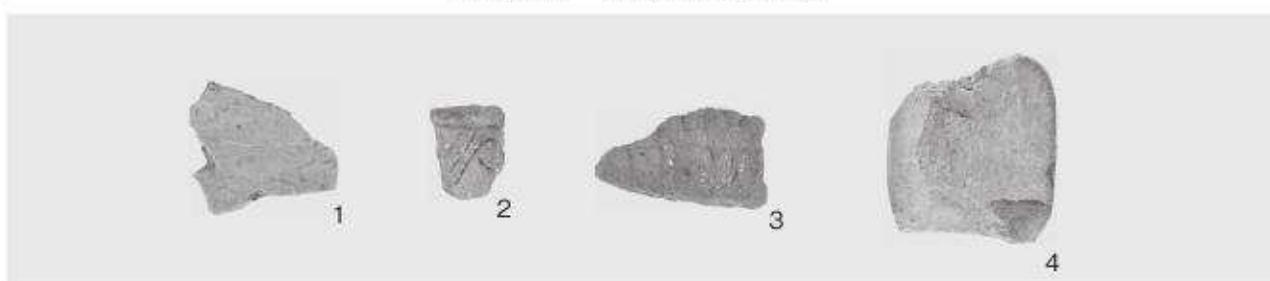
縄文時代 16号住居出土遺物(1)



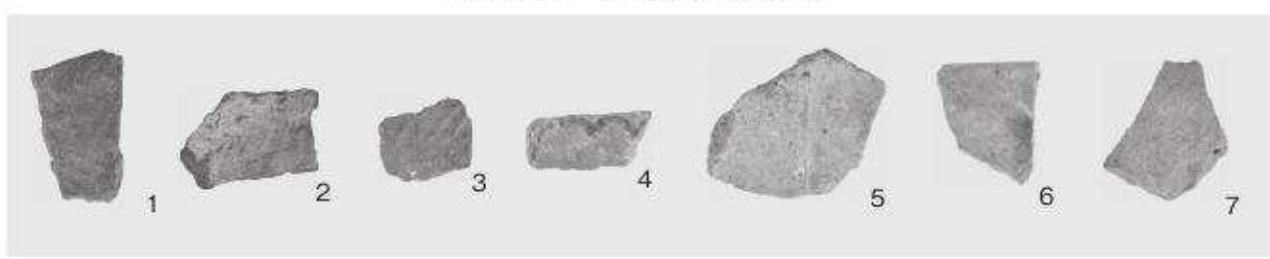
縄文時代 16号住居出土遺物(2)



縄文時代 18号住居出土遺物

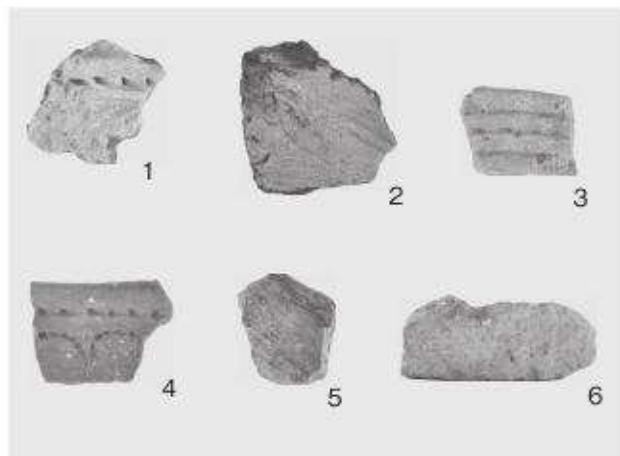


縄文時代 19号住居出土遺物



縄文時代 22号住居出土遺物

図版 18



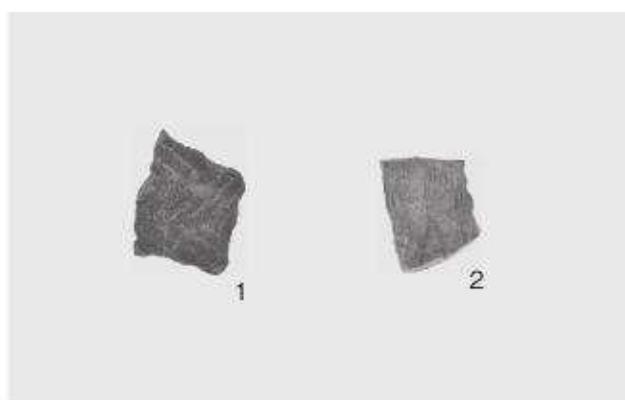
縄文時代 25号住居出土遺物



縄文時代 11号土坑出土遺物



縄文時代 25号土坑出土遺物



縄文時代 27号土坑出土遺物



縄文時代 36号土坑出土遺物



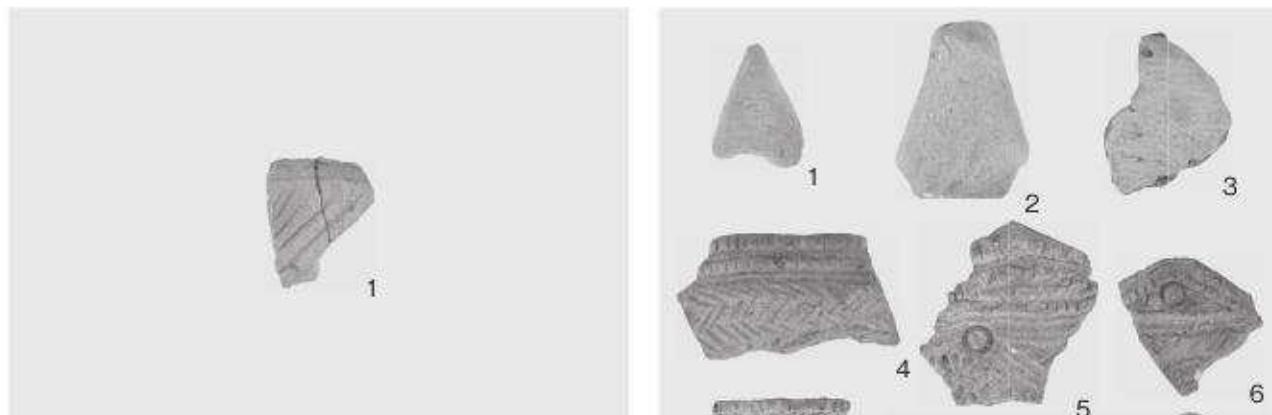
縄文時代 47号土坑出土遺物



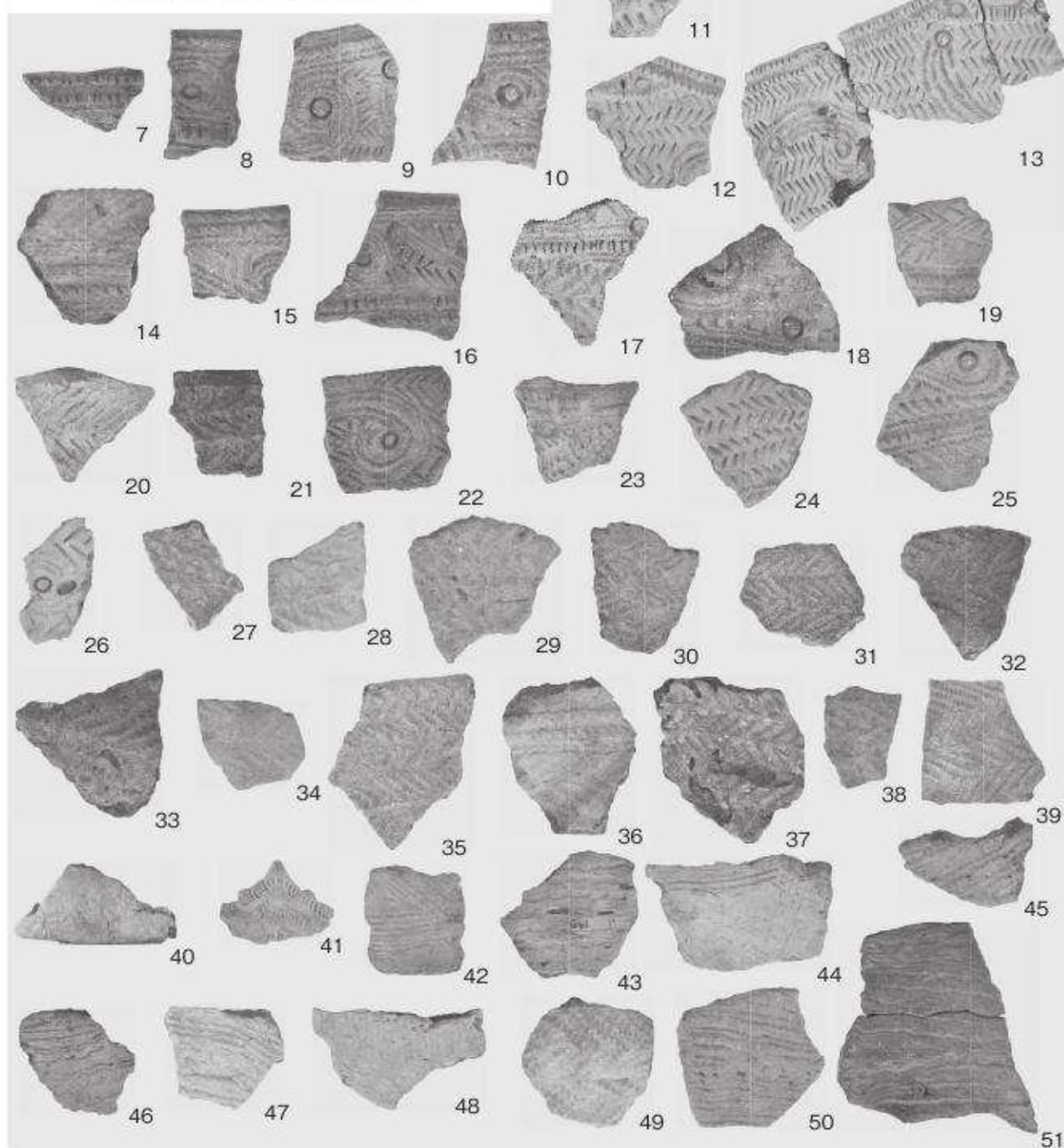
縄文時代 55号土坑出土遺物



縄文時代 73号土坑出土遺物

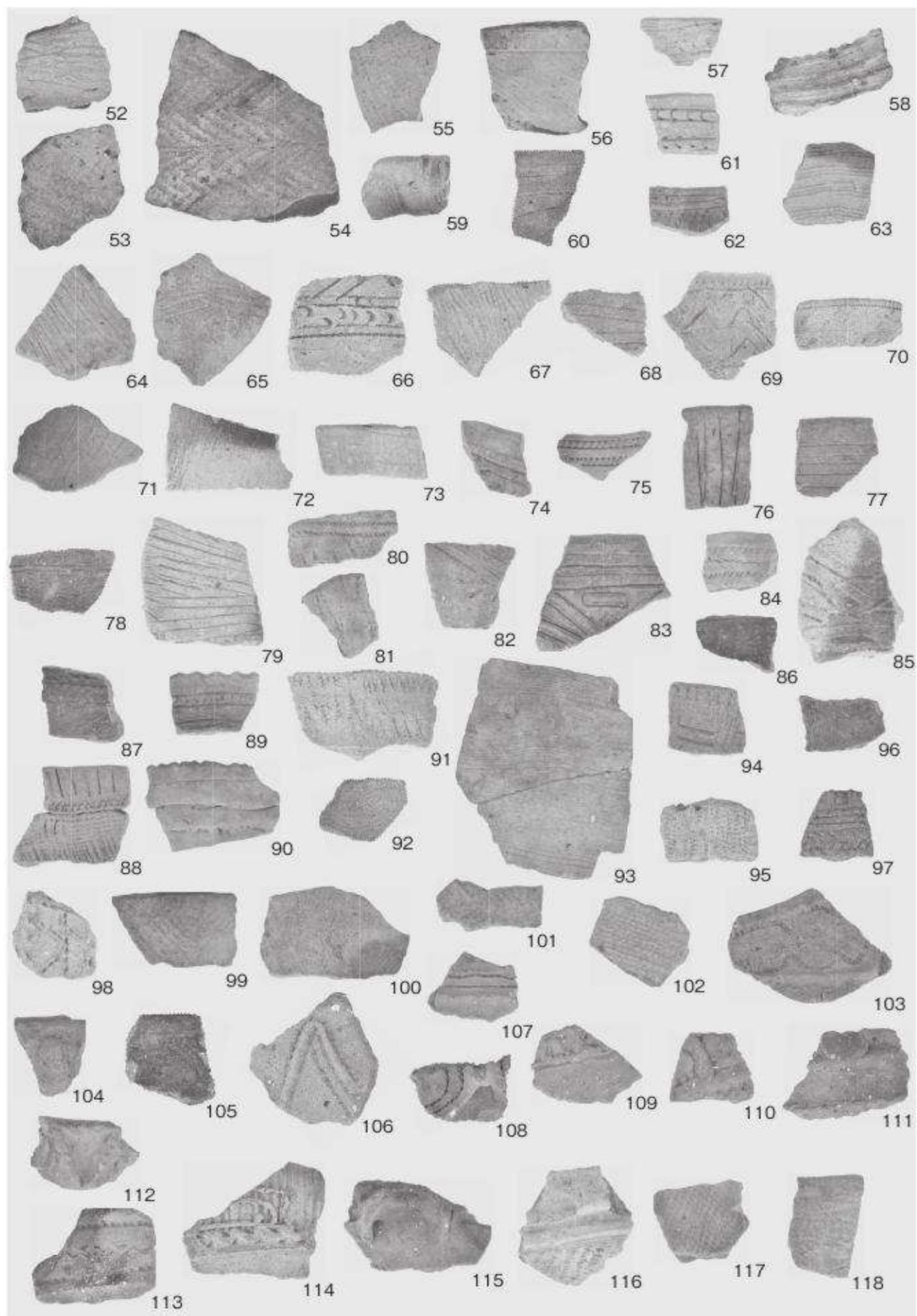


縄文時代 91号土坑出土遺物

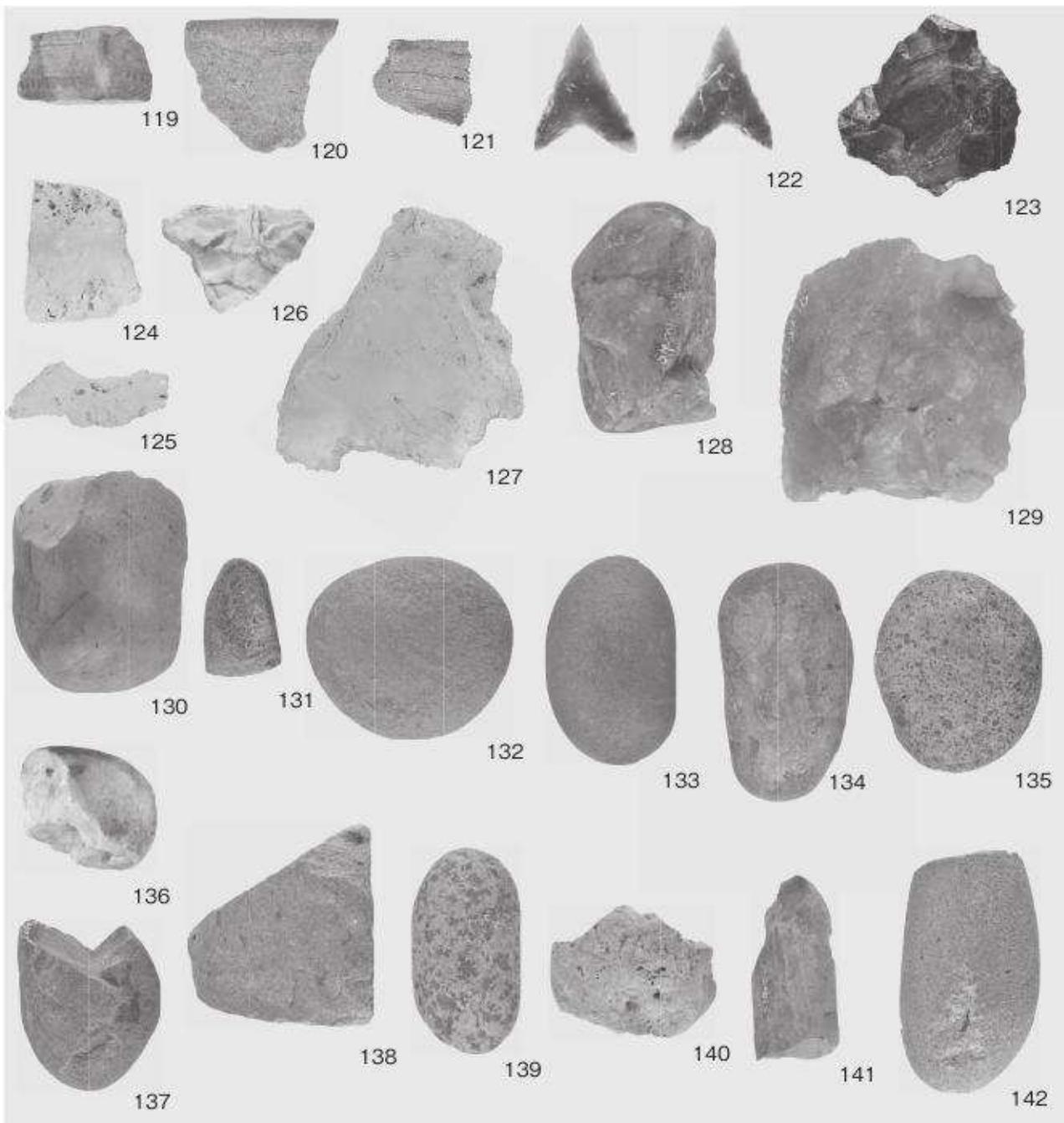


縄文時代 遺構外出土遺物(1)

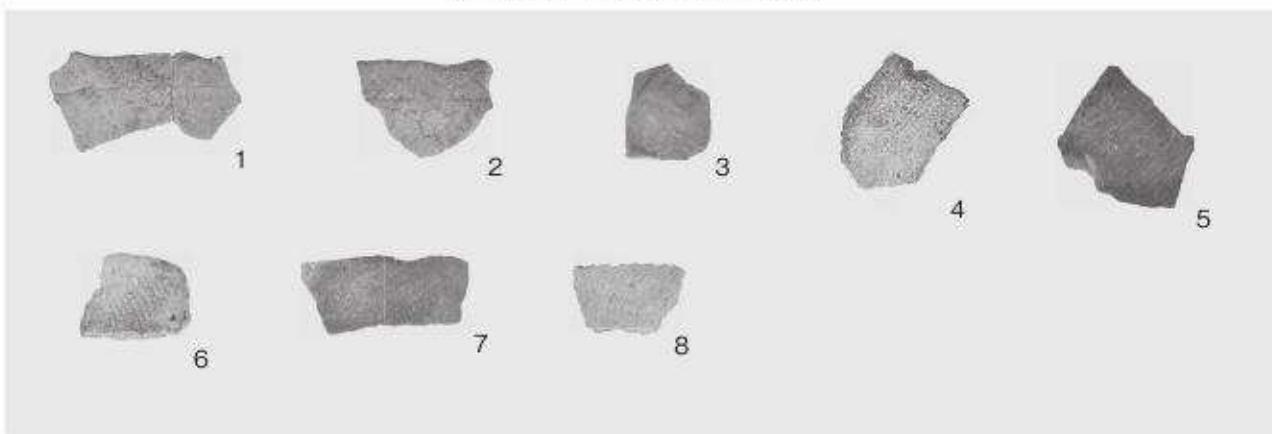
図版 20



縄文時代 遺構外出土遺物(2)

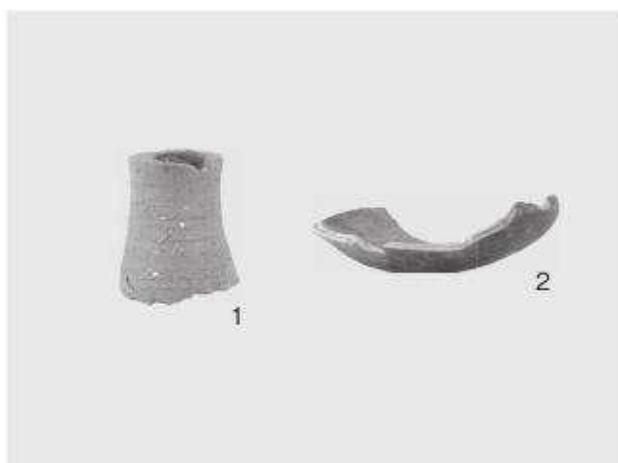


縄文時代 遺構外出土遺物(3)

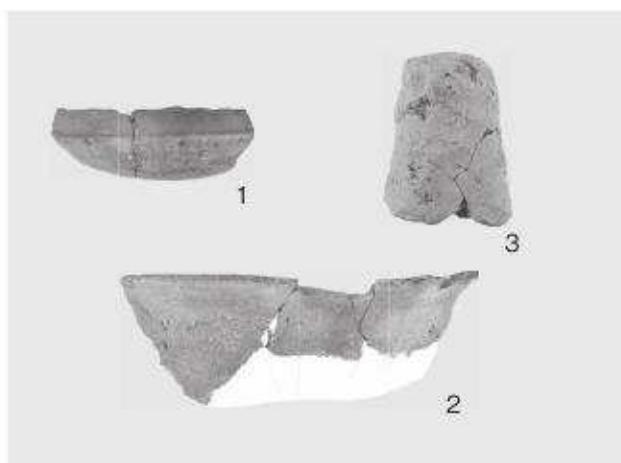


弥生時代 遺構外出土遺物

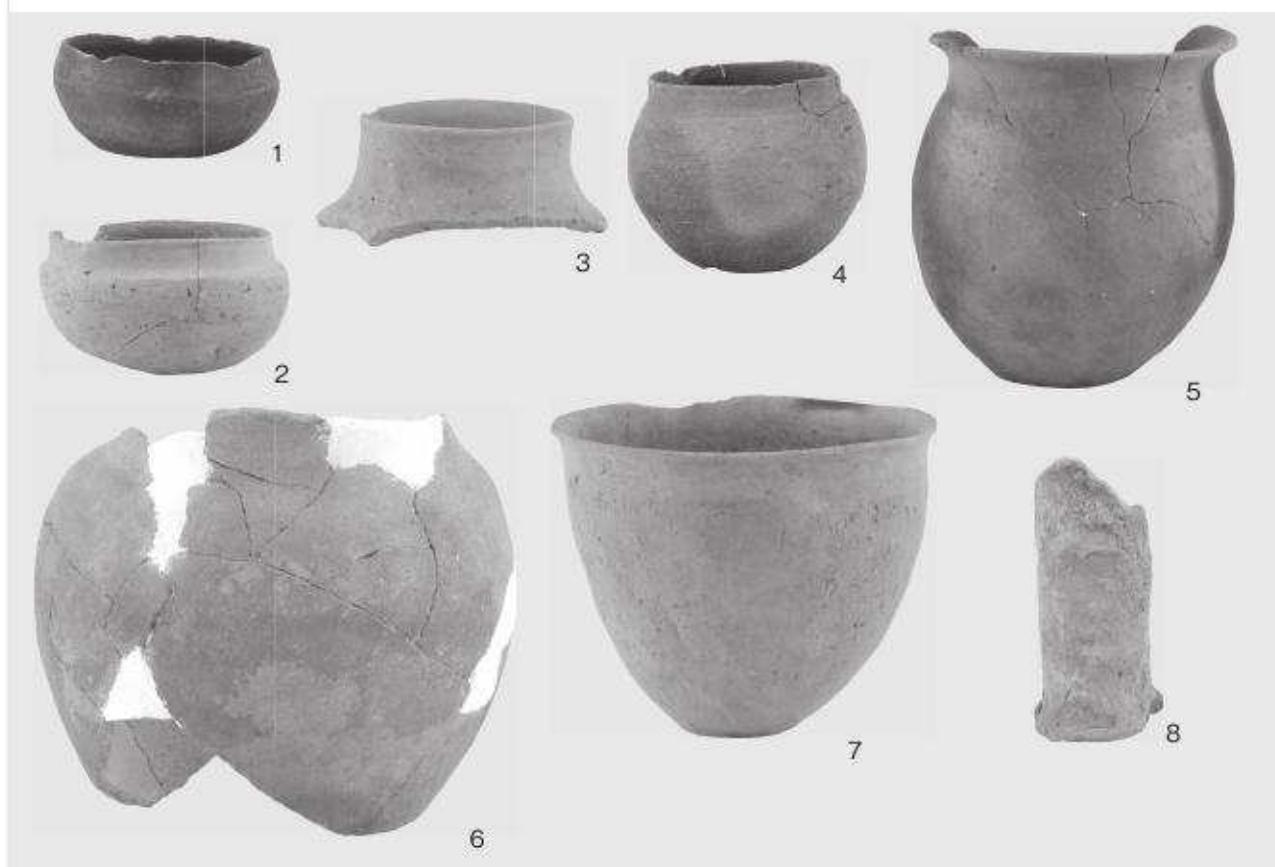
図版 22



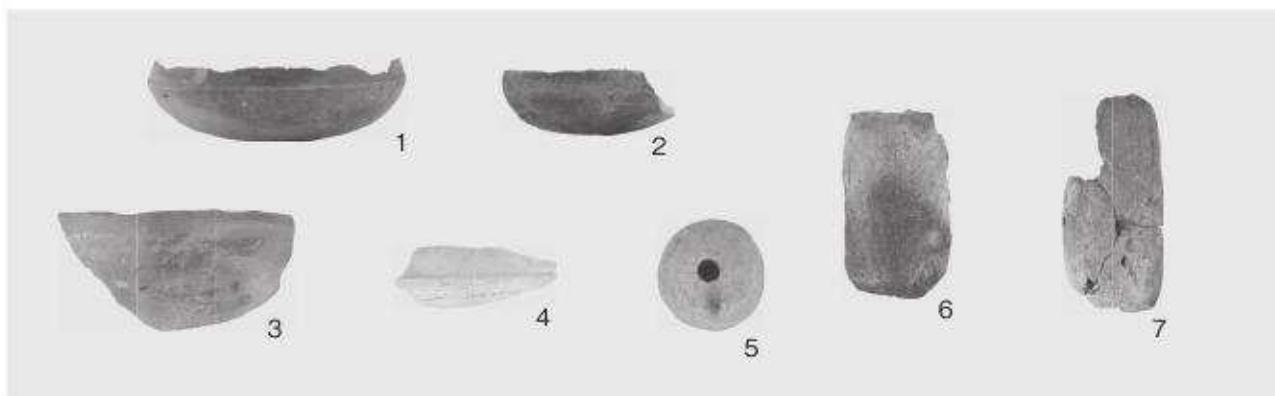
古墳時代 2A号住居出土遺物



古墳時代 2B号住居出土遺物



古墳時代 3号住居出土遺物



古墳時代 4号住居出土遺物



古墳時代 5号住居出土遺物



古墳時代 7号住居出土遺物



古墳時代 20号住居出土遺物



奈良・平安時代 1号住居出土遺物



奈良・平安時代 6号住居出土遺物(1)

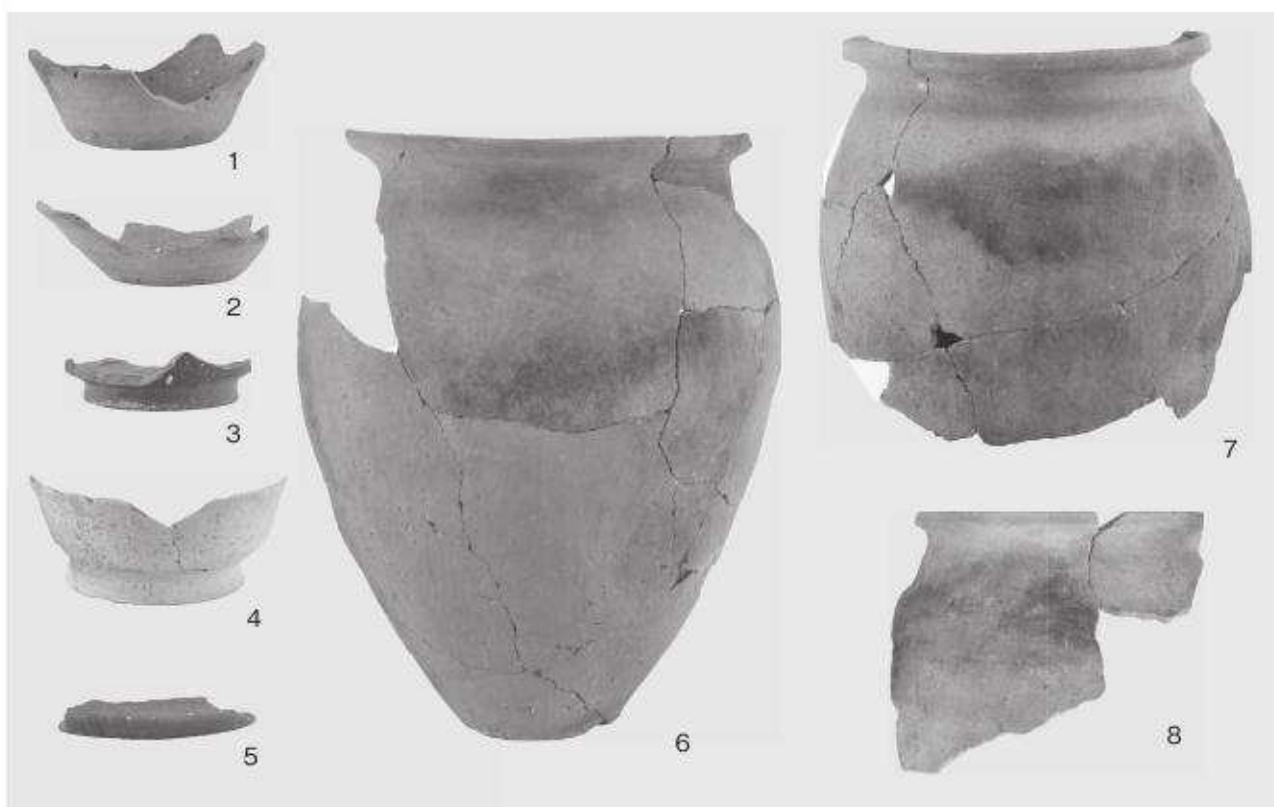
図版 24



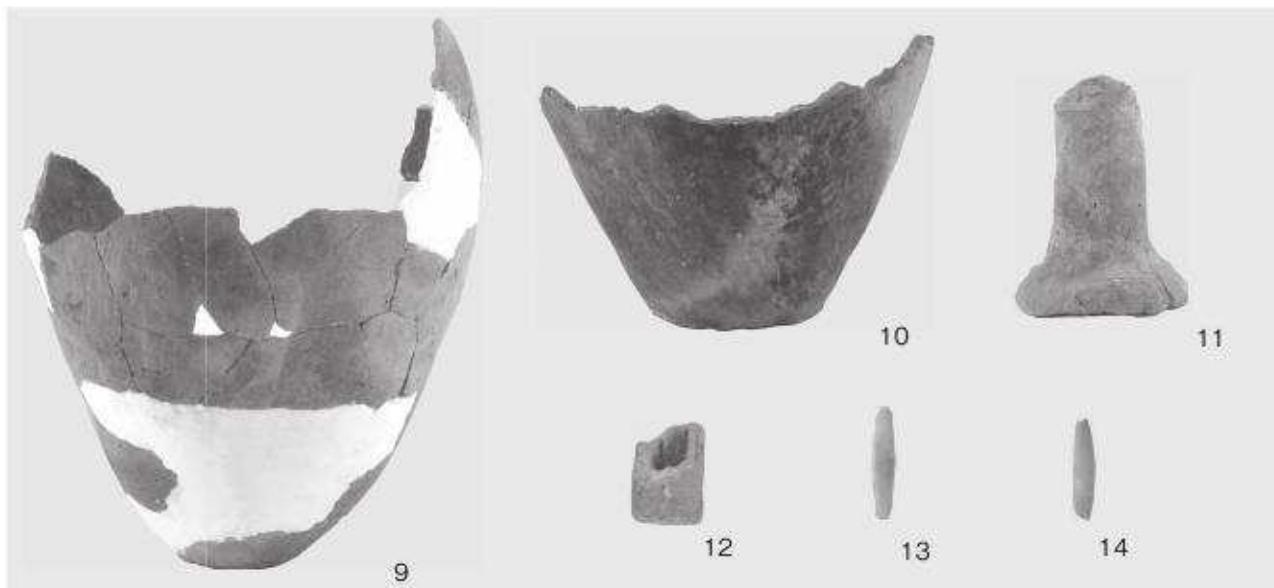
奈良・平安時代 6号住居出土遺物(2)



奈良・平安時代 9号住居出土遺物



奈良・平安時代 12号住居出土遺物(1)



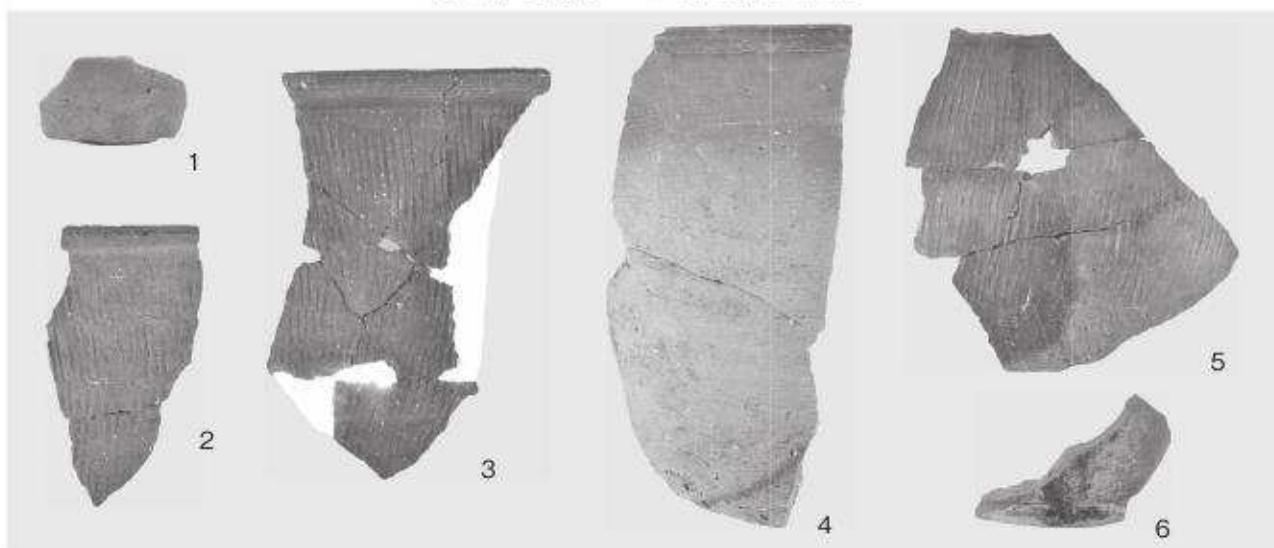
奈良・平安時代 12号住居出土遺物(2)



奈良・平安時代 14号住居出土遺物



奈良・平安時代 15号住居出土遺物



奈良・平安時代 23号住居出土遺物(1)

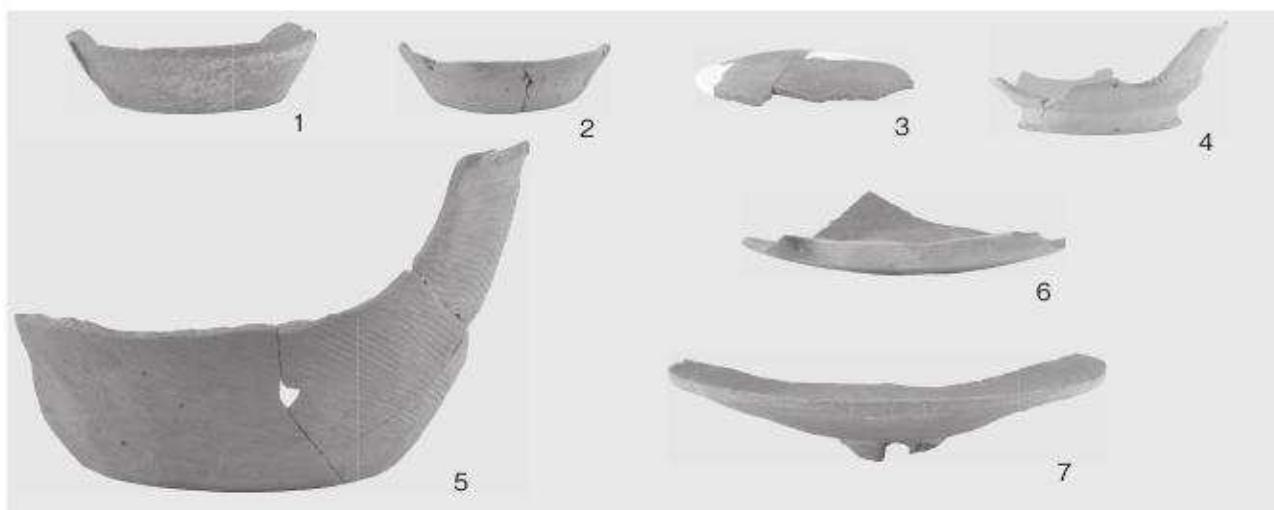
図版 26



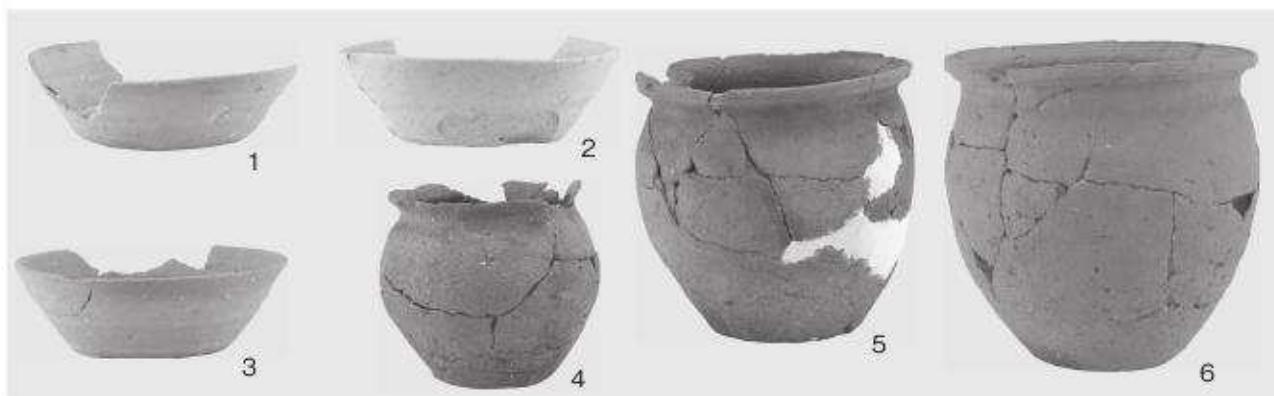
奈良・平安時代 23号住居出土遺物(2)



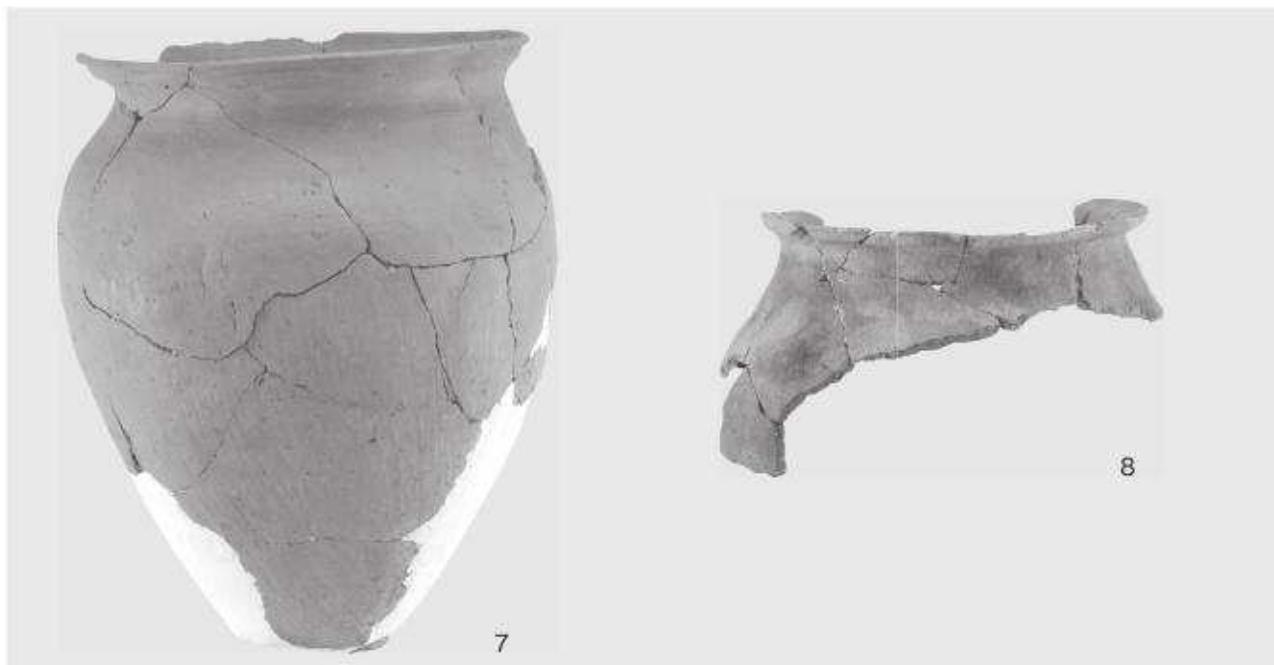
奈良・平安時代 24号住居出土遺物



奈良・平安時代 26号住居出土遺物



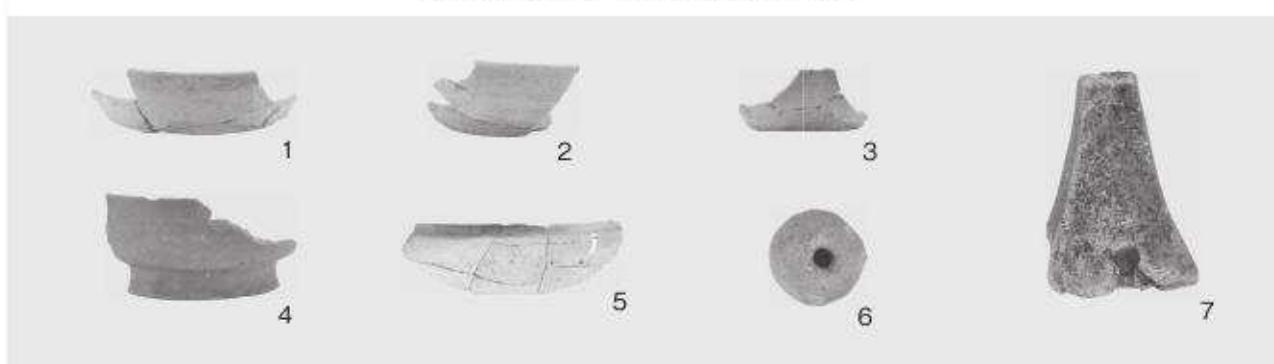
奈良・平安時代 27号住居出土遺物(1)



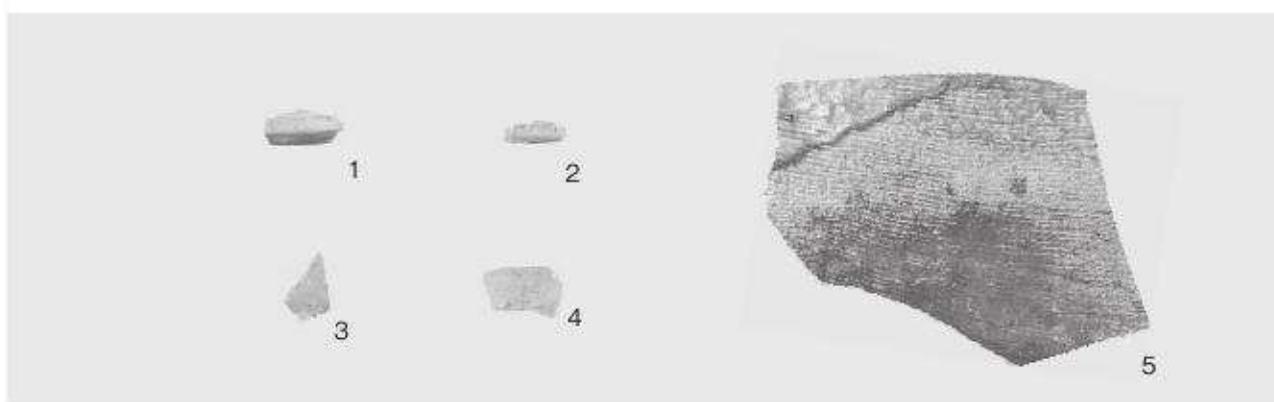
奈良・平安時代 27号住居出土遺物(2)



奈良・平安時代 30号住居出土遺物



奈良・平安時代 遺構外出土遺物



中・近世 遺構外出土遺物

報告書抄録

茨城県石岡市

下ノ宮遺跡

- 県営畠地帯総合整備事業（三村地区）に伴う発掘調査 2 -

2012年3月16日発行

編集 株式会社東京航業研究所 〒350-0855 埼玉県川越市伊佐沼28-1

TEL049-229-5771

発行 石岡市教育委員会 〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680-1

TEL0299-43-1111

印刷 関東図書株式会社 〒336-0021 埼玉県さいたま市南区別所3-1-10

TEL048-862-2901

